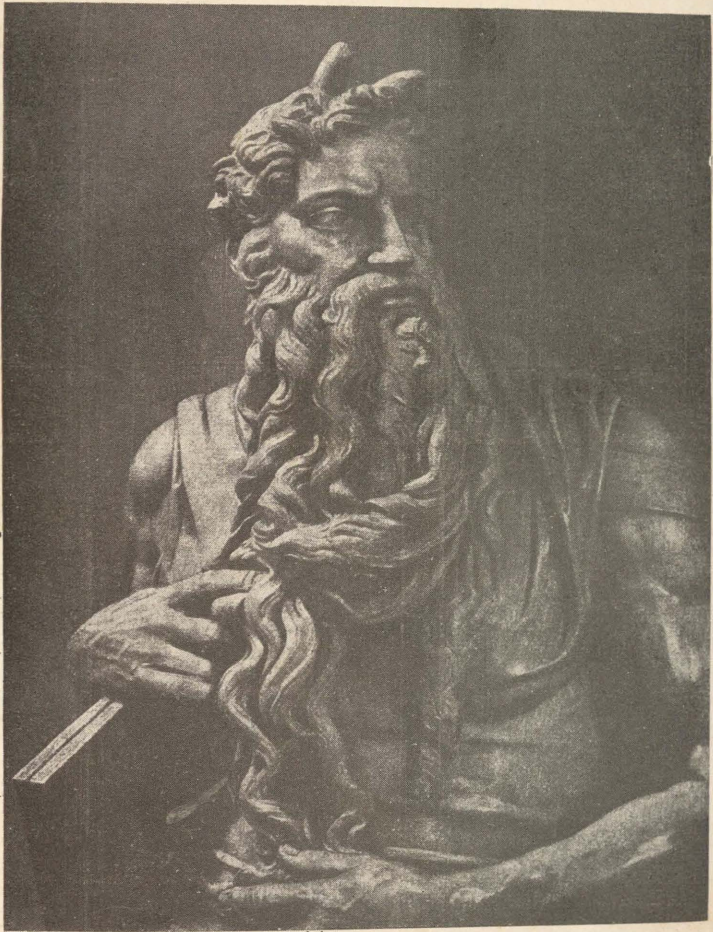
Freud

Analyse der Kunst

September 27th,
1951, at Taipeh.

Feb. 1946.

S. Tsujō

モオゼス（ミケランゼロ）

Freud

藝術の分析

篠田英雄・濱野修 訳

フロイド
精神分析大系
10

アルス刊

FREUD, Sigmund.

Selected Papers on Hysteria and other Psychoneuroses, (2nd edit, translated by A. A. Brill, Nervous and Mental Diseases, Monograph Series, No. 4, New York, 1912.)

Three Contributions to the Theory of Sex, (2nd edit, trans. by A. A. Brill, Nervous and Mental Diseases, Monograph Series, No. 7, Washington, 1920.)

The Psychopathology of Everyday Life, (translated by A. A. Brill, London, 1914.)

The Interpretation of Dreams, (trans. by A. A. Brill, 2nd edit, London, Geo. Allen and Unwin, Ltd., 1921.)

Totem and Taboo, (trans. by A. A. Brill, London, 1919.)

Wit and its Relation to the Unconscious, (translated by A. A. Brill, London, 1916.)

Introductory Lectures on Psychoanalysis, (translated by Mrs. Joan Rivère, London, Geo. Allen & Unwin, Ltd., 1922.)

序に代へて

本書は、フロイド全集第九卷から『レオナルド・ダ・ヴインチ』を、同第十卷から他の全部を、選擇譯出して編んだものである。

飜譯に對する譯者の心構へを言へば、只管、平明と易解とを狙つた。フロイドは難解であるといふ批評が、往々、友人を通じて聞かされたからである。從つて、『高貴な物を平俗化した』といふ科は大きにあるかも知れないが、『光りを暗くした』覺えは、斷じてないつもりである。寧ろ、光りを一層明るくする事に努力したつもりである。

尙、『レオナルド・ダ・ヴインチ』に就ては、醫學博士安田德太郎氏の譯が旣に行はれてゐる。本譯を脫稿するに當つても、之が無言の助言者であつた事を特記して、感謝の意を表明する次第である。

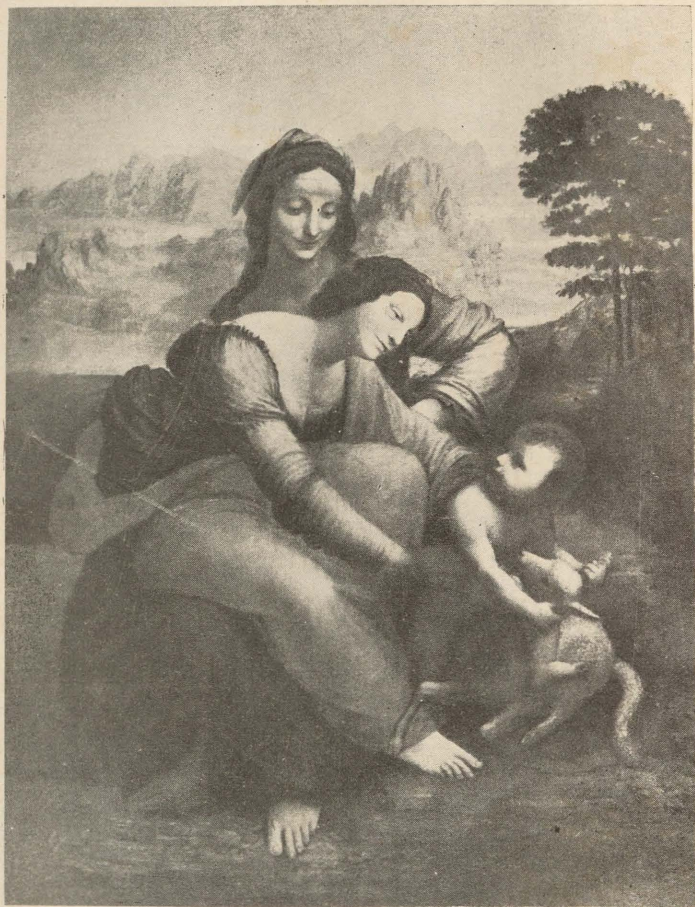
昭和八年四月　　譯　者

目次

不氣味なるもの……………二七一

聖アンナ三體像（レオナルド・ダ・ヴィンチ）

レオナルド・ダ・ヴインチ

一

精神病醫の研究といふ物は、由來、貧弱な人間資料で滿足して來たものであるが、一旦これを人類中の一偉人に及ぼすとなると、その研究の誘因と成る主旨は、專門外の人達がよく擠ぎ出すものとは大分違つて來る。精神分析研究は『光を暗くし、高貴な物を凡俗化す』爲の仕事ではないのである。偉人が、或る方面では素晴しい完全さを持ちながら、他の通俗な日常茶飯事では頗る不器用だつたといふ兩極端の距離を、減らし近づけるやうな事には何等の滿足を感じないのである。寧ろ此の研究の成し得るところは、さういふ偉人達が見せてくれた悉皆（すべて）に對して、正しい價値を發見するといふことに外ならないし、また健全（ノルマル）な行爲も異常病的な行爲も押しなべて支配する嚴酷な法則といふ物を、あてはめる事が侮辱と成る程それ程のずば抜けた偉人が存在しようとも考へない。

レオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二年——一五一九年）の名は、もう存生の當時から、伊太利文藝復興（ルネツサンス）期の最大な偉人の一人として嘆仰されてゐたのであるが、その人物は然し、現今の我々

には言はずもがな、既に彼と同時代の人々にさへ謎として映つてゐた。『その輪廓は僅かに想像し得るばかりにて――測り究め得ると言ふ事絶えて無し』と言はれた此の八面玲瓏の天才が、當時に與へた決定的の影響は畫工としての規範だつたのである。先づ、現代の我々に評價を殘されてゐるのは、彼の、藝術家であると同時に又自然科學者（工學者）として優れて居た偉大さだ。繪畫の傑作は數多く傳へられてゐるが、科學上の發見は未發表のまま評價されずに殘つてゐる。だが然し、彼の發展の跡を辿つて見ると、藝術家としての自由を束縛し、いたく傷つけた事さへ一再ならず、而も、恐らく結局は藝術家としての彼を壓倒し終つたものこそ、此の自然科學者としての彼だつたのである。ヴサリが記したレオナルド臨終の際の言葉には、次の樣な自責の文字が讀まれる。『余は、自己の藝術及び自己の義務を果さなかつた點で、神と人とを侮辱した者である。』假令このヴサリの物語りが、外的にも、一層內的にも眞實性をもつて居らず、寧ろ此の神祕に掩はれた巨匠を繞つて、その存生の間に早くも形作られ始めてゐた逸話の類であるにしてから、が、兎に角、かかる人物とかかる時代とを判斷する上に有力な價値ある證左である事は爭ひ難い。

では、レオナルドといふ一人格を、同時代の人々の理解範圍外に置いた原因はなんであつたか？　黑坊(イル・モロ)と綽名されたミランの大公ロドヸコ・スフォルツアの宮廷に、自らの新考案に據る樂器の彈奏者として招待を受けたり、或は又、建築及び兵器技師として驚嘆すべき實蹟を擧げ、此の大公をしてあの著名な讃賞の手紙を書かしめるに至つたのも、みな、巨匠自身が如何に多藝多能であつたかを裏づけるものではあるが、然しこれが、前の疑問を解く鍵では斷じて無い。かかる多方面な能力が一個人の中に結合し、併集してゐた例は、文藝復興期(ルネッサンス)時代には珍しくなかつたに違ひないのである。勿論、レオナルド自身が、さうした多藝多能者中でのぴか一であつたことは言ふまでもないが。それにまた彼の外貌も、所謂天才型ではなかつた、天才型といふものは通常、見窄らしい風采をしてゐる樣に考へられるし、其の人間自身の方から言へば人生の外的形式なぞは輕視し、自分の情緒の悲痛な悒鬱から人生との交渉を厭離してゐるものだが、レオナルドは頗る趣きを異にしてゐたのである。身長は遙かに大きく、均整した體格と、端麗な容貌と、拔群の膂力を持つてゐた上に、擧措には人の心を惹きつける優(やさ)しさがあり、辯舌も暢達で、世人に對しては朗かに又溢れる愛嬌を忘れなかつたし、且、身の周圍(まはり)の調度にさへ美を愛した。彼の

好んで着けた衣服は華やかな物が多く、實際生活にも凡ゆる醇美化を愛惜して止まなかつたのである。此の朗かな享樂慾を裏づけるに十分な一節が彼の『繪畫談議』にも見出されるのだ。彼はその中で、繪畫をその姉妹藝術と比較すると共に、彫塑家の仕事の勞苦を敍べてから言つてゐる。『仕事場に在る時、彼の顏は汚れきつて大理石の粉をいつぱいに浴び、まるでパン燒屋の樣に見えるし、彌が上にも大理石の細かな破片に埋まつたところはどう見ても背中に雪をいただいてゐるとしか見えない。その住む家と言へば、石の破片や塵埃で足の入れ所も無い有樣である。これに引代へて、畫工の方はすつかり趣きが變つてゐるのだ――畫工といふ者は頗る安樂な心持で作品の前に座を占めてゐるし、衣服も美しければ、輕筆に走らせる色彩さへ實に氣持のよいものばかりである。衣服だつて、自分の氣に適つた通り着飾ることが出來るし、住む家とても、朗かな繪畫をいつぱいに飾り立てて、輝かしいばかりに淸らかだ。時にはまた社交の樂しみに浸つて、音樂や、種々樣々な美しい作品の朗讀を聽く事も出來る。而も、槌や鑿の響き、乃至その他の騷音に煩はされずして、さういふ樂しみに浸りきる事が出來るのだ。』

勿論、レオナルドのかうした餘りにも華やかな享樂的心象が一番よく該當する時期はただ、此

前に敍べたロドギコ・モロの主權が衰微し、餘義なく、自分の獨壇場であり、確實な地歩であつたミランを去つてからは、不安定な、物質的に餘り裕かでない生活が、晩年のフランス隱遁時代まで續いたのである。さうして、此の外面生活の一變と同時に、情緒の上の陸離たる光彩は褪せ、彼の本質に隱れてゐた種種の奇怪な姿が一段と強く表面に現れて來たのであつた。一方では亦、年一年と増長して行つた彼自身の興味關心の轉向、即ち、藝術から科學への轉向も亦、彼の人物と、彼の同時代人との間の乖離を助成するに與かつて力があつたと言ひ得よう。譬へば彼が、以前の同僚ベルジノオの樣に依頼や註文に應じてせつせと繪畫を仕上げ、自分の生活を裕かにしようともせず、却つて種々な科學上の實驗に耽つてゐたことなども、總て同時代の人間の限りには、時を浪費する氣紛れな遊び事と思はれ、或は又、彼といふ人物そのものが、魔法遣ひであるといふ疑ひさへ抱かせるに至つたものである。此の點では、彼のスケッチによつて彼がどんな魔法の術を行つてゐたかを知り分けてゐる我々の方が、當時の人間よりも遙かによく彼を理解してゐる理だ。教會といふものの權威が古代のそれと交代し始め、假說前提といふものを缺いた研究の内容さへまだ知られなか

つた當時に在つて、夙くも、ベエコン、コペルニクス等に敢て遜色を取らぬ競爭者で有り得た先驅者の彼が、無理解と孤獨の裡に置かれたことは必然の數である。彼が、馬や人間の屍體を解剖したり、飛行機を考案し、植物の榮養や毒物に對するその反應を研究したりする場合、當然、アリストテレスの註釋家達から遠く離反して、所謂、錬金術師の汚名を浴びせられた事は止むを得ない事だつた。彼は、かういふ無理解な時代に在つて、せめてもの避難所を、自分の實驗室内での實驗的探求の中に見出して居たのである。

かうした結果は、彼の繪畫の上にも現れた。畫筆を取上げる興味は漸く失はれ、それもいよいよ稀に成つては、着手したものさへ大部分未完成のままに放擲して、自己の作品が將來どんな運命を受けようと意に介しない有樣だつた。藝術に對する彼の態度を、遂に理解し得なかつた當時の人々が、彼に加へた非難の理由は此處にもあつたのである。

後世、レオナルド讚仰者の大多數が、彼の性格中から拭ひ去らうとしたのも此の移り氣といふ缺點だつた。彼等は主張する。レオナルドについて非難される點は、一般に大藝術家の特性である。精力家で仕事に嚙りついたと言はれるミケランジエロでさへも、作品の大部分を未完成のま

まで放擲したではないか。もし、レオナルドの製作態度が非難されるなら、彼も同罪でなければなるまい。それにまた、レオナルドの繪畫は、彼自身が說明した程そんなに未完成の度の大きいものではなかつた。門外漢の眼に傑作と映つても、なほかつ藝術作品の製作者自身に言はせれば不滿だらけのものに見えるのが常だ。彼自身の見方を以てすれば、より立ち優つた完全の姿が眼先にちらついて、いつも、その再現の至難さに絶望せざるを得ないのである。だが然し、自分の作品が、結局どういふ運命に逢着するかといふ事なぞは、藝術家の負ふべき責任中でも最も輕いものでなければならないと。

假令かうした辯明がどれ程有力なもつともらしい事で有り得ようと、我々が此の巨匠の中に見出す全實相は、それだけで言ひ盡されてゐないのだ。作品との悲痛な苦鬪、それからの究極の逃避、又その將來の運動に對する無關心、などといふ事は、多くの他の藝術家にも繰返された事である。勿論、かうした態度の最も强かつたのがレオナルドであつた事は言ふまでもないが。——ソルミは、レオナルド論の中で、レオナルドの門弟の一人の言を引用してゐる。『藝術の偉大さを沈思して、他人の眼に驚異と映つたものの中に錯誤を見出した彼は、繪筆を取る每に戰慄し、爲

に、着手した作品を未だ嘗て完成し得なかつたもののやうである。』と。レオナルドの最後期の繪畫、レダ、聖オノフリオのマドンナ、バッカス、サン・ジョヴンニ・バチスタ・ジョヴアネ等の作品は、『恰も干渉を受けたかの様に』未完成のままで殘されてゐるし、聖晩餐の描寫をし遂げたロマツツオは、レオナルドの、完成まで描き終せない有名な無氣力さを、短詩でかう誹つてゐる。

嘗て繪筆を採らざりしプロトオジエンに
さも似たるかな神ヴィンチ、
眞に仕上げを終れるもの一つだになし。

レオナルドの遲筆は俚諺に成つた程である。ミランのサンタ・マリア・デレ・グラチエ僧院に聖晩餐の圖を描くにも、その下繪を徹底的に研究してから三年の日子を費やした。同時代の小說家マテオ・バンデリは、當時、此の僧院の若僧であつたが、その物語る所に據ると、レオナルドはよく、もう朝の早いうちから足場に登つて、日の暮れ方まで畫筆を放さず、飲食さへ忘れ果ててゐたといふ事である。さうかと思ふと數日を費やして一筆も下す事が出來なかつたり、時には、

畫面の前に數時間も立ち續け、內面的の檢討だけで滿足してゐる事もあつたと言ふ。又或る時は彼がフランチエスコ・スフオルツアのために騎馬像のモデルを作製してゐたミラン宮城から、一直線に僧院に駈けつけて畫中の姿に加筆する氣で居りながら、而も匆々に中止して終つた事もあつた。更にヴザリの記述に據れば、フロオレンス人フランチエスコ・デル・ジョコンドの夫人モンナ・リザの肖像に四年の歲月を費やしながら、到頭最後の仕上げまで運ぶ事が出來なかつたのである。これは、レオナルドが、此の肖像畫を依賴者に渡さず自分の手もとに殘して置いて、後年フランスへ行く時も携へて行つたといふ事情ともよく一致してゐる事である。それを買ひ上げたのがフランツ一世で、今日でもルウヴル最大の名寶の一つに數へられてゐるのだ。

レオナルドの製作樣式に關する之等の報告を、傳へ殘された驚くべき數量のスケッチや下描きなぞの實物に比較して考へるとき、我々は恰も、彼の藝術に對する態度には、輕卒とか移り氣とかいふ缺點が些少の影響をも與へ得なかつたのだ、と信ぜざるを得ない。その反對に我々の眼を惹くものは、造形藝術の分野に於ける可能の富贍と、超現實的の深さであり、兩者の間におろされたためらひ勝ちな決斷である。又、殆ど滿足と言ふことを知らぬ種々の要求であり、その要求

の實行に對する抑制である。理想への意圖の背後に匿れた、藝術家通有の、引込思案といふ言葉位では到底說明のつかない抑制だ。製作の初期から著しかつた彼の仕上ののろさは、かうした抑制の一徵候であり、又、後年に現れた繪畫からの轉向の前ぶれだつたのである。誰に罪を歸すべくもない聖晩餐圖の運命を決したのも、矢張り此の抑制から來た仕上げののろさだつたのだ。だから彼は、壁面の濕つてゐる中に仕上げを急がねばならぬフレスコの如き材料を好まず、繪を描くにはいつも油繪具を用ひた。これならば、繪具は乾いても、畫面の仕上げを氣分と暇に委せて引延ばす事が出來たからである。然し、油繪具は、それを塗りつけた下地から溶け、下地は又壁面から繪具を引き離してしまつた。かうした壁面の缺點と、部屋其のものの運命が附け加へられた結果、畫面にあのやうな避け得ない破損を生じたのである。

アンギアリに在つた騎兵合戰圖を滅したものも、似たやうな技術上の試みの失敗からだつたと思はれる。これは、前の場合よりもずつと後年の事で、彼が、例のミケランジエロと競爭して、フロレンスのサラ・デル・コンシリオの壁面に描き初め、これも亦未完成のままに放棄してしまつたものである。之等の點をよく考へて見ると、恰も、實驗者としての特殊な興味が先づ、藝術家

としての制作慾を唆り、やがて、その實驗慾によつて藝術作品そのものが毒されてしまつたやうに思はれるのだ。

レオナルドといふ人間の性格中には、なほ此の他にも様々の異常な姿と、外見的の矛盾が現れてゐる。掩ふべくもないやうに見える特徴は、或る種の因盾と無關心だ。各々の個性が、自分の活動のために最も廣い領域を獲得しようと努めるとき、必然の結果として他に對する猛烈な攻撃が展開される。彼の時代は恰もさうした時代だつた。そこへ、ごく穩かな平和主義と、一切の競爭及び爭鬪回避主義を持して現れたのだから、ひどく世人の眼を瞠らしたのである。彼は、何人に對つても溫和で深切だつた。肉食を斷つてゐたと傳へられるのも、彼が、禽獸の生命を奪ふことは正しくないといふ考へを持つてゐたからで、殊に彼の愉樂の第一は、市場で買ひ求めた諸種の鳥を放つてやる事だ。また、流血と戰爭とを非難し、人類は萬物の靈長どころか、野獸の中でも最も兇惡な動物であると見做してゐた。だが然し、かうした情感の女性的な纖細さを持ちながら、一方では、死刑を宣告された囚人の、恐怖に歪んだ顏を硏究し、それをノオトに描き取りたさから、處刑場まで跟いて行く事を辭さなかつた。或は又、最も殘忍極まる攻擊武器を考案し、

自ら兵器技師長としてチエサレ・ボルジアの幕下に參ずる事を辭さなかつた。彼は、往々、善惡に對して無關心であるかに見られたのである。乃至は、自分が特殊な尺度で律せられる事を要求したのである。又、凡ゆる敵の中でも最も無鐵砲な謀叛氣の多い敵を、ロマナの領地に連れ込んだチエサレの遠征に與して、司令官の地位に立つたのである。此の當時の出來事に關しては、レオナルドのスケッチの一線一劃だに、批判、關與の痕を止めてはゐないのだ。フランス戰爭當時のゲエテと比較する事を全然斥け得ないのも此の點からである。

若し、傳記的探求が、眞實その偉人の精神生活を貫いて理解しようとなれば、大部分の傳記作家がやつてゐるやうに、分別や氣兼ねなぞから、偉人の性生活、性的特質なぞを默過してしまふことは許されない。レオナルドについて見るに、此の方面では極めて些少しかわかつてゐないが、然しその些少な知識こそ貴重なのだ。放縱極みない享樂主義が、索漠肅々の禁慾主義と相ひ鬪つた當時を顧ると、彼は、冷やかな性慾拒絕主義の實例で、まことに、女性美の再現に努めた藝術家には思ひがけぬ事である。ソルミが、レオナルドの言葉から次のやうに引用して、その不感症を裏づけてゐる。『生殖行爲及びそれと結びついてゐる一切は唾棄すべきものだ。萬一之が昔

から傳來された風習でないとしたら、又、美しい顏とか肉慾的の素質といふものが無かつたとしたら、人間は直きに死に絕えてしまつた事であらう。』と。レォナルドの遺稿中には、勿論最も高尙な科學上の問題だけが扱はれてゐるのでない。寧ろ、我々に言はせれば、これ程の偉大な精神には殆ど不相應だと思はれる徒らぬことが（譬喩的な博物學、動物寓話、駄洒落、豫言）或る程度の純潔さで、いな禁慾者的にと言ひ度い位に書き止められてゐるのだが、これは、純文學の一作品として見て、今日でも嘆賞されるに相違ないものであらう。凡そ性に關する事柄を決定的に回避してゐるところを見ると、さすがに一切の生命を維持するエロスも、此の研究家の知識慾に取つてはてんで一顧の價値さへ無い材料だつたやうである。偉大な藝術家の往々にして陷り勝ちな通癖が、その奔放な空想をエロチックな描寫に馳せ、野卑猥褻にさへ墮する事であるのは人の善く知るところだ。之に反して、レオナルドには、女性の內生殖器、子宮內の胎兒位置、及びそれ等に類似した僅々二三の解剖學的スケッチがあるばかりである。（註、實際には、レオナルドのスケッチ中に交接の狀態を解剖學的に描いたものが一枚あるが、勿論之とて猥褻と呼ぶことは出來ないし、又、Dr. R. Reitler によつて、二三の著しい誤謬さへ發見された程である。から

いふ事實も亦、此處に敍べた彼の特質と一致してゐるのである。）

疑問とされるのは、レオナルドが嘗て一婦人を抱擁した事があるか否かといふ事だ。ミケランジエロ對ヰツトリア・コロンナの如き、一婦人との精神的戀愛があつたか否かさへ、まるで解つてゐない。修業時代、師匠ヴエロッキオの邸に寄寓した頃に、他の若い連中と一緒に禁制の男色關係で告訴された事があるが、之は、結局彼の無罪が釋明されて終つてゐる。こんな疑惑を蒙むつたのも、原因は當時評判の不良少年をモデルに使つた事に在るらしい。大家と成つてからは、美少年や美靑年を弟子に取つて左右に侍べらせた。かうした弟子の最後の者がフランチエスコ・メルヂで、これはレオナルドに從つてフランスへ渡り、臨終の日までも傍を離れる事なく、終に彼の遺産繼承者とされたのである。近世のレオナルド傳記作家は、かうした師弟間に性的交渉があり得たなぞと推定するのは巨匠に對する根柢なき侮辱である。と排斥してゐるが、かかる傳記家の確信を俟つまでもなく、その當時の師弟生活の樣式を考へ合せて見れば、レオナルドの若い弟子達に對した情愛關係が性的行爲に走り得なかつたらしいことは、遙かに確實と見てよいであらう。彼については、性的活動の方面でも亦何等高い限界を推測する必要が無かつたかも知れな

い。では、かうした感情竝に性生活の特質が、藝術家及び科學探求者としてのレオナルドの二重性格とどんな關係に在るのか、これを理解する途は唯一つしかない。傳記作家の心理的觀點といふものは往々、頗る迂遠な所に止まり易いものだが、私の知る限りでは、此の謎を解く鍵を摑みかけた者は唯一人ソルミだけであつた。だがしかし、傳記家ならぬ詩人、ドミトリ・セルゲヰツチ・メレシユコウスキも、或る大規模の歷史小說の主人公にレオナルドを選び、同じ理解を基礎として此の巨人を描いてゐる。その解決は、傳記家流の乾燥無味な文字でないにしろ、いかにも詩人らしい彫塑的な表現の中にはつきりと物語られてゐるのだ。レオナルドについては、ソルミはかう批判してゐる。『然雖、己が周圍の一切を理解し、冷靜なる思惟もて凡ゆる完全なる物の祕密をふかき奧底まで究めんとする鎭め難き欲求こそは、常に、レオナルドの作品を未完成に止めしめき。』コンフエレンチエ・フイオレンチンの論文中にも、巨匠の信念告白竝にその本質を解く鍵とも成るべき言葉が引用されてある。『愛するとか憎むとかいふ權利は、その對象の本質について、根本的な認識をかち得た上での事である。』と。又之と同種の言葉が、彼の繪畫談議中の一節、自分に加へられた宗教無視者の非難を辯駁したと思はれる個所に、反復されてゐる。

『とまれかかる非難者は沈默してゐる方がよい。何故と言ふに、彼（行爲）は、かくも澤山の驚異すべき事柄を創造した造物主を理解せんとする途であり、此（行爲）は又、かくも偉大な發明主を愛せんとする道だから。又確かに、大きな愛が流れる出づる源は、その對象への深い理解でなければならない。もし君にして、對象を理解する事が淺かつたなら、それに對する君の愛も極く淺いか或は絕無であると言つてよからう………』

レオナルドのかうした言葉の價値が、一の重要な心理學上の事實を語つてゐる所に在るなぞと考へる事は出來ない。此處に主張されてゐる事は明白に誤謬だからである。レオナルドにしても、此の位の事は我々同樣に心得てゐた筈である。人間愛憎の情緖は、その情緖を働かせる對象を研究したり、その本質を知悉したりした上で動き始めるものでない。寧ろ、衝動的に突發的に、認識とは何等の關係ない感情誘因に基いて働きかけるものであると共に、その働きを極端に鈍らせるものは、意識と反省の力でなければならない。つまり、レオナルドの言はうとした意味はかういふことに過ぎないのだ。人間の愛情といふものは正しく缺點のないものであり得ない。先づ情緖の動きを抑制して思惟の作用に從はせ、その試驗を通過したのちに初めて情緖を解放するの

は、これは一般人に取つて努力の價値があるものである。と。もし彼自身と同じやうである場合にふ事に成るのだ。つまり、一般人の愛し方、又憎み方が、が、本當の愛し方である。と。さうして、彼が我々に言はうとした眞意について考へるとかうい

事實、彼自身の場合にはさうだつたらしい。彼の情緒は制御されたものだつたし、彼自身の研究慾にも克服されてゐた。愛憎の情緒を動かす前に、先づ、自分の情緒發動の由來を心に訊ね、その意義を知らうとしたのである。だから、第一に彼が、善及び惡に對しても、又美及び醜に對しても、無關心であつたかのやうに見えるのは當然だつた。かかる探索檢討の仕事にかかつては、愛憎兩者(ふたつ)ながらかぶとを脫いで、等しく、冷靜な知的興味の中に轉化されざるを得なかつたのである。實際に於いてレオナルドは冷血無情の人ではなかつた、間接、或は直接に凡ゆる人間行爲の衝動力と成るところの微妙な情緒を缺いた人間ではなかつた。ただ、その情熱を只管(ひたすら)知識慾へと變貌させたのである。かくて彼は身心を傾け、堅忍、不拔、鐫鑿等、凡そ情熱の源に發する一切を賭て探索檢討に從つた。さうして、かかる精神的勞作の高所に達して認識を獲得した後初めて、永く抑制し來つた情緒を開放し、恰も、本流から導いた枝流の水を、工事完了後に放水

する如くに奔流せしめたのである。彼が、認識の高所に立つて因果律の大なる一端を鳥瞰し得た時、彼の全心を捉へたものは感激だつた。さうして、自ら學び得た宇宙の一端の壯麗を狂熱の語に讚へ、乃至は、宗教的粉飾を以つて、造物主の偉大さを絶唱したのである。レオナルドに現れた此の轉化變貌の過程を、正しく理解した者はソルミだつた。レオナルドが『おお驚くべき必然よ………』と、自然の壯嚴なる衝迫を讚仰した句を引用した後、ソルミはかう敍べてゐる『ヴィンチの手記に見出さるる固有の特徵の一は、科學及び自然情緒への、換言すれば宗教への、かかる轉向なりき。げにかかる表現に逢着する事幾百回なるを知らず。』

レオナルドは、その飽足と倦怠とを知らぬ研究慾によつて伊太利のファウストと呼ばれた。然し、ファウスト悲劇の前提として見ざるを得ないものは、かうした研究慾がどうかすると生活享樂へ還元されはしまいか、といふ懸念である。ところが、レオナルドの場合を考へると、かうした懸念の一切を離れて、彼の發展はスピノヅア風の歩み方に近縁したものであると斷言したい程だ。

心的衝動力が、活動の諸種な形式へ移つて行く際には、恐らく物理的な諸種の力の轉化の場合と同じやうに、幾らかづつの損失なしで行はれるといふ事はあるまい。レオナルドの例が敎へる

ものは、如何に他の種々様々なものが、かうした過程によつて探求され得るか、といふ事である。先づ認識して、それから愛するといふ猶豫から出て來るものは代償だ。一旦認識に透徹した時には、もう正しい意味の愛や憎みは無い。言はば、其處は愛憎の彼岸である。つまり、愛する代りに檢討したのだ。恐らくは、レオナルドの生涯が、他の偉人の藝術家と比較してあんなにも愛に惠まれなかつた所以は此處にあるのだらう。他の多くの藝術家や偉人達は、魂を昂揚させ煆き爛らす情炎の嵐の中に、彼等の最善を體驗したのだが、レオナルドには、かかる機會が與へられなかつたらしい。

更に又、かうした態度が招來する別種の結果がある。彼はまた、行動し創造する代りに探索した。宇宙を掩ふ因果律の廣大と、その必然性の無邊に通曉し始めたものは、彼自身の小さな自我を沒却し易い。驚異に沈潛しては眞實徹底の心となり、容易に、自身がかの働きつつある諸々の力の一部分である事を忘れ、個性の力の準繩に從つて、宇宙の、かの必然なる經過の一端の變革を試み得る事を忘れて終ふのだ。まことに、宇宙間に在る諸相は、小なる物と雖も大なる物に比して、驚異と價値との減小するといふ事がないのである。

レオナルドが企てた探索は、恐らく、ソルミの言の如く己の藝術に奉仕するためだつた。光、色彩、影、遠近法等の特性と法則とを專心研究したのも、自分が自然の模寫に精通すると共に又、他に對しても同じ道を敎示したかつたからである。彼が、旣に此の當時から、かかる知識の價値を、藝術家の必要とする以上に過重して居つた事は疑ひを容れない。

(*) ソルミ。文藝復興、第八頁。レオナルドは自然の探索を繪畫制作上の戒律とした……だが、研究熱の高まり進むに連れて、今度はもう藝術のための科學では滿足しきれず、科學の爲の科學を獲得しようと望み始めた。

かうして、畫家としての必要といふひき綱によつて益々激しく驅り立てられた結果、繪畫の對象、動植物、人體各部の比例關係等の研究、さてはその外部形態から進んで內部構造の知識、及び、それ等の生活機能の知識へまで深入りしたのである。勿論生活機能といふものは、それ等の現象のなかにも表現されてゐるし、藝術による再現を要求するものではあつた。で、到頭つひには、餘りに過大に成つた硏究慾、知識慾が、藝術的要求と言ふ關聯を破壞する所まで彼を引き込んでしまつた。彼が、力學の一般法則を發見したのも、アルノの溪谷の地層史竝に化石史を推定

したのも、やがては又、彼の著書中に、『太陽は不動なり』といふ認識を特筆大書する事が出來たのも、みな、かうした深入りした研究の結果だつたのである。實にレオナルドはかういふ風にして、殆ど自然科學の全般にわたる探索と研究の手を押し擴げ、凡ゆる部門部門での一發見者と成り、尠くとも豫言者、開拓者と成つた。だが然し、彼の知識慾は外界だけに止まつて、人間の精神生活探索へは或る物に阻まれて手を出さなかつた。かの巧みなる技巧の錯綜を見せた寓意『アカデミア・ヴィンチアナ』中にも、心理學上の事については殆ど觸れてゐないのである。

やがて彼が、此の探索研究から嘗ての出發點だつた藝術修業に立ち歸らうとして、自ら氣づいた事は、自分の關心の新しい立場と、自分の心的操作の變化した性質とに招來された混亂だつた。繪畫については、先づ第一に彼の興味を惹くものは一の疑問だ。さうして、此の一個の疑問の背後に、無數の他の疑問が隱見してゐる事、恰もかの無邊廣大な自然探索の折に經驗したと同樣であるのを、彼は見た。彼はもう、己の要求を制限する事が不可能に成つてゐた。己が屬してゐると悟つた大なる因果律から、藝術上の作品を分離することが出來なく成つてゐた。一切を、それ己が思惟のうちに結び合つてゐるままに表現しようとして、鏤心彫骨の辛勞を重ねながら、

を仕上げまでに到らずして放棄し、或は未成品といふ宣告をくださずにはゐられなかつたのである。

最初藝術家が、己の仕事の助手として用ひた探索研究は、言はば被傭人に過ぎなかつた。それがなんと、終に被傭人の方が強大に成つて主人を壓迫してしまつたのである。

レオナルドの場合の知識慾と言つたやうに、一個人の性格中に餘りに強い單一の衝動が形成され終つたのを發見する場合、我々がその說明のために持出すのは或る特殊な素質だ。と言つた所で、その素質の確かな器質的條件については、大部分、未だに詳しい事は解つてゐないのである。だが然し、我々は、神經性疾患の精神分析研究によつて、二種のより廣い豫想へ傾いてゐる。これが、我々の好んで各個の場合にぴたりとあてはめたいと思つてゐる豫想なのだ。我々が確からしいと考へることは、凡そ過大な衝動といふのは其の人の極く幼少の頃から既に活動して來たものである事、及び、その衝動の主權は幼兒生活で蒙つた印象によつて確立されたものであること、此の二つである。更に一歩進んで考へれば、此の衝動は、始源的に性衝動の諸般の力を吸引する事によつて增長された結果、後には性生活の一部分を代表し得るものであると見做される。

つまり、例へて見ればかういふ人は、他人が戀愛に捧げると同じ程度の情熱を探索研究に捧げるであらうし、又、戀をする代りに研究をする事も出來るに違ひない。かう言つた性的衝動力によつて、其の人間のいろいろな衝動が强められるといふ結論は、唯に探索研究慾についてのみならず、多くの他の、一衝動の特殊な强度の場合にもあてはめて行かれるのである。

人間の日常生活を觀察する事によつて敎へられる事は、大多數の人間に取つては、その性的衝動力が職能活動に寄與する處尠少でないと言ふ事だ。性慾といふものは、格別かうした助力者として恰好の適任者である。性慾が先天的に昇華能力を具へてゐる所以であると共に、又換言すれば、その本來の目的を、他の、機宜により高く評價されてゐる非性的の目的と交換する事が出來るからに外ならない。一人物の幼少時代の歷史が、即ちその精神上の發展が、彼の小兒時代の性的興味に强大な衝動の働いてゐた事を示すなら、此の場合には前に敍べた過程が立證されたのである。更に一步進んで此の立證を一層强く裏書きするのは、壯年者の性的生活中に著しい萎縮減退が確かめられた場合であつて、かかる際には、まるで性的活動の一端が强大な他の衝動によつて補償されてゐるかの如き觀を呈する。

かうした豫想を、强大な研究慾の場合に適用しようとすると、そこに何か特殊の困難な事情が伏在してゐる様に見えるが、それは、幼少の子供の中に、かかる眞劍な研究慾だの目に立つ程の性的興味だのが、よもや有らうとも思はれない、と考へる心持からである。子供といふものは種種樣々な事に好奇心を持つて、ひつきりなしに彼此と訊きたがるものだが、かうした質問癖は大人に取つてひどく不可解に思はれるものである。つまり、かかる質問は大部分遠廻しなものであり、子供といふものはかうした遠廻しな質問の連續によつて、どうしても口には出せない唯一つの質問を補償しようとしてゐるのであるから、結局、何處まで行つても質問の止む時がない。といふ事が理解されない限り、大人に取つてひどく不可解に思はれるのだ。段々に成長し思慮分別がつくやうに成ると、かうした好奇心からの質問癖は往々ぱつたりと熄んでしまふ。ところで、此の點に十分な說明を與へるのが精神分析の硏究なのだ。卽ち、多くの恐らくは大多數の、何等かの方面で天才的な素質を受けた子供は、凡そ三歲前後から、小兒期の性的探索と名づけ得る一の時期を通過するものである。此の時期の小兒に目覺める知識慾は、我々の知る限りでは突發的でない。一つの重大な體驗の印象によつて目覺めさせられる。たとへば、招來された、或は外

部からの經驗によつて恐れてゐた弟妹誕生によつて目覺めるのである。子供といふものは、弟や妹を、自分の利己的な關心の脅威として眺めるものだ。此の探索は、赤ん坊といふものは何處から來るのか、といふ質問と成つて現れる。これは恰度、自分に望ましくない出來事を豫防する手段と方途をでも探してゐる樣だ。さうして驚いた事には、子供といふものは與へられた解答を全然信用しない。例へば、神話的に深い意義のある鸛の寓話なぞ、頭から否認して終ふ。また此の、大人の言を信用しないといふ行爲こそ、彼自身の精神的獨立心の發足點と成るもので、どうかすると、大人に對して眞劍な反感を抱き、大切な機會に眞實を欺かれることを、心から斷じて容赦しない場合さへあるのだ。で、今度は子供流義の探索を始め、赤ん坊といふものは母親の腹に在つたのだといふことを考へ出したり、自分の性衝動に導かれて赤ん坊が食物から出て來るとか、生れる道は腸管だとか、よくは解らぬがそれに與かる父親の役割、等の子供らしい意見を揑上げる。さうして性的行爲の存在を感知するのも此の時期であつて、何か敵意を含んだ暴力行爲のやうに考へてゐるのである。ところで、自分自身の性的體質が、生殖の課程にはまだ發育してゐないやうに、「赤ん坊は何處から來るか」といふ探索も立ち消えの形で、未完成のまま放棄しな

ければならない。かうして、最初に企てた知的獨立が失敗に終つたといふ感銘は、いつまでも持續し、頗る心意を沮喪させるものらしいのである。

小兒の性的探索時期が、强烈な性抑壓の推進によつて閉塞された場合、その性的關心との早期の關聯によつて生じて來るのが、此の研究慾の將來の運命に對する三種の可能だ。第一種では、研究探索慾がそれ自身と運命を同じくし、それ以來好奇心(知識慾)が制肘されると共に、自由なる知的活動が恐らくは生涯に亘つて制限を加へられる。別して、其の直後に確實にされるのが、敎育による强力な宗敎的の思惟制肘だ。これが所謂、神經性障害の型であり、我々はかういふ風にして招來された思惟薄弱こそ、神經的疾患の勃發を暗示する初兆である事を十分承知してゐる。小兒期第二種の型では、知的發展が十分强力に成り、引摺り込まうとかかる性抑壓に抵抗する。小兒期の性的探索が消滅して後暫く經つてから、若し知力が强められてゐる場合だと、此の性抑壓を回避するための救ひを、以前の關係に求めるものだから、抑へつけられた性的探索が不知不識の間に今度は穿鑿衝迫の形で復活する。勿論此の場合には原形を失ひ、頗る束縛されたものと成つてゐるが、それでもなほ、思惟そのものを性的化し、知的運用に、本來の性的過程が有する快感と恐

怖とを色づけるだけの强烈さは十分に具へてゐる。かうなると探索慾は性的活動に變じ、時には極端な例外として、思惟に於ける解決の感情、即ち問題を解決した後のあの晴朗明快な感情までが、性的滿足と交代するのである。だが然し、小兒期の探索慾が此處にもその未完結な性質を復活させるから、此の場合の穿鑿には決して終局といふものがないし、叉、探ねんとする解決の知的感情といふものは、何處まで行つても遙か向ふへ向ふへと遠ざかるのだ。

第三種の型は、最も稀な、同時に最も完全なもので、神經性思惟の制肘を特殊な素質の力によつて免れる。勿論此の場合にも性的抑壓が現れることは言ふまでもないが、然し此處では、性快感の各部衝動を無意識の中に指揮する事が出來ず、寧ろ快感自身は抑壓の運命を脫して最初から知識慾へと昇華されるとともに、强力な探索慾に味方して其の力を增成するのだ。勿論此處でも、探索が或る程度の强迫となり、性的活動の代償を務めてゐる事は言ふまでもないが、然しその根柢に橫たはる心的過程の完全な相違のお蔭で（即ち、無意識から出た勃發でなく昇華と成つてゐるのだ）神經疾患の性質は出て來ず、小兒期性的探索の始元的な錯雜に繫がつてゐた束縛も脫落し、衝動そのものが、知的關心の爲に自由な活動を始め得るのである。昇華された性快感を

補給する事によつて、かくまで探索衝動を强化した性的抑壓といふものは、此の衝動が、性的なテーマとの交渉を忌避し得た事にも與つて力があつたのである。

我々は、レオナルドについて、あの超人的な探索慾が、所謂理想的の同性愛に極限された程萎縮した性的生活を伴つてゐることを考へ合せる場合、どうしても、彼こそ、前述の第三種型の一典型であると呼びたく成る。彼に在つて、性的關心事に於ける好奇心の小兒期活動の後、性的快感の大部分が探索衝動へ昇華するに成功したといふ此の事實こそ、彼の本質の核心であり祕密であつたに相違ない。だが、かうした解釋に對する立證といふものが容易に得られるものでない事は勿論である。此のために必要とされるのが、彼の初期小兒時代の精神發展を洞察する事だ。ところで、彼の生涯に關する報告がかくも貧弱でかつ曖昧である上に又、我々現代人によつてさへ觀察の注目を斥けるやうな事情について詮議だてをして、その資料を求めるなぞといふ事は、ひどく馬鹿らしく思はれるに違ひない。

レオナルドの幼少時代について、解つてゐるものは頗る僅かである。彼の生年は千四百五十二年、生地はフロレンスとエムボリの中間なるヴィンチといふ小さな町だ。私生兒だつたが、これ

も、確かにその當時では市民的に重大な耻辱とは思はれてゐなかつたのである。父は、セル・ピエロ・ダ・ヴィンチといふ名前の公證人で、公證人と地主を生業とした家柄である。家名を、土地の名から取つてゐるところから見ると可成りの舊家であらう。生母はカタリナと呼ばれて農家の娘らしく、レオナルドを生んだ後に、其の町の別の男に嫁してゐる。レオナルドの生活史中に生母が出て來るのは後にも先にもこれきりである。僅かに詩人メレシユコウスキ一人あつて、彼女の消息を跡づけ得たと信じてゐるのだ。レオナルドの幼少時代に關する確實な報告的記錄は、ただ一つ、千四百五十七年度のフロレンス徵稅臺帳あるのみである。之に據ると、彼は當時五歲で、セル・ピエロの庶子としてヴィンチ家の家族の一員に加へられてゐる。少年レオナルドが父の家に引取られたのは父とその妻ドニア・アルビエラの間に子供が無かつたからだつた。彼が、始めて父の家を去つたのは、アンドレア・デル・ヴエロツキオのアトリエに弟子入りするやうになつてからだが、何歲位の時かは判明してゐない。兎に角、レオナルドの名がコムパニア・デイ・ピツトリの會員名簿に載せられたのが、千四百七十二年。解つてゐる所は之で全部なのである。

二

レオナルドが、その科學上の草稿中へ幼時に關した報告を挿入したのは、私の知れる限りでは唯の一回であつた。禿鷹の飛翔を扱つた一節へ來て、ふと筆を止めた彼は、胸中に搖曳し來つた幼き日の追憶へと思ひを馳せたのである。

『かうも徹底的に禿鷹の研究を試みると言ふ事は、どうやら、余の遠い以前から定められてゐた宿命であるらしい。と言ふのは、これが、余に取つてはごく幼い頃の記憶として思ひ出されるからだ。まだ搖籃に横たはる頃、一羽の禿鷹が舞ひ降つて、余の唇を彼が尾もて開き、その尾を余の唇に押し當てる事一再でなかつたのである。』

つまり小兒期の追憶であると共に、實に奇妙不可思議な種類と言はなければならない。內容から言つても、その記憶が置かれた年代から言つても、訝しい限りだ。乳兒期の記憶をそつくり保存し得る事は、或は不可能でないかも知れぬが、然し確實なものとして見做す事は絶對に出來ない。とまれレオナルドの此の追憶が語る様な、禿鷹が尾で赤ん坊の唇を開けたなぞと言ふの

は、どうも眞實らしくなくお伽噺のやうに聽えるところから、我々の判斷には或る別種の解釋が迎へられ易い。これは判斷を妨げてゐる二樣の困難を一擧に終熄させてしまふ解釋で、つまり、禿鷹に關する場面はレオナルド自身の記憶でなく、後に作り上げた一つの空想を幼年時代に置換へたものであらう、とする解釋である。

(*) ハヴロック・エリスが、心理科學雜誌（一九一〇年七月號）で此の禿鷹の記錄について深切な討議をやつてゐるが、その中に、上述の解釋を反駁してかう述べてゐる。レオナルドの此の追憶は確かに一つの眞實な根柢が有り得る筈だ。といふのは、小兒期の記憶といふものは、往々、普通我々の信ずる以上遙かに早期の時代まで立戻る場合があるからである。大きな鳥でさへあれば、必ずしも禿鷹に限る必要はないのだ、と。私も此の說には進んで同意すると共に、困難を避ける爲かう言ふ假定を持ち出したいのである。母親は、何か大きな鳥が赤ん坊の傍へ舞ひ降つたのを眺めた事があつて、それが一つの重大な前兆と思はれ易かつた所から、後に、赤ん坊に繰返し其の話を聞かせた。その結果子供の記憶に此の話が保存され、後にはもう、よくある樣にそれが子供自身の體驗として記憶の中に置換へられてしまつたのである。かういふ風に變化してみても、前に述べた事柄の連絡は些かも損はれない。加之、人間

が成人した後に作り上げた幼少時に關する感想と言ふものは、かうした嘗て忘れ去られてゐた前期時代の小さな事實に依據するのが常則なのだとは言へ、禿鷹と呼ばれた鳥がかかる注目すべき行爲をしたといふレオナルドの場合のやうな方法で、現實の無に一つの形を與へ得る爲には或る神祕的な誘因が必要とされる所以なのである。

小兒期の記憶は、往々にして他に何等の起原をもたぬ場合がある。一般に、成年期の意識された記憶とは異つて、體驗から定着され繰返されるものでない。寧ろ、小兒期を既に通過したずつと後年に成つて初めて現れて來るもので、其の際、變化され、歪められて後年の傾向に役立つやうに作り換へられてゐるから、嚴密に言へば殆ど空想と區別がつかなく成つてゐるのが一般通有の狀態である。此の事情を明らかにするには恐らく、古代の民族に在つてはどうして歷史の記錄が發生したかといふ手段方法を考へるのが、一番手取り早いであらう。民族が小さく弱かつた間は、自分達の歷史を書き殘すなぞといふ考へはなかつたのである。國內の土地を耕し、隣國の侵略を防いで自分等の存在を安全にし、土地を肥沃豐饒にして富裕に成ることに努力した。言はば英雄時代であつて有史時代ではなかつたのである。やがて、別の一時代が展開すると、今度は人

間に意識が生じ、富と力の自信を持つやうに成つてから必要に迫られたのが、自分達は何處から出て來たか、又どういふ發展を遂げたか、等の知識だつた。かうして、自分達が體驗した現在の事件を逐次に記載し始めた歴史の記録は、同時に亦溯つて過去へも眼を向けて、傳統と言ひ傳へとを蒐め、風俗と習慣とによつて古代の殘存物に意義を與へ、かくて出來上つたのが太古史だつたのである。かかる太古史が、過去の寫實といふより寧ろ當時の民族の意見及び願望と成つた事は避け難い事實だつた。民族の記憶から、多くの事柄が除かれてゐると共に一方では又、種々と誤り傳へられた事が多かつたし、過去の痕跡が當時の精神によつて誤解された事も種々あつたからである。それに又、客観的の知識慾といふ誘因からでなく、當時の人間に影響を與へて、彼等を鼓舞し、向上させ、あるひは又彼等に一つの龜鑑を垂れようとして書かれた歴史だつたからである。成年期の經驗に關する意識された記憶が、今述べた歴史記録にそつくりだとすれば、その小兒期追憶は、それの發生と信頼し得る度合とから見て、後年傾向的に是正された一民族の太古史にその儘であらう。

では、レオナルドの搖籃を見舞つた禿鷹の物語りが後に生れた一の空想に過ぎないとしたら、

さう言ふ空想なぞにいつまでも拘づらつてゐるのは餘り褒めた話でない、と。之はさう考へられさうな事である。此の説明になら、勿論、世人に知れ渡つてゐる傾向、即ち彼の鳥の飛翔を研究するのに或る宿命的な心持を寄せたといふ傾向で十分だつたらう。だが然しである、かうした輕々に評價し去ることの不當さは、恰も、言ひ傳へや傳統、乃至一民族の有史前に於ける解釋の資料を、輕卒に放棄したと同樣でなければならない。如何に歪められ、どんなに誤解されてゐるにもせよ、兎に角、過去を偲び、その實際を表現させるのはかういふ資料による外はないのである。言はば之は、民族が、かつて強力だつたと共に今日もなほ影響力の多い誘因の支配下に、その太古の經驗から形成したものだ。だから、有効な知識の凡ゆる活動力によつて、此の歪みや誤解を溯る事が出來るとしたら、かかる言ひ傳への資料の奥に歴史的眞實を發見する事も出來るに違ひない。これと同じ事が個人の小兒期の追憶や乃至は空想にあてはまるのである。一人の人間が、自分の小兒時代について記憶してゐると信じて居るものは、決して輕々に扱ふ事が出來ない。其の人自身では理解して居らぬ樣な記憶の屑でも、其の奥を覗くと、その心的發展の最も重大な特徴に對する、貴重な證據の數々の隱されてゐる事が常である。

(*) 私は、不可解な小兒期の追憶については、爾來、かうした見方を他の偉人の場合にも試みて來た。ゲエテが自傳とも見るべき「詩作と眞實」を書いたのは、かれこれ六十歳前後だが、その第一頁で、彼が隣人に煽てられて大小の陶器を、窓から往來に投げつけて粉碎した、と報告してゐる。而も、實に之が、ゲエテの早期小兒時代について報告した唯一の場面なのだ。その內容が全然藪から棒である事、又、さして偉人にならない他の二三の人々の小兒期追想と符合してゐる事、竝にゲエテが、此の場合に弟の事を思ひ出してゐなかつた事情、等に刺戟されて私は、此の小兒期記憶の分析を企てたのである。(勿論彼は、後章で、自分の弟が赤ん坊時代に大變病身だつた事を洩らしてはゐる。此の弟は、ゲエテが三年と九箇月の時に生れ、その死亡した時はゲエテがかれこれ十歳に近かつた)――「詩作と眞實」に現れた小兒期追想の項參照、譯者。

ところで、かうした隱れた貴重な證據を明るみへ引き出す秀れた便宜を持つてゐるのが、我々の精神分析といふ技術なのだから、レオナルドの傳記に殘されてゐる間隙を塞ぐに、彼の小兒期空想の分析を以てしようとする試みは許されていいわけである。萬一これによつて見て何等滿足される程度の確實さが得られなかつたら、仕方がない。我々は、此の偉大な人物の謎を解かうと

して試みられた研究は他にも隨分多いが、みな何等より善い運命を決定し得なかつた例によつて自ら慰めるばかりである。

だが、精神分析者の眼で觀察すると、レオナルドの禿鷹に關する空想も直きに不思議ではなく成つて來る。よく考へれば、我々も時には、譬へば夢なぞで、同じ様な場合に出會つた記憶があるやうに思ふ。從つて、かうした空想を、その本來固有の言葉から普通一般に解りやすい言葉に翻譯するだけの勇氣が我々には在る。かう言ふ場合、翻譯が目ざすのはエロテイクな言葉だ。尾(Coda)は、男根の最も一般的な象徵の一つであると共に又、その代用詞の一つである。伊太利語では他の言葉と同じ様に使用されて居る。空想中に現れた様な、禿鷹が幼兒の唇を開けて、尾を以つて強く其の中を撫で廻したといふ状況は、フエラチオ(Fellatio)の仕草にぴつたり合つてゐる。これは、××を相手の口中に挿入する一種の性的行爲だ。飽までも奇怪なのは、此の空想が徹頭徹尾受動の性質を帶びてゐる事である。亦、婦人の或る種の夢や空想、乃至は、性的關係の際、女性の役割を演じる受動的同性愛のそれにも似通つてゐる。

さて讀者は、此處で胸を撫で下して暫く面上朱をそそぐ態の怒りを耐へ、精神分析の示す通り

跟いて來て戴きたい。と言ふのは、精神分析が既にその第一歩で、諸君が抱いてゐる純潔な一偉人への追憶に、許すべからざる侮辱を加へたことである。だが然しだ、如何に諸君が憤慨したからとて、それによつて、レオナルドの小兒期空想が何を意味するかを解く事は、言ふまでもなく不可能である。他方またレオナルド自身が明白に此の空想を告白してゐるのだし、旁々、どうも手放す氣になれない期待が有る。之は、呼びたければ偏見といふ名で呼んでも差支へないが、兎に角、かかる空想は、他の凡ゆる心理上の產物、例へば、夢、幻影、妄想、等と同樣に何等かの意味を持つてゐなければならないと考へるのだ。それ故、ここ暫くの間は寧ろ精神分析の仕事に正しい耳を貸して、どう言ふ結論を下すか待つた方がいいと思ふのである。

男子の××を口中に入れてそれを吸はうとする傾向は、現今ブルジョアの社會では穢らはしい性的倒錯の一つに算へられてゐるが、然し今日の婦人に在つては、亦昔の繪草紙類が示してゐる通りずつと以前の時代にも、非常に屢々行はれる事であつて、而も、戀愛の當事者たちにはさう言ふ穢らはしいなぞといふ氣持を全然起させないものであるらしい。醫者はよくかうした傾向から發した種々の空想に出會ふものだが、それがクラフト・エエビングの變態性慾論なぞ讀んだ覺

えも無い様な婦人だつたり、或は又其他の書物なぞによつて、かうした性的滿足の有り得るといふ事を讀んだ筈もないやうな婦人だつたりする場合がある。婦人に在つては、獨創的にかうした願望空想を拵へる事が容易であるらしいのだ。よくよく探索して見ると、かうした習俗上からはひどく輕蔑されてゐる情勢も、實は極く他愛のない起原を持つてゐる事が解る。これは、或る別の情勢の變化されたものに過ぎない。つまり、乳兒期に母親なり乳母なりの乳首を口に入れてそれを吸つた時に、誰しも一度は覺えのある快感の情勢が變化したものなのだ。かうした最初の享樂に對する器質的印象といふものは、よく破壞されずに刻みつけられて殘つてゐる。それが後に成育してから、機能では乳房であるが形態と下腹部の位置から見れば陰莖に匹敵する牝牛の乳房を見るに及んで、後年の、あの穢らはしい性的空想形成への第一階梯となつたのである。

さて、レオナルドが何故禿鷹に關する如上の體驗の追憶を乳兒期の中へ置いたか、といふ理由はこれで解つた。此の空想の背後に匿れてゐるものは、兎に角、母親の乳房を吸つた記憶――乃至は吸はされた記憶に他ならないのである。それは、彼及び他の多くの畫家達が、神母とその子を表現しようとして彩管を揮つたあの人間的な美しい情景でなければならない。勿論此處で確實

にして置かなければならぬ事は、男女兩性に取つて等しく有意義な此の記憶が、どうして、男性であるレオナルドの場合にかうした受動的同性愛の空想に變形されたか、といふ謎は未だ解かれてゐないといふ事である。母親の乳房を吸ふ事と同性愛とが果してどんな關係を持つてゐるのか、その疑問は一先づ措いて、單に思ひ出されるのは、レオナルドが實際に同性愛を感じた人間であつたと傳へてゐる傳說である。かと言つて何も、青年時代のレオナルドに加へられた例の非難が正しかつたか否かを問題にしようといふのではない。我々に取つてはそんな事はどつちでも差支へないのだ。或る人間に倒錯の特性があるか否かを判定する場合、それを裁決するものは實際上の行爲ではなく、寧ろ感情の置きかたなのである。

第一に興味を惹かれるのは、レオナルドの小兒期的空想が一つの不可解な特徵を示してゐる事だ。此の空想の意味は母親から授乳されてゐる事を示すものであると共に、又、此處では一羽の禿鷹が母親の代用をしてゐる事が發見される。では、此の禿鷹は何に由來して現れたのか。又どうして母親の地位に取つて替つたのか。

此の疑問に應じて思ひ起される事がある。時代がひどくかけ離れてゐるから、思ひ起すのは一

寸困難かも知れないが。古代エヂプトの神聖な象形文字を見ると、母親といふ言葉はいつも禿鷹の形によつて現れてゐるのである。此のエヂプト人は一種の母性神をも祀つたが、その母性神の頭部は禿鷹の首であつた。或は數種の首で現された場合にも、尠くとも其の中の一個は禿鷹の首が使用された。此の女神の名はムウトと呼ばれたのであるが、その發音が、ドイツ語のムツタア（母の義）に似通つてゐる事は、果して一の偶然に過ぎないのであらうか。又かやうにして禿鷹が、事實、母親と連絡關係あるものとして、それが我々にどういふ助けと成り得るのであらうか。初めて、象形文字の讀方に成功したのが、フランソア・シャムポリオン（一七九〇年——一八三二年）だとすると、果して、レオナルドにおなじ知識があつたと推測することは正しいであらうか。

此處で興味ふかい問題は、如何なる筋道によつて、古代エヂプト民族が禿鷹を母性の象徴に選んだか、といふ事でなければならない。エヂプト民族の宗教と文化とは、早く、ギリシャ人及びロオマ人の、科學的な好奇心を喚起して居たもので、エヂプトの碑文が、我々自身にはまだ讀破し得なかつた以前から、ごく古代の古典本によつて、之等に關する個々の報告が提供されてゐた

のである。その著述の一部は、例へばストラボ、プルタルク、アミニアヌス・マルセルスなどの如き知名の著者の筆に成り、一部は、例へばホラポロ・ニイルスの象形文字とか、ヘルメス・トリスメスギストといふ諸神の名を冠して傳へられた、由緒と著作年代の不明な、東洋的の悟道を說いた著述である。かういふ古文書によつて敎へられることは、古人が、禿鷹といふ鳥類は雌だけで、雄は無いものと信じてゐた點から推して、『此の時代には禿鷹は母性の象徵だつたのである』といふ事だ。だが、古代の博物學は、かうした制限への對照をも心得てゐたので、エヂプト民族が神として崇めた甲蟲には、雄だけしか無いものと信じられてゐたのである。

では、どれも雌ばかりだとしたら、一體禿鷹の受胎はどうして行はれるのか。此の疑問については、ホラポロがうまい說明を與へてゐる。或る一定の時期が來ると、飛翔中の禿鷹は空中で飛翔を止め、膣を開放して風から受胎するといふのだ。

此處で、我々は意外な結論に逢着する。それは、我々がつい今の先までも無稽の事として排斥せずにおかなかつた事柄を、今度は、正當な蓋然として見なければならない事である。エヂプト人は、禿鷹の繪によつて母性の概念を現さうとしたが、此の科學的メルヘンを、レオナルドは十

分知悉してゐたのだ。彼は非常な多讀家で、その興味と關心とは、文藝と科學の廣汎なる領域に亙つてゐる。彼が、或る時期に藏してをつた書物の目錄は、コオデクス・アトランチクウスの中に悉く盡されてゐるが、而もそれ等の書物には、彼が友人から借用した他の書物についてのノオトが、實に夥しく書込んであるのだ。又、リヒテルの、スケツチを基にして編輯した拔萃に據れば、レオナルドの讀書がどれ程廣汎に亙つてゐたか、殆ど見極めがつかないのである。そして、此の廣汎な讀書範圍の中には、古代並に當代の、自然科學に關する著作も亦包含されてゐた。かかる著作は、既にその頃印刷されてをつたので、恰もミラノは、當時の幼稚なイタリイ印刷技術の中心地だつたのである。

さて、探索の眼を更に進めて見ると、こんな報告が出て來る。それは、レオナルドが、禿鷹のメルヘンを知つてゐたであらうといふ推測を、一層確實にするところの報告だ。例のホラポロの出版者で註釋者を兼ねた博識の學者が、既に引用したテキスト一七二頁で、次のやうな注意をしてゐるのである。

『自然からの彼の證據を論駁しようとして、敎會の敎父等が論じたものは、貪婪な人間の情慾に

闘する別の物語りだつた。彼等の論難は、處女マリアが男なしに子を生んだ事を否定する人達へ向けられたものである。かうして、此の問題は廣く世人の注意を惹きつけた。」

即ち、單性と受胎とに闘する禿鷹の寓話を、あの甲蟲のそれと同一に見做す事は斷じて出來ない。敎父たちは、聖書の物語りを疑ふ人〻への論駁の根據を、博物學から借用するために前の寓話を利用したのだ。禿鷹の凮による受胎が、古代からの立派な報告によつて立證される以上、一遍位は、同じ事が人間の女性にもあつて然るべきではないか。と、マリアの處女受胎を可能の事實とする爲に、敎父は殆ど例外なしに、禿鷹の寓話を持ち出すのが常であつた。かう成るともう、レオナルドも亦、此の寓話をかかる有力な後援者を通じて聞き及んだであらう事は、殆ど疑ふ餘地がない。

で、レオナルドの禿鷹に闘する空想の發生は、次のやうにして假定する事が出來る。卽ち、彼が、敎父の話によつてか、乃至は自然科學の書物なぞによつて、禿鷹には雄がない事、從つて、雌だけで生殖する法を知つて居たと聞いた時、彼の心に一つの記憶が浮び上つた。前の空想は、此の記憶の變形されたものであつたが、同時にまた、彼自身もさうした禿鷹の子だつたこと、卽

ち、父親を持たぬ、母親だけの子供であることを意味しようとするものであつた。さうしてそれへ恰度、古い印象が印象自身だけで現れ得るやうな具合に結びついたのが、母の乳房によつて受けた快感の餘韻だつたのである。かの「子供を抱いた神聖處女」の高貴な概念は、多くの著述家が殘した諷示によつて美術家たちへ植ゑつけられたが、レオナルドの場合には、此の空想が殊に貴重な意義深いものに思はせられたばかりか、やがては、自分自身を嬰兒時代のキリストに比して、獨り一母性の慰安者でない、全母性の救濟者とまで思ひ込むに至つたのである。

小兒期の空想を分解するに當つて、我々の努力は、先づ、空想の現實的な記憶內容を、後年の、これを變形し置換させる諸種の動機から分離する事に向けられる。レオナルドの場合を言へば、以上で、彼の空想中の現實的內容は知り得た。母親が禿鷹で代用されたといふ事は、父親を失つて母親と二人ぎりであつたことを示し、レオナルド自身が私生兒だつた事實は又、彼の禿鷹の空想と一致する。かういふ一致があつたからこそ、彼は、自分を禿鷹の子供と比較し得たに過ぎない。だが、彼の幼年時代については、確實と言つてもよい事實として、こんな話が傳へられてゐるのだ。それは、彼が、五歲の時には父親の家庭に引取られて居たといふ事實である。之が

行はれたのはいつだつたか、誕生後數箇月だつたか、出生屆が濟んでから數週日の後だつたか、それは全然不明だ。が、これを、前の禿鷹に關する空想と思ひ合はせると、レオナルドが、尠くとも實父を忘れて終ふに十分な生後數箇年の時日は、貧乏な一人ぼつちの實母と暮してゐたことが判る。かう言ふと、如何にもあやふやな、而も相變らぬ、精神分析研究といふものの危險な獨斷のやうに思はれるが、然し之を更に推進めて行く中に、立派な意義が生れるのである。此の確實さへ更に一石を加へるものは、レオナルドの幼年時に於ける實際上の關係だ。記錄で見ると、彼の父セル・ピエロ・ダ・ヴィンチが、身分の高いドニア・アルビエラと結婚したのは、既にレオナルドが生れてゐた年の事で、アルビエラとの間に子寶の無かつた事が、やがて正式に、レオナルドを實父の家、といふよりも祖父の家へ引き取らせたのである。此時、彼は五歳だつた。ところで、まだまだ子寶を期待し得る若妻に對して、新婚の當初から、私生兒の養育を押しつけるといふ事は、普通に有り得ない話だ。私生兒レオナルドは、多分は可愛いい子供と成つてゐたらう。が然しそれを、夫婦の間に待ち望んでも得られなかつた正統の嫡子として引き取る、といふ決心がつくまでには、恐らく、失望の何年かが經過した筈である。レオナルドが、一人ぼつちの生母

の膝下から實父の手に移り得たまでに、尠くとも三年の、恐らくは五年の、歳月があつたと考へる事は、禿鷹の空想が暗示する所にぴたりと一致する。之だけの歳月があつたとすれば、もう遲いのだ。印象といふものや、外界に對する反應の仕方といふものが、固着され、決定されるのは、生後三年乃至四年の間で十分であつて、後年のどんな體驗を以つてしても、もう、最初に受けた印象や外界への反應性を奪還する事は不可能なのである。

『不可解な小兒期の記憶と、その記憶を土臺とした空想とは、常に、その人間の精神發展中の最も重要な部分を現す』と言ふことが正しいなら、禿鷹の空想に據つて確實にされた事實、卽ち、レオナルド誕生後の最初の幾年かが、母親と二人ぎりで過されたといふ事實こそ、彼の心的生活を形成する上に、此の上ない決定的の影響を及ぼさずに置かなかつたものであらう。かうした境遇に置かれた子供の必然として、早く、他の子供よりも一層強く一つの問題と直面し、特殊な熱情を以つて問題の謎を穿鑿し始め、幼年時代から早くも一個の研究者と成つて、「嬰兒（あかご）といふものはどうして生れるのか、その出生に對して父親といふものはどんな役目を持つてゐるのか、」といふ大きな疑問に惱むやうに成るのは、蓋し避け難い所だつた。後年、レオナルドをして『余が鳥類

の飛翔といふ問題に沒頭したのは昔からの因緣であつた』と言はしめたのも、既に搖籃時代に一羽の禿鷹のお見舞ひを受けたところから、かうした、研究と小兒時代の經驗との淺からぬ因果關係が豫想されたのである。之は後に說明するが、鳥類の飛翔に向けられた知識慾を、小兒期の性的好奇心へ歸納するといふ事は容易に解決し得る課題なのだ。

三

レオナルドの小兒期記憶が示すところの禿鷹の要素は、現實的な回想の內容だ。レオナルド自身が彼の空想を据ゑつけた關聯によつて、彼の後年の生活に對する此の內容の意義へ、一條の光明が投げられたのである。今、解釋の進展に連れて逢着するのは、かかる回想の內容が何故に一つの同性愛的狀況へ轉化されたか、といふ奇怪な問題である。子供に哺乳する母親——解り易く言へば、子供に乳を吸はせた母親——が、子供の口中へ尾をさし込んだ一羽の禿鷹といふ鳥に變形されてゐるのだ。此處で言つて置きたいのは、禿鷹の尾(コオダ)が、一般に代用される用語では、男子の生殖器、陰莖以外の何物をも意味しない事である。だが、母性の象徵だつた此の鳥類に、殊さ

ら男性の記標が與へられたのには、果してどんな空想が働いての事か、それは解し得ないし、また、かかる荒唐無稽の事實に對しては、此の空想の形態へどうしたら合理的の意味を與へ得ようかと、思ひ惑ふのである。

と言つて、諦め捨てる要はない。既に幾多の、一見荒唐無稽と見えた夢の數々を捉へて强制的にそれ等の意義を告白させて來た我々ではないか。子供の空想を、夢よりも扱ひ難(にく)いとする理由がどこに在らう。思ひ起されるのは、孤立した特殊性を發見するのは善くない、といふ事だ。では急いで、第二の、より一層顯著な特殊性の解決に取りかからうか。

エヂプト民族の女神ムウトは、禿鷹の頭を形(かた)どつたもので、全然非人稱的性格の形態である事は、ロツシエルの辭典に載せられたドレクスレルの批判を俟つまでもない。ところで、かういふ形態は、往々、例へばイシスやハトオルの如き生命的個性をもつた他の母性神と融合されがちだが、然し、その際にも、原神としての別個な存在と崇拜とは保有されてゐる。個々の神々が混合し融合されながら、尙かつ原個性を失ふに至らなかつたのは、エヂプト式パンテオンの獨得な特徴なのである。一方に諸神合流が行はれながら、他方にまた、單一なる諸神形態が、どこまでも

各〻の獨立性を保有してゐるのだ。エヂプト民族が、一般に、禿鷹の頭をもつた母性神へ男性的表現を與へた所以は此處に在る。卽ち、ムウトは、胸部には女性の特徴である乳房を持ちながら而も、勃起狀態に於ける男根を具へてゐるのだ。

つまり、女神ムウトに見られる、母性と男性の特徴の結合は、そのままレオナルドの禿鷹に關する空想中に現れてゐるのである。かかる偶然の一致を、果して、レオナルドが「母性の禿鷹に與へられた兩性具有の性質をも、讀書によつて知つてゐた」といふ假說から說明してよいであらうか。こんな說明の可能が疑問である事は言ふまでもない。彼の讀書範圍には、何等、かうした奇妙な推定を下し得るものを含んでゐないやうである。寧ろかかる偶然の一致は、一つの共通した、其處此處に現れながらなほ十分に知られてゐない、或る動機の方へ歸納した方が妥當であらう。

神話學の報告するアンドロギン的成形、卽ち、男女兩性の性的特質の合流といふ事は、ひとりムウト女神にだけ限つた事でない、イシスやハトオルの如き神性にも現れてゐるのだが、後者では、恐らくこれ等の神性も亦、母性的性質を持つてムウト女神と融合した場合に限つて、存在し

たのであらう。神話學は更に、後年ギリシヤのアテエネを生んだ原神サイスのナイトの如き諸神までも、始原的にはアンドロギン、即ち半男半女として解釋される事。また、同じ事が、大多數のギリシヤ諸神、別してデイオニソスを繞る諸神や、後代にはただ愛の女神に限定されたアフロデイテにまでも該當する事、等の事實を教へてくれるのである。更にまた、神話學の引出して來る說明は、かかる女性體に與へられた男根の意味は自然の創造的原動力に在つた事、及び之等一切の半男半女的諸神の成形が表現する觀念は、男性と女性の結合によつて初めて神性にふさはしい完全圓滿相を現し得るといふに他ならなかつたこと、などである。然しながら、かうした註釋によつても、なほ依然として未解決のままに殘された心理學上の謎がある。即ち、母なる本質を具體すべき筈の形態に、母性とは凡そ正反對の男性的力の表徵を與へながら、而も其處に何等の矛盾をも、人間の想像力が感じなかつたのは何故か、といふ疑問だ。

之に說明を與へるのが、小兒期性慾の學說である。勿論、男子の性器官が母性の再現と結びついて見られた時代はあつた。男の子の好奇心が性的生活の疑問へ向けられると、先づ、自分自身の性器官に對する興味によつて支配される。彼は、自分の肉體の此の部分を非常に尊い大切なも

のと思ひ込む餘り、自分と同様な他の人間にはこれが無いだらうと信じきつてしまふ。又、自分のと匹敵する價値を持つた、性器官の別の型がある事を考へ出し得ないところから、人間は誰でも、女でも、自分のと同型の性器を持つてゐるといふ結論に陷つて了ふ。かうした偏見が、若い研究家である子供の頭に固く刻みつけられる結果、假令、女の子の性器を初めて見る機會があつても、その位の事ではなかなか最初の偏見を捨てようとはしない。勿論此の場合の認識は、彼自身のとは大分異つてゐる事を敎へるのだが、然し、認識内容として、女の子には陰莖が發見され得なかつた事を是認するまでには至らないのだ。陰莖が無い場合も有る、なぞといふ事は、子供にとつては、想像するさへ恐しい、耐へきれない事實である。だから子供は、此處で一つの便宜的な妥協說を持出して來る。卽ち、「陰莖は女の子にも在るのだが、まだ大變小さいだけの話で、將來は大きく成るのだらう。」といふ考へ方である。ところで、かうした期待が、後年の觀察によつて裏ぎられさうに成ると今度は更に『陰莖は女の子にも在つたのだが截取られたのである、さうしてもと在つた個所に傷痕が殘つてゐるのだ』といふ新たな遁辭を持ち出す。理論上のかうした進歩には、既にお誂ひ向きの痛苦の性質を帶びた體驗があるのだ。卽ち、子供は、自

分の陰莖に對して餘りに露骨な關心を見せた時、誰かに聞かされた、その貴重な器官を切り取つてしまふぞといふ脅迫がそれだ。かうした去勢の脅迫の影響を受けた子供は、今度は、女性の性器官に對する解釋を訂正しなければならない。さうしてそれ以後は、自分が男性であるといふ事に戰慄を感じながらも、女に對しては、陰莖切斷といふ恐しい刑罰を旣に與へられてしまつたものと、子供らしい考へ方で眺め、その薄倖な同胞を輕蔑するやうになるのである。

(*) 私の見るところでは、西洋民族の間に原始的な力で現れるあの不合理なユダヤ人憎惡も、またその根元な此處に探ね得る事は否定し得ない。割禮は、無意識の裡に去勢と同一視されてゐるのだ。私の想像を、思ひきつて人間種族の原始時代へまであてはめることが許されるなら、元來割禮なる事柄が抑も、去勢の中和的代償であり代辯であつたに相違ないと考へ得る。

子供が、去勢といふ總括的な概念にまだ征服されてゐない時、卽ち、女といふものをまだ輕蔑的に見ないときに始まるのが、例のエロチツクな衝動行爲として現れる猛烈な覗きたい慾望である。始原を考へれば、恐らく自分のと比較したいためであらうが、兎に角、子供といふものは他人の性器官を見たがるのだ。母といふ人格から發散するエロチツクな魅力は、やがて、自分のと

同じ陰莖だと信じてゐる母の性器官への憧憬に高まつて行く。さうして、後年初めて、女には陰莖がないといふ認識を得ると同時に、前の憧憬と打つて變つた憎惡の現れることも稀でない。思春期に於ける精神的イムポテンツや、女嫌ひ、繼續的同性愛、等を惹き起す原因は皆これだ。だが、一度熱望した對象、即ち「女の陰莖」といふ信念の執着は、子供の精神生活に於て拭ひ取り難い痕跡を止めるので、特に、小兒期の性的探求心といふ過程を特別深刻に經過して來た子供には、この痕跡が著しい。女性の足や靴なぞを偶像的に崇拜するのも、要するに一度崇拜して、而も後に裏ぎられた女性の性器官に對する、代償の象徵として崇拜するに過ぎないらしい。又、よくある『女の髮きり』といふのも、無意識の裡に、女の性器官へ去勢を行ふ者の役目を演じてゐるのだ。

一般に、性器官及び性機能への文明的輕蔑が捨てられない限り、子供の性的活動に對する正しい事情を汲み取る事は出來ないと共に、恐らくはまた、かかる報告を一笑に附さうとする手段が取られるであらう。子供の精神生活を理解する上に必要なのは、原始時代の相似類同（アナロギイ）だ。人類に取つて、性器官が隱し所（プデンダ）、即ち羞耻の對象となつたのは、幾時代かの古い昔からの事で、しかも

それが、性的抑制の伸展するに連れては、つひに嫌忌の對象とまで成つたのである。試みに今日の時代の性生活を大觀して見るがよい。別して、人類の文化を代表してゐる層へ眼を放つて見給へ。近代の人の大多數は、自責を感じながら生殖の掟に從つてゐるではないか。生殖の仕事を遂行するに當つて、なにか人間としての品位を傷つけ、墮落させられたやうに感じてゐるではないか。では、性生活に對する別の見解はないのかといふと、それも在るには在るのだが、ただ、野蠻未開の低い民族層へ撤退されてしまつて、より高い醇化された文明民族の層では、非文化的な事として隱蔽され、その實踐に當つても、或る誤つた良心の悲痛な呵責を伴はずに濟まないといふ狀態だ。人間種族の原始時代には、かうでは無かつたのである。文明史家たちの難澁な蒐集のお蔭で與へられた確信によると、性器官は、太古の始原に在つては生命の誇りであり希望であり、神と同じ尊敬を享け、又、その機能の神性は、人間の新しく學び得た凡ゆる活動の上へ置き換へられたのである。數かぎりない諸神の形態も、みな性器官本來の意義の昇華によつて生れたものであると共に、又、性的活動に對する公認宗教の關係が、早く、一般民衆の意識に遮蔽されてあつた時代、之を、一團の信徒によつて生かさうと努めたもので、所謂淫祠と呼ばれた密教に

他ならない。かうして最後に、文化の發展に連れて行はれたのが、性的なものの中から、こんな豐富な神と聖とを抽出する事だつた。その結果、殘滓と成つた純粹に性的な部分が、輕蔑され貶しめられるに至つたのである。ところで、性器官崇拜の最も原始的な形式すら、その證跡を近代に至るまで擧げ得るし、又、現代人の用語、習俗、迷信等の中には、前に言つた文化進展の凡ゆる層からの記念的遺物が含まれてゐるのだが、之等の事も、凡そ心的印象の本質中に存する不滅性を考へ合せれば、別段怪しむにも足りないのだ。

　個體の精神發展が人類進化の過程の短縮された再演であるといふ前提は、重要な生物學上の相似類同（アナロギイ）によつて與へられてゐる。從つて、性器官に對する小兒期評價についての、子供の精神分析研究を出鱈目の一語で否定することは出來ないであらう。子供が、母親にも陰莖があるといふ假説を抱く事は、例へばエヂプト民族の母性神ムウトの男女兩性的成形や、またレオナルドの小兒期空想に現れた禿鷹の尾（コオダ）などを發生したのと共通の源泉から來てゐるのである。私達が、かうした諸神描寫を、醫家の所謂ふたなり（ヘルマフロデイット）といふ言葉で言ひ現すのは勿論誤解に過ぎない。諸神の中には一人だつて、俗に言ふふたなりの如き、嫌惡を感ぜしめるやうな畸

型のものはないのだ。皆、母性の表徴としての乳房と、男性的陽根とを兼有してゐるに過ぎないので、恰度、母の肉體について子供が考へた最初の想像と同一なのである。此の尊信すべき、始原的空想の母體成形を信徒のために保存してくれたのが、神話である。レオナルドの空想に現れた禿鷹の尾も、かくして、次のやうに飜譯する事が出來よう。『その頃私は、可憐な好奇心を母の上へ向けてゐたので、母にも、私のと同一の陰莖があるものと想像してゐたのである。』と。これは、彼の早期の性的探究心に對する第二段の證據であつて、私達の見解によると、之こそ、後年の彼の全生活を決定したものだつた。

此處で少し考へ直して見ると、レオナルドの小兒期空想に現れた禿鷹の尾の說明が、これだけでは十分でないといふことに氣がつく。之にはどうやら、私達のまだ理解し得ないものがひそんでゐるらしい。その最も目立つ特徵は、母の乳房を吸ふといふ事が、吸はされるといふ、つまり受動の形に、從つてまた、疑ひもない同性愛的性質の狀勢に轉化されてゐる事だ。レオナルドの生涯に同性愛的行爲があつたとする、かの歷史上の推測を考へ合せる時、先づ浮んで來るのは、果して此の空想が、彼の母に對する小兒期關係と、理念の上だけだつたとは言へ、彼の後年に顯

れた同性愛的傾向との間の、原因的な關聯を證據だてはしないか、といふ疑問である。私達が、歪められた彼の回想からかかる推理を敢てする所以のものは、實に、同性愛病患者の精神分析研究によつて、かかる事實の成り立つ事、いな寧ろ緊密必然の事實である事を辨へて居るからに他ならない。

今日、同性愛的行動の法律的束縛に對して、熱心な反抗運動を企ててゐる同性愛の男子が好んで言ふところは、『一つの最初から分離された性的變質、性的中間者、所謂第三性』といふ、彼等の理論的代辯者の宣傳した言葉である。彼等は、胚種からの器質的條件によつて、女を相手では感じ得ない快感を、男同士に求めるべく强ひられた男性でもあらうか。では、進んで、人道上の見地から彼等の要求を是認してやりたいが、待ち給へ。此處に、私達を引き止めるものがある。それは、同性愛の心的發生を考へずに揭げられた彼等の理論だ。精神分析の提供する手段は、此の缺陷を補塡すると共に、又、同性愛者の主張なるものを再吟味の俎上に載せるのである。精神分析が、此の課程を滿足させるために必要とした患者はごく小數だが、而も、今日までに行はれた凡ゆる研究は、驚くべき成績を擧げてゐる。

(*) I・サドガアの研究、これは余自身の經驗から具體的な支持を與へ得る。また、キインのW・ステエケル、ブダペストのS・フエレンシイ等の研究も、同樣な成績を擧げた事が判つた。

同性愛の男子の總てが、（後年、個性によつて忘却されてはゐるが、）初期の子供時代にはみな、女性に對して、普通の場合は母親に對して、頗る猛烈なエロテイクの執着を呼び起され、それが或る時は、母親自身の甘やかしを受けて增長したり、更にまた、早く父親に死別れた事によつて支持されたのである。サドガアは、扱つた同性愛患者が、多く、亭主を尻に敷いた精力的な性格の、男まさりの母親を持つた子供である事を特記してゐる。此の例は、時折私も實見したところだが、特に強い印象を與へられた場合を擧げると、父親が最初からゐなかつたり、或は早く死んでしまつてゐたために、全然子供の意思が、母親だけの影響下に委されてあつた事實である。どうやら、強い父親の存在するといふ事が、息子の異性選擇に對して、正しい決定能力を確保するのではあるまいか、と考へられるのである。

(*) 精神分析研究が、同性愛を理解する上に提供した事實は二つある。勿論、之を以て直ちに、かうした性的迷走の誘因が盡されたとは信じないが、とに角、あらゆる疑念を容れない程明白な事實で、一

つは、前に述べた、母親への愛情欲求の執着であり、一つは、「各人が、最も健全常正の人間でも、同性愛的な對象選擇の傾向を持つてをり、一生に一度は何處かでそれを實行すると共に、又、無意識の中にでも此の傾向を保持して居るか、或は、强力な反撥態度によつてこれを防いでゐるかに過ぎない」といふ主張の中に表現された事實である。此の二つの確證こそ、所謂第三性と見做された同性愛者の要求もまた、先天的及び後天的の區別を同性愛に與へる事を重要視する說も、二つながら窒息させて終ふものだ。異性の肉體的特徵を具備してゐるといふこと、卽ち、物理的半男半女は、同性愛的な對象選擇の現れる上に頗る促進的ではあるが、然し決定的ではない。同性愛の代表者たちが、精神分析によつて確かめられた新知識に、馬耳東風の態度を取つたのは實に遺憾と言はざるを得ぬ。

さて、かうした前程を經て一つの轉向が現れるのだが、その機構は判つてゐるが、その推進力の何物であるかは未だに捉へる事が出來ない。母親への愛は、これ以上立ち入つた意識的の發展を見せ得ないので、結局、抑制されて滅るのである。子供は、母親への愛を抑制するが、同時に、自分自身を母の立場に据ゑ、自分と母親とを同化させ、自分といふ人間を典型として、新しい愛の對象を此の典型に似通つた者の中から選擇するのだ。かうして彼は同性愛に陷るのだが、

本來之は、自己エロティズムスに逆戻りしたに過ぎない。青年期に入りかけた少年が年下の少年を愛するのは、結局、彼自身の幼年期の再生か乃至はその代用を、母親が幼年時の彼を愛したやうに愛してゐるに過ぎないからである。言はば、彼はナルチスムスの過程上に愛人を見出したのである。ギリシャ神話に、ナルチススといふ青年があつた。水鏡に映つた自分の容姿に戀こがれた揚句、美しい花と化してから、彼の名をそのまま、花は水仙と名づけられたと言ふ。

かかる過程を經て同性愛者に成つた男が、無意識の裡に忘れ兼ねた母親の面影に戀着してゐるといふなら、それは、十分に徹底した心理上の考察によつて是認されよう。母への愛を無理に抑制した結果、その愛が無意識の裡に保存されて、飽くまでも母への貞節を完うしようとする。だから、彼が愛人として少年を追ひ廻す事は、實際には、母へ捧げた貞節が他の婦人によつて破れる事を回避してゐるのだ。一見同性の刺戟だけしか感じないやうな男でも、實際には、常態の男子と同じに、女性の發散する魅力に征服された事實を、直接、個々の觀察によつて立證する事も出來るのである。然し、かういふ男はいつでも、女性によつて刺戟された興奮を同性の方へ移植してゐるから、つまりかうした方法によつて、彼自身が同性愛者と成つた機構を終始反復して

ゐるに過ぎないのだ。

これは、同性愛の心的發生に關する此の說明の意義を誇張して言ふのではない。如上の說明が、同性愛の代表者たちの公表した學說とひどく矛盾してゐる事は明白だが、またこれが、此の問題に、徹底的な闡明を與へるに十分の包括性をもたない事は、善く辨へてゐるのだ。實際に同性愛と呼ばれてゐるものは、恐らく、種々雜多な性的心理の抑制が過程として現れたものであらう。そして、私達の認識した過程は、それ等多數の過程中の一つで、同性愛中の一類型にだけしか該當しないものかも知れない。此の同性愛の類型に在つては、私達が求めてゐる條件を具へた實例の數が、治療效果の本當に現れた實例の數に比べて遙かに多かつたから、私達もまた、告白せずにはゐられない。『世人が、一般同性愛の原因と見たがる未知の、體質的因子の共同作用の存する事は否定し得ぬ』と。私達は、禿鷹に關する空想から出發して分析を進めたのであるが、もし、レオナルドに、同性愛の此の類型を示す確實な推理が及ばなかつたら、これまで研究した同性愛の、此の類型の心的發生へ入り込んで行ける機會が果して何處に在つたらうか。

この藝術及び科學の兩分野に跨つた巨人の性的生活については、餘り詳しいことも判つてゐな

いが、また、同時代の人の記述や報告だつてさうひどく出鱈目でもあるまい、といふ點は信じてよからう。傳説の光彩の中に現れたレオナルドは、性的慾望と性的活動の餘りにも低い人間としての、恰も、人類の高尙な追求のために、人類の卑俗な動物的本能を捨離し超脫した人間としての、姿である。では、此處に殘されるのが、「レオナルドはいつ、如何なる方法を以つて、直接、性の滿足を求めたか」或は、「果して、性の滿足といふ事を斥け得たのか」といふ疑問だ。此處で人間を絕對に性的活動へ驅り立てるところの或る感情の流れが、レオナルドの中にも在つたか、否か、それを先づ探し出す必要がある。といふのは、廣い意味の性慾、卽ちリビドといふものは、たとひ本來の目標からは隔離されることがあつても、乃至はその遂行に躊躇する場合があつても、リビドそれ自體が人間の精神生活を構成する分子である事に、變りはないと信じてゐるからである。

レオナルドの中に豫期する事を許される性的慾望は、辛うじてその痕跡だけであるが、この痕跡こそ、一つの方向を指示して、彼を飽までも同性愛者の中に數へさせてくれるものだ。誰もが特筆大書してゐる事實に、彼は非常な美少年や美靑年を弟子にしてゐた、といふ一項がある。彼

は、之等の弟子に對して、深切で寛大で、病氣の時などはまるで母が子供を劬はるやうに、少年時代の彼に對する生母の愛撫もかくやと思はれるばかり、親しく弟子の看護をやつた。彼は、弟子を選ぶに當つて、その才を問はず容姿の美醜を以てしたため、門下の、チェザレ・ダ・セスト・ボルトラフイオ、アンドレア・サライナ、フランセスコ・メルチ等、一人として一流の畫家に成つた者がない。彼等の多くは、師を離れては一家を成し得ず、師の歿後、美術史に名を殘すことなくして滅びた。その畫風から言へば、當然レオナルドの門下と言つてもよい他の畫家、例へば、ルイニ・ソドマの筆名で通つたバッヂの如き、實は個人的には、レオナルドと一面識さへなかつた男である。

弟子に對するさうした態度が、一般に、性的動機と何の關係があるのだ。そんな事からレオナルドの性的特質を結論する事が出來るものか、などと言ふ抗議が出るのは百も承知なのである。我々は十分の愼重さで主張したい。『我々の獨得な觀察によつて、師としての彼の態度の中から、一般には謎として葬り去られる筈の、奇怪な性癖の二三を捉へ得た』と。レオナルドは日記を書いてゐた。それは、右から左へと走る微細な文字の、自分だけにしか解らない文句だつた。此の

就て根の乘法を敎はりなさい』とか、『お前はアバッコ先生から球體の求積法を敎へて貰ふがいい』と書いてゐる事だ。

さうかと思ふと旅行をする際に『私は庭園の用件でミラノに行く………行李を二つ拵へさせろ。お前はボルトラフイオに旋盤を出させて、それで石を磨け、――アンドレア・イル・トデスコ先生に本を渡せ』と書き、別の個所ではまた頗る特異な意味の思想を敍べてゐる。『お前は、この論文の中で、地球が、月に似た略同樣な星體である事を示し、以て我が地球の尊いものである事を立證せねばならない』

レオナルドの日記は、大體普通人の日記と異つたところはなく、往々にして、日々の最も重要な事柄を全然默殺したり、書いてもほんの數語でしか觸れてない場合がある。が、其の中には、凡そレオナルド傳の筆者に取つて見逭し得ない珍しい記入が、二三あるのだ。巨匠の、小遣錢の使途についてのこまかな記載がそれだ。まるで、打算に長けたしまり家の主人のそれのやうに、嚴密で精細を極めてゐる。ところが、他方では、もつとずつと高額の支出が默殺されてゐるとい

ふ有様で、美術家としてのレオナルドに、全然經濟上の知識が無かつた事を示す材料ばかりである。此の種の記載の一つとして、門弟アンドレア・サライナの爲に買つた新しい外套(マント)がある。

銀絲の金襴……………………一五リラ四ソルチ
裝飾用の赤ビロオド……………九リラ
紐……………………………九ソルヂ
ボタン…………………………一二ソルヂ

これと異つたもう一つの支出に關する詳細な記入は、或る弟子（或はモデルか）の不良と盜癖の爲に蒙つた損害である。「一四九〇年四月二十一日、余は此の日記を始めると共に、復び馬*に取りかかつた。ジヤコモが來たのは、此の年のマグダレナの日である。年齡は十歲（此處に、盜癖、嘘つき、我儘、大食ひといふ傍註がある）二日目に、余は彼の爲に、二枚のシヤツと、ズボン及びジヤケツを註文した。以上の物品に要する錢を取除いて置いたのに、彼は、余の財布から錢を盜んだ。彼が盜んだ事は確實に判つてゐたが、然し、余はどうしても彼を責めて自白させる事が出來なかつた。（此處にも、四リラといふ傍註がある）」

(*) 此の馬は、フランセコ・スフオルッアの騎馬像を指してゐるのである。

之に續いて少年の惡事の數々を竝べた末、次のやうな支出計算が記載されてある。『最初の一年内に、外套一着、二リラ。シヤツ六枚、四リラ。胴衣三着、六リラ。靴下四足、七リラ。其他』レォナルドの精神生活に於ける謎が、彼の小さな弱點や性癖によつて解き得ようなどとは夢にも知らなかつた傳記作家は、之等の珍しい支出明細書に出會ふと、必らず、師としての巨匠の、弟子に對する深切と寛大とを裏づける證據だと言ふ。彼等はみな、説明を必要とするのはレォナルドのかかる態度でなく、寧ろ、その態度を裏づけるところの證據を殘したといふ事實に在る事を忘れてゐるのだ。ところで、かうした明細な記録を殘した動機を考へると、彼が自分の深切さの裏書を我々に傳へようとしたものであるとは思へない。どうしても、何か別の情緒的動機があつたのだと假定せざるを得ないのだ。では、その動機が何であつたか、といふと、之は容易に言ひ當て得る事ではない。が、幸ひにして、レオナルドの手記中に發見された他の支出明細書が、前の奇妙な弟子の被服その他に關するこまかい記述へ、一道の光明を與へてゐるのである。

カタリナの死後埋葬までの支出……………………………………二七フロリンス

蠟燭二ポンド…………一八フロリンス
運搬並に十字架建立費…………一二 〃
葬龕…………四 〃
棺人夫費…………八 〃
僧侶と牧師へ、各四人…………二〇 〃
鐘つき男へ…………二 〃
墓掘人夫へ…………一六 〃
許可證のため、役場へ…………一 〃
合計…………一〇八 〃

以前の支出

醫師へ…………四フロリンス
砂糖と燭代…………一二 〃
總計…………一二四 〃

(*) メレシユコウスキイより。レオナルドの親近者に對する生活がどうであつたかは、ごく僅かの報告しか傳へられてゐない。而もそれすら曖昧不正確な物が多く、その悲しむべき一例は、之と同一の支出明細書が、ソルミの本に非常に變更されて引用されてゐる事だ。中でも、フロリンスをソルヂとしてあるなぞ、最も疑ふべき變更であると思はれる。此の計算では、フロリンスを古い金貨とせず、寧ろ後年使用された一リラ三分ノ二、又は三十三ソルヂ三分ノ一に當る貨幣と見て宜しい。また、ソルミはカタリナを、或る時期レオナルド家に働いてゐた女中であるとしてゐるが、兎に角、かうした支出明細書に關する二記錄の出て來た源は、私には分らないのである。

右の表に現れたカタリナとは誰であつたか。それを知つてゐる者は、詩人メレシユコウスキイ一人である。彼は、レオナルドの別の短い手記によつて、レオナルドの生母なるヴインチ生れの貧乏な百姓女が、一四九三年にミラノへやつて來て、當時四十一歲だつた息子を訪ねた事。其處で病氣になつて、レオナルドの手で病院へ入つた事。そして、彼女が死んだ時、レオナルドは莫大な費用を以て、鄭重に葬式を營んだ事。等の事實を推測してゐる。

勿論、心理描寫に巧みな此の小說家の解釋を裏づける程の證據はない。が然し、彼の解釋には

多くの内在的確からしさがあつて、我々が持つてゐるレオナルドの感情生活についての知識と、立派に合致するのだ。私は此の小說作家の解釋を是認せざるを得ない。レオナルドは、自己の情感を硏究といふ桎梏に緊縛し、その自由な表現を禁壓してゐたのである。だが、此の場合にもやはり、堰止められたものが、無理に外へはみ出す機會はあつた。それを作つたものは、卽ち、昔レオナルドが熱愛を捧げてゐた生母の死、といふ事件である。葬儀の費用の細かい記載の中に表現されてゐるのは、不思議な程ゆがめられた、母への哀悼だ。何故、こんなにも歪みが見えるのか。之は、常態の精神過程を辿る見解をもつては、到底理解し得る限りでない。ところで、之と同樣な歪みは、神經性疾患、殊に、所謂、强迫性神經疾患の變態條件の中に見出される。かうした患者に在つては、猛烈な、而も禁壓によつて無意識化された感情の再現が、實にくだらない機構の中へ轉移されてゐるのである。禁壓された感情再現を極端に壓迫して、感情の强さを「くだらない」と批評させるに至つたのは、實はそれと對立した反對の力があるからだ。「くだらない」と見られる此の表現を、實行に移させた絕對强迫の中に現れる力こそ、意識へ上るのを否定しようとする衝動の、無意識の中に根を張つた眞實の力である。强迫性神經疾患の機構を考へ合せる

事によつて、初めて、生母への死に當つてレオナルドが書きつけた埋葬費用の明細書は、說明されるのである。彼は、搖籃の時代と同じ母へのエロテイクな愛情を、無意識の裡に藏してゐた。小兒期の熱愛を壓迫する後年の感情的抗爭は、母のために、日記の中へもつと情愛の籠つた記念碑を殘す事を許さなかつた。而も、此の神經性葛藤から生れた妥協表現は實行されずにをられなかつた。かうして、妥協表現であるところの費用明細書が記錄され、後人の知識には不可解として殘つたのである。

以上の見解を、そのまま、弟子のために消費した費用の明細表へ持つて行く事は、敢て冒險ではないだらう。此の見地からすれば、それは、レオナルドの中に在つたリビド的衝動の僅かな殘物が强迫的に生んだ、歪められた表現の實例であると言へよう。生母と美少年の弟子と。それ等は、彼自身の少年時代の美しさを髣髴させるものであり、彼の本質を支配した性的抑壓がかかる特徵を許す限り、實に、彼自身の性的對象だつたのである。つまり、弟子達のために費消した金額の明細表を書きつけるといふ强迫は、かかる始原的な葛藤の不思議な暴露なのだ。かうして、レオナルドの戀愛生活が、眞實に同性者の類型であつた事が判明すると共に、その心的發展を跡

づけ得た者こそ我々に他ならない。彼の、禿鷹の空想に現れた同性愛的情熱は、かやうにして我我の理解範圍に包含された。卽ち、此處にも、同性愛の一類型に對する我々の主張が、明瞭に現れてゐたのである。それこそ、『私が同性愛に落ちたのは、母親へのエロティクな關係によつてだ』といふ飜譯を必要とするものでなければならない。

四

どこまでも我々を引きつけるものは、レオナルドの禿鷹に關する空想だ。『さうして幾度かその尾を以て余の唇を撫でた……』といふ、かくも明瞭に性的行爲の描寫を思はせる言句の中に强調されたものこそ、母親と子供の間に在るエロティクな交渉の强靱さである。母親(卽ち禿鷹)の行爲が唇に集められたといふ此の二者の結合によつて、空想の第二次記憶內容を指摘する事は容易だ。つまり、之を飜譯すると『母親が、私の唇へ數限りない情熱的の接吻をした』といふ事に成る。此の空想を合成したものは、母親から授乳された記憶と、母親から接吻された記憶とに外ならない。

藝術家に與へられた善き天性は、彼自身にも氣づかれない神祕內密の精神衝動を、作品の制作によつて再現し得るといふ事だ。而も、作家たる彼に一面の識もない第三者は、その作品によつて激しい感動を受けながら、また何によつてかうした感動が起つたかを說明すべくもない。彼の幼年時の最も强烈な印象として保存された記憶が、果して何物であつたか。それを、彼の全作品を通じて跡づけ立證する事は出來ないであらうか。いな、我々は、跡づけ得ると期待せずにゐられない。だが然し、藝術家の生活印象(體驗)なるものが作品へ或る貢獻をなし得るまでには、凡そ深刻徹底の轉向が貫行されてゐるもので、此の事を思ひ合せるなら、正しくレオナルドの場合の如き、或る決定的な尺度への立證に對する確實性を要求する事は、當然避けられなければならないであらう。

レオナルドの繪畫に就て想ひ起されるのは、彼の女人像の唇の上にいみじくも描き得た、驚くべき、魅惑と謎に滿ちた微笑であらう。綏やかに閉ぢた、ややうねりを見せた唇に漂ふ微笑。これこそ、彼の畫風の特徵と成り、また好んで『レォナルド流』と名づけられたものである。フロレンス美人モンナ・リザ・デル・ジョコンドの、地上の人とも思はれぬ美しさは、眺むる者の心を最

も強く捉へ、またその心を混亂させる。かかる微笑は解釋を必要としたから、千態萬樣の註釋が行はれた。が、その一つとして滿足なものはなかつた。まことに、『凡そモンナ・リザを暫く見つめてから彼女を語る者の心を恍惚とさせてより、早くも四百年の時は流れた』のである。ムウテルは言つた。『見る者の胸へ特に迫つて來るものは、此の微笑の惡魔的な魅惑である。數百の詩人著作家をして筆を取らしめた此の女性。或は誘惑的に微笑みかける女、或は冷やかに無心に虛空を凝視するかに見える女、何人かよく彼女の微笑の謎を解き、何人かよく、彼女の胸中を言ひ得たであらう。總て、風物までも、神祕に滿ちた夢幻だ、肌さへ汗ばむ官能の惱ましさに戰いてゐるやうな。』

モンナ・リザの微笑には二つの相異つた要素が融合されてゐる、といふ考へ方には、大抵の批評家が動かされた。だから彼等が此のフロレンス美人の表情の中に捉へたものは、女性の戀愛生活を支配する矛盾の、內氣と誘ひの身も心も捧げる優しさと、一途に燃える、男を獸か何かのやうに食ひ盡す肉慾との、最も完全な再現だつた。ミュンツもかう言つてゐる。『モンナ・リザ・ジョコンドが、殆ど四世紀に亙つて、彼女を取捲く讚美者達へ、如何に蠱惑に滿ちた謎の眼を投げた

か世人はよく知つてゐるのだ。——余は、ピエル・ド・コルレイの筆名に匿れたデリケエトな著作者の筆致を借用しよう——凡そ、女性の精髄をかくも巧みに現し得た者があらうか。やさしさと艶媚と、貞淑と黙せる官能と、祕められた胸のときめきの、反映する腦の、自分を堅固に守り、その光彩にばかり一身を委ねようとする人格の、ありと凡ゆる神祕……』と。又、イタリイのアンチエロ・コンテイは、ルーヴルに行つた時、白日の光に生々と輝いてゐる此の肖像畫を眺めて、『貴女は尊い靜寂の中で微笑む。征服の、殘虐の、彼女の本能、民族の全遺傳、誘惑と籠絡の意思、嘘をつく女のしほらしさ、無殘な目的を祕めた深切、一切は微笑てふ帷幕の彼方に、かつ現れかつ消えて、彼女の微笑の詩の中に溶融し去る……善と惡と、殘虐と憐憫と、優雅と狡智と、ああ彼女は微笑む……』と嘆じた。

レオナルドは、此の肖像畫に四年の日子を費した。恐らく、一五〇三年から同五年にわたつての間だつたらう。恰度、フロレンスに二度目の滯在をした時で、彼自身は五十歳を越してゐた。ワサリの記述によると、レオナルドは、席に着いた彼女の氣持を寛がせ、その容貌にあの微笑を保持するのに、特別な技巧を用ひたとある。當時、彼の揮つた畫筆がカンバスのうへへ再現した

微妙な美は、僅かにその一部分を、現在の畫面に止めてゐるに過ぎない。描かれた當時、これは、凡そ藝術の成就し得る最高作として激賞された。けれど、レオナルド自身は、此の畫に滿足しなかつたか、未完成だと言つて、註文主にも渡すことなく、フランスへ渡つた時にも携へてゐた。此處で、ルーヴルへ飾るために之を買上げたのが、彼のパトロンのフランツ一世だつたのである。

モンナ・リザの表情の謎は、解けないものとして置かう。そして、彼女の微笑が、四百年來の凡ゆる見物人にも劣らぬ感銘を、美術家たちへも與へたといふ否定し難い事實を敍べようと思ふ。魂を奪ふこの微笑は、爾來、彼及び彼の門下生が描いた肖像畫の總てに再現された。レオナルドのモンナ・リザは一つの肖像畫である。して見れば、描かれた彼女自身にないやうな、而も表現に至難の特徴を、彼が勝手に持つて來たとは、どうしても考へられない。寧ろ、かかる微笑をモデルと成つた彼女の上に見つけ出して、その魅力に惹きつけられたあまり、爾來、彼自身の空想の奔放な制作上に之を利用したのであらう。例へば、A・コンスタンチノワは之と似たやうな意見を、次のやうに敍べてゐる。

『巨匠は、永い事モンナ・リザ・デル・ジョコンドの肖像畫に執心してゐたが、その間に、此の女人の容貌に漂ふ表情の微妙さにすつかり打込んでしまつた。彼が、あの顏つきを——特に神祕に滿ちた微笑と世にも珍しい眼ざしを、後年に描いた總ての顏へ移し植ゑたのは、みなその結果である。ジョコンドの表情上の特徴は、ルーヴルに在る洗禮者ヨハネの肖像にさへ確認され得るのだ。——然し何と言つても、此の特徴の明瞭に出てゐるのは、三像アンナに見えるマリアの容貌である。』

だが、これはどうにでも言ひ得る事だ。畫家としてのレオナルドを、復び放す事のなかつたジョコンドの微笑、その牽引力には、何かもつと深い根柢があつたのではあるまいか。之が、一人ならず彼の傳記の筆を取つた人の心に動く疑問だつた。モンナ・リザの畫の中に、『文明人の戀愛經驗に於ける全具象』を見、また、いみじくも『あの得體の知れぬ微笑は、レオナルドの中に在る何か不吉を豫告するものと、手を繫いでゐるのではあるまいか』と論じたW・ペエタアは、次のやうな言を吐いて、別の足跡を指示したのである。

『而も之は肖像畫だ。これは、彼の幼年時代から、彼の夢の網の中に織込まれてゐた顏ではある

まいかと思ふ。之を反駁する十分の證據が無い以上、これこそ、彼が最後に見つけ得た、そしてそれを具象化した、理想の女であらうと信じたい……』

多分、次に掲げるM・ヘルツフエルトの言も、その意味はこれとよく似通つてゐるものであらう。『レオナルドは、モンナ・リザの中に自分自身を見たのである。彼が、自分自身の本質に在るものをあれまでに肖像畫の中へ移入する事が出來たのもその爲だつた。かうした容貌は、早くから、謎のやうな同感(シユンパシイ)で彼の精神に住んでゐたのである。』

試みに、以上の暗示的な意味へはつきりとした輪廓を與へて見るなら、つまり、レオナルドがモンナ・リザの微笑の俘囚(とりこ)となつたのは、永く彼の胸中にまどろみを續けてゐた或る物が、恐らくは昔懷しい或る記憶が、彼女の微笑によつて忽然と呼び醒されたからだつたとでも言ひ得ようか。此の記憶は、彼に取つて餘りにも重大なものだつたから、一度呼び醒されるともう、片時も離れる事が出來ない。彼は繰返し繰返し、それへ新たな表現を與へずにはゐられなかつたのである。『モンナ・リザに似た容貌は、彼の幼年時代から夢の網目に織込まれてあつたのではあるまいか』と言ふペエタアの保證は、確かに信じられさうであると共に、また、文字通り首肯されてよい。

ワサリの報告では、レオナルドの藝術家としての處女習作は『微笑する女の顔』であつた。次に掲げる、一句の如きも、疑ふ餘地がないから、立證の要もないまでに明瞭である。『彼は少年時代に、幾つかの微笑する女の顔を粘土で拵へ、他の子供の顔などと一緒に石膏に複製してゐるが、その美しさは、名人の作を偲ばしむるものがあつた……』

即ち、彼の習作は二種の客體の再現によつて始められた事が解る。さうして、之等の客體が彼の二様の性的對象を暗示する事を推斷させたものこそ、例の、禿鷹に關する空想を分析した結果に他ならない。美しい子供の顔を、彼自身の幼年時代のそれとすれば、微笑する女は、彼の母親カタリナの複寫でなくて何であつたらう。かうして初めて、彼の母親が此の神祕な微笑の持主だつた事、それを復び見る事が出來なく成つた彼が、偶〻フロレンスの貴女に同じ微笑を見出して、あれまでに打ち込んだのである事、等の推察が可能となつて來るのだ。

(*) 之と同じ事をメレシュコウスキイも是認してゐるが、然し彼はレオルナルドについて一つの幼な物語りを空想してゐる結果、具體的な點で、我々が禿鷹の空想から拾ひ出した事實とは大分かけ離れた違ひがある。だが、萬一レオナルド自身があの謎の微笑を持つてゐたとするなら、恐らく、傳說が數へ

る此の偶然の符合は一蹴されなければならなかつたであらう。

モンナ・リザと年代的に一番近い作品は、所謂、「三像の聖アンナ」マリアと幼年のキリストとアンナを描いたものだ。二人の女の顔に示された、レオナルド風の微笑の何といふ美しさ。之に着手したのが、モンナ・リザの肖像よりどの位後だつたか、また前だつたか、それは見當がつかない。二つの勞作が數年に亙つてゐるところから、或は、同時に着手したとも考へられよう。萬一、聖アンナの構想が、モンナ・リザの特徴への執心によつて、空想的に出來上つたのだつたら、これ以上、我々の期待にぴつたり來るものはない。と言ふのは、もし、母親への記憶を喚起したものがモンナ・リザの微笑であつたとすれば、先づ、最初に彼を驅り立てたものは、母性の光耀發現であつたと共に、この貴女(あてびと)によつて見出した微笑を母の姿へ再現する事であつた事情が判つて來るのだ。かうして、モンナ・リザの肖像に對する興味は、それと優劣なき美しさの、同じく今もルーヴルに飾られた、聖アンナの三人像へと推移されて行く。

娘と孫とを連れた聖アンナの畫題は、イタリィの畫家には極めて稀有の物である。凡そレオナルドの描寫は、從來の著名な物の一切から懸絶してゐるのが常だ。ムウテルは言つてる。

『或る畫家達、例へばハンス・フリイスや、より古くはホルバイン、ジロラモ・ダイ・リブリの如きは、マリアの傍にアンナを坐せしめ、兩人の中間へ子供を持つて來た。他の畫家、例へばベルリン畫家ヤコブ・コルネリスに至つては、聖アンナ三像の字義通りで、卽ち、アンナの腕にはマリアの小さな身體が抱へられ、マリアの膝にはより小さい子供のキリストが坐つてゐる。』とところで、レオナルドの構圖では、母の膝に在るマリアは、前踞みに兩手をのばして、小羊と戲れてゐる、恐らくは少しいぢめてゐるらしい我子を捉へようとしてゐるのだ。子供の祖母は、露はに見える手首を腰にあて、天福を湛へた微笑で二人を見やつてゐる。確かに此の群像には、無理な點が全然ない。だが、二人の女性の唇に浮んだ微笑には、よし、モンナ・リザのそれと同じ物を見落す事は出來ないにしても、その無氣味な、謎に滿ちた特徴は失はれてゐる。アンナ像に現れた微笑が發現するものは、親しみ易き溫情と靜かなる天福だ。

此の三體像を觀賞するに當つて、或る程度の熱心を續けると、俄然として心を打つ理解がある。卽ち、禿鷹の空想を歌ひ得たレオナルドにして初めて、かかる繪畫をよくし得たのだ。これに移し植ゑられたのは、彼の幼な物語りの合成であつた。畫面を構成する各一(ひとつ〳〵)を說明するものこそ、

レオナルドの最も人間的なる生活印象でなければならない。彼が引取られた父の家には、善き義母ドニア・アルビエラがあつたばかりか、彼の父親の母なる祖母モンナ・ルチアがあつた。ルチアは世の常の祖母と同じく、孫に對して優しかつたと解されて然るべきであらう。レオナルドに、母と祖母とから愛護された子供の構圖を與へたものは、かかる境遇狀況だつた。更に、より大きな意義をもたらすところの、より著しいもう一つの特徴がある。それは、子供の祖母でありマリアの母である聖アンナは、當然老嫗であるべきのを、おそらくマリアより稍世故に長けた、豐熟の、而も色香まだ衰へぬ年增盛りの女として描かれてゐる事だ。實際に、レオナルドは此の子供に二人の母を與へてゐるのである。一人は雙手をさしのべてゐる母、一人は背後にそれを見やつてゐる母。何れも天福の微笑に母の愉悅が現されてゐるではないか。かうした獨得の構想が、批評家の嘆異を惹かずに置かぬ筈はない。例へばムウテルはかう解してゐる。『レオナルドは、思ひきつて老婦人のしいなびた皺を描くことが出來なかつたのだ。だから、アンナへまでも、輝くばかりの美しさを與へたのである』と。果して、かかる說明で滿足され得るであらうか。また一般に、『母と娘の年齡に隔たりのないこと』を、何とかして否定しようと企てた批評家もある。だ

が、ムウテル流の説明こそ、聖アンナの若返り的印象を來すものは肖像自體であつて、決して或る傾向によつて欺瞞されたものでない事を裏づけるに十分であらう。

レオナルドの幼年時代は、恰度此の畫面の通り注目に値ひするものがあつたのだ。母親を二人持つてゐたのである。最初のが、生みの母カタリナ。彼は三歳から五歳の間に此の生母の膝下を離れて、父親の妻である若い優しい義母ドニア・アルビエラの手に引取られた。かうした幼年時代の事實を、今言つた現存の母と祖母の事實に結びつけて試みた一種の混合溶融、それが、彼に、聖アンナ三體像の構圖を成形させたのである。子供から離れてゐる母の姿は、本來は祖母であるが、その外貌から言つても、空間的關係から言つても、昔の生みの母カタリナと呼ぶにふさはしい。聖アンナの天福的な微笑を以つて、彼が、掩ひ否定せんとしたものは、恐らく、生みの母の嫉妬であつたらう。カタリナは、貴女（あてびと）アルビエラといふ競爭者に、始めは夫を、次いで子供をも讓らねばならなかつた薄倖の女である。

(*) 此の畫面について、アンナとマリアの容貌に區別を立てる事は容易でない。大抵の人が、「これはへたに壓縮された夢の中の形態のやうに、すつかり融合しあつてゐるから、何處を取立てて見ても、ア

ンナとマリアの截然とした區別を立てる事は困難である」と言ひ度いところだらう。だが、批評家の眼に失錯と見え、構圖上の缺陷と思はれるものこそ、精神分析者には、その神祕な意義を釋明するよすがと成るのである。幼な心に殘つてゐた二人の母親は、彼の心の中で一體に融け合つてゐたのだ。

別して心を惹かれるのは、ルーヴルの聖アンナ三體像を、有名なロンドンの下繪と比較することである。下繪の示す構圖は、同じ題材でありながらルーヴルのそれと大分異つてゐるのだ。此方では、二人の母の融合がより一層緊密で、その區別もより不確實であり、從つて、どう說明のしようもなかつた批評家連は、結局、『恰も二つの顏が一人の胴體から生えたる如し』と、匙を投出さずにゐられなかつたのである。

大多數の批評家の一致した點は、『此のロンドンに在る下繪は餘程初期のもので、恐らく、レオナルド最初のミラノ滯在時代（一五〇〇年以前）に出來たものである』といふ事だつた。ところが、アドルフ・ロオゼンベルヒは此の下繪の構圖中に、同じ意匠のより後年の形を見つけ、之を、アントン・スプリンゲルの支持を得て、直接モンナ・リザの發想と同一であると斷じた。下繪の方が遙かに古いものであるべきだとする考へは、我々の吟味した所と完全に合致してゐる。また、ルーヴルに在る畫が此の下繪から出たものであつたらう事は、假令兩者の間に見られる變化が何を意味したものか判らなくとも、推察

に難くない。

下繪の構圖によつて想像するに、レオナルドは、彼の幼年時代の記憶にぴつたり合つた、二人の母親の夢の如き融和を高揚すると共に、その額を空間的に引離す必要を感じたものに違ひない。かうして出來たのが、マリアの額と上半身とを、母親のポオズから引離して前方へ踴ませるといふ構圖だつた。從つて、自然子供のキリストも膝からずらせて地上へ移す必要があつたし、その結果また、天使ヨハンネスを入れる場所が無くなつて、その代りに小羊を持つて來たのである。——ルーヴルに藏された畫の方で、注意すべき發見をしたのは、オスカア・ピステルだ。此の發見を無條

件に認容する事は避けられねばならぬにしろ、とに角、レオナルドに關心を有する者に取つては、見遁し得ない發見である。それは、マリアの着てゐる獨得な形の、一寸判斷に苦しむやうな衣裳が、禿鷹の輪廓をたどつた物であるといふのだ。ピステルは之を、無意義の中に行はれたからくり畫と解釋してゐる。

『レオナルドが母を再現した肖像に現れたものは、即ち、掩ふべくもない禿鷹だ。母性の象徴と言はれる禿鷹だ。見給へ、前方の女の腰を掩うて、下腹から右膝の方へのびてゐる青衣の中には、極度に特徴づけられた禿鷹の頭が、頸が、胴體の鋭く屈曲した突起が、眺められるではないか。此の些細な發見に注意すれば、何人と雖も此のからくり畫の確證を否定する事は出來まい』

此點については、讀者諸君も恐らく、此處に挿入した圖版によつて、ピステルが發見した禿鷹の輪廓を探さうとする勞を吝まないであらう。所謂からくり畫と成つてゐるのは、紺青の衣裳が示す線であつて、複作描出に於ける明灰色の一區劃となり、他の衣裳の暗色基調から浮上つてゐる。

ピステルは更に續けて言ふ。『然らばそのからくり畫は何處まで成功してゐるか。之が重要な問題である。試みに、周圍から一段と際立つて浮上つてゐる此の衣裳を、翼の中央から追究して見るなら、先づ氣づかれる事は、その一方が女の右脚へ下げられ、他は子供の方へ高められてゐる事だ。前者は略翼

の形と禿鷹の通常な尾の形をあらはし、後者は、尖つた腹部を示してゐる。さうして特に、其の線狀の、羽毛の輻輪に似た数條の線を注視するなら、その右端が恰も子供の唇に接してゐるのを見る。これこそ正しく、レオナルドの運命に重大な意義を持つた、あの幼年時の夢と合致するものでなくて何であらう。』

かくして、聖アンナ三體像によつて跡づけ得たものは、モンナ・リザ・デル・ジョコンドの微笑こそ、彼に、最初の幼年時に於ける母への記憶を喚起したものであるといふ推察だ。爾來、イタリイの畫家によつて描かれた聖母(マドンナ)や貴女(あてびと)の像は、みな、虔しげに首をうなだれ、いみじき天福の微笑を湛へてゐるが、その始原と成つたものは、此の世に、畫才と研究心と忍苦との星を負うた素晴しい息子を生んだ、貧しい百姓娘カタリナだつたのである。

レオナルドが、モンナ・リザの容貌に此の二樣の意義を再現し得たものとすれば、即ち、ペエタアの言つた「極み知らぬ優雅さと不吉を豫告する脅迫」の微笑を描くに成功したものとすれば、此處にも、彼の幼き日の記憶內容に忠實であり得たと言へるのである。何故といふに、彼の運命と彼を待つてゐた窮乏とを決定する宿命の星と成つたものは、實に、母親の極み知らぬ優雅さだ

つたから。禿鷹の空想が暗示する愛撫の激しさ、それは餘りにも當然の事だつた。貧しい、見捨られた母は、過ぎ去つた日に受けた愛撫の記憶と、新しい愛撫への憧憬のすべてを、唯一途に母としての愛へ注ぎ込まずにはゐられなかつたのである。彼女にそれを強いたものは、ひとり夫の無い空虚を紛らはすためばかりでない、寧ろ子供の、可愛がつてくれる父を持たない寂しさを償ふためだつた。かうして、若い母親は、滿されざる世の常の母親と同じ様に、幼い息子を夫の位置に据ゑると共に、餘りに早熟な子供のエロティクによつて、その男性的方面の一部分を奪つてしまつた。自ら養育し看護する乳兒への母の愛には、少年と成り青年と成り行く息子への後年の愛情に較べて、遙かに深刻徹底のものがある。それは、單に、凡ゆる精神的願望を滿たすばかりでない。寧ろまた、一切の肉體的要求をも滿足させるところの、至上滿足の戀愛關係の性質を帶びてゐる。もし此の愛が、人間に達し得られる幸福の一形式を取るとすれば、それは、早く抑壓された、倒錯とも名づくべき願望衝動さへも圓滿に滿足させ得る可能性から、由來する所決して些少でないのだ。最も幸福な若い夫婦の間では、夫は、我が子、殊に小さい男の子に對して、自分の戀敵である樣な氣持を抱かされる。これが、後年成長した息子に對する敵對心の、無意識の

裡に根ざした芽生えなのである。

圓熟の絶頂に立つたレオナルドが、かつて母親の愛撫を受けた折に見た、唇の邊に漂ふあの天福に滿ちた微笑と再會したとき、早く或る抑壓の奴隷と成つてゐた彼は、女性の唇に、かかる優婉の表情をまた望む事が許されてゐなかつたのである。だが、彼は畫工であつたから、かかる微笑の畫筆による再現に努めた。さうして、自ら描くと門下を督して描かしむるとに論なく、レダに、ヨハネに、バッカスに、此の微笑を附與したのである。ヨハネとバッカスとは同じ型の變形だつた。ムウテルはかう述べてゐる『レオナルドが描いたバッカス、アポロ、みな聖書の蝗食ひから生れたもので、何れも、撓やかな大腿を組合せ、唇に謎の微笑を湛へながら、魅惑の眼を我等に投げてゐる。』と。之等の肖像が呼吸する空氣は神祕である。その祕密に足踏入れる勇氣は我等にない。僅かに試み得られるのは、レオナルドの初期の制作に對する關聯を探る事だ。之等も亦男女兩性的形態を具へてゐるが、もう、禿鷹の空想の意味からは離れてゐる。女性の優雅と女性の姿態を具へた美しい青年の姿だ。彼等は、眼を伏せてはゐぬ。寧ろ、人を默せしめずば已かぬ大きな幸福の獲得を知つてゐる者の樣に、神祕の誇りを浮べて眺めてゐるのだ。それが愛戀の

秘密である事は、見覺えのある魅惑的な微笑から想像し得よう。レオナルドが、かかる形容によつて、彼自身の戀愛生活の薄倖を、否定し、美術家として克服した事は可能である。彼は、母によつて眩惑された子供の願望成就を、かくも天福に滿ちた、男女兩性のかかる融合によつて再現したのだ。

五

レオナルドの日記中にこんな記載がある。之は、內容の重大性と、また或る些細な形式上の過失によつて讀者の注意を惹きつけるものだ。

書かれた時は、一五〇四年七月である。

『一五〇四年七月九日、火曜日、七時。セル・ピエロ・ダ・ヴインチ、ポテスタ宮の公證人なる父は、七時に死んだ。享年八十歲。十人の息子と二人の娘が殘された。』

つまりレオナルドの父親の死去を書いた物である。形式上の些細な過失といふのは、七時といふ文字が二度も繰返されてゐることで、恰もレオナルドは、文章の結尾に來て、此の文字を旣に

冒頭で書いた事を忘れてしまつた如くである。此の様な零細事を取上げようとするものは精神分析者以外には無いであらう。多分、こんな事は看過されがちであらうし、偶〻注意されたにしてもかう言ふであらう。『およそ人間が放心狀態か興奮狀態に在る時、この位の事は起りがちだ。別段の意味がある事ぢやない』と。

精神分析者の考へ方は異るのである。彼に取つては、匿された精神的過程の表現より些細なるはない。彼は、かかる忘却や繰返しの意味深長な事、また、所謂放心といふやつが、かつて隱蔽された衝動の裏切りと解し得る事、等をよく知悉してゐるのだ。

だから、右の記述もまた、カタリナの葬儀費計算表や、門弟たちのための支出明細書と同樣、レオナルドが彼の情感抑制に失敗した一例に過ぎず、久しく隱蔽されてあつたものが歪められた表現と成つて暴露した適例であると考へられる。その形式も、前と似た、同一のペダンティクな精密さを示し、相通じた數字の煩雜さを持つてゐる。

(*) 此の日記でより大きな過失は、七十七歲であつた父を八十歲とした事だ。が、それは看過して置かうと思ふ。

我々は、かかる繰返しを躊躇と呼ぶ。繰返しは、情緒の強調を公告するのに此の上ない手段だ。例へば此處に、ダンテの神曲『天上界』中に、無能なる地上の代表者へ投げつけた聖ペトルスの忿激の辭がある。

地上界にて我が座をば簒奪せる者、
我が座をば、我が座をば、彼今こそ
神の子のみ前に除かれたり、
我が墳墓を變ぜしめ、血と惡臭の
溝と化したる、彼、惡魔、
天上界に失脚し、地上界にて欣べる。（二十七歌。）

レオナルドに情緒抑制の事がなかつたら、此の日記は凡そ次のやうに書かれたであらう。『今日の七時に、余の父は逝つた。セル・ピエロ・ダ・ヴインチ、氣の毒な父よ！』だが、死亡通知といふ最も冷淡な限定の上へ、即ち死亡時間の上へ、推移された躊躇が、凡ゆる悲哀の情を此の日記から奪ふと共に、まさしく、これには何か隱された、抑壓されたものの在つた事が、理解され得

るのだ。

セル・ピエロ・ダ・ヴインチは、代々公證人を職とした家に生れ、旺盛な生活力の所有者で富裕な身分の名望家だつた。妻を娶ること四人、最初の二人は子供を儲けずに死に、三人目の妻が初めて、嫡子に當る男の子を生んだ。これが一四七六年の事で、レオナルドは既に廿四歲、早く、師のヴエロツキオのアトリエへ移り住んでゐた頃である。四番目の妻、卽ち最後の妻を娶つたのは、セル・ピエロが五十代に入つてからで、それでもなほ、九人の男子と二人の女子を擧げた。

(*) 前揭の日記には、之等の兄妹の數が問違つて記載されてあるやうだ。がかうした問違ふ筈もない事柄まで誤記したといふ事は、注目に値する。

確かに、此の父も亦、レオナルドの心的性發展に對して重大な存在だつたに違ひない。勿論、ひとり彼の生年初期に父がゐなかつた事による消極的の意味ばかりでない。寧ろ、後年の少年時代に父が在つたといふ直接の關係からである。凡そ、子供として母を慕ふ情の中に、父の位置に取つて代らうとする意慾が匿れてゐる事は爭へぬ事實だ。子供の空想中で、自分を父と同等視させ、また後年、父に打克つ事を我が生存課程と思ひ込ませるものは、みな此の匿れた意慾なので

ある。まだ五歳にも達しなかつたレオナルドが祖父の邸に引取られた時、子供心にも、若い義母アルビエラが生母カタリナと同等に感じられた事は確實だらう。從つて、父に對する少年レオナルドの關係が、母を中心とする一種の愛情の競爭者だつた事は、寧ろ常態普通の事と見てよい。彼に、同性愛への決定的傾向が現れたのは、漸く思春期に近づいてからだつた。同時に、自分を父と同等視するといふことは、もう、彼の性生活に取つて何等の價値もなくなつてしまつたが、今度は、それがエロテイクでない活動の別の方向で持續されたのである。傳へられる所では、ワサリの所謂『殆ど財産もなく、さして稼ぎもしなかつた』彼であるに拘はらず、裝飾と美服を愛し、從僕を傭ひ乘馬を飼養した。かうした嗜好の原因は、ひとり彼自身の審美感のみでない。其處には、父を模倣し、父を凌がうとした强迫觀念が理解されるのである。彼の父は、貧しい百姓娘の眼には貴公子であつたから、その息子たるレオナルドの中にも、自ら貴公子たらんとする刺衝が、所謂、『ヘロド以上のヘロド』たらんとする衝迫が存して、如何にしたら自分を眞の貴公子として父に見せつけられようかと、砦りに彼を刺戟したのである。

凡そ藝術家が自分の作品に對して抱く感情といふものは、子に對する父のそれと同じだ。畫工

としてのレオナルドの制作に取つて、一つの悲慘な結果を招來したものは、自分と父とを同等視する見方だつた。彼は制作した。が、出來上つてしまふともう一向に頓着しなかつた。之は、父が、生れて來た彼の事に無頓著だつたのと同一である。後年の父の配慮も、かうした强迫觀念を些かも變化させる事は出來なかつた。かうした觀念を管理し誘導するものが初期の幼年時代に受けた印象であると共に、また、無意識の中に藏された抑制が、後年の體驗によつては訂正され得ない所以である。

文藝復興期には――後代とても同じだが、どんな藝術家でも贔屓にしてくれる大名や後援者が、卽ちパトロンが、無いと立行かなかつた。藝術家の運命を左右する者はさうしたパトロンだつたのである。レオナルドのパトロンだつたロドヴィコ・スフオルツアは、黑坊と綽名された、野心滿々の、派手好きの、外交的辭令に長じた、而も氣紛れで信賴の出來ぬ太公である。レオナルドが、生涯を通じての華やかな生活は、ミラノの太公の宮殿時代で、此の時期が、彼の最も奔放な制作力を發揮した時代である。聖餐圖、フランチエスカ・スフオルツアの騎馬像等は、當時の彼の活動を物語る作品だ。太公の運命に破局が現れた頃、早くレオナルドはミラノを去つてゐ

た。太公はフランスの獄舎に幽閉され、やがて獄死を遂げた。レオナルドの日記中に、『太公は領土を、財寶を、自由を失つた。而も、太公が企てた事業は一として完成されてゐない』と書きつけたのは、彼が、パトロンの悲痛な最期を知つた日である。此處で注意すべき事は、レオナルドが、自分の愛護者に對して、後代の人から自分が蒙つたと同義の非難を加へてゐる事、恰も、彼自身が未完成の作品を殘したのは、父と同じ立場に在つた人の責任であるかの樣な、非難を放つてゐる事である。之は確かに味はふべき言葉だが、然し、實際には太公に對して禮を失した事實はない。

藝術家としてのレオナルドを誤つたものが父への摸倣心だつたとすれば、それにも優る科學者としての偉大な業績に、小兒的條件をあたへたものも、また父への反抗であつた。メレシユコウスキイの美しい言葉を藉りて言へば、彼こそは、他人がまだ假睡に在る暗黑の中で、早くも眼覺めて居つた人だつた。凡ゆる自由研究の辯護を包括する勇敢な鐵則、『權威の上に立つて意見を闘はさんとする人の活動は、知性に賴らず記憶に賴る』を、公然と宣言した人である。かくして、近代の自然科學者として、第一線に敢然と立つた彼の勇氣、それは、驚くべき豐富な認識と觀念

とによつて酬いられた。彼こそは、觀察と批判とに立脚して自然の祕密に參じようとした、ギリシヤ以來の最初の人である。けれど、權威への蔑視と、古代摸倣への排撃を學んで、自然の研究こそ凡ゆる眞理の大本であると反復指示した彼、それは、世界を驚異の眼で見た小兒の上に早くも掩ひかぶさつた負擔を、人間の達し得る最高の昇華で再演したものに過ぎなかつた。科學の抽象を、具象の個人的體驗に飜譯すれば、古代と權威とは直ちに父に相當し、自然は、此處でもまた、彼を哺み育てた優しい懷しい母に相當する。凡そ、現代と原始時代とを問はず、人の子の何等かの權威に頼らうとする欲求が絶對的になる時、ために、支柱と願ふ權威が脅かされると彼の全世界が震撼の危殆に瀕しようといふ時、一人レオナルドだけは、さうした支柱に頼らないで立てる人であつた。彼が、生年の最初に、父親なしで立つ事を教へられてゐなかつたら、恐らく、之は不可能の事だつたらう。後年の科學的研究に現された彼の大膽と不羈とは、父によつて抑制されぬ小兒期の性的好奇を前提としながら、性の拒絶後にもなほ、同じ精神が持續されてゐたのである。

生年の初期に在つて父といふ存在の威嚇を免れ、その研究に在つては權威の鎖をたち切つたレ

オナルド、もし此の人が、後年、信仰者となり宗教のドグマを拒絶する力を持たなかつたなら、我々の豫期を裏ぎる事これより大いなる矛盾はない。精神分析の敎へるところは、父性混和(コムプレツクス)と神信心の密接な關聯であり、人間の拵へた神は心理的には父性の高揚に他ならぬといふ事實である。また、父の權威が崩壞すると共に、いかに多くの青年がその宗敎的信念を失ふかは、日常我我の眼前に展開せる事實だ。宗敎的要求の根元は、兩親混和の中に認識される全能の正しい神、慈悲深い自然、それ等は、父性と母性との偉大なる昇華であり、幼年時代に抱いた父母への觀念の復活、再興に他ならぬのではなからうか。宗敎心の起原を生物學的に求めるなら、それは、幼弱の子供の、一本立ちに生活し得ぬ、他人の保護を必要とする、あの永い期間の中にある。子供が成人して人生の大きな權力に直面し、眞實の自分の孤獨と弱さとを認識させられると、その立場は幼弱の時代と同一に感じられ、その絶望は、幼年時代の他力への逆行的復活によつて否認されさうに考へられる。宗敎は、個人及び全人類の罪惡意識の中核を成す兩親混和を除き去り、それから解放してやるもので、無信仰の人間は之だけの課定を自力で完了しなければならない。神信心によつて煩悶を去り安心が與へられるといふ祕訣も、實はこんな簡單なものなのである。

レオナルドの例を取つても、前述の、宗教的信仰に關する見解が誤つてゐるとは考へられない。彼は、早くその存在中に、瀆神者とか、世間一般の所謂キリスト教の違背者とかいふ彈劾を蒙つたので、これに就ては、ワサリの最初のレオナルド傳中に確定的な敍述が發見される。（一五六八年に出版された第二版では削除されてゐるが。）宗教に關しては極度に神經過敏だつた當代の社會に生きて、而も、キリスト教に對する自己の態度を手記の中にも公言して憚らなかつたレオナルド、彼の心持は、十分首肯され得なければならない。科學者としての彼は、聖書に書かれた創世紀の記述に、露些かも惑はされなかつたのである。例へば、ノアの洪水の可能性を反駁して、現代の科學者と同じく、地質學上では百萬年も太古の事であると、果敢にも言ひきつた。

彼の『豫言』を披くと、敬虔なキリスト教徒の感情を凌辱せずに置かぬやうな言葉が澤山ある。例へば、

聖者の像を禮拜する事に就て。

『人々は、何も解らない人間へ、眼があつても見えないやうな人間へ、話しかけてゐる。人々は、彼に言葉をかけるのだが一言の返辭も與へられない。人々は、耳を持ちながら、聞き得ぬ人

間から、恩寵を求めようとしてゐる。盲目の人間に向つて、燈明を捧げてゐる。』
又、受難日の哀訴に就ては、
『ヨオロッパ全土の、多數の民族が涙を流して悲しむ事、それが東方の國で死んだ、たつた一人の男の死だ。』
レオナルドの藝術に加へられた世の批判は、彼が、聖徒の像から敎會的桎梏の最後の遺物を剝ぎ取つた事、聖徒像を人間的なものに引きずり下して、それへ偉大にして美しい人間の感覺を表現した事、等である。ムウテルは、レオナルドが頽廢の情緒を克服して、人間に官能と生活享樂の權利を復活せしめた點を稱讚してゐる。大いなる自然の神祕を徹底的に探求したレオナルドの手記を見ると、彼は、造物主へ、この壯嚴を凡ゆる神祕の究極の原因へ、驚嘆の聲を吝まなかつたけれど、自ら、この神祕力へ個人的交渉を把持する態度は、寸毫も示してゐない。彼の晩年に於ける深奥の學識を示した信條中に呼吸してゐるものは、アナンケへ、卽ち自然法則へ、自分の一身を委ねて、神の慈悲、恩惠による輕減は露ほども求めじとする人間の諦めだ。ドグマ的宗敎を、個人的宗敎を、克服した彼が、その燃ゆる如き科學の研究によつて、敬虔なキリスト敎徒の

世界觀を遠く離反したのは明白である。

子供の心的生活の發展に關しては最初に敍べて置いたが、この見解から歸納される假定は、レオナルドもまた、幼年時代にその最初の探求心を向けた對象は性の問題であつたといふことである。だが、彼の示してくれたものは、透明な掩蔽を通してであつた。卽ち、彼は、その探究心を禿鷹の空想へ結びつけ、彼をして魚類の飛翔を硏究せしめたものは、或る定められた運命であるもののやうに說いた。彼の手記中の、鳥類の飛翔を論じた、朦朧とした、而も豫言に似た響のある美しい一章は、彼が、飛行術を摸倣し得べしとする希望へ、いかに多大の感情的興味を結びつけたかを立證するものである。『巨鳥はかの大いなる白鳥の背によつて、彼が最初の飛翔を試みるならん。宇宙は嘆仰の聲もて、凡ゆる文書は彼の榮譽もて、埋めつくされ、彼を生みたる巢に久遠の光榮あらむ。』彼が、いつか自分で飛行し得ると希望してゐた事は確からしい。人間が、かうした希望の實現に就てどれ程の歡喜を期待してゐるものであるか、その消息を敎へてくれるものは、願望を遂げた夢を見た時の人間の心持だ。

だが、かうも澤山の人間が、飛行し得た夢を見るのは何故だらうか。之に解答を與へるのが、

精神分析である。空を翔るとか鳥とかいふものは、或る別の願望の外被に過ぎないので、此の願望の認識には、言語や物體以上のものの橋渡しが必要だ。嬰兒(あかご)を持つて來るのは、例へば鸛のやうな大きな鳥だ、と好知慾に燃える子供へ話して聞かせる事や、原始人が、翼のある陽根を拵へた事や、男性の性殖行爲を、ドイツでは俗に「鳥が飛ぶ(フェーゲルン)」と言ひ、陰莖を、イタリイでは直接「鳥(ルッチエロ)」と言ふ事や、等々を考へ合はせると、之等は總て、或る大きな關聯の各一斷片に過ぎない事が判ると共に、又之によつて、夢に現れた「飛びたい」といふ願望の意味も、結局は、性行爲實踐への憧憬に過ぎない事が敎へられるのである。言はば之は初期の願望である。大人が自分の幼年時代を振返つて見ると、誰しも、瞬間を樂しみ希求なしに明日を迎へた此の時代を、幸福だつたと感じ、從つて、大人は子供を羨ましいと思ふのである。だが、もし子供たち自身に、幼年時の心持を說明させ得るとしたら、恐らく、大人の想像もつかぬ事を喋るに違ひない。幼年時代を天福的な牧歌と見るのは、どうやら、後年の我々の歪んだ見方であるらしく、寧ろ子供といふものは、早く成人して大人と同じ事をやりたい、といふ願望に鞭うたれて、幼年期を過すものらしい。子供の營む喜戲の一切を推進させる原動力は、かうした願望である。彼が、その性的好奇

の過程に、『大人といふものは何か神祕的な、而もひどく重大であるらしい領域に在つて、子供には覗き見る事も行ふ事も許されないやうな、何か素晴しい事をやる事が出來るのだ』と想像する場合、彼の幼な心にこみ上げて來るものは、『その素晴しい事を自分もやつて見たい』といふ一途な願望である。それが、彼の夢に直接飛翔の形で現れたり、或はまた、後年の飛翔の夢に對する願望の假裝を準備するのだ。から考へて來ると、現代に至つて到頭目的を達した航空術も、その根元はやはり、幼年期の性的好奇に在つたのだ。

レオナルドが、『飛行の問題と自分との間には幼年時代からの特別な因緣がある』と告白した事實は、彼の小兒期の探求心が性的な方面へ向けられてゐた事を裏書するもので、またよく、今日の兒童硏究が豫想推知し得た所と一致してゐる。尠くとも、後年の彼をして性的免疫性たらしめた抑壓から脫し得たものは、唯一つ此の問題だけであつた。幼年期から發して最も圓滿な知的成熟の時期にいたるまで、些細な意義の變化はあつても、連綿として持續された關心は、此の問題に對する興味だつた。そして、彼に望まれた藝術が、始原的意味においても機械的意味に於ても成就を見なかつた事、二つながら、彼には禁斷の果實として終始した事、は極めて有り得る事で

なければならなかつた。
巨人レオナルドは、凡そ全生涯を通じて、凡ゆる方面に子供であり、子供であつた。『偉人は總て稚氣がある』とは世人の言ふ所だが、レオナルドは成人した後にも玩具を弄んだ。同時代の人から、とかく薄氣味惡い變物扱ひを受けた一原因は、また此處にも在つたのである。太公宮殿の饗宴や儀式の接待の爲に精巧を極めた玩具の器械を拵へた事を考へ合はせる場合、巨匠が嫌々ながら、そのやうな無用の長物に精力を費したのだとすると、頗る不滿を感じざるを得ないが、然し、どうやらこれは、彼が自分から進んでやつたらしいのである。といふのは、ワサリの報告中に、レオナルドは他からの委託を蒙らない場合でも、さう言つた玩具を拵へてゐた事實が傳へられるのだ。『其の地（ロオマ）で、或る日彼は蠟をこね廻し、それが液状に成ると、頗る可愛らしい空洞の動物を拵へた。それへ息を吹き込むと飛上り、中の空氣を出して終ふと落下する。ベルヴエデレの番人が見つけた珍しい蜥蜴へ、別の蜥蜴から取つた皮で拵へた翼をくつつけ、それへ水銀をつめたものだから、蜥蜴が匍行する度に、翼は動き慄へた。それからなほ、眼玉や髭や角を作つて取りつけ、小箱の中に飼育して、友人連を悉く威かしつけたものである。』

かうした戯れが、時に、重大な意味のある思想を表現した場合も稀でない。『時々彼は、羊の腸管を綺麗にして、掌中へまるめ込み得るやうに拵へ、之を廣い部屋で、隣りの部屋に備へた鍛冶用の鞴に結びつけて膨脹させた。腸管は、室内一杯になるほど膨らみ、見物の人を隅へ追ひやつた。かうして彼が示したのは、腸管といふものが、いかに漸次に透明に成つて空氣に滿たされて行くかといふ事で、同時に彼は、此の、最初は小さく局限されてゐた物が、次第に廣大な空間を領して行く事實を藉りて、之を天才に比較したのである。』無邪氣な『寶探し』や巧みな『當て物』に現れた、同じやうな遊び好きの心が、彼の寓話を生み、謎を考案させたので、後者は、『豫言』の形式で殘されてゐる。どれを見ても彼の頭のよさを示してゐるが、驚くほど機智の痕が見えない。

レオナルドが、自分の空想中に話したかかる戯れと突飛とは、動もすると、彼の個性を誤認した傳記筆者を、ひどい錯誤に落しいれたのである。例へば、彼のミラノ時代の手記中に見られた『バビロニア皇帝の總督、ソリオ（シリア）のデアオダリオ』に與へる手紙の下書といふのがあるが、此の中で彼は、自ら、或る事業を企てる爲に東洋の此處へ派遣された技師と名乘つたり、

怠け者といふ非難に對する辯解を竝べたり、都會や山岳の地理學的敍述を書いたりした揚句に、彼の滯留中に起つた大天災の情を狀いてゐるのだ。

J・P・リヒタアが一八八一年に試みた推論は、此の文書を根據としたもので、レオナルドが實際にエヂプト皇帝（サルタン）の使臣としてかかる視察旅行を遂げた事、親しく東洋に滯在してモハメツト敎を受入れた事、等を立證しようとしたものである。彼の東洋旅行が事實あつたとすれば、その年代は一四八三年代であるはづだ。つまり、ミラノ太公の宮殿に召抱へられる前に該當する。だが、これを單に表面上の事として容易（たやす）く說明するに十分な、他の傳記筆者の批判の裏づけがある。卽ち、實際には、若い藝術家が自分の娯樂のために創作した空想的產物である事、恐らくは、世界を見物し、冒險旅行を體驗して見たいといふ彼の願望の現れに過ぎない事、等を、推察させるに難くないのだ。

例の『アカデミア　ヴインチアナ』も亦、恐らくは或る空想の成形であつたらう。此の解釋を基礎づけるものは、アカデミイの銘を持つた五つ乃至六つの、極めて精巧に組合はされた意匠畫の存在である。ワサリは、此の畫に言及してはゐるが、然しアカデミイといふ銘には觸れなかつた。

ミュンツは、『アカデミア　ヴインチアナ』の實在を信じてゐる少數派の一人である。大レオナルド傳の表紙を此の意匠畫によつて飾つた。

レオナルドの戲心が壯年時代に入つてから消滅した事、及び、此の戲心もまた、彼の個性の、最終最高の發展を意味するあの研究活動へ合流した事、等は確かであつたらう。だが、かかる長期に渡つて彼が戲心を保持してゐたといふ事實から、我々は次のやうな知識を與へられるのだ。『彼の幼年時代に、後年復び出會ふ由もないほど最高度の、エロテイクな歡喜を味はつた人は、その童心から離脫するまでに隨分永い時日を要するものであるが、』と。

(*)　その他、彼は組紐を描くのにも澤山の時間を費してゐるが、此の組紐の絲を始めから終りまで辿つて行くと、それが完全な圓形を描いてゐるのを知る。非常にこみ入つた美しい此の種の畫の一つは、銅版にされ、その中央に讀まれるのが、Leonardus Vinci Acadimia の文字だ。』

六

現代の讀者が、病形學(パトグラフィー)の一切を不愉快な眼で見てゐることは欺き得ぬ事實だ。此の排斥が着せ

られてゐる外裝は『一偉人の眞價と業績とをその病形的研究によつて理解する事は不可能であること、從つて、他の一流人物中に發見し得るのと同じ事柄を、その偉人について研究するなんて無益な惡戯ではないか』といふ非難である。だが、かかる批判の不當である事は明白だ。單なる口實としか、假託としか思はれない。凡そ、病形學（パトグラフィ）の目標とするところは偉人の業績を理解させる事でない。約束もしなかつた事を、履行せぬと言つて非難するのは妥當でない。讀者が反感を抱く實際の動機は別に在るのだ。之は、傳記作家といふ者が、自分の書かうとする偉人に對して、いかに特異な執着を持つものであるかを考へ合はせれば、直きに發見される事である。此處に一人の傳記作家があつて、或る英雄を研究の對象に選んだとする。此の場合、選擇の理由を考へると、多くは、傳記作家自身の個人的な感情生活から發してゐるので、彼は最初からその英雄に特別の好意を寄せてゐるのである。續いて彼が努力するのは理想化といふ仕事で、その英雄を、傳記作家自身の少年時代に於ける典型の系統に加へ、父親に對して抱いた少年期の畏敬觀念を、その英雄の中で復活させようとする。傳記作家の描いた偉人英雄が、妙に冷淡な餘りに超人間的な理想型と成つて、我々とは、何かひどく懸け離れた感じを抱かせるのは、實は、作家が理想化

に急な餘り、對象の相貌から個性の特徴を抹殺したり、内外の抵抗に對する生存戰の血みどろな痕を綺麗に片づけてしまつたり、或はまた、人間的な弱點や瑕瑾の片影さへ殘すまいと努力した結果なのである。之は實に遺憾千萬の事で、傳記作家は、かくして眞實を空想の犧牲とし、自分の小兒的な空想のために、人間本性の最も魅力ある神祕境へ踏み入る機會さへ逸してしまふのだ。

(*) 此の批判は一般の傳記作家に對して適用されるもので、單に、レオナルド傳の場合ばかりを言つてゐるものではない。

よしんば、レオナルドの精神發展と知力發展の條件を摘發するに當つて、その研究の緒を、彼の中に見られる小さな奇癖や、謎に求めたにしろ、眞理を愛し知識慾に燃えた彼自身も、亦之を拒みはしなかつたであらう。彼についての知識は、彼に對する尊敬を高めるのだ。幼年期以來、彼の進展發達を侵害した犧牲の正體を究め、人間レオナルドに薄倖の烙印を與へた要素を蒐集する事が、レオナルドの偉大を傷つけるものでは斷じてない。

此處で特に斷つて置きたいのは、我々がただの一回も、レオナルドを、神經性患者とか、又は

あの不愉快な語韻をもつ『狂人』として算へはしなかつた事である。病理學から持つて來た見解を、無鐵砲にも、レオナルドへ通用したと抗議する人こそ、我々が今正しく放棄し得たと信じてゐる偏見へ、まだまだ拘泥してゐる人なのだ。健康と疾病、常態と神經質、等の截然たる區別を立てる事や、神經性の特徵は一般に低格性の證據と判定すべきである、等といふ學說は今日はもう通用しない。神經性の症狀とは小兒から文化人への發展途上に惹起された、ある抑制行爲の代用的成形である事、健康と言ひ得る人間の總てに、かかる代用成形が產出される事、また、さうした代用成形の數、强さ、分布のみが、疾患といふ實際的槪念と體質的低格性の結論を是正するものである事、等の事實を我々は知つてゐるのだ。レオナルドといふ人間に現れた小さな表示によつて、彼を所謂『强迫型』なるあの神經性疾患の一類型に近づけ、その硏究慾は神經性疾患の穿鑿慾に、その抑制は神經性疾患の所謂意思薄弱に擬へても差支へなかつたのである。

我々の硏究目標は、レオナルドの性的生活と藝術的活動と、この兩者の中に在る抑制への說明だ。從つて、彼の心的發展の過程に摘發し得る一切を、此の目標の下に總括する事が許さなければならない。

彼が、どんな遺傳關係を持つてゐたかは解らないが、彼の幼年時代に現れた偶然的環境によつて、深刻な攪亂作用の與へられてゐることはよく判つてゐる。私生子といふ事情は、彼が凡そ五歳に達するまで、彼から父親の影響を除き、母親の愛情の中へ放任的に惑溺させた。母に取つて、文字通り掌中の珠であつた彼が、また母の激しい愛撫によつて性的早熟と成つたまゝ、幼年期の性的活動の過程を踏んだ事は確實であらう。此の過程に於ける唯一の表現を裏づけるものは、彼の小兒期の性的好奇の猛烈さだ。見たい、知りたい、といふ衝動は、彼の生年初期の印象によつて最高度に興奮させられた。唇といふ發情帶は、もう忘れきる事の出來ぬ強い印象を受けてゐた。例へば、後年に反動的に現れた、動物に對する過度な同情同感から、彼の幼年期に、強力なサディズム型の特徴が在つたらしい事を推察し得る。强力な抑制は、この幼年期の過大を終熄させると共に、また、思春期に入つてから現れるべき素因を確實にしたのである。此の轉換の最も目覺ましい成果が、凡ゆる性的活動への捨離である。レオナルドは、禁慾生活に可能の人となり、中性的印象を與へる人と成つた。たとへば、思春期的衝動の潮が、子供の中に押寄せて來た場合でも、之に强制的に、贅澤な有害な代用成形を與へる事によつて、子供の病氣を防止し得

るものだ。性的衝動の欲求は、大部分、性的好奇への初期の選擇如何によつて、一般の知識慾へ昇華する事は容易であらう。その結果、抑制がくひとめを食ひ、リビドの極く小部分だけが性目標に向けられて、大人のいぢけた性的生活の代表となる。之が同性愛的態度を取り、典型的な美少年好きの姿を取つたのは、母性への愛情が抑制されたためである。無意識界では、母性への執着、母親との幸福な關係への記憶的執着が、そのまま保存されるが、暫定的には無活動の狀態で休止する。かうして、レオナルドの心的生活に及ぼした性慾の效用を處理したものは、抑制、執着、昇華の三者だつた。

朦朧とした少年時代から、藝術家、畫工、彫刻師、としてのレオナルドの全貌を偲び得るのは、早く幼年期に於ける覗きたい衝動のめざめによつて强められた、或る特殊な天稟の資性によるものである。ではどんな方法によつて、藝術家的活動が原始的の心的衝動へ歸納されるか。我々の持合はせてゐる手段を頭から否定しないなら、喜んで此處に披露しようと思ふ。先づ、我々が、殆ど疑ひを容れぬ事實として斷定し公言したいのは、藝術家の創造もまた彼自身の性的欲求から誘導される、といふ事である。レオナルドの場合で言へば、ワサリの殘した報告を根據として、彼

の早期の藝術的習作で目立つものが、微笑せる女の顏、美少年の顏、言ひ換へれば彼の性的對象の再現であつたといふことを立證するのである。最初、青春の開花期に在つては、レオナルドは自由に妨げられずに仕事をしたらしい。外部の生活様式では父を手本としたやうに、男性的な創造力と藝術家的生産力の一期はミラノで過し、此處で、運命の加護の下に、ロドヴイコ太公を父の代役とし得た。だが、やがて彼の悟つた經驗は、ほとんど事實上の絕對禁慾の生活が、必ずしも、昇華された性的探求の活動（卽ち、藝術家としての精進）に有利な條件でないといふことだつた。性的生活の原型がのさばり出し、活動と速かな決斷への能力とは痲痺し始め、氣迷ひと躊躇の傾向は早くも、『聖餐』の構圖中に惑亂の痕を止むると共に技術的影響も伴つて、さしも大規模な作品の運命は此處に決したのである。かうなると、漸く彼の中に見え初めたものは、神經性疾患の退行に擬し得るに過ぎない一つの過程だつた。彼の本質だつた藝術家への思春期發展は、生年第一期に決定されてゐた探求者（科學者）への發展によつて凌駕され、彼のエロテイク衝動の第二段の昇華は、最初の抑制によつて準備されてあつた第一段の昇華に抗しかねて退行したのである。科學者とされた彼は、初めの間こそ藝術への奉仕を續け得たが、後にはこれを離れ、全然

反對の方向へ走らざるを得なかつた。父の代役として求め得たパトロンを失ふと共に、此の退行的推移をいや更に深めたものは、刻々に增さり來る人生の憂欝である。どうにかして、せめて一枚でいいから彼の手に成る畫を、と懇望した伯爵夫人イサベラ・デステの事務員が報告した通り彼は、『畫筆に最も性急な人』と成つてゐた。彼の上に主力を揮ひだしたものは、幼き日の過去であつた。だが、いま藝術家としての創造に取つて代つた探求心それ自體には、無意識的衝動の活動してゐた事を裏づけるに十分な、二三の特徴を具へてゐた。それは、現實の境遇に順應して行く能力の缺乏、飽く事を知らぬ慾、前後を辨へぬ剛情、であつた。

彼の生存の絕頂期なる五十代の始め、女性に在つては性的特徴が既に衰頽し、男性に在つてはリビドの活動がまだ激しい噴出を見せることも稀でない時期、此の時期に、新しい轉化が彼を見舞つたのである。彼の心的內容のより深い層は、復び新たな活動を開始した。だが、既に萎縮の運命に在つた彼の藝術に幸ひしたものこそ、實にこのより深まつた退行であつた。ゆくりなくも出會つた女性によつて呼び起された記憶は、既に亡き母の、幸福な、官能的に恍惚とした、微笑である。此の覺醒の影響の下に、昔、微笑する女を描いてゐた頃、あの藝術家としての製作の端

緒を開いてくれた刺戟を、復び獲得する事が出來たのである。彼は、モンナ・リザ、聖アンナ三體像等を始め、數枚の、神祕的な、所謂、『謎の微笑』で特色づけられた作品を描いた。それは、最も初期始原のエロテイク衝動の救援によつて、自己の藝術に於ける障碍をもう一度克服し得た凱歌だつた。普通人の場合なら、かうした最後の發展は、迫り來る老境の闇に消失する性質のものであつたが、レオナルドの知力は、なほ一層、同時代の世界觀を遙かにだしぬいた、至高の傑作へと飛躍したのである。

前章で述べたところは、實は、レオナルドの發展經過に對するかかる描寫を、彼の生存のかやうな構成を、又、藝術と科學との間を彷徨した彼の動搖のかやうな說明を、是認し裏づけ得るためのものだつたので、かうした敍述から、精神分析界の識者や友人達の間に、私を單なる精神分析的の小說作者とする批判が呼び起されねばならないなら、私は次のやうに答へよう。私は決して、之等の事實の正確さを過信してゐる者ではないと。私だつて、此の謎に滿ちた偉人から發散する魅力に參つてゐる事は、他人と變りがない。彼の本質には、强力な推進的な情熱が潛んでゐるに違ひないが、ただ目立つ點は、その情熱は抑壓されて初めて發し得るものだつた事である。

レオナルドの生存に關する眞實はどうあつたらうと、もう一つの課程が解決されるまでは、精神分析的に掘り下げて行くといふ試みを、放棄することは出來ない。一般に、此處で樹立されるべき境界線は、此の精神分析といふ研究法が、傳記學に對してどれだけ活用されるかといふ點だ。之がはつきりすれば、中止された說明の何れも、不結果と解釋されずに濟むわけである。精神分析研究が資料として使用するものは生活史の事實で、一面に、事件と環境の影響との偶然性を、他面にはまた記錄に殘された個性の反應を使用する。かうして、かかる心的機構の知識を支點として、その個性の本質を彼の反應から動的（ディナミッシュ）に穿鑿し、彼の始原的な心的發動力を、竝に又その後年の轉化と發展とを、暴露しようと企てるのだ。これが成功すると、その個性の生活態度は、體質と運命の、言ひ換へれば、內部的な力と外部的な力の複合作用によつて說明されるのである。萬一かかる企圖が何等の確實な効果をもたらさない事があるなら、恐らくは例へばレオナルドの場合がそれかも知れないが、それは、精神分析學の方法に缺陷や不十分があつてのせゐでない。寧ろ責任は、その人物について傳へられてゐる資料の不確實と不完全とに在る。從つて、失敗した場合の責任者は實に、かかる不十分な資料に基きながら、判定を與へようとした著者自

身にあるとしなければならない。

けれど、歴史的の資料が十全に利用されてさへ、また、心的機構が最も着實に操縦された場合でさへ、精神分析の研究では與へ得ない、二つの重大な點に關する判斷がある。卽ち、個性といふものが唯かく成り得るだけであつて他にはどう成り得ようもなかつた、といふ必然性に於ける斷定だ。レオナルドの場合に代表されるべき意見は、彼の出生の私生子といふ偶然と、母親の竝外れた愛し方と、此の二つが、彼の性格成形及び後年の運命の上へ及ぼした影響の決定的だつた事、同時に、幼年期のかかる過程を經て現れた性の抑制が、リビドを知識慾へ昇華させると共に、後年の全生活に對する彼の性的無活動を確立してしまつた事である。だが、かうした、幼年期の最初のエロテイクな滿足を經てからの抑制といふものは、或は現れないでも濟んだであらう。これがレオナルド以外の人間だつたら、多分現れなかつたであらうし、現れたにしろ遙かに輕微な効力を持つものだつたに違ひない。此處で、どうあつても是認せざるを得ないのが、自由といふ一つの範圍だ。こればかりは、精神分析では解き兼るのである。と同様に、前言つた抑制推進の終局點を、唯一の可能な終局點であると斷定することも許されない。レオナルド以外の人間だつた

ら、リビドの主力を、知識慾への昇華によつて抑制から免れさせることは、凡そ成功しなかつたであらう。レオナルドが受けたと同じ影響の下に置いても、彼等がそれによつて與へられる結果は、思想活動の永續的障碍か、若しくは、神經性疾患への不可抗的な傾向だつたに相違ない。つまり、精神分析上の努力を以てしても、如何とも仕方ないのが、レオナルドのかうした二特徴なのである。卽ち、衝動抑制への比類ない傾向と、原始的な衝動を昇華する異常な能力と、此の二つの特質だ。

精神分析が認知し得る最後のものは、衝動と衝動の轉化である。そこから先は生物學上の研究範圍だ。抑制の傾向と言ひ、昇華の能力と言ひ、その源を探ねれば、何れも性格の器質を基礎としてゐるので、人間の心的結構も、此の基礎があつて初めて成立つのである。ところで、藝術家の天賦と創作能力とは、昇華作用に緊密の關係をもつてゐるのだから、藝術創作の本質も亦、我我の精神分析を以てしては及び難いものである事を白狀して置く必要がある。現代の生物學的研究の大勢を見ると、人間の器質的體質の主要特徴の説明を、男性及び女性の素質の混合による物質上の意義に於て求めようとする傾向があるが、レオナルドの肉體的な美、竝にその左ぎつちよ

であつた事實など、此の點に多くの支持を與へるものであつた。だが、我々はどこまでも、純粹心理學研究の地盤を見捨てようとは思はない。我々の目標は飽くまで、衝動活動の經路以上に、個性の外的體驗とその反應との關係を跡づける事だ。假令精神分析の學が、レオナルドの藝術家たる事實を理論づけ得なくとも、兎に角、此の學によつて我々が理解し得たものは、彼の藝術家としての表現と拘束である。どうやら、レオナルドの如き小兒期體驗を經た者にして初めて、モンナ・リザを、聖アンナ三體像を、描き得るのではあるまいかと考へられるのだ。彼の作品を、また自然科學者としての未曾有の飛躍を、準備したものこそ、あの悲痛な運命だつたのではあるまいか。彼の業績の一切と、彼の不運の一切とを説明する鍵こそ、あの禿鷹に關する幼年時の空想の中に匿されてゐるのではなかつたらうか。

然しながら、一人の人間の運命に對する決定的影響を、兩親關係といふ偶然に求めた研究の結果について、抗議を持出す事は許されないであらうか。例へば、レオナルドの場合で言へば、彼の運命を決定した影響を、私生子といふ出生と、最初の義母ドニア・アルビエラの不姙症といふ偶然な關係に求めた事に對して、抗議は出來ないのであらうかといふに、私の信ずるところで

は、我々にはさうした抗議を持出す資格がないのだ。もし、偶然といふ事に、人間の運命を決定する力がないとするなら、その考へ方は、あの敬虔な宗教的世界觀への退却に過ぎない。レオナルド自身でさへ、かかる世界觀克服の第一歩として、あの『太陽は動かない』といふ一句を書いたのだ。勿論我々の心を痛ましむる事は、神の正義を以てしても、善き準備を以てしても、餘りに力弱い人間の生涯に現れるこれ等の偶然を、防ぎ得ないといふ事實である。兎角我々は忘れがちだが、元來、人間の事總て偶然ならざるは無いので、我々の出生その事が既に、精子と卵子との偶然な廻り逅によるのだ。だが偶然が自然の合目的性と必然性とに參與し得る所以は此處にあるので、缺けてゐるのはただ、我々人間の願望と空想とへの關係に過ぎない。人間の生涯決定を、體質の必然と幼年期の偶然とに配分することは、各一の場合にはまだ確實と言へないかも知れない。が、全體として見る時、幼年初期の經驗の重大性については、もはや疑ひを容れる餘地がないのだ。自然に對する我々の敬意は、まだ餘りにも僅少に過ぎてはゐまいか。ハムレツトの科白を思はせる、幽玄な、レオナルドの言を藉りれば、自然こそ『未だかつて經驗の中へ現れなかつた原因を、數限りなく藏してゐる』のだ。人間といふ存在の各一は、數限りない實驗の各一に當

るもので、自然の中に在る原因が經驗として進出するのも、みな、『此の實驗を目ざして』なのである。

『詩作と眞實』に現れた
ゲエテの小兒期記憶

『我々が、初期の幼年時代に出會つた事を回想しようとする場合、ややもすれば、他人から聞かされた事と、眞實自分が眺めた經驗とを取違へることが往々あるものだ。』とはゲエテが、六十年代に入つて初めて筆を取つた自傳『詩作と眞實』の第一頁に書きつけた文句である。これ以前のものとしては、彼の『一七四九年八月廿八日正午、午報の鐘と同時だつた誕生に關する報告』が二三有るに過ぎない。彼は運のいい男だつた、恐らく、彼が命拾ひをした原因もここに在つたのであらう。といふのは、彼は死兒として生れて來たので、いろいろな手當によつて辛くも日の目を見る事が出來たのである。さて、冒頭に掲げた文句に引續いて書いてあるのが、子供たちの、即ちゲエテとゲエテより年下の弟妹たちの大好きだつた遊び場所や、家などに關する簡單な說明だ。續いて、特に或る單一の事件が語られてゐるが、之は多分、四歲位までの幼年初期に起つた事と推察されるもので、ゲエテ自身は、之に關する記憶を確かに持つてゐたらしい。

ゲエテの記述は次のやうである。『余のお氣に入りは、向ひ側のオツクゼンシタイン家の、死んだシユルトハイセンの遺した三人兄弟だつた。彼等は、余と一緒に遊び、種々の事をして戲れ合つたものである。』

『家の者が好んで話してくれたのは、例のいろいろな瓢輕者の物語りだつたが、余の心を挑發したのは、その男たちの、平素は眞面目で而も孤獨であるといふ事實だつた。余が實行したのは、さうした惡戯の中のほんの一つに過ぎない。あれは恰度瀨戸物市の日だつた。家の者は、次の市の日までの用意に、臺所用の瀨戸物を買ひ込むばかりか、我々子供たちへも、小さな皿小鉢の類を、遊び道具として買つてくれるのである。美しく晴れた午後だつた。家の中はひつそりしてゐた。出窓のところで、皿小鉢を持つて遊んでゐた余は、別に何といふ考へがあつたわけでもないが、皿小鉢を街上に抛り投げて、氣持よく碎けるのを見て喜んだのである。余が手を拍つて嬉戯するさまを見たオックゼンシタイン家の子供たちは、大きな聲で、もう一つと呶鳴つた。余は、躊躇なく壺を一つ投げた。さうして、間斷なしに叫ばれる『もう一つ、もう一つ』といふ聲に應じて、ありつたけの皿、小鉢、盃の類を、手當り次第に鋪石道めがけて叩きつけたのである。見物人の喝采はまだ止まらない。余は、彼等の御機嫌を取る事がひどく嬉しかつた。だが、肝腎の皿小鉢はもう無い。而も、彼等の『もう一つ』といふ掛聲は荐りに續く。そこで、余はまつ直ぐ厨房に駈け込み、陶器の大皿を持ち出した。それの碎けるのが一層壯觀だつた事は言ふまでもな

い。かうして、余は厨房と出窓の間を行つたり來たりして、瀨戸物棚に在つた皿の、手が屆く限りを順々に持出しては街上へ抛りつけたのである。だが、例の見物人はなかなか滿足の容子を見せない。で、今度は、引きずつて來られるだけの皿や鉢を持出して、悉皆街上へ叩きつけて見せた。暫く經つて、誰か家の者が出て來て、余の惡戲を止めさせた。だが、災難はすでに過ぎてゐた。さうして、こんなに澤山破壞された陶器の代償として、尠くとも一つの面白い話が得られたのである。殊にそれに就て一生の間自分の心を娯しませたものは、此の惡戲の創始者でなければならない。』

さて、かうした小兒期の記憶といふものは、精神分析といふ事が行はれなかつた時代なら、かかる記憶の宿された動機を考へることなしに、また何等の憧着を感ぜずに、讀み捨てる事が出來たのである。だが、後代に成つては、此處に、精神分析上の知識が活動せざるを得ない。勿論我我は、生年最初の小兒期に關する記憶について一定の意見と期待とを形づくつてゐるし、それに對しては、好んで一般的適應性を要求してもゐる。幼年生活中でのどの單一な事實が、幼年期の一般忘却から免れてゐるか、といふことは、決して輕々に看過すべきでないと共に、また、無意

義な事であつてはならないのだ。寧ろ、かかる記憶に止められた事件といふものは、その人間の全生涯を通じての、最も重大なものであらう、と推察しても差支へないし、或は又、さうした重大性は、既にその事件の發生當時からあつたのだと解しても、乃至は、それが、後年に得た體驗の影響によつて補充されたのだ、と想像してもよいのである。

兎に角、かかる小兒期記憶の價値の重大性が明白に現れる場合は、極めて稀にしか起り得ないことは確實だ。大多數の場合は、取るに足りない、無意味な事にさへ思はれて、何故記憶喪失(アムネジイ)に逆つてまでこんなことが記憶の中に殘されてゐるのかと、兎角理解に苦しむ位なのである。また、永い年月に亙つての記憶力をもつてゐる人でも、それを話して聞かせる相手と同樣、そんな些事へはあまり注意を向けようともしないのが常だ。かかる小兒期記憶の重大性を認識するには、特殊の説明が必要なので、その方法に二種類ある。一は、その記憶內容がどういふ風にして他の內容と置換へられるかを立證する事で、もう一つは、他の、疑ふ餘地のない重大な體驗との關係を證明する方法で、此の場合には、所謂潛在記憶として現れて來るものである。

凡そ、或る人間の生活史の精神分析が達成するところは、生年初期の小兒期記憶が有する意義

を、かかる方法によつて明かにする事でなければならない。加之、分析を蒙る者の持つてゐる記憶が、彼の懺悔告白の序曲と成る記憶が、最も重大な記憶として、即ち、彼の心的生活の祕密を解く鍵を包藏するものとして、現れるのが通例なのだ。然しながら、『詩作と眞實』中に物語られた如上の小さい揷話の場合では、我々の期待に餘りぴつたりと來ないのである。解答を引出すのに、之だけでは材料と手段とが不十分である事は言ふまでもない。事件それ自體からして、後年の何等か重大な生活印象への、跡づけ得べき交渉を持つてゐようとは思へない。他からの影響によつて行はれた、家の器物を破毀したといふ惡戲は、確かに、ゲエテの豐富な生活が傳へる一切の、どの場面にも適合しない揷圖である。此の記憶の持つてゐる徹頭徹尾無邪氣な、他と沒交涉らしい印象は、精神分析の要求がここには該當しない事、或は又、それが不適當な場所に持出されてゐる事を主張させるであらうし、我々にしても、さうした警告に同意せざるを得ないのである。

で私は、疾うに、此の小さな問題を思考の範圍外へ追ひ出してゐたのであるが、そこへ偶然にも、私の前に現れた或る男を研究することによつて、彼の中に、これとよく似た幼年期記憶が、

實に明白な關聯において現れてゐることを知つた。彼は廿七歳になる、高等教育を受けた、天賦の才能ある男で、現在、母親との或る葛藤で惱み拔いてゐるが、その葛藤ときたら、彼の生活のあらゆる興味と關心に影響を及ぼし、ために、彼の戀愛も獨立處世の術も、重大な打擊を蒙つてゐるといふ狀態なのだ。此の葛藤の起原を探ねると、遠く幼年時代に溯ることが出來るが、恐らく、生年第四年代まで溯ると言ひ得るであらう。最初、彼はひどく虛弱な、いつも病氣がちの子供だつたが、それでも彼の記憶は、かうした不運の時代をも天國の樣に思ひ込ませたのである。といふのは、その當時の彼は、母親の愛を、絕對無制限に獨占してゐたのだが、弟の生れたのは彼がまだ滿四歲に成らない前で、之は今日も未だ生きてゐるが、彼を、片意地で强情な、母親から叱言ばかり言はれてゐるやうな少年に仕上げたのは、かうした弟といふ邪魔な存在に對する反應だつたのである。彼もまた、二度と正しい軌道を踏む事は出來なかつたのだ。

此の男が私の研究對象と成つたのは、信心家らしい母親が、精神分析といふものを嫌忌したからでは毫末もないが、兎に角、當時搖籃に在つた乳兒を殺してやりたいとまで考へた、弟に對する激しい嫉妬を、綺麗に忘れ果てて居たのである。彼は、今度はもう弟を頗るやさしく扱つたが、

然し發作的に奇妙な意地惡が現れ、かつては可愛がつた動物、たとへば獵犬だとか、大切に育てて來た小禽などを不意にひどい目に遭はせたりする事があつた。之などは恐らく、小さい弟に對して抱いたあの敵視的衝動の餘韻として解すべき事であつたらう。

ところで、此の男の報告によると、やはり弟に對して激しい敵意を持つてゐた頃の事だが、或る時、弟の手の屆く範圍に在つた遊び道具を、片端から窓の外へ抛りつけた事があるといふのだ。つまり、『詩作と眞實』中で、ゲエテが物語つてゐる幼年期の記憶と全く同じなのである。斷つて置くが、此の男はドイツ人ではなく、ドイツ流の教育を受けた者でもない。ゲエテの自傳などはついぞ讀んだ事もない男なのだ。

此處において私は、ゲエテの幼年期記憶を、今言つた男の經歷によつて否定し得なくされた或る意義の中に、探ね當てようとする試みを抑へきれなくなつたのである。だが果して、かかる解釋に必要な諸條件を、詩人ゲエテの幼年時代に跡づけることが出來るであらうか。ゲエテ自身からして既に、子供らしい惡戯を、オツクゼンシタイン家の息子の示唆によるものと說明してゐるではないか。けれども、その說明の中に理解されるのは、少年達が皷舞し督勵したのは單に彼の

惡戲を繼續する事に過ぎなかつた事實である。それに對する最初の實行は自發的なものであり、その動機に就ては、『別段、何といふ考へがあつたのでもないが』と自然自白の形で、惡戲の實際的動機が、自傳を書いた當時にも、またその前永い間にも、實際判明してゐなかつた事を說明してゐるのだ。

大勢の、而も非常に虛弱な子供達のなかで一番長命だつたのが、ウォルフガング（ゲエテの名前）と、妹コルネリアの二人だつた事は人の知る通りである。之等の夭死した兄妹たちの記錄が殘つてゐるのは、偏へにハンス・ザックス博士の深切によるものと言はなければならない。

それ等の弟妹を列擧すると、

（イ）ヘルマン・ヤアコップ。一七五二年十一月二十七日（月曜日）に洗禮を受け、生年六年と六週日で、一七五九年一月十三日に葬らる。

（ロ）カタリイナ・エリザベエタ。一七五四年九月九日（月曜日）に洗禮を受け、一七五五年十二月廿二日（木曜日）に葬らる。（生年一年と四箇月）。

（ハ）ヨハンナ・マリア。一七五七年三月廿九日（火曜日）に洗禮を受け、一七五九年八月十一日

（土曜日）に葬らる、生年二箇年と四箇月。（兎に角、これがゲエテの弟妹中で評判の美人で可愛らしい少女だつたのである）。

（二）ゲオルグ・アドルフ。一七六〇年六月十五日（日曜日）に洗禮を受け、一七六一年二月十八日（水曜日）に葬らる。生年八箇月。

ゲエテの直ぐの妹、コルネリア・フリイデリカ・クリスティアナが生れたのは一七五〇年十二月の七日で、恰度、ゲエテが一年と三箇月に達したときである。かうした年齢の差がごく尠い兄妹に在つては、お互ひに嫉妬の對象とは成り得ないもので、子供といふものは、その情熱が目ざめた場合決して、既に存在してゐる兄弟に對しては、さう激しい反應を發展させるものでない。彼等の反應は寧ろ、さういふ感情が發生してから後に生れて來た嬰兒に向つて集中されるものである。此處に說明しようとして努力してゐる前述の皿毀しの場面にしても、ゲエテがまだ搖籃に置かれた時代だつたり、或は、妹コルネリアが生れた直後だつたりしては、辻褄が合はなくなつて來るのだ。

最初の弟ヘルマン・ヤアコップの誕生は、ウォルフガングが三年と三箇月に達した時である。それからざつと二年經つて、彼が生後五箇年に入つた時、第二番目の妹が生れてゐる。皿毀し事件の行はれた時日は、此の頃に當てはめて考へられなければならない。恐らく、何れの場合かと言へば、ヘルマン・ヤアコップの方に當てはめられるのであらう。之なら、前に述べた男の『三歳と九箇月の時に生れた弟』といふ報告の例とよく一致してゐる。

こんな風に、我々が推測的說明を向けようとするゲエテの弟、ヘルマン・ヤアコップは、後に生れた弟妹たちと異つて、ゲエテの遊び場へ現れると直ぐ消え出るやうな存在ではなかつた。ゲエテの自傳を讀む者は、彼の一言隻句も、此の弟に觸れてゐないのを不審に思ふであらう。

(*) 「追記、一九二四年」此の機會に私の主張が事實と違つてゐた事を取消さして貰ふ。自傳第一書中の後章で、ゲエテは兎に角、弟の事にも言及してゐたのである。幼年時代の病氣がちな煩はしさを追想した個所で、此の弟も亦『ご多分に洩れず病弱だつた』と述べ、『非常に虛弱な資質で、むつつり屋で我儘で、お互ひに兄弟らしい關係を持ち合つた事は一度も無かつた。彼もまた、僅かに幼年時代を經ると共に世を去つたのである』と書いてゐる。

此の弟は六歳以上まで生き、ゲエテが十歳に近かつた時死んだのである。次に掲げたのは、ヒッチュマン博士の厚意によつて引用を許された、此の資料に關する記錄だ。
『少年ゲエテも、弟の死を不快な眼では見なかつたのである。ベッティナ・ブレンタノのまた聞きに據れば、尠くともゲエテの母親自身、次の樣な報告を殘してゐる。ゲエテの母親が奇妙に思つたのは、彼の遊び相手だつた弟の死に際して、彼が一滴の淚も滾さなかつた事である。それどころかゲエテは、兩親や他の弟妹たちの悲嘆に對して一種の忿怒を抱いてゐたらしい事だつた。で後に母親が、此の强情な子供に向つて、「お前は弟を可愛がらなかつたのか」と訊いた時、ゲエテは自分の室に走つて行つて、ベットの下から、いろいろ勉强やお話を書き綴つた紙を澤山持つて來て言つた。「これはみんな、弟に敎へてやらうと思つて書いたものである」と。卽ち彼が、いつも、弟妹たちと一緒で父親と遊ぶのが好きだつたのは、父親に自分の優越を見せたかつたからだつたらしいのである。』
つまり、皿毀し事件は、一つの象徵的事件であつたといふ見解を作ることが出來るかも知れない。或は、もう一層正確に言ふなら、子供の（ゲエテ及び前に言つた私の患者をも含めて）邪魔

物を片づけてしまはうとする欲求へ力強い表現を與へた、一つの魔術的行爲であると言へるであらう。物が砕けることに對する子供の快感に就ては、何等議論の餘地がない。既に、一つの行爲がそれ自體に快感を伴ふ以上、その行爲は決して制肘でない、寧ろそれ以前に、これを他の意圖の行使に際しても繰返さうといふ誘惑がある。快感が、器物の鳴り砕ける音響に在つたとは信じられない。快感といふものは成人した者の記憶中では、かかる子供の惡戯に一つの持續的な位置を保證し得るのだ。と言つて何も、より後への寄與のために、此の行爲の動機説明を混亂させようとして躍氣となるものではない。器物を叩きつけた子供は、それが惡いことである位の事や、大人から叱責される位の事は百も承知してゐる。從つて、さうした知識がありながらなほかつ抑制しきれないとすれば、確かにそれには、兩親に對する忿滿を洩らすべき何等かの理由が無ければならない。即ち、自分を、兩親の嫌がる者に見せてやらうといふ氣持である。

ただ單に子供が、毀れ易い物體を地上に投げただけなら、破壊された物に對する快感は滿足されたかも知れない。だが、それだけでは、窓から街上へ投げつけたといふ行爲の説明には成らないのである。此の『窓から外へ』といふ事が、魔術的行爲の主要部分であり、また、それの匿さ

れた意義も此處に發してゐると考へられる。新しく生れた子供は片附けられなければならない。而も、最初窓から入つて來たのであるから成るべくは窓から外へ片附けられる必要があつた。かう考へて來ると、此の行爲の全部といふものは、例の、人口に噲炙した『鸛が赤坊を連れて來るのだ』といふ言葉の、子供に與へた反應と全く同意義になる筈である。即ち『それなら、もう一遍鸛に持つて行つて貰へ』といふ結論に成るのだ。

とはいへ、凡ゆる内的の不確實な點は暫く措いて、一つの小兒期行爲の解釋を單一な相似類同の上に基礎づける事が如何に困難であらうと、自ら欺くやうな眞似はしないつもりである。私が『詩作と眞實』中の小さな挿話に對して、私見を發表する事を幾年かの間さし控へたのもそのためだつた。ところが、偶〻一人の患者が現れて、自身の精神分析を次のやうな、文字通りの正確さで誘導してくれたのである。

『私は長男で八人乃至九人の弟妹があります。私の最初の記憶の一つは、寢間着姿の父親がベットに腰かけて、笑ひながら「お前の弟が直きに出來るぞ」と、私に話してきかせた事でした。當時私は三歳と九箇月でした。つまり、それだけ弟との年齡の差があつたのです。それからもう一

つ記憶してゐるのは、その後間もなく、(或は一年も前でしたか)私が種々な品物、刷毛だの靴だの、といつた物を窓から街上へ抛り出した事です。だが之も、刷毛だけだつたかも知れません。またもつと小さい時分の記憶も一つ御座います。私が二歳の時でした。ザルツカンマアグウトへの旅行で、リンツのホテルへ兩親と一緒に泊つた晩、私は夜中にひどくものに悸えて泣き叫んだため、父親から打擲された事なんです。』

此の陳述を聞いて、私の凡ゆる疑念は一掃された。凡そ精神分析の操作に在つて、二つの事柄が、一呼吸のやうに直接連續して起るなら、かかる近接の意義は關聯によつて解釋されなければならない。卽ち、前の患者の陳述を言ひ換へると『弟が出來ると聞かされたから、其の後暫くして、器物を街上に抛り出すといふ亂暴をやつた』のである。刷毛、靴、其の他の物品を抛り出したといふ行爲は、弟が生れたといふ事實に對する反應として認識されなければならないのだ。望むらくは、此の場合に抛り出された對象が、靴とか刷毛とかでなく、寧ろ他の、生れて來た乳兒の手の屆く範圍に在つた物品である事だ……行爲の實體として現れたものは(窓から外へ)抛り出した事で、破壞や音響に對する快感とか行爲された物品の種類は、非實體的なのであつて

も差支へなかつたのである。

勿論、かかる關聯の要求が、前の患者の言つた第三の小兒期記憶にも當てはまる事は言ふまでもない。それは前の二つに比して一層初期のものであるとは言へ、結局、關聯の順位から見ると最後に移されるので、之を解くのは容易である。滿二歲に達した子供が夜中不安で耐らなかつたのは、父と母とが一緒のベツトに在つたのを見たからなので、旅行の際子供がさうした場合の目擊者にされるのは、蓋し止むを得ない事であらう。さうして、その當時に小さな嫉妬家の心に動いた感情の中から殘留するのが、女性に對する忿怒といふ感情で、之がまた、彼の愛情發展を持續的に阻害するといふ結果を招くのだ。

かうした兩度の經驗を與へられてから後、私は、精神分析會の席上で、かかる種類の事件は幼兒期にはよく有る事であらうといふ期待を述べたのである。其の時、二個のより立入つた觀察を提供してくれたのが、フオン・フウグ＝ヘルムウト博士夫人だつた。ここに借用したのはその觀察である。

一

小さなエリッヒが、「自分の體に不相應な品物を、無暗に窓の外へ投げ捨てる」といふ癖を、不意にもち始めたのは、かれこれ滿三年と六箇月に入つてからでした。而も、それが別段邪魔に成つたり、有つてはいけないやうな品物ばかりぢやないのです。恰度父親の誕生日でした。エリッヒは其の時滿三年と四箇月半に成つたのですが、何思つたか重たい麵棒を臺所からひきずつて來て、三階の居間の窓から外へ抛りつけたんです。それから二三日經つと、今度は杵を、續いて、やつとこさで戸棚から引ぱり出した父親の重たい登山靴を、窓の外へ抛り出しました。

その頃母親は姙娠七八箇月で流産しましたが、するとエリッヒは「まるで生れ變つたやうに素直な優しい穩かな」兒に成りました。母親がまだ五六箇月の時分には、よく、『母ちやん、お腹へ飛上つてやらうか』の『母ちやんのお腹を押して上げようか』のつて申して居りました。それから、流産する直ぐ前には、十月の事でしたがこんな事を言つたので御座います。『どうしてももう弟が出來るんなら仕方がないや、だけど、せめてクリスマスが濟んでからだといいなあ』と。

二

滿十九歳に成る令孃が、或る日、自發的に、次の樣な早期小兒期の記憶を話しました。

『思ひ出しても恐しいほど、私は不作法な子供でしたわ。いつでも這ひ出す氣かなんかで、食堂のテエブルの下へ坐つてゐましたの。テエブルの上には、私のコオヒイ茶碗があつたんです、え、今でも、茶碗の模樣まではつきりと覺えてゐますわ。で、その茶碗を窓の外へ拋りつけようとした瞬間、お祖母樣が入つていらつしやいました。

つまり、私には誰も構つてくれる者が無かつたんですの。その間に段々コオヒイの表面に皮が出來たんで、それが私には恐くて耐らなかつたんですわ。今思ひ出してもゾツとしますの。

私の、二年半違ふ弟が生れたのはその日だつたんです。だから、誰も私を構つてゐられなかつたんですの。

今でも始終言はれますけど、私、あの日位嫌な子だつた事は無いんですつて、お晝の時にはパパの祕藏のグラスを拋りつけるし、一日中着物は汚すし、朝早くから日が暮れるまでぐづり通し

でゐたし。それから、癇癪を起してお湯に入れる人形まで壞しちまつたんですもの。』

右の二例については殆ど註釋の必要がないであらう。これ等がいづれも、新しく現れた競爭者への子供らしい忿怒と、物品や器物の窓外抛棄といふ行爲や、乃至、惡事、破壞慾等の動作によつて表現したものであることは、別段精神分析の勞を俟つまでもなく裏づけ得よう。一の例で、子供が選んだ『重たい器物』の象徴するところは、恐らく母親自身であらう。新しい競爭者がまだ生れて來ない間、子供の忿怒は母親自身に向けられたのである。滿三年と六箇月の子は母親の姙娠を知つてゐたので、母親の胎中に嬰兒が宿されてゐる事を信じて疑はない。これに就て思ひ起されなければならぬのは、『小さなハンス』の實例と、山のやうに荷を積んだ車に對する、彼の特別な恐怖とだ。二の場合で注意されるのは、事件の起つた當時の子供の年齢が、二箇年半といふ非常な早期を示してゐる事である。

(*) かうした母親の姙娠の象徴に關する一例としては、數年前、五十歳を過ぎた一婦人から與へられた立派な確證がある。彼女が、後に幾度となく聞かされた話によると、彼女は、まだろくに舌も廻らな

い時分から、荷物を山と積んだ車を見るごとに、ひどく興奮して、父親を窓のところへ引張つて行つたさうである。彼女の記憶によるとそれはまだ三歳と九箇月に達しない時分の事であつたらしい。その頃に弟が生れ、家族が殖えた結果、住宅を移轉したのである。また、就寢前になると、定つて、何か知らん氣味の惡い大きな物が自分の上へのしかかつて來るやうな恐怖を感じて、それと一緒に、自分の手がひどく肥大して來るのを感じたのも、かれこれその前後の事であつた、と彼女は物語つてゐる。

さて、此處でゲエテの小兒期記憶に戻つて、彼の『詩作と眞實』中の小さな挿話へ、他の子供たちから得た觀察の推理的結果を當てはめて見るなら、此處に初めて、今まで發見し得なかつた筈の、完全無缺な、一つの關係が現れたのを知るのである。卽ち、ゲエテの言葉を言ひ換へて見るとかう成るのだ。『余は幸運の子だつた。死兒として生み落されたにも拘らず、運命は余の生命を保持してくれたのである。だが、余の弟たちは、運命の手によつて片づけられ、從つて、母親の愛を彼等と頒つ必要はなかつた。』この考へ方を倘も押進め行くと、彼の早く死んだ祖母へまで辿られるのである。此の祖母は、深切で、穩和で、幽靈の樣に、現實を超えた別世界に住んでゐる人だつた。

之は既に別の個所で言つて置いた事であるが、絶對に母親の愛を獨占した者は、その生涯を通じて、かの征服感と成果に對するかの確信とを與へられ、而も實際に於ても、此の確信が成果をもたらす事は稀でない。また從つてゲエテが、その傳中に、『余の强さは余と母親との關係の中に根ざしてゐる』と述べてゐるのは、正當な根據のある言葉として理解されて然るべきであらう。

小筥選みの主旨（モテイフ）

シエークスピヤの「ヴエニスの商人」より

一

最近に一つの小さな問題を提供し、その解答に對する誘因を與へてくれたものは、シエークスピヤ劇中の二つの場面、明るい場面と悲劇的な場面の二つだ。

明るい場面といふのは『ヴエニスの商人』中に在る、三つの小筥を繞る求婚者達の選擇がそれだ。美人で聰明なポオシヤは父親の意思によつて束縛され、三人の求愛者の中の、正しい小筥を選み取つた男と結婚しなければならない。三つの小筥といふのは、黄金のと、銀のと、鉛のと、この三種類で、そのどれか一つがポォシヤの肖像を納めた正しい筥なのである。求愛者中の二人までは、既に空籤を引いてしまつた。二人は、黄金のと、銀のとをそれぞれ選み取つたのである。從つて、第三の求愛者たるバツサニオの擇るべき筥は、鉛と決つた。これによつて彼は花嫁をかち得たのであるが、彼女の意中は、既にかうした運試しの始まらぬ前から、此の男へ傾いてゐたのだ。求愛者は何れも、自分が選んだ小筥について、何故それを選んだかといふ動機を説明し、他の二つの金屬を捨てた事に對して、自分の選んだ筥の金屬の長所を禮讃しなければいけな

いのである。かう成ると、一番難題の引受手は幸運な第三の求愛者だ。彼が、金や銀を向ふに廻して鉛の長所を禮讃する文句は、餘りぱつとしないし又こぢつけの感が尠くない。假に我々が、精神分析の實踐においてかかる場合に立つたものとしたら、必ずや、不滿足な論據の背後に匿されてゐる主旨(モティフ)を暴露してしまつたに相違ない。

小筥選みの神託はシエークスピアの發明ではなかつた。彼は、「ロオマ皇帝物語り」(Gesta Romanorum) の中に在る、皇子を得るために同様な籤びきをした一人の少女の話から、かうした題材を採つたのである。此の話でも、幸運をもたらす第三の金屬は、やはり鉛だつた。此處に一つの古來からの主旨(モティフ)が存在し、又それが、說明と演繹と歸納とを要求するものである事は、忖度するに難くない。第一の推測は、金と銀と鉛との中から選擇するといふ事は果して何を意味するのであらうか、といふ疑問だが、之に就ては、此の三つの物質の廣汎な關聯を研究したスツッケンの說明が、立所に確證を與へてゐる。曰く『ポオシヤに對する三人の求愛者が誰々であつたかは、彼等が各自に選擇した對象によつて明らかである。即ち、黃金の小筥を選んだマロッコの王子は太陽である。銀の小筥を選んだアラゴンの王子は月であり、鉛の小筥を擇つたバッサニオ

は星の子である。』と。此の說明を支持する資料として引用されたのが、エストランドの民族敍事詩中に在る一つの挿話だ。それは、太陽と月と星の子（北極星の長男）が變裝せずに三人の求愛者として登場し、結局、花嫁は第三の靑年に與へられる、といふ趣向である。

かくして、我々の持出した小さな問題は星の神話へ通じてゐるのだ。ただ遺憾なのは、此の說明だけでは終局へ達してゐない事である。何しろ、神話的人物の天降りを云々するいろいろな神話硏究者を信じない我々だから疑問は後から後からと續出する。寧ろ我々は、彼等が何處か地上の世界で、純粹な人間的條件の下に發生した後、天上的の圖柄を與へられたのである、といふランクの說に贊成する。我々の興味は、寧ろかかる人間的內容の方に繫けられるのだ。

此處でもう一度前の材料を見直さう。ロオマ皇帝譚中に在る如く、エストランドの敍事詩が扱つてゐる主題は、三人の求愛者にたいする一人の少女の選擇である。『ヴエニスの商人』中の場面も、見かけはこれと同樣だが、然し、此方では最後になつて、主旨の轉向を示すやうな場面が現れ、一人の男が、三つの小筥の中から選擇するのである。もし之が夢の中の事とすれば、直ちに考へられる事は、小筥もまた女性を現した物、女性の實體を象徵した物、卽ち、圓筒、匣、箱、

籠等と等しく女性その物を指してゐる事だ。從つて、神話の世界へも、かうした象徴的置換を適用する事が許されるなら『ヴェニスの商人』中の小筥選みの場は、眞實、我々の豫想した復歸であり轉向となるのである。童話の世界のやうになるが、此處で一搖り搖すつて、此の主題から星の衣を脫ぎ去つて見給へ。殘るものは、三人の女に對する一人の男の選擇といふ、人間的な主旨だけと成るではないか。

之と同じ內容が、シェークスピヤ劇の最も傷心震魂的な他の場面にも指摘し得るのである。此の場合では花嫁選みでないが、然し、それだけにまた『ヴェニスの商人』に於ける小筥選みと隱約の共通性が、多分に感じられるのだ。老いた國王リャは、自分の存生中に、領土を三人の娘に分配する決心をする。その分配の尺度と成るものは彼に對する娘たちの情愛の深さだつた。二人の姉娘ゴネリルとレガンは、あらゆる誓ひと讃辭を連ねて、自己の情愛の深さを述べ立てるが、三番目のコルデリアは、さういふ事を嫌つて應じない。リャ王は、本來なら此の、末娘の、飾らぬ無言の情愛を認識してそれに酬いてやつて然るべきだつた。が、彼はそれを見損なつて、コルデリアを押し除けて二人の姉妹に領土を頒つた。此處に、彼自身と全體とに對する禍根が孕まれ

たのである。之もまた、一番年若の者が最も幸運の當り籤を引くといふ、三人の女に對する花嫁選みの場面と同一ではないだらうか。

此處で思ひ起されるのは、同じ情勢を內容とする、神話に、童話に、詩に、描かれた一場面だ。卽ち、三人の女神の美の選定に當つて、一番年若の女神を最も美しいと言つた牧人パリスの話である。アッシエンプッテルもまた、王子によつて選み出された、三人姉妹中で一番末の妹だつたし、アプレユスの童話に現れたプジイヒエも、三人姉妹のなかの、最も美貌な末娘であつた。プジイヒエは、一方では人間化したアフロディテとして尊敬を集めたが、他方では、姉の女神たちから、アッシエンプッテルが繼母から受けたと同じ虐待を蒙り、雜多に混合して積上げた種子の山を、その種類に從つて分類する事を命じられる。さうして、アッシエンプッテルの場合では鳩が、プジイヒエの場合では、蟻が出て來て、その仕事を助けたのである。かうした資料を探さうと思へば、同樣な具體的特徵を具へた同じ主旨(モテイフ)の別の形態は、恐らく幾らでも發見する事が出來るに違ひない。

此處では、コルデリアとアフロディテと、アッシエンプッテルとプジイヒエと、此の四つだけで

十分としよう。三人の女があつて、その中の三番目の女が幸福の當り籤を引くといふ趣向は、その三人が姉妹として登場した場合にはいつでも同質の物と解していいであらう。穿き違へてならないのは、前のリア王の場合には三人の王女が選定に當つてゐる事であつて、此の意味は、恐らくリア王が、老人として描かれねばならなかつたからに外ならないであらう。老人には、三人の女から選定される資格は一寸無理であらう。從つて、此處では彼の娘といふ事にされたのである。だが、此の三人の姉妹は誰々であらう。又、どうして當り籤が第三の妹に落ちなければならなかつたのであらうか。此の疑問に答へる事が出來れば、探してゐる説明もおのづから得られるわけだ。さて、前に三つの小筥を三人の女の象徵であると斷定した時、既に我々は精神分析上の技術を應用してゐる。此のやり方をどこまでも續けて行く勇氣があるなら、我々が最初に突當る道は、豫想だにしなかつた不可解の道だ。が、迂路を通つても恐らくは一つの目標へ通じてゐる道である。

先づ、我々の眼をそばだたせるのは、あの幸運な三番目の妹は、いろいろな場合に於て、彼女の美しい容姿以外にも或る種の特殊性を持つてゐる事だ。それは、何か一つの一元へ向つて努力

してゐる様に見える特性である。勿輪、それが凡ゆる例に亙つて、一様にはつきりと描き出されてゐると見る事は期待しないが。コルデリアは自分の心を隱して現さない。鉛の様に見かけが貧弱だ。默つてゐる。彼女は『愛してそして默つてゐる』女である。アッシエンプッテルも自分を隱してゐて、見出されない女だ。多分此處では、自分を匿してゐる事を、默つてゐる事と同じ意味に扱つても差支へあるまい。だが、勿論これは、此處に持出した五つの場合の中の二つに過ぎないのである。けれど、不思議な事に、此の二つの場合から得た暗示が、更に他の二つの場合にも存在するのである。此處で今度は、執拗に沈默を守つたコルデリアを、鉛に比較して見る事としよう。之については、小宮選みに於けるバッサニォの短い言葉が、極めて直接に當てはまるのだ。卽ち

『お前の內氣さこそ、僕に取つては他の二人の饒舌にも優つて親しみがある。』金と銀とは『響きが高い』、鉛は、『愛して默つてゐる』コルデリアのやうに沈默してゐる。

古ギリシヤの神話に現れたパリスの物語りでは、アフロデイテにかうした內氣さが與へられてゐなかつた。三人の女神は、各自に青年へ話しかけ、各自の約束によつて彼の心を獲ようと試み

たのである。だが、近世の人の筆になつた此の場面を見ると、我々の眼に奇異に映つた幸運の第三の女の特徴は、復びありありと現されてゐる。樂劇『美しきヘレナ』の中のパリスは、二人の姉の女神の求愛の樣を物語つた末に、第三のアフロデイテが、此の美人競爭において如何に振舞つたかを下のやうに敍べてゐるのだ。

だのに三番目の女は——ほんとに此の三番目の女は——

傍に立つて默つてゐた。

僕は、彼女に林檎をやらずにはゐられなかつた。

さて、此處に取上げた第三の妹の特性を『沈默』といふ事に集中させて見るなら、精神分析によると『沈默』は夢の中では死の表現と成るのが通例である。

もう十年以上にも成らうか、或る高い敎養を持つた男が私に一つの夢の話をした事がある。彼は、それによつて、多くの夢が持つてゐる所の、距離を超越した性質を裏書しようとしたので、永い間消息を絕つてゐた友人と夢で會ひ、それに向つて音信不通の罪を大いに責めたが、友人は一言も返辭をしなかつた。ところが、その後に判明したところによると、此の友人は自殺して世

を終り、而もその自殺した時が、前の時間と略一致するといふのである。夢が距離を超越するといふテレパテイ說は暫く措いて、此の話の中に疑ふ餘地がないやうに見えるのは、沈默が、夢の中では死の表現と成つてゐる事である。また、自分の心を隱すことや、自分の本心を發見されまいとする事は、童話の中の王子が、アッシエンプッテルによつて三度も嘗めさせられた經驗だが、之等もまた、夢の中では紛れもない死の象徵である。その青白い色は、シエークスピヤ劇原文の一つの讀み方によつて思ひ出される鉛の青白さ（Paleness）だ。夢でない現實の生產社會に在つても亦、沈默が、死の表徵として解さるべきである事を確實にし得るなら、かうした夢の語法の意味を、今、扱つてる神話の表現法へ反譯する事は實際に容易と成るであらう。

此處で、例のグリンム童話の第九『十二人の兄弟』といふ標題の一篇を取上げて見よう。或る國王夫妻の間に十二人の子供があつて、どれもこれも男の子ばかりだつた。そこで王は、十三番目の子が女だつたら、前の男の子は殺さなきやならない、と言ふ。で、女の子を期待して、王は十二の棺を拵へさせる。十二人の王子は、母に助けられて人里離れた森に遁れ、今後出會ふほどの女の子は、片端から殺してしまはふと誓ふ。

十三人目の子は女だつた。王女は、成長すると共に、或る日母から、十二人の兄がある事を聞かされ、それを探し出す決心をする。王女は、森の中で一番末の兄と出會つた。彼は、王女を知つてゐたが、兄達の誓ひを思つて、わざと知らない風を裝はねばならない。妹である王女は『もし私の十二人の兄樣たちが助かる事なら、私は喜んで死ぬつもりです』と言ふ。十二人の兄弟は、やさしく王女を迎へ入れ、王女は、兄弟の家に止まつて、兄弟のために家事を見る事に成つた。

兄弟の家に小さな庭があり、十二の百合の花が咲いた。王女は、十二人の兄弟に贈るために、それを取る。王女が花を手折つたその瞬間に十二人の兄弟は鴉に化身し、家も庭も消えてしまつた。——鴉は靈鳥である。一人の王女の誕生によつて約束された十二人の子の死は、花を手折つた事によつて新たに具現され、同樣にまた十二の棺と十二人の王子の失踪とによつて、物語りの序曲は具現されたのである。復び、十二人の兄を救はうと心構へした王女が敎へられた解放の條件は、七年の間啞に成る事だつた。一言も喋つてはならないことだつた。王女は、此の試錬に耐へた。それによつて、自分自身の生命まで危險に曝されたのである。といふ意味は、前に十二人の兄と邂逅した時に自ら誓つた通り、兄達のために自分の身を殺した事である。かうした、七年

間の無言の行によつて、到頭、十二の鴉の贖罪が成就されたのである。

七羽の白鳥に化身された七人の兄弟が、一人の妹の無言の行によつて救はれた、といふ『七羽の白鳥』の童話も全然同じ趣旨のものである。七人の兄の罪を贖はうとする少女の堅い決心は、『假令自分の生命に換へても』と、後に王妃と成つてから復び陷つた危險にさへ、沈默を守り續けたために加へられた惡い讒訴による生命の危險にさへ、敢然として打勝つたのである。

沈默が死の表現として理解されねばならない事は、確實に、童話の中から、なほ別の證據をいくらも取出す事が出來るであらう。從つて、此の意味から言へば、前の、幸運の當り籤を得た三番目の末娘は、死人を意味するものであつた筈だ。が、その意味が少しずれて、死そのもの、即ち『死の女神』と成つたのである。よくあり勝ちなかうした轉移のお蔭で、一つの神性によつて人間に頒たれた特性が、彼女だけに附與されたのである。現代流の解釋に從つても、ここに擧げた表現法に從つても、死それ自身は直ちに死者を意味するのであるから、死の女神の場合にかうした轉移が行はれた事は毫も訝しむに足りないであらう。

だが、第三の末娘が死の女神に當るとすれば、此の三人姉妹の正體は自然解つて來る。即ち、

モイレンとかパルツェンとかノルネンとか呼ばれた運命の女神の姉妹であつて、その第三の末娘アトロポスは、嚴格冷酷の女の意味だ。

二

以上のやうにして發見された意味が、我々の神話に該當するかどうかといふ懸念は、暫く預かつて置いて、今度は、運命の女神たちの由來と役割とに就て、神話學の敎へを乞はうと思ふ。

(*) 以下は、ロッシエルの、ギリシヤ及びロオマ神話に關するレキシコンに據つたのである。

最も古いギリシヤ神話學で知れてゐるのは、免れ得ない運命の化身としてのモイラ女神（或はメエレ）一人に過ぎない。（ホオマア）これが、三人（稀には二人）の神性の姉妹團に發展し、恐らくは、モイラと親近のカリテンやホオレンなどといふ別の諸神形體と關聯したのであらう。

ホオレンの始原は天上の水の神であり、雨と露を降らし、又雨を落すところの雲の意味をも含んでゐた。ところで、此の雲は織物として解されたところから、此の女神群に對し紡織女の特性が與へられ、やがて*それ*が、運命の女神の特性とされるに至つたのである。太陽の光を豐富に受

けた地中海沿岸の諸國では、雨が地の豐饒と大きな關係があるところから、ホオレンは生產の女神に轉化した。花の美と果實の豐饒とを、此の女神群のお蔭であるとした思想が、やがて彼等の成形に凡ゆる愛らしさと優雅さとを準備した。ホオレンは、一年の各季節を代表する女神と成つた。神聖な自然の季節を三期に分つて解釋する事は妥當を缺いてゐたかも知れないが、ホオレン女神群が三人を以つて形成されたのも、恐らくはかうした關係からであつたに違ひない。之等の原始人は、一年の季節を、冬と春と夏との三つに區別してゐたのである。秋といふ季節の分類が加へられたのは、後のギリシヤ＝ロオマ時代の事で、此の時代の美術的作品に四體のホオレン女神を見る事は餘り珍しくない。

ホオレン女神群の、時に對する關係は永く保持された。最初、一年四季の時を護つた樣に、後には一日一晝夜の時を守護し、終りには、時の稱呼に、此の女神の名が使用されるまでに墮落した。(Heure, ora 等の文字は、之を裏づけるものである。)ドイツ神話に出て來るノルネン女神像は、此のホオレンやモイレン女神群と本質的の同族であつて、それ等の名によつてもかうした時を意味するものであることが解る。だが、かかる諸神性の本質が、更に徹底的に理解されると共

に、時の推移に於ける合自然法へ移されて行つた事は、當然の歸着としなければならない。かくして、ホオレン女神群は自然法と神聖秩序の守護神と成り、自然に於ける不可變の順列を反覆回歸せしめる役割を與へられたのである。

自然に對するかうした認識は、人間の生活に對する解釋の上に反響を與へた。自然の神話は人間の神話と轉じ、天候の女神群から運命の諸神性が生れた。だが、ホオレン女神群に於けるかうした方面が先づ現れたのは、モイレン女神群の中であつて、彼女等は、自然の合法性を管理したホオレン女神群のやうな嚴格峻烈さで、人間生活に必須の秩序を監視したのである。不可避なる自然法の嚴しさ、死と滅びへの關係、さういつたものが、ホオレン女神群の愛すべき容姿には附與されなかつた代りに、今度はモイレン女神群の中にそれがはつきりと刻印された結果、人間は我といふ個性を自然に從屬せねばならなく成つて、此處で初めて、自然法の凡ゆる嚴肅さを痛感したのである。

三人の紡織女神の名は、神話學に在つても亦重大な意味のある事が發見された。第二番目の女神ラヒエジスは、『運命の合法内に於ける偶然』といふ意味——言ひ換へれば、存生といふ事を現

してゐるらしく、これは、例へばアトロポスが不可避＝死を意味してゐるのと同様だが、さてかう成ると必然に、最後のクロトオ女神には、非運の素質といふ意味が與へられたのである。

さて此の邊で、前に預つて置いた三人姉妹の選擇の主旨（モティフ）の説明に戻らうか。先づ、頗る不滿ではあるが、此處に認めざるを得ないのは、前に發見した意味を當嵌めようとすると、此の三人姉妹の情勢が實に不可解になつて來ると共に、又、その外見上の内容に種々矛盾した點が現れて來る事だ。第三の末娘は死の女神、即ち死そのものであるべきである。ところが、パリスの審判では、それが愛の女神となり、アプレユスの童話では同様な美人となり、『ヴェニスの商人』では最も美貌の聰明無類な婦人となり、『リヤ王』では唯一の貞節な娘となつてゐるのだ。實に申分のない徹底した矛盾と言はなければなるまい。だが然し、かうした有り得さうにない漸層的變化こそ、恐らくは、ごく親近の關聯を持つてゐるのではあるまいか。かういふ變化が起り得る場合は二つある。即ち我々の主旨（モティフ）の中で、選定が常に女達の間で自由にされる場合と、誰一人選んだ覺えがないのに、その選定が死の上に落ちざるを得ない場合、つまり宿命によつて犧牲とされる場合とである。

だがそれにしても、或る特種の矛盾や完全に相背反した事柄を通じての置換といふ事に、さして困難を感じないのが精神分析の解釋法なのである。此處では對立した二つの事象を、例へば夢の中での様に無意識な表現方法において、そんなに幾度もあれこれと、同じ要素を通じて再現する必要もあるまい。然し考へざるを得ないのは、精神生活の中には、相反した事柄を通じての置換を、所謂反應成形として誘導する所の主旨(モティフ)が有る事、及び、我々の研究の結果は、正(まさ)しく、かうした匿れた主旨(モティフ)を暴露する事の中に探ね當てられるといふ事である。モイレン女神の創造は、人間へ警告を與へようといふ見解から生れた結果であり、人間も亦自然の一部分なのだから、死といふ不可避の法則に從屬せざるを得ない。ところで、人間といふものは、自分だけは例外だといふ考へ方を棄てるのが耐らなく嫌なものだから、何とかして、此の自然法への從屬に反抗せずにゐられないのだ。我々人間は、現實ではどうしても滿たされない願望があると、空想能力を利用して、それを滿足させようとするものである。かくして人間の空想は、モイレン女神の神話に具象化された見解を一蹴して、其處から演繹された別の神話を創造し、死の女神を愛の女神によつて置換へると共に、それへ、人間らしい形態を與へたものだ。即ち、第三番目の妹は、もう死を

意味するものではなく、最も美しい、最善の、願はしさの限りの、愛らしさの限りを盡した、女の中の女である。また、かかる置換は技巧上から言つても決して困難でなく、既に古い愛憎兼備(アムビヴアレンツ)を通じて設計の用意は出來てもゐるし、まだ忘れきれ得ない原始時代の或る關聯を續つて行はれてもゐる事だ。此處で死の女神の位置に取つて代つた愛の女神自身も、かつては、死の女神と同義だつたのである。更にギリシヤのアフロディテ女神ですら、その下界神としての役割は、早く、他の諸神に、卽ちペルゼフォーネや、三體神のアルテミス——ヘカアテ等に讓つたとはいへ、下界との交渉を完全に斷つたわけでない。而もまた東洋諸民族の大いなる母性諸神に至つては、おしなべて生産の女神であると共に亡滅の女神であつたらしく、生命と豐饒の女神であると共に又死の女神であつたらしいのだ。かくして、此處に問題となつた主旨(モテイフ)に見られる、一つの反對願望を通じての置換といふ事は、その端を遠く原始時代の『同義(イデンテイテエト)』に發してゐるのである。

(*) 或はプロゼルピナ、ユウピテルがセレスに生ませた女神。

前の、神話に現れた三人の姉妹選定の特質は何處から出て來たか、といふ質疑にこたへるものは、やはりかうした考へ方でなければならない。此處にも、例の願望倒錯が行はれてゐるのであ

る。命數の必然なる立場に、宿命の悲運なる立場に、選定が置かれたのである。かくして人間は思想においては認知し肯定した死を、克服したのである。之を、願望成就の、强大な凱歌と考へる事は許されない。實際は自然法の强制に從つて選定しながら、而も選び取つたものは、恐怖の姿でなく却つて最も美しい、願はしさの限りの姿だつた。

勿論、より立入つて之を眺めるなら、原始神話のかかるゆがみはまだ十分に徹底的なものでなく何處かに、そのゆがみを跡づける面影の殘つてゐるのを感ずるであらう。三人の姉妹に關する自由選定は、實を言へば決して自由でない。必然的に、第三の姉妹が選まれなければならないので、萬一さうでなかつたら、リヤ王の場合の如く、凡ゆる不祥事が其處から發生せざるを得ないのだ。死の女神と位置を交替した最も美しき最善の姿、その容貌には、仄かな鬼氣が感じられる、匿された眞相は、實に此の點から暴露し得るのだ。

(*) アプレユスのプジイヒエ女神も、死への關聯を警告するに十分な特徴を具へてゐる。女神の婚姻の宴は葬禮の裝ひを與へられ、花嫁たる女神は下界に跳び降つて、やがて死の眠りに落ちねばならないのだ。（ランク）

春の女神及び死の花嫁としてのプジイヒエ女神の解釋に關しては、A、チンツォウの『プジイヒエとエロス』を參照されたし。

さて、以上の如く追究したところによつて、神話及び、その轉向の隱れた理由は擧げ得たと思ふ。今度は、詩人や作家によつて主旨(モティフ)がどう利用されたかといふ事が、恐らくは興味ある點であらう。第一に我々が受ける印象は、原始神話への主旨(モティフ)の還元が、詩人や作家達によつて行はれてゐるらしい事で、從つてゆがみによつて弱められた神話の原始的意義が其處に復び跡づけられるのである。かかるゆがみの還元によつて、原始本體への部分的復歸によつて、作家達は、より深い感動を讀者に與へようと狙つたのだ。

誤解を避けるために言つて置くが、二つの賢明な敎訓を尖銳なものにしようとする『リヤ主』劇に對して、反駁の意圖は私には無い。人間は、己の財と己の權利とを存生中に棄權する必要はないと共に、また、純金の眞理を阿諂と交換せぬやう警戒せねばならないのである。彼此似たやうな警告が、事實、此の作品には含まれてゐるのだが『リヤ王』劇の異常な効果を、かかる思想內容の印象によつて說明したり、或は理解したりすることは、卽ち、かうした人生の敎訓を提示

しようとする意圖を持つた、作者の個人的主旨（モティフ）を論じ盡す事は、私にはどうも不可能であるらしい。また、作者がかうした忘恩の悲劇を見せてくれた由來も、――その臍を嚙む痛さは多分、作者自身の體にこたへてゐるだらうが――また劇の狙ひ所が、藝術の衣裳を纏つた定型の契機（モメント）に過ぎない事も、主旨（モティフ）の評價を通じて、三人姉妹の選定に展開された認識を置換へる事は出來さうにない。

リヤ王は老人である。前にも敍べたとほり、三人の姉妹がリヤの娘として現れたのは、そのためだつた。かくも豐富な劇的推進力を發散し得た父といふ關係が、此の劇中では、それ以上の利用を見せてゐない。だが、リヤ王は單に老人であるに止まらず、寧ろまた死につつある人である。從つて、かくまでに珍妙異常な遺產分配の假定に對する奇異の感も消失せざるを得ない。だが、墓穴に片足を入れかけたリヤ王は、まだ、女の愛を諦め捨てようとはしなかつた。彼は、自分がどれほど愛慕されてゐるかを知りたいのである。此處で讀者は、あの終幕の傷心震魂的場面を、近代の劇に於ける悲劇のクライマックスの一場面を、考へて見給へ。リヤ王は、コルデリアの屍體を舞臺に運んで來るではないか。コルデリアは死である。此の情勢を逆に考へると、我々にも

よく理解されるし又、信じ得るのだ。それは死の女神である、ドイツ神話に現れたワルキユウレの如く、斃れた勇士を戰場から運び去るところの女神である。原始神話の衣を借りた不滅の智慧は、老王リヤにかう教へた、愛を拒け死を擇んだ者は、死の必然と手を握らねばならぬ、と。

シエークスピヤは、三人姉妹に對する選定の籤を、一個の死に瀕した老人に引かせる事によつて、古い主旨（モテイフ）を我々へ親近させたのである。かく、願望轉化によつてゆがめられた神話を以つてした復古的の制作は、その原始の意義を遙かに耀き透らしめて、おそらくは、主旨（モテイフ）の有する三人の女性の、表面的な寓意の解釋をも容易ならしめてくれるであらう。男性に取つて、免かれることの出來ない女性への交渉が三つある、と言つても差支へないであらう。それが、此處に具現された、子供を産む女、伴侶としての女、廢頽の女、の三型である。また此の三種の型は彼の生涯中に三度轉化した母の姿でもあらうか。第一が母親自身、第二が、母を基本として選んだ戀人、最後が、彼を復び迎へ入れるところの母なる大地。老王リヤは、彼が最初に母親から迎へられた如く、女性の愛を捉へようとしたのであるが、窒しかつた。僅かに、運命の女性の第三番目の者が即ち沈默の死の女神が、彼を抱き上げたに過ぎないのであらう。

ミケランゼロの『モオゼス』

お斷りして置くが、私は美術鑑識家でなく寧ろ素人である。幾度も申した通り、私は、藝術家が第一に價値判斷の基礎とするところの形式上の特徴や、技巧上の長所などよりも遙かに、作品そのものの內容の方に心を惹かれるのだ、元來私には、藝術の手段效用の諸般に就て正しい理解が缺けてゐるので、此の事は、私の研究に對して餘り辛辣な批判を加へられぬやう、一言お斷りして置く必要がある。

だが然し、私の心へ強く働きかけるものは藝術作品である。別して、文學と彫塑、稀には繪畫のそれである。そんな機會がある每に、強く心を動かされてそれ等の作品の前に足を止め、私流儀のやり方で解釋しようとする。言ひ換へれば、それ等の作品が私の心を惹きつけるのは何によるかを見究めようとするのだ。これが出來ない場合、例へば音樂の如き藝術については、私は殆ど鑑賞の資格がないのである。心を動かされて居りながら、而も、何故さうなつたか、何が私を感動させたかを、知り當て得ない場合になると、一つの思辨的素質が、といふより恐らくは一つの分析的素質が、私の心中でそれに對する反抗をやり始めるのだ。

此の場合に奇異の感を起すのは、最も壯大な又最も征服的な藝術創造の或る作品が、我々には

全然理解されないといふ、いかにも逆説的な事實である。我々はその作品を讃嘆し、その作品から衝迫されるのを感ずる。が、それが何を意味してゐるのか、我々には說明する事が出來ない。私は博覽强記の識者でないから、かういふ事は旣に何人かによつて指摘されてゐるのかも知れないし、或はまた、かかる思辨を超越した力こそ、一つの藝術作品が喚起すべき最高作用力の必然な一條件である、と喝破した審美學者は無かつたのかも知れない。兎に角、私としてはただ、さうした條件を信じる氣になかなか成れないのである。

と言つて何も、鑑識家や熱心家諸君がさうした作品を推賞してくれる場合、一言も、それに觸れてゐない事を指すのではない。彼等は彼等でいいのだ、と私は考へなければならない。然しながら、かうした藝術家の一傑作については何かしら變つた事が言はれるのが常例で、卒直な鑑賞者には解き難い謎の樣な言葉が多い。けれども、私の解釋では、我々をこれ程に强く感動させるのは、作品を作つた藝術家の意圖に過ぎないのであつて、その意圖が作品中に十分表現されると共に、我々をして理解せしめるにも成功した場合に限るのである。勿論、單に解り易いといふだけではいけない事は私も知つてゐる。藝術家に在つては創作の推進衝動力となるところの心的狀況、

情緒狀況等が、鑑賞者たる我々の間にもう一度喚起されなければならないのだ。だが、藝術家の意圖は何故に指定され得ないのか。また、精神生活の他の事實のやうには、何故に言葉で表白され得ないのか。恐らく之等の事は、偉大な傑作の場合では分析を應用せずには成し遂げられないのであらう。もしそれが、我々へ働きかけるところの、藝術家の意圖と心的活動との表現であるなら、その作品自身は、とに角かうした分析を可能にするものでなければならない。さうして、かかる意圖を忖度するためには、先づ是非とも、その作品中に再現された意味と內容とを見つけ出さなければならないので、かうして初めて、その作品を説明する事が出來るのである。從つて、かういふ作品には註釋が必要であり、その註釋によつて初めて、何故これほどに强力な印象を蒙るかの理由も判明する、と言ふ事が出來るのだ。とは言へ、かうした分析が成功した場合に、作品の與へる印象が些かでも稀薄にされ弱められる事はあるまいといふ希望は、私自身でさへ抱いてゐる事をお斷りして置かう。

さて、此處で考へて貰ひたいのは、三百年以上にもなる、シエークスピヤの古い傑作ハムレットだ。精神分析上の文獻を追求した結果、私は『此の悲劇が何故あれ程の感動を與へ得たかの謎

を、エヂプスのテエマに基いて解決したのは、材料の歸納によつた精神分析が最初である』といふ主張に左袒せざるを得ない。だがそれまでには、一體どれ位、相異つた、相背反した說明や解釋が行はれた事だらう。主要人物の性格や作者の意圖に關する意見も、一體どの位選擇された事だらう。シエークスピヤは果して、ハムレットを病人とする意見に左袒する事を要求したであらうか。それとも不十分な低能兒とする意見に與する事を喜んだであらうか。或は又、現實世界に對してはただ善人であるに過ぎない理想主義者と見る意見に、贊成する事を望んだであらうか。またかうした解釋の如何に多くが、我々に、その作品の持つ迫力の說明には全然なり得てゐないことを、冷やかに敎へた事であらう。寧ろ、この劇作の魅力は、偏へに、思想の印象と言語のあやとに基くものであるといふ考へを抱かせたのも、みな、前に言つたやうな解釋が澤山に行はれたからだつた。而も從來のかうした硏究努力は、其處に一つの必然的要求が探し當てられる事、かかる迫力のより廣い源泉が見つけ出される事、に就ては言及してゐないではないか。

かかる謎に滿ちた、又壯麗無比な、藝術作品の他の一つとして、モオゼスの大理石像がある、ロオマのヴインコオリなるサン・ピエトロ寺院に建てられたミケランゼロの作で、周知の如く、

彼が、威勢當代を壓した法王ユリウス二世のために制作しようとした、あの巨大な墓石の一部分に過ぎないものである。此の像に就て言はれた、これこそは『近世彫塑術の冕冠である』といふ一句（ヘルマン・グリンム）を讀むごとに、私は同感を禁じ得ない。何しろ私は、如何なる彫塑からもかつて之以上に强い迫力を感じた覺えがないのである。美しからぬコルソ・カヴールの嶮しい石段を、落莫荒凉たる寺院の淋しい廣場へと幾度か登つて行つた私は、その都度、此の巨人の輕蔑的な怒れる眼光を耐へ忍ばうと試み、時には又、私自身が、彼の眼光を向けられた賤民であつたかのやうに、內陣の薄暗がりからこそこそと忍び出た事も一切でない。それは何等の確信をも確かめ得ない眼だ、期待と信賴を欲しない、而も偶像の再來を歡喜するところの眼だ。

だが、何故に私が、此の立像を謎に滿ちてゐると言つたのか。其處には露ほどの疑惑も存立しない、モオゼスの再現する姿は、神聖な戒律を誌した盤を抱へたユダヤの立法者である。これだけの事は確實だが、また、それ以上には何一つ解つてゐないのだ。美術批評家のマックス・ザウエルラントが下のやうな判定を與へたのはつい最近（一九一二年）の事である。『凡そ、此の牧神の頭をしたモオゼス像ほど、矛盾した批判を蒙つた作品は世界にない。すでに、立像の單純な解

釋さへ、徹頭徹尾矛盾の中に動搖してゐる……』僅々五年ばかり前に行はれた比較配列によつて如何なる疑惑が、此の立像の解釋に結ばれてゐるかを説明しよう。恐らくは、それ等の解釋の背後にかくされた、此の作品を理解する上の本質的な最善のものを示す事も困難では無いであらう。

一

ミケランゼロの表現したモオゼスは坐像である。胴體を前に屈め加減にして、逞しい鬚髯と眼光を具へた顏面を左方へ向けて、右足は床上に休ませ、立てられた左足は僅かに五指を以て地に觸れてゐるに過ぎない。盤を抱へた右腕は、鬚髯の一部分に接觸し、左腕は、膝の上に置かれてある。これ以上詳しく説明しようとすると、勢ひ、後段で言はうとする事に觸れざるを得ないのである。就中、批評家達の敍述は不思議な程適切でない。恐らくよく解つてゐないから、その觀察や乃至は説明も鮮明を缺いたのだ。ヘルマン・グリンムは、此の右手を説明して『その腕は戒律の盤を抱へて鬚髯を握つてゐる』と書き、W・リユブケ(Lübke)は『怒つて、右手に、素晴しい垂髯を摑んでゐる』と書き、またスプリンゲルは、『モオゼスは左手を體に押し當て、右手を以

て無意識のごとく、逞しく膨れ上つた鬚髯を握つてゐる』と述べてゐる。C・ユスティ(Justi)の見解では、右手の指は『近代人が興奮したさいに時計の鎖を弄ぶやうに』鬚髯を弄んでゐるのだ、とあるが、かうした見方は、ミュンツの説明にも見受けられる。ヘンリ・ソオド(Thode)は『支へられた盤の上に在る右手の、しつかりと落ちついた姿態』を説明してゐるが、此の右手にさへ彼は、前のユスティやボイト(Boito)などの考へたやうな、興奮の所作を認めなかつた。『右手は、恰も鬚髯を握らうとする風で、巨人が頭を回すまで、ぢつと保たれてゐるのである。』ヤコブ・ブルクハルトの説明によると『有名な左の腕は、結局のところ、垂れ下つた鬚髯を身近く抑へつけようとしてゐるに過ぎない』のだつた。

こんな風に記述が一致してゐない以上、此の像の個々の特徴の解釈にいろいろと差別があるのも、さして訝しむに足らないであらう。固より私の見るところでは、モオゼスの顔面表情を特徴づけ得た者はソオドに如くはない。彼はそこに、『忿怒と、痛苦と輕蔑との混合した表情』を看取したのである。即ち『脅迫的に引寄せられた雙の眉に於ける忿怒と眼光中に在る痛苦と、突出た下唇、及び抑下げられた口角の中に見られる輕侮と』であつた。だが、他の嘆賞者は、自らまた、

別樣の眼を以て眺めずにはゐない。デュパティ（Dupaty）はつぎのやうに判斷してゐる。『嚴肅な額は、その大いなる精神を辛うじて掩うてゐる透明のベエルに過ぎぬやうに見える。』と。之に反してリュプケの意見では、『顏面に於てより高い知識人の表情を探したつて無益だ。迫つた額が示す表情は恐るべき忿怒とどんなことでも遂行せずにはゐないエネルギイとの能力以外の何ものでもない』のである。更に一層かけ離れた解釋がある。（Guillaume、一八七五年）、これによるとモオゼス像の顏面表情には何等の感情激發の痕はなく『單に、誇らしげな質朴さと、潑溂たる品位と、信念のエネルギイとがあるに過ぎず、モオゼスの眼は遠い將來へ向けられてゐるので彼は、自分の血族の持續と、自己の掟の恒久性とを豫見してゐる』のである。ミュンツも同じやうな意見で、『モオゼスの眼光は、遠く人間種族を超えて投げられてゐるので、彼が唯一人者として保持した祕密のうへへ向けられてゐるのだ』と述べてゐる。それどころかスタインマンの解釋では、此のモオゼスは『もはや頑固な立法でもなければ、エホバの忿怒を具へた、罪に對する恐るべき敵でもなく、寧ろ不老長壽の祝福と豫言とを與へつつ、永遠の光耀を額に戴き、國民から最後の訣別を受ける、王者の僧侶』だつた。

尙また別の一群の人々には、ミケランゼロのモオゼスから一般に何の意味も感ぜられず至極正直にそれを表白してゐるのがある。その一例は『四季刊批評（クオタリレヴユー）』一八五八年版のなかに見られる論評だ。『其處に在るものは全體の着想に於ける意義の缺如である。それが自己滿足全部への意圖を妨げるのだ……』と。更に驚くべき事は、モオゼスの像に何等の嘆賞を感ぜぬばかりか、却つて之を否定し、像の冷酷性と頭部の獸に似た形狀とを非難する一派があつた事である。

巨匠ミケランゼロは、事實果して、そんなにも差別を生ずる讀方が可能とされるやうな。無意味な、乃至は曖昧な、銘を、此の石像にうち込んだのであらうか。

だが、此處に一つの別の疑問が起つて來る。上述した不確實性の如きも、實は、容易に、此の疑問の中に從屬されてゐるのだ。ミケランゼロが此のモオゼス像中に創造しようとしたものは、時を超越した性格像（カラクテルビルド）、乃至は調和像（スティンムングスビルド）であつたらうか。それとも又、彼は、此の巨人の姿を、一つの確定した契機（モメント）、即ち彼自身の生涯での、最大重要な契機（モメント）の中で、再現させたのであらうか。評家の大多數は後者に與してゐるし、また、ミケランゼロが、永遠かけて堅く樹立した一場面をモオゼスの生涯から抽出する事も出來るのだ。此處に扱はれたテエマは、モオゼスが、神から戒

律の盤石を受け取つてシナイ山を降らうとする所であり、又遙かに、ユダヤの男女が黄金の犢を拵へてその周圍に歡呼し亂舞してゐる光景を眺めた時の容子である。此の光景を見やつた彼の眼光、同時に呼び覺された感情、それ等は彼の顏面表情の中に再現され、やがて此の逞しい像が、最も激烈な活動へと置換へられるのを暗示してゐる。ミケランゼロが選んだ表現は、此の最後の躊躇の、嵐の前の靜寂の一瞬の契機だつた。左足は既に地上を離れんとしてゐる。次の瞬間には正にモオゼスは跳上つて、抱へた盤を大地に叩きつけるであらうし、又滿身の忿怒をば、背教者等に向つて浴びせかけずには置かないであらう。

此の點の説明も亦、それぞれの代表者によつて相異つた意見が敍べられてゐる。

ブルクハルトは『金牛禮拜の樣を目擊して將に躍り上らんとした契機に於けるモオゼスを再現したもので、その姿勢には力強い激動への準備が籠められ、之に賦與された精神力の强烈さに至つては、ただただ戰慄を以てその激發を待つばかりである』と述べた。

リュプケは、『炯々たる眼、恰も金牛禮拜の瀆神行爲を目擊したるもののごとく、全姿勢を貫流する内的激動の强烈さが感じられる。心の激發に覺えず、豐かに垂下せる鬚髯を握つたモオゼス

は、なほ束の間、その激動を抑へんとする風情だが、やがて、一層の激烈さで爆發せずにはゐないであらう』と說明してゐる。

スプリンゲルも此の說に贊成してゐるが、少し異論を挾まないではなかつた。その異論は、我我の注意した點に一層よく適應するもので、曰く『全身を燒き盡す忿怒を感じながら、巨人は辛うじてその內的激動を抑へつけてゐる……從つて、知らず知らずの中に思ひ起されるのが一つの劇的な場面であり、また金牛禮拜を目擊して、忿怒に躍り上らんとする瞬間のモオゼスを再現したものである、といふ考へ方も生れて來る。ところで、モオゼス像は、法王の墓石と成る他の五體の坐像中でも、最も優越なる裝飾的効果を擧げる必要があつたのである事を考へ合はせると、前の推測は、實は、作者ミケランゼロの眞實の意圖から大分距離のあることが解る。作者の眞意は寧ろ、モオゼス像の人格的本質と、生命力の充溢とに對する、一つの耀かしき證左としての表現を狙つたのであらう。』と。

金牛禮拜の場面に對しては直ちに贊同し兼ねた二三の批評家も、此のモオゼスは躍り上つて次の行爲に移らうとする瞬間である、とする實際上の點では、前述の解釋に合流した。

ヘルマン・グリンムは『此の像に充實するものは一つの崇高である。恰も上天の雷神を驅使する權力を與へられたもののやうな、强い自覺と感情である。而も彼は、その雷神を驅り放つ前に、自ら制して、擊滅させんと思ふ敵が自分に向つて攻擊を敢てするか否かを、待望んでゐるのだ。彼は、今にも躍り上らん勢ひを見せて坐してゐる。頭は誇らかに雙の肩より高く向けられ、戒律の盤を抱へた手は、重い流れに胸の上を波うつ鬚髯を撫しつつ、大きく開いて呼吸する雙の鼻孔、この唇に浮ぶ言葉はわなわなと震へてゐるかも知れない。』と言つて居る。

ヰルスン (Haeth wilson) は『モォゼスの注視は何事かによつて激動されてゐるのであらう。將に躍り上らんとしつつもなほ躊躇の色を見せてゐるのだ。激怒と輕侮との混合した眼光は、或はまだ同情憐愍に變へられ得るものであらうか。』と言つてゐる。

ウエルフリンは『妨止された動き』を說いてゐるが、動きを防止し妨げるものは、此の場合ではモォゼス自身の意思であり、それこそ、爆發を、卽ち躍り上らうとする運動を、抑制する最終の契機(モメント)である。と述べた。

金牛目擊說に基いて最も立入つた推論をするとともに、從來は注意されなかつた細部の諸點を

此の推測と結びつけたものは、ユスティである。事實、彼の指示に從つて見直すと、二枚の戒律盤の位置は注目に値する。正に、石の座に滑り落んとする恰好だ。ユスティは言ふ。『だから此のモオゼスは、騷ぎの起つた方向を不愉快げに見やつてゐるのだと考へてよいかも知れない。或はまた、その騷ぎを直視して、恰もおもはぬ衝撃に呆然自失してゐる所とも見られるであらう。彼は、嫌惡と痛苦とに心魂を奪はれてぐつたりと腰を落したのである。*モオゼスは、四十日の晝夜を山上に籠つてゐたのだから、疲れきつてゐた。固より、怪異や大いなる運命や、瀆神の罪や、幸運さへも一瞬の間に目擊し得たであらうが、その實體、深度、結果、等を解し得る事は出來ない。その瞬間、彼は、自分の仕事が無殘に壞されたやうに感じ、此の國民に對する絕望を味はつたのである。かやうな瞬間に、內部の不安を露はならしめるものは、無意識の裡に行はれる小さな動きだ。彼は右腕に抱へた二枚の盤を石の座の上へ滑り落し、一角によつて支へた盤は、腕の下膊から胸部の側面へ抑へつけられた。而も胸を撫で、鬚髯を撫した手は、頸の右方へ向けられるに伴つて、自然、鬚髯を左方へと引かざるを得ない。かうして、嚴かな男性的威容の均齊が破れる。まるで、鬚髯を撫してゐる指は、興奮して時計の鎖を弄んでゐる近代人のそれのやうに見

えるではないか。左手は、上衣の腹の邊に埋められてゐる（舊約聖書では、內臟は感情の座とされる）が、左脚は既に引込められ、右脚は前に出されてゐる。次の瞬間には、彼は起ち上るであらう。感受によつて發した精神力が意思を跳び越えれば、右腕は動いて盤は床上に滑り落ち、血潮の逆流は背敎瀆神の汚辱を贖はねば止まぬだらう……だが、此處にはまだ、實行に爆發せんとする緊張の契機（モメント）はない。まだまだ精神的苦痛の打擊が、殆ど彼の力を萎えしめてゐる。』

(*) 注意すべき事は、外衣の細心な配置である。坐像の脚部を繞る外衣（マンテル）の配置は、ユスティ說の最初の一段の支持を薄弱にするものだ。寧ろこれは何等の期待もなしに靜かに坐つてゐたモオゼスが、突然に或る事實を目擊したことによつて愕然とした所を、再現したものであると解した方が妥當であらう。

フリッツ・クナップの解釋も全然同樣で、ただ、彼のは、此處に問題となつた姿勢から前に敍べた疑念を除き去つたに過ぎない。と同時にまた彼は、戒律を記した二枚の盤の動き方の說明を一層鞏固なものに敷衍したのである。『たつた今まで神と二人きりで在つたモオゼスの思念をわきへ向けさせたものは、地上の騷音だ。彼は騷ぎを耳にした。歌ひ囃す輪舞の叫びによつて、夢から醒まされた。眼と顏が、先づその騷音の方へ向けられる。驚愕と忿怒と、荒々しき激情の復讐

神は束の間に巨人の全身を驅り立てた。彼が起つて、霹靂の怒聲をば背教瀆神の大衆へ投げつける時、戒律の盤石は滑つて、地上に落ちて碎けるであらう……此の、緊張しきつた契機が選まれたのである……』と。つまり、クナツプの强調するところは實行への準備であつて、最初の抑制の表現は、異常に强烈な激動の結果に他ならぬと主張するのだ。

我々は、以上のユスティやクナツプの如き解釋法が、稍妥當ならぬ牽强附會な點をもつてゐることは否定しないであらう。然し、此の解釋の與へる効果は、彼等が、像の全體印象に囚はれる事なく個々の特徴を價値づけたといふ事情に歸せられるのであつて、かかる個々の特徴といふものは、從來は餘りに像全體の迫力に壓倒された結果、言はば痲痺されたやうに注意の眼を向ける事を忘れてゐたのである。頭部と眼の決定的な轉向は、正面に向いた全體の姿勢と照應して、憩へる者の注意を突然に惹きつける何事かが彼方に目擊された、といふ解釋によく適合するものだ。地上から引上げんとする足の姿勢は、跳り上らんとする直前の準備姿勢と解する以外には、殆ど解釋の餘地がない。また、餘りに特殊な盤の位置を考へると、とに角これは神から與へられた戒律であるから、よく見受けられるやうな、單に場所埋めのための添景物とすることは許されない。

従つて、モオゼスの感情激發の結果、腕から滑つてやがて地上へ落下する、といふ解釋は妥當な說明と言はなければならない。かうして知り得るであらうことは、此のモオゼスの大理石像が、彼の生涯中での、一つの決定的な重大契機を再現したものである事、また、その契機を誤認する危險さへもないほど、確定的なものであつたらうと言ふ事だ。

(*) 勿論、メディチ會堂に安置されたジウリアノの安坐像では、左足を、やはり同じやうに持上げてゐるけれども、モオゼスの場合とは意味が全然異らなければならない。

然しながら、此處に我々が既定の事實として信じた事柄を、また根本から覆さうとする解釋がある。それは、ソオドの與へた二つの注意だ。彼の見る所では、戒律の盤は滑り落ちるのでなくて、寧ろ『確りと固持されてゐる』のだ。彼の主張に曰く、『支持した盤石の上なる右手の、平靜にして確乎たる姿勢……』云々と。我々は自分の眼で此の像を見直すとき、ソオドの說にも澁滯なく賛成せざるを得ない。盤石は固持されてゐるのであつて、滑り落ちる危險は毫もないのだ。右手はそれを支持してゐるのである。或は、それの上に右手を支へてゐるのである。勿論、此の解釋によつて像の構成が說明され盡すものではないが、然し、ユスティ共の他の解釋に取つては甚

だ不都合なものとならう。

第二の注意は更により決定的である。ソオドはかう警告してゐるのだ。『此の像は六體の群像中の一體として考へられ、而も、坐像として表現されたのである。して見れば、そのいづれの條件も、ミケランゼロがある特定の歴史的契機（モメント）を此處に固定せしめんとしたとする解釋に矛盾する。その故は、第一の群像といふ條件を考へるとき、相竝んで坐せる姿體へ人間的な本質の型（活動生活、沈思の生活）を與へるといふ問題は、個々の歴史的實例を排斥する事になるではないか。また、第二の坐像といふ條件に關して言へば、墓石に對する藝術家としての全意匠によつて規定された坐像の表現は、かの歴史的事實の特徴、即ち、シナイ山から休息所へ降つて來たといふ事實に撞着するものではないか。』

我々は、此のソオドの疑念を採用する者だが、思ふに、此の疑ひはもつと强調し得るものだらう。モオゼスは最初墓石の土臺を飾る六體の群像の一つとして（後年は四體）創案されたものでなければならない。モオゼスを第一體として第二體はパウルス像だつたはずだ。第三第四の像、即ち活動生活と沈思の生活を現すものが、レア及びラヘルだつた事は、今日、僅かに壞滅を免か

れてゐる記念像によつて確實に想像される。で、群像全體に對するモオゼス像の從屬性を考へると、今にも坐席から跳り上つて走り出し、金牛禮拜の騷ぎへ一擊を加へようとする姿勢を想像することは、全く不可能にされるのである。だから、もし群像を形成する他の像にもかうした激しい行爲への準備姿勢が與へられるのでないとしたら、これは殆ど有り得ない想像だが、群像は全體として頗るまづい印象を與へるに違ひない。卽ち、モオゼス像一體だけが、坐席を跳り出して他の群像から離れて行くやうな想像を起させる事は、やがて、墓石全體の構成に於けるモオゼス像の任務に戻るものだ。こんな事は非常な構成上の不統一を暴露するもので、よほど特殊なる事情のない限り、ミケランゼロのやうな大藝術家には想像され得ない話である。墓石群像の全體の氣分を覆してしまふやうな勢ひを見せた像などといふものは、言語同斷の沙汰と言はなければならない。

從つて、此のモオゼス像は、跳り上らんとする姿勢では斷じてない。他の諸像、例へば計畫された法王自身の像の如く、(これはミケランゼロによつては完成されなかつたが) 虛心の憩ひを續ける者の姿勢であり得た筈である。また從つて、ミケランゼロは、シナイの山から降つて背敎瀆

神の國民を目撃し、忿怒の餘り、戒律を誌した聖盤を微塵になれと叩きつける、激したモオゼスを再現したのではない。實際私は、私自身が啓蒙された時の事を思ひ起し得るのだ。以前、ヴィンコオリの聖ピエトロ寺を訪ねて此の像を仰いだ時である。私は、今にもモオゼスが跳り上つて盤を大地に叩きつけ、満心の忿怒を爆發させるのではあるまいかといふ期待を以て眺めてゐた。が、事實はさうではなかつた。大理石のモオゼスは見れば見る程巍然として動かない。彼の發散する氣分は、殆ど息づまるやうな、犯し難い靜寂だつた。私はしみじみと感じたのである。此處に再現されたものは不變常住の姿だ、此のモオゼスは永遠に坐席を離れる事なく、ああやつて忿怒を抱いてゐるのであらう、と。

　ところで、もし此のモオゼス像の契機(モメント)を、偶像目撃によつて爆發した忿怒であると説明するなら、是認される解釋は僅かに一つ即ち此の像の中に一つの性格を認識しようとする解釋しか殘らない。さうなると、次に引用するソオドの判定は、他の何れの論告にも優つて獨斷を免れるともに、また、姿態に關する運動の素因(モティフ)の分析に最も善く立脚したものと言へさうだ。『此の像は、例によつて、一つの性格の型を成形するのが主眼とされたのである。ミケランゼロは、人類の情

熱的な指導者の像を創造したのだ。此の指導者は、神から託された立法者たる使命を自覺し、而も、無知なる國民の反抗に遭遇した。かかる男を行爲に於て特徴づけるには、意思のエネルギイを強調明確にする以外に手段がない。それには、外見は平靜なやうでありながら、內實は大いに動いてゐる心持を描いて見せるのが一番で、此の像で言へば、頭部の轉向、筋肉の緊張、左足の位置等によつて現された心の動きである。之と同樣の現象はメディチ堂に安置されたジュリアーノ像『動ける男』にも見られる。かやうな一般的特徵描寫を一層効果的にするには對立牴觸するものの發揚によるのが何よりで、それによつて初めてモオゼス像の如き人間の形をした天才が普遍性を帶びて來るのだ。卽ち、忿怒、輕蔑、痛苦の感情の如き、典型的な表現となるのである。かうした表現を借りなくては、モオゼスの如き超人の本質を描寫する事は不可能である。ミケランゼロは、歷史像を刻んだのではない、寧ろ、動もすれば反逆せんとする人世を撓めんとする、抜き難いエネルギイを描いた性格像だ。これは聖書に記載された特色であり、自己の內的體驗であり、人間ジュリアスの印象であると共に、余をして言はしむればまたこれは、サヴォナロオラ流の闘争活動の印象を具體化したものである。』

右の說明と略似てゐるのが、クナツクフウスの與へた注意だ、卽ち『モオゼス像の持つてゐる迫力の主要祕密は、內部に燃える激情の焰と、外に現れた態度の平靜さとの、藝術的對立の妙に存する。』と。

私自身としては、前記ソオドの說明に反對しようとする何物も見出さないが、然し何か見失つてる事があるやうである。恐らく此處に、モオゼスといふ巨人の心的狀態と、その態度に現れた『外見上の平靜及び內的の激動』の對立との間に在る、一つの隱約な交涉によつて言はれる必要があるのではあるまいか。

二

もう餘程前の事、私がまだ精神分析といふ事に就て何等の知識を持たなかつた頃である。イワン・レルモリエフといふロシアの美術鑑識家が、ヨオロツパ各地の美術館に一つの革命を惹き起したといふ話を聞いた。それは、多數の繪畫の分布狀態を、一々の原作者について檢杳し、眞筆の原畫と摸寫とを確實に判定すると同時に、また、それぞれの原畫から勝手に拵へられた多數の

作品によつて、あたらしい藝術家の個性といふものを組立てたといふのである。此の最初の論文がドイツ文で發表されたのは一八七四年から七六年の間であつた。どんな風にしてやつたかと言ふと、彼は先づ、一つの繪畫の全體印象とその主要な特徴とを見究めると共に、從屬的な細部の描法に關する個性的價値、例へば、爪先の描法はどうだとか、耳朶・光輪の具合はどうだとか、さう言つた餘り注意されない點を拾ひ上げたので、こんな細かな部分は、摸寫する者も得て等閑に附し易いのだが、然し、原作者の藝術的特徴は寧ろさうした點によく現れてゐるのだ。ところで、其後、レルモリエフといふのは實は、モレルリといふイタリイの醫師の匿名であつた事を知るに至つて、私はこれを頗る面白く感じたのである。此の醫師は、一八九一年にイタリイ王國の元老院議員として逝去したが、思ふに、如上のやり方は、醫學でいふ精神分析法の技術と似寄つたものだつたに相違ない。實際、餘り重要視されない特徴や、或は全然看過された特徴から、即ち觀察の鐵渣から、祕密と隱れた正體とを嗅ぎ出す事も珍しくないのだ。

以上の前置きをして、ミケランゼロのモオゼス像を見直すと、從來注意されなかつた、いや、本當を言ふとまだ正しく説明されなかつた、細部が二箇所も發見される。右手の置方と二枚の盤

の位置がそれだ。盤と、恐れる巨人の鬚髯の間に置かれてゐる此の手は、ひどく奇妙な、無理な是非とも一註釋を必要とする恰好である、と言つて差支へあるまい。從來の說明ではかうだつた。右手は、小指の端で盤の上に支へながら、殘りの指で繩の樣な鬚髯をつかみ、弄んでゐるのである、と。だが、此の解釋は明かに當つてゐない。右手の指の仕草と、指に關係のある逞しい鬚髯とをより綿密に觀察して、忠實に見た通りを言つて見れば、自然に會得されよう。（挿圖參照）

凡そ明瞭に見られるのは、拇指が隱れてゐる事、實際に鬚髯と接觸してゐるのは人差指一本きりであること、だ。此の指が、柔軟な毛を深く抑へつけてゐるため、指の上下に當る部分の毛は卽ち抑へつけてゐる指から言へば頭部と腹部との毛は、他の部分の水準以上に膨れ上つてゐる。殘りの三指は小關節で屈曲して胸部に支へ、その上を渡つてゐる鬚髯の一番右側のもつれと、僅かに觸れ合つてゐるに過ぎない。言はば、之等の指は鬚髯から遁げてゐるのである。從つて、右手が鬚髯を弄んでゐるとか、それを握つてゐるとか言ふ事は出來ない。卽ち、一本の人差指が鬚髯の一部分を抑へ、それによつて鬚髯の上に深い溝が出來てゐる、といふのが唯一の正しい說明である。一本の指だけで鬚髯を抑へてゐるといふ事は、確かに、一つの奇異な、また難解な擧措

である。

多くの嘆賞者を持つたモオゼスの鬚髯は、雙の頬からも上唇からも顎からも、無數の繩となつて垂れ下つてゐるが、それでもなほ、その垂れ下つた經路によつて、各部分の從屬を區別する事は出來る。最右端の垂髯の一つは、頬から發生したもので、壓しつける人差指の上端へ走つて、其處で抑止されてゐる。さうして更に、人差指と隱れた拇指との間をすり拔けて、垂下してゐると解釋することが出來る。これと對蹠的位置に在る左側の垂髯は、殆ど何等の屈折なしに胸の上を落下してゐる。最も注目に値する形を見せてゐるのが、此の左側の垂髯から中央へ寄りの、殆ど全體の中樞をなしてゐるところの逞しい密集部だ。此の部分は、顏面の、左方への轉向に追隨する事が出來ず、餘儀なく輕く捲上つた弓形を描き、內部の本當の主髯を緣どる花輪の一部分の如き形狀を示してゐる。卽ちこれは、右手の人差指の壓を蒙つた結果で、本來ならば左側の中軸を形成し、左半分の主髯となるべき性質のものである。口髭も同じ理由から、顏が左方へ轉向してゐるに拘らず、大部分右方へ片寄つてゐる。又、人差指の壓を受けてゐる部分を見ると何か、毛の渦卷の樣な形が出來て居り、此處で、左右の垂髯が重なり合ひ、雙方が、强力な指の壓によ

つて凝縮してゐるのだ。此の關門を越えると初めて、鬚髯は各〻の正しい位置に戻る事が出來、垂直に落下した末端を、膝の上に置かれた左手によつて收容されてゐるのである。

以上の説明が穿ち過ぎてゐるといふ懸念は持たぬが、また、ミケランゼロが果して、前述の疑問に對する鍵を實際に鬚髯の中に置いたか否かについては、何とも判斷を下す勇氣も無いのである。けれども、事實はかかる疑念を超越して嚴存するので、卽ち、左半分の口髭の主流を抑止してゐるものは右手の人差指の壓迫であり、その影響によつて口髭は、顏面と眼の轉向に從つて左側へ動くことを抑止されてゐるのだ。此處で必然に起る疑問は、かうした鬚髯の配置が何を意味せんとするものであるか、また、どんな主旨(モテイフ)によつてかかる狀態が生れたのであるか、といふ事である。萬一これが、眞實に線の配列や空間充塡(あなうめ)への顧慮から考へ出された工夫であるとするなら、左方を眺めてゐるモオゼスの見事な垂髯を、反對の右方へ引寄せる手段として、一本の指の壓を持つて來た事は、何といふ不適當な話であらうか。また、實際の場合としても、何かの理由で髭を反對の側へ引張つて抑へつけようとするのに、指一本の壓迫位で、これだけの垂髯を抑へつけ得るだらうか。それともまた、これは取立てて問題にする程の特徵でもなく、作者自身には

全然どつちでもいいやうな事柄であつて、そんな事に頭を惱ますのは餘計なおせつかいなのであらうか。

が兎に角、これ等の細部にも一つの意味があるものとして、我々の研究を續けて見るなら、此處に、いくつかの難點を片づけ、一つの新しい意義を豫想せしめるところの、解決の鍵が見出されるのだ。もし、像の示す通り、左半の垂髯が右手の人差指によつて抑へられてゐるものとすれば、此のことは恐らく、右手全體と垂髯との間に或る交渉があつて、その名殘りを示すものとして解されるのではなからうか。卽ち、像に再現されてゐるのより、もう一つ以前の契機に遡つて解釋するのが、一層適切なのではあるまいか。恐らくは、此の右手がもつと力強く垂髯を握りしめて、左分の垂髯の流れ全體を抑へつけてゐたのであらう。さうして、右手が、現在此の像に見られるやうな位置へ復するに至つて、垂髯の一部分も元の位置へ戾らうとしてゐるので、これは、旣に行はれた運動の跡を示す證據なのであらう。花輪の一部分のやうに弧を描いてゐる髯の形は、手の壓迫から解放された經路を跡づけるものに違ひない。

從つて此處に想像し得る事は、右手が、ある動きを中止した狀態である。かうした解釋から、

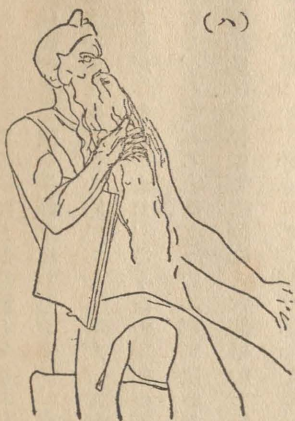
必然的に次の解釋が生れて來る。我々は此處に現されたより一つ前の運動を、垂髯の形狀によつて生じた動きが殘してゐる一部的痕跡から、完全に想像する事が出來るのだ。さうして、此の想像はまた『憩へるモオゼスが、國民の騷ぎを聞きつけ金牛を目擊した事によつて驚かされた』といふ解釋へ、何等の無理なく歸納される。モオゼスは、見事な鬚髯を貯へた顏を正面に向けて、靜かに着坐してゐた。恐らく、その手は鬚髯に觸れてゐなかつたに違ひない。そこへ、騷がしい物音が彼の耳をうつた。彼は、顏を、眼を、平靜を破つた物音の方向へ轉じた。彼は、國民の騷ぎを眺め、その仕業を理解するに及んで、勃然たる忿怒を感じ、躍り立つて、背教瀆神の罪人共を一喝し、追ひ散らさうと考へる、忿怒といふものは、その對象がまだ遠く離れてゐる時には、自分自身の肉體中に、身振り、表情として現れるものだ。思はず振上げた手は、もどかしがつて鬚髯を握りしめる。その鬚髯は、顏の向きと一緒に左方へ向いてゐたから、拇指と四本指との鐵の如き握力で、ぐいつと反對の右方へ引き撓められた。此の場合の力と激しき姿態の表情は、ミケランゼロの他の作品によつてよく偲び得る。だがそこへ、理由と狀況はまだ說明し得ないが、突如としてあらはれたのが、一つの變化であつた。つき出された、垂髯に埋れた、手の力は慌てて

緩められ、髭は握力から解放され、指は、一本一本、髭を離れた。だが、最初の勢ひが猛烈だつたため、髭は、さう容易には、右から左へ復歸する事が出來ず、なほ暫くは、一番上の人差指の壓に止められて、右側の垂髯の上に留まらなければならなかつたのである。此の像に示されてゐる鬚髯の位置は、かうした第二段の動きによつて生じたものなので、その一つ前の第一段の動きと併せ考へて初めて、合點が行くものなのである。

さて、此處で一つ考へねばならない事がある。いま我々は、右手は最初鬚髯に觸れてゐなかつと解釋した。さうして、非常な情緒緊張の一契機（モメント）に於て左方へ延ばされ、髭を握り、やがてまた元の位置に戻つたが、髭の一部分は、まだその手に殘されてゐた、といふ解釋をしたのである。我々は、此の右手を、まるでどつちへでも自由に動かせる空手（からて）のやうに扱つたが、それでいいのだらうか。一體、此の右手は空手（からて）だつたらうか。神聖な戒律の盤を、支へるか抱へるかしてゐたのではなかつたか。そんな人形のやうな運動は、彼の重大な任務によつて拒絕され、否定されるのではないか。更にもう一つ、もし此の手が、最初の靜止狀態から急激な運動に移つたことに、一つの強い主旨（モチイフ）があつたものなら、それを復び中止させたものは果して何であつたらうか。

さあこれが、實際に新たな難關となるのだ。何と言つても右手が盤を抱へてゐる事は確實である。此處でも異論を挾む餘地のないのが、我々の推測には、右手がどうして最初の運動を中止したかといふその主旨を缺いてゐる事だ。だが然し、もしも此の二つの難關が相互的に解釋せしめ得るものだつたら、また、さうなつて初めて、前に言つた第一段の動きが完全に理解されるものとしたら、一體、これはどういふ事になるのであらうか。卽ち、手の運動を說明するものが、萬一、直接此の戒律の盤に關聯した何事かであるとしたら、果してそれは何であつたらうか。

此の盤について注意すべき點が二三ある。これは、從來あまり重視されなかつた點だ。(木版圖イ參照)從來の解釋はかうだつた。『手は盤の上に支へられてゐる。』或は『手が盤を支へてゐる』と。二枚の重ねられた四角な盤が、稜角で立つてゐる事は十目の見る通りだ。これを一層綿密に見ると、二枚の盤の下の方の緣が、上の方のとは少し異つて、斜めに前方へ彎曲してゐるのに氣がつく。此の上の方は直線的に區劃づけられてゐるが、下の方は、前方に恰度角のやうな突起を持つてゐる。さうして盤が石の座と接觸してゐるのは、正しく此の突出の部分であるのだ。かうした細部は、はたして何を意味するものだらうか。又つまりは、ヰイン大學の造形美術蒐集に於

(ハ)
(イ)
(ニ)
(ロ)

けるあの大規模な石膏模型が、此の細部まで忠實に復寫したのもやはり、全然不當な事だつたのであらうか。元來かうした角（つの）といふものが、文字を誌した盤の上部の小口に附けらるべきである事は殆ど疑ひを許さぬ所である。また、かやうな四角な盤に在つては、小口を彎曲形にしたり、波形にしたりする事は上部の小口に限られるのを常とする。つまり此の像では、盤が逆立ちしてゐるのだ。して見るとこれは、神から授けられた神聖な戒律の盤の扱ひ方として甚だ奇妙と言はねばならない。逆立ちになつて、而も殆ど逆立ちの尖端で僅かに支へてゐるのだ。かうした構圖を生むに至つた契機（モメント）は果して何であつたらう。それともまた、此の細部もまた原作者にはどうでもいい瑣事とすべきだらうか。

此處で考へられるのが、盤もまた、第一段の運動を經てかかる位置を取つたのである、といふ解釋だ。此の運動が、前に想像した右手の變化と關係してゐる事は言ふまでもないが、また、右手をして餘儀なく第二段の動き、卽ち元の位置へ復歸するといふ運動を起さしめた原因は、實に此の盤自身の運動だつたのである。解り易くするために、手の第一段の運動と盤の第一段の運動との關係を一元的に説明すると次のやうになる。卽ち、最初モオゼスが安坐して居た時は、此の

盤は正しく右腕に抱へられてあつた。右手は盤の下部の小口を握り、其際の支點は下向きに向けられた突出部だつた。何故盤が逆さにされたかといふと、それは簡單に說明される。即ち、盤を抱へるのにはかうした方が容易（らく）なのである。續いて現れた契機（モメント）はモォゼスの憩ひを破つた騷音だ。彼は頭を向けて、騷ぎの光景を眺める。その時、足は躍り起つ用意をし、手は、盤を放して左上方へ動きながら、鬚髯を握りしめた。これは、激情の肉體的表現だ。かうなると、勢ひ、盤を支へるものは、右胸部と肱との間の壓力だけになる。だが、その定着力は十分でなかつたから盤は、前方から下へと辷り落ち始め、それまでは地平線形に持たれてゐた上部の角のある方の小口が前へのめると共に、支點は下部の小口と交替して、石の座の上へ逆立の位置を取つた。もし此のままで行けば、次の瞬間には盤は止むを得ず、此の新しい支點を中心として一回轉し、最初の位置を顚倒して下部の小口が先づ地に落ちて碎けた筈である。右手が慌てて引返して來たのはそれを警戒するためだつた。同時に、手は握つた髯を解放したが、無意識に、その一部分をまだ人差指で抑留したまま危いところで食ひ止めた盤の小口を抑へ、斜に、一番上となつた上下部の小口の角の邊で支へるにいたつたのである。かやうにして、いかにも奇妙な歪みを見せてゐる鬚

髯、全體の配置、一角で逆立ちをしてゐる二枚の盤、等の構圖は、自ら、此の手の激情的な運動とその立派に跡づけ得た結果とによつて演繹される。もし諸君が、かうした激しい右手の運動經過を跡づけて見ようと思ふなら、先づ、盤の上方の手前の一角を持上げて、水平に押し戻して見る必要がある。かうする事によつて、(角狀突起を持つた)下方の手前の一角は石の座から離れると共に手は下に落ちて、今度は地平線形になつた盤の下方の小口の所まで戻るであらう。

前頁に掲げた木版圖は、私の說明をより具體的にしようと思つて、ある畫家に依賴した略畫である。その(ニ)は原畫と同じものだが(ロ)(ハ)の方は(ニ)に至るまでの過程を示すもので、何れも今述べた推察を假定として描き現したもの、(ロ)は安座してゐる時、(ハ)は最高度の緊張に達した時、卽ち、躍り上らんとする勢ひで、盤から手を離したため、盤が辷り落ちかかつてゐる所を示したものである。さて、此處に注意すべきは、之等の、說明を補ふために描いて貰つた略畫が、適切ならざる說明をした過去の批評家達へ、思ひがけぬ名譽囘復の役目を働いてゐる事だ。ミケランゼロと同時代のコンデイヴィは言つてゐる。『ヘブライの領主であり族長であつたモオゼス、沈思の態の姿勢で坐し、右腕に戒律の盤を抱へて、左手に顎を支へたその容子は、滿身の憂

苦に疲れきつた人の如くである。』と。勿論、之は現在するミケランゼロの作品に認めらるべくもないことだが、然し、前掲の(ロ)に基いた解釋と殆ど一致する意見だ。リュブケの說は、他の觀察者と同じで、『心激して、見事なる垂髯を右手に握りしめ……』と書いてゐる。これも現在の像と對照して見れば正しい解釋でないが、然し、前掲の(ハ)と較べればよく一致してゐる。また既に述べた通り、盤を辷り落ちる、今にも破壞の危險に在るものと見た者は、ユスティとクナップである。此の解釋は、ソォドの『盤は右手によつて確實に定着されてゐる』といふ解釋によつて是正されざるを得なかつたが、然し、これがもし、現在する像でなしに、私の想像畫について言はれた意見だつたとすれば、頗る正しい解釋でなければならない。だから、次のやうに考へても差支へない筈である。これ等の批評家諸君は、像の顏面表情を勝手に作り變へてしまつて、無意識のうちに、その運動の主旨(モティフ)を分析し始めてゐたのである、と。また、さうする事によつて彼等の達し得た結論は、結局、我々がより意識して、より明晰に展開した所と同一だつたのである、と。

二

私の考へが間違つてゐないなら、今こそ我々の努力の成果を收獲しても支障ないであらう。モオゼス像の印象に打たれた多數の批評家が衆口一致した說明は、旣に言つた通り、自國民の墮落と偶像禮拜とを目擊して感情激發した瞬間を再現したものである、といふ解釋だつた。然しながらかうした解釋は、モオゼスが次の瞬間には跳り上つて、盤を踏みしだき瀆神背敎への報復を遂行するだらうといふ期待に續くものであるから、是非とも廢棄さるべき解釋であらう。之は、三體乃至五體の他の坐像と相俟つてユリウス二世の墓石を形成する群像の一部分である事を考へると、どうしても群像全體の統一を破る事になる。此處で、此の一旦捨て去つた解釋をもう一度取上げることが許さるべきで、モオゼスは跳り上りもしないし、また盤を投げつけもしないのである。我々の見たモオゼス像は、强力な行動への準備姿勢でなく、却つて旣に行はれた一つの運動の名殘りなのだ。最初は、忿怒の激發に委せて、跳り上り、報復手段を取り、戒律盤を忘れようとしたのであるが、やがてさうした誘惑を克服して、今度は、此の像に見る通りの、激情を抑へ

た、輕蔑と痛苦の混じた、姿勢でぢつと坐してゐる。彼は、もう戒律盤を投げ出してそれを碎かうとしないであらう。彼の忿怒が壓肘されたのは此の盤のためであつたし、彼の激情が克服されたのは、それの破壞を救ふためだつたのである。最初、彼が滿身の激昂に我を忘れた時、戒律の盤を抱へてゐた手を、つい、うつかりと離さずにはゐられなかつた。從つて、盤は辷り落ち始め、今にも粉碎されんとする危險に迫つた。これが、モオゼスの心へ警告を與へたのである。彼は、自分の使命を考へると共に、その使命のために、單なる感情の滿足を思ひ捨てた。彼の手は元に復り落下しかけた盤は危いところで救はれた。モオゼス像の取つてゐる姿勢は、此の感情の滿足を思ひ留つた姿勢であると共に、又、ミケランゼロは墓石の番人として、實にかゝる一瞬を摑んだのである。

モォゼス像の中には、三様の分類が垂直の方向に表現されてゐる。顏貌に反射するものは克服されつつある感情であり、像の中央部に認められるものは、制肘された運動の痕であり、足部の位置はまだ，意圖された行動の方向を示してゐる。恰も、感情抑制が、上方から順次下方へと及んでゐることを物語るかの如くだ。更に、我々の解釋へ有力な材料を提供してゐるやうに見える

のが、左の腕である。之は今まで言及しなかつた點だが、左手の位置を見ると膝の上であり、而もいかにも柔和な感情を以て、愛撫するやうに、落下する鬚髯の末端を抑へてゐるのだ。恰も、一瞬の前に、右手が鬚髯を虐待したその暴行を、止めようとするもののやうな印象を與へるではないか。

だが、かう言ふと異議を挾む人があるに違ひない。『然しそれでは聖書に在るモォゼスと異るではないか。聖書に傳へられたモォゼスは、實際に忿怒を激發して盤を叩きつけて碎いたではないか。さうなると之は、藝術家の心持だけで拵へられた全然別のモォゼスになつて、ミケランゼロは聖書を改竄し、神德を具へた人物の性格を頽廢せしめたものとなるではないか。果して、ミケランゼロが、神聖人格を冒瀆するに近いやうな、勝手氣儘を敢てしたと想像してよいものであらうか。』と。

金牛の場面に於けるモォゼスの態度を記載した、聖書の文句は、下に掲げる通りだ。（此處にルウテル譯を引用する事の時代錯誤を咎め給ふな。）

舊約第二卷（出埃及記）第三十二章。七節『エホバ　モォゼに言ひたまひけるは　汝行きて降れ

よ 汝がエヂプトの地より導き出せし汝の民は惡事を行ふなり』八節『彼等は早くも我が彼等に命じし道を離れ 己のために犢を鑄なしてそを拜す 夫に犧牲を獻げて言ふ イスラエルよ 是は汝をエヂプトの地より導きのぼりし汝の神なりと』九節『エホバまたモオゼに言ひたまひけるは 我此の民を見たり 見よ是は頸の頑き民なり』十節『されば我を阻むる勿れ 我彼等に向ひて怒りを發して彼等を滅し盡さん 然して汝をして大なる國をなさしむべし』十一節『モオゼその神エホバの面を和めて言ひけるは エホバよ 汝などて彼の大なる權能と強き手をもて エヂプトの國より導き出したまひし汝の民にむかひて怒りを發したまふや』……(中略)

十四節『エホバ是に於てその民に禍ひを降さんとせしを思ひ直したまへり』十五節『モオゼすなはち身を轉じて山より降れり かの律法の二枚の板その手にあり 此の板はその兩面に文字あり』十六節『此の板は神の作なり 又文字は神の書にして板に彫りつけてあり』十七節『ヨシユア民の呼はる聲を聞きてモオゼに向ひ 營中に戰爭の聲すと言ひければ』十八節『モオゼ言ふ 是は勝鬪の聲に非ず また敗北の號呼にも非ず 我が聞くところのものは歌唱の聲なりと』十九節『かくてモオゼ營に近づくに及びて 犢と舞跳を見たれば 怒りを發してその手よりかの板を擲

ちこれを山の下に碎けり』二十節『然して彼等が作りし犢をとりてこれを火に燒き　碎きて粉となしてこれを水に撒き　イスラエルの人々に之を飲ましむ』……（中略）三十節『明日(あくるひ)モォゼ民に言ひけるは　汝等は大なる罪を犯せり　今我エホバの許(もと)に上り行かんとす　我汝等の罪を贖ふを得ることもあらん』三十一節『モォゼすなはちエホバに歸りて言ひけるは　嗚呼この民の罪は大なる罪なり　彼等は己のために金の神を作れり』三十二節『されど叶はば彼等の罪を赦したまへ　然らずば　願はくば汝の書きしるし給へる書の中より我が名を抹消(けしさ)りたまへ』三十三節『エホバ　モォゼに言ひたまひけるは　總てわれに罪を犯す者をば我これをわが書より抹消(けしさ)らん』三十四節『されば今ゆきて　民を　我が汝に告げたる所に導けよ　我が使者汝に先だちて往かん　但しわが罰を行ふ日には我彼等の罪を罰せん』三十五節『エホバすなはち民を撃ちたまへり　是は彼等犢を造りたるに因る　卽ちアロンこれを造りしなり』（以上、大正十年四月刊行の東京米國聖書會社版に據る。譯者）

現代流の批判的な眼で聖書を讀むと、以上掲げた個所の意味を讀みとる事は不可能だ。必ず此の中に、妥當を缺いた文章の構成をいろいろの源泉報告から發見するのである。八節を見ると、

國民が墮落しきつて偶像を拵へた事實は、神自身がモオゼスに告げたのである。モオゼスは國民の罪の赦しを願つてゐる。ところで、十八節のヨシユアに答へた言を見ると、モオゼスは、まだその事實を知つてなかつたらしく、十九節の示す通り、偶像禮拜の實況を目擊するに及んで、初めて急激な忿怒を發した。十四節を見ると、彼は既に此處で、罪深い國民のために神の赦しを願つてゐるが、而も三十一節に讀まれる通り、復び山へ登つて、此の罪の赦しを哀訴し、國民の墮落を報告し、神から罰の延期の確言を貰つて來る。三十五節は、神が下した國民への罰を敍べた條だが、罪そのものに就ては一言も傳へられてない。ところが、二十節及び三十節では、モオゼス自身の實行した罪の情況が描かれてゐるのだ。イスラエル人の移住を扱つた歴史的部分が、尙一層の著しい不合理と矛盾だらけである事は十目の見る所である。

文藝復興期（ルネッサンス）の人間が、かうした聖書への批判的態度を持たなかつた事は當然で、みな、聖書中の報告を一つの緊密な關係に在るものと解釋せずにゐなかつたのであるから、やがて、その表現法に何等の連結がない事を、恐らくは發見したに相違ない。聖書に描かれたモオゼスは、既に國民の偶像禮拜に就て聞き知り、慈悲と赦免とを願つたのであるが、やがて、その後彼自身で金牛

を見、それを繞つて輪舞する群衆を目撃するに及んで、急激な忿怒の激發に襲はれたのである。して見れば、かうした魂を嚙む驚愕に打克たんとした巨人を再現するに當つて、作者が、内面的の主旨から聖書の原文を無視したにせよ、それは、訝しむべき事ではないであらう。些かな主旨から聖書の文字に違背する點があつても、それは決して異とすべきでないし、また、それを作者に禁ずる事は出來ない。かのパルミギアノの名畫『モオゼス』を見たまへ。聖書には明晰に『かの板を擲ちこれを山の下に碎けり』とあるに拘らず、山の頂上に坐して盤を投げつけてゐる所が描かれて居るではないか。第一、坐せるモオゼスといふ構圖からして、聖書には何等の據り所を見出せないもので、寧ろミケランゼロのモオゼス像は、此の巨人の生涯中の、何等決定的なる契機を捉へんとしたものでない、と解釋する批評家の方が正しいやうにさへ考へられるのだ。

凡そ、聖書の原文に不忠實であるといふ事よりも一層重要な點は、我々の推測では、ミケランゼロがモオゼスの性格を扱ふに當つて示した一つの轉化であらう。モオゼスといふ男は傳説に徴すると怒りつぽい、感情の激發に捉はれ易い人物だつた。彼が、一人のイスラエル人を虐待したエヂプト人を打擲したのも、かうした義憤の激發においてだつたので、而もそれが、エヂプトを

遁れて曠野に赴く直接原因と成つたのである。神の直筆になる二枚の戒律盤を碎いたのは、實に之と同樣な感情激發からだつた。恐らく之は眞實だつたに違ひあるまいし、また、さうした性格特徴が傳說によつて報告されるといふ事は、かつて存在した一人の巨人の人格的印象を確實にするものと言はなければならない。ところが、ミケランゼロが法王の墓石を護らせたモオゼスは、かうした史實を、或は傳說を、遙かに超越したモオゼスであつた。彼は、戒律盤粉碎の主旨を改作して、モオゼス自身の義憤によつて粉碎されたとせず、却つて粉碎するかも知れないといふ恐怖が、此の忿怒を鎭靜させた、或は、尠くとも實行の途中で妨止させた、としたのである。かくして作られたモオゼス像には、何か新しい、超人的な解釋が與へられると共に、强力な肉體と、その隆々たる筋骨も、單に、一個の人間に可能なる最高の精神に實踐を示すための、肉體的手段となつてゐるに過ぎない。言ひ換へれば、自己の感情の克服と、一身を捧げた使命への奉仕を現す手段となつてゐるに過ぎないのだ。

以上で、大體ミケランゼロのモオゼス像に對する說明は盡きてゐると言へるが、更に、一步進んでこんな質疑が發せられるかも知れない。ミケランゼロが、法王ユリウス二世の墓石の爲にモ

オゼスを、而もこれ程に轉化されたモオゼスを、選定したのは、一體どんな主旨に基いたものであるか、と。此の主旨を、法王自身の性格、竝に法王とミケランゼロとの關係の中に探ね當てることは、凡ゆる方面から、綜合一致的に跡づけ得られるのだ。第一、法王ユリウス二世とミケランゼロとは、孰方も、偉大と强力とを、就中容積の偉大を、具體化せんと努めた點で一致してゐたのである。ユリウス二世は實行の男だつた。彼の目標は、法王權の下に全イタリイを統一する事だと言つても過言でない。他のいろいろな力の復合的効力と相俟つて、數世紀の後に初めてその成就を期待すべき事柄を、彼は單獨でやり遂げようと欲したのである。彼に許された、一指尺にも足らぬごく短い主權に於ける唯一人者は、目的達成の爲には凡ゆる暴力的手段さへまだるいと考へたのである。彼は、ミケランゼロを自分にひき較べて尊敬した。が、折々はまた、持前の癇癖と一徹な無反省心とから、之を苦しめた事も尠くない。一方ミケランゼロがまた、目的達成への努力の激烈さに於て敢て法王に劣らぬ男だつたから、對象の深奥を見究める徹底的穿鑿者として、及びもつかないやうな空想的理想を抱くことは法王と同列に見られる人間だつた。從つて、彼が、ユリウス二世の墓石にモオゼスを据ゑた主旨は、勿論、故王への訓戒の意味もあつた

らうが、同時に自分自身への警告として、自分自身の性質を正しく批判する事によつて、自己の向上を志したのである。

四

イギリスのW・W・ロイド（W. Watkiss Lolyd）が、ミケランゼロのモオゼス像（四十六頁ばかりの一册子を捧げたのは一八六三年の事だつた。（The Moses of Michelangelo, Williams and Norgate. 1863）私は、之を通讀して、一種の混成した讀後感を受けたのである。これは、獨得な人物を復び知る一つの機會だつた。價値もない我々の仕事への畸型な主旨（モテイフ）を、一つの大きな事實の奉仕へ參與させるのを常とする機會だつた。殘念に思はれる事は、ロイドが豫め取除いた事柄には、私に取つて私自身の努力の所產として貴重な事柄の大部分、竝に、再度の檢討によつて初めて、意外の裏書を得たと喜んだやうな事柄が、澤山に含まれてゐた事である。又、黑白を決定するやうな大切な點で、私と彼との道が岐れてゐる事は言ふまでもない。

ロイドは、先づかう言つてゐる。『此の像に關する從來の批判は大部分不當であつて、このモオ

ゼスは起上らんとする瞬間を現したものでない。右手は鬚髯を握つてゐるのでなく、單に、その人差指がまだ髯の上に置かれてあるに過ぎない』と。またさらに、彼の强調せんとする點を敍べて、『此の像に再現された姿勢は、此處に現れてゐない第一段の契機(モメント)に歸せられるべき復歸運動によつて、初めて說明され得るものに過ぎない。それは又、左側の鬚髯がやがて右方へ復歸する事を暗示せんとする契機(モメント)である。右手と鬚髯の左半分とは、もつと、より密接な、當然の和合的關係に在つたものであらう』と。だが、彼が、必然に推測される手と鬚髯との親近關係を復び說明するに當つて取つた途は、全然異つた方法だつたのである。彼は、手が鬚髯を摑んだのでなく却つて、手の近くに鬚髯があつたのだとするのだ。說明に曰く『像の頭部は、沈思を破る急激な騷音に驚いて、手以上に、のばせるだけ右の方へ向けられた契機(モメント)を示してゐるのであり、又、その手は、最初から戒律盤を支へてゐたのである事を想像しなければなるまい。盤を通じての空手への壓が、その指をして、落下する鬚髯の下に開かしめた事は當然であり、また、頭部の急激な轉向が行はれた結果、鬚髯の一部分は、瞬時(しばらく)の間、動かされたのではない手によつて自然に引止められると共に、其處に、運動の痕跡として認めらるべき、かの花輪の一部分のやうな形狀を生じ

たのである。』と。

又た、『最初は右手と左側の鬚髯半分が親近してゐた』といふ見方の別の可能性に就ては、ロイドは或る思惑からそれを保留してゐるが、此の思惑こそ、彼の考へが我々の解釋とどんなに近いところまで來てゐたかを立證するものだ。彼は言ふ『モォゼスが、自發的に、感情激發からでなしに、手を延して髭をこんな風に片寄せるといふことは有り得ないことである。かかる場合には指の位置が全然異つて來るのが當然であらう。又、さうした運動の結果として盤は辷り落ちてしまはなければならない筈だ。ところが事實は、僅かに右手の壓によつて支へられてゐるでないか。して見れば、さうした動きがあつてもなほ盤が支へられてゐるのだとすれば、此の姿勢は頗る妥當適切を缺いた運動を想起させるものであるし、本來から言へば、さうした假定は、一つの瀆神的行爲を是認するものでなければならない』と。(Unless clutched by a gesture so awkward, that to imagine it is profanation.)

案ずるに、ロイドの見落しが奈邊に在るかは察するに難くない。彼が、此の注目に値する髭の形狀を既に經過された或る運動の表徴と解した事は正しかつたが、その後、同じ推理を、盤の位

置に於ける尠からず歪められた細部へ適用する事を忘れてゐるのだ。彼は、髭の表徴の意義を探ねるに急なるあまり、盤の位置が示してゐる意義を忘れ、之を、最初からかく在つたものと速斷してしまつた。かくして彼は、我々の解釋、卽ち、取るにも足りぬやうな細部の意義を探ねる事によつて、像全體の成形とその意圖とに對する驚くべき推理に達し得る解釋への道を、踏み迷つてしまつたのである。

だが然し、萬一ロイドと我々と雙方ともに、一つの迷路に落込んでゐたのだとしたら、どうなるだらうか。重大な意義ふかいものとして取上げた細部が、萬一、原作者ミケランゼロに取つて全く無關心のものだつたら、卽ち、之がほんの氣紛れだつたり、何か一寸した定型上の刺戟から現在の樣に出來上つたものに過ぎず、其處に何等の祕密が置かれたのでなかつたとしたら……？我々もまたかの、原作者が意識的にも無意識の裡にも思惟しなかつた點を確實に見拔き得たと信ずる多くの註釋者流と、同じ軌に落ちたのであつたら……？　之をさうでないとは、どうして言ひきる事が出來よう。だが私は、その作品に於て、表現へのかくも多くの思想內容の苦鬪を示す事、ミケランゼロの如き藝術家にかかる無邪氣な氣紛れがあるとは信じきれないし、又、よしあ

つたにしても、殊更このモォゼス像に示された、著しい特殊な特徴の數々に對して、そいその事の可能を信ずる事は出來ないのである。結局のところ、尙幾多の極めて遠慮勝な揣摩臆說が加へられ得るであらうけれど、その責任は、さういふ臆說を加へた註釋者と共に、かかる疑念を生ぜしめるやうな作品を殘した原作者自身も頒つべきであらう。ミケランゼロは、その創作に於て時に藝術の表現し得る最大限界にまで走つた例が珍しくない。もし、此のモォゼス像に於ける彼の意圖が、過ぎ去つた激情の嵐の跡を、平靜の中に探ねるべき表徵を與へんとしたのであつたら、その意圖も亦、恐らくは十分に成功したものとは言へないであらう。

精神分析學から見た性格型の二三

醫師が、一人の神經性患者に對して精神分析を行ふ場合、その關心の第一線は、彼の性格へ向けられるものでは斷じてない。寧ろより多く知らうとする點は、彼のさまざまな神經症的徵候が何を意味してゐるか、それ等の徵候の背後にはどんな衝動力が潛んでゐるか、それによつてどういふ風に滿足されてゐるか、また、それ等の衝動願望の神祕な經路の如何なる起伏を通じて、彼のさまざまな徵候が現れるものであるか、等の問題である。然しながら、醫師の遵奉せねばならぬ技術は、直ちに、彼の探知が先づ別の對象へ向けられる事を要求する。醫師は、自分の研究が患者の示す抵抗によつて脅かされるのを認めると共に、それ等の抵抗を患者の性格へ加算する事が許されてゐる。此處に至つて、かうした性格が先づ、醫師の關心の第一步を喚起せざるを得ない。

と言つて、醫師の研究操作に抵抗する總てが、いつも、患者の告白する性格特徵であるとは限らないし、又、環境によつて蒙つたそれと限つたわけもないのだ。時とすると、患者のごく僅かしか持つてゐないやうな特質が、意外に活發な强度にまで上昇する事があり、或はまた、別の方面の生活交渉では豫想もされなかつた態度さへ現れて來る場合も珍しくない。次に揭げたのは、

かかる驚くべき性格特徴の二三の説明と、その歸納とに關係したものとなるであらう。

一　例　外

精神分析の仕事(アルバイト)が目前に見る課程は、いつもながら、患者をして、或る身近な直接な享樂慾への棄權をやらせて見る事だ。一般に言へば、快樂は棄權されてはならないものである。恐らく、それは何人にも想像され得ない事であらうし、宗教でさへ、肉的の快樂を遠ざけしめるといふ要求の代價には、それと比較にならぬ程の價値を持つた、莫大なる天上的快樂を與へるといふ約束を、保證する事が必要とされてゐるのだ。が、是非とも患者に對してはかうした快樂滿足への棄權を必要とする。それが、患者にどういふ傷害を與へるかを完全に追究するのだ。患者は、或る期間の間辛抱しなければいけない。直接の快樂を、一つのより善い、確實な快樂と、よしそれが將來に約束されたものにしろ、その快樂と交換する事を學ばなければいけない。言ひ換へれば、醫師の指導の下に、快樂の原則から實產の原則への飛躍を謀らなければならないので、この進步こそ、小兒と成人とを區別する基準なのだ。かかる敎化的の作業に當つて殆ど決定的の役目を演

ずるのが、醫師のより善き見解である。勿論、かうした場合に醫師が患者に言ひ得る事は、醫師の知性が辨へ得る以外の何ものでもない。だが然し、或る事柄を自發的に知つてゐる、といふ事と他から聞いて知つた、といふ事とでは、大分その間にひらきがある。醫師が握るのは、かうした有効な、他へ働きかける役割であつて、一人の人間が他へ及ほし得る影響力を利用するのだ。或はまた、精神分析で始終用ひてゐるところの、始原的な根元的なものを、演繹され緩和された個所へ据込むといふやり方を思ひ合はせて、次の様に言ふ事も出來るだらう。醫師が、その教化的作業に當つて利用するものは、愛慾の何等かの組合はせである、と。かかる後天的教育といふものが、一般に初期の教育を可能にした既往の事實を繰返すに過ぎぬ事は確かである。愛慾は、窮乏と共に人生の二大教育者だ。未完成な人間は、愛する者への愛慾によつて影響されて、窮乏を重視する様になると共に、また、その埒を越える事の刑罰を免れる様にもなるのである。

かうして我々が患者に對して、何等かの快樂滿足への暫定的棄權を要求する場合、即ち、一つの犧牲を、より善き結果を得るための一時的受難を、乃至はまた單に、萬人共通の窮乏に追從する決心だけでも、要求した場合、相手がひどく變つた人物であると、或る特殊な理窟をつけて我

我の要求に反抗する事がある。かういふ患者の言草はかうだ『自分達はもう苦しみぬき缺乏しきつて來たのだから、之以上の要求は御免蒙つていいだけの資格がある。何しろ自分達は例外であり、何處までも例外だと信ずるから、もう、窮乏などといふ有難くも無いものは眞平である。』と。同じ種類の或る患者に在つては、かうした權利主張が確信にまで增長して居て、自分には、かうした情ない犧牲を免れさせてくれるところの一つの特別な神意があつて、それが自分を護つてゐてくれる、と信じきつてゐた程である。これ程の强さで現れた內的の確信を審議する論據は、醫師には全然無いけれども、それでもやはり、醫師の力は第一着手として彼の反抗を否定し、かかる傷害的な偏見を生み出した源が何であるか、その穿鑿を跡づけて行くのである。

此處で疑ふ餘地のないのは、十人が十人、自分は例外だと考へて他に優つた特權を要求したがる事だ。だがそれだからこそ、患者が眞に自分は例外だ、と信じきつてる場合には、一つの特殊な、さうざらに轉つてゐないやうな論據を必要とするのである。さうした場合の論據は幾つか有り得るが、就中、私の試みて成功したのは、患者に共通な特性を、それぞれの患者の以前の生活運命に於て跡づけて見る事だつた。卽ち、彼の神經性疾患が果して體驗乃至は受難に關係するも

のかといふ事である。彼等が生年の初期に蒙つた受難については、彼等自身何等の責任を感じてゐないし、またそれは、彼等が自分といふ人格に加へられた不當なる傷害として評價するところのものである。かかる不當といふ信念から演繹された特權の概念と、其處から發生した反抗心とは、後年神經疾患の發作の因となる心的葛藤を尖銳化するに與かつて、尠からぬ力を及ぼすものだ。前に敍べた樣な態度を見せたのは、かうした婦人患者中の一人で、彼女の生活目的の達成を妨害してゐた一つの痛ましい器質的受難が、或る精神的の根元に據る事を聞知つた時である。彼女はその苦痛を、一つの偶然な、後天的に受けたものであると思つてゐた間は、辛抱強くそれに耐へ續けて來たのであるのに、一旦それが、傳へられた遺傳の一つであると知るや、急に反抗的になつてしまつた。又、自分を特別な神意の加護の下に在る者と信じてゐる青年の方は、乳兒の時代に乳母を通じて或る偶然な傳染病の犧牲となり、その後の全生涯を、まるで傷害保險でも請求する樣に、賠償の要求に費消し盡し、而も、彼自身は、その要求の根據が何處に在つたかを夢にも知らぬ有樣だつた。彼の場合の分析は、家族の人々からの報告によつて客觀的に裏づけられるので幽暗なる記憶殘滓と徵候判斷とから、かうした事實の在つた事が組立てられるのである。

私が、なほ幾多の、同種の或は別種の患者の事實談をお傳へする事が出來ない理由は、說明するまでもないであらう。また、幼年期の永い疾病によつて、現れた性格壞敗に對する手近な類同相似や、重い受難の過去を負うた國民全體の行狀に就て深入りする氣もない。けれども、どうあつても言及せずにゐられないのは、大文豪によつて創造された一人物の性格中に見られる、此の例外的存在の主張が精神的傷害の契機（モメント）とぴつたり結び合つてゐる事と、主旨（モティフ）が其處に置かれてある事實とを跡づけて見たい事だ。

シエークスピヤの『リチャアド三世』の序曲的獨白（モノロオグ）の中で、グロスタアはこんな事を言つてゐる。彼は、後に王位に卽く男だ。

　だが己は、道化芝居のために作られたんぢやないし、
　己惚鏡の御愛顧を得るやうにも出來てゐない、
　己は、荒い鑄型から出た男だ、愛慾の女神の鼻のさきへ
　物體ぶつて出て行くだけの身の尊嚴がない
　己は、さういふ五體の美しい釣合ひを、

あの嘘つきの造化に欺されて、變な風に縮められて
片輪のまま、半出來のまま、まだ出べきでない時に此の世へ出て
產聲を擧げさせられたんだ、
それだつても無樣千萬な、不釣合ひ極まる者だから、
犬めが吠えるわ、己が跛(びつこ)ひきひき行く先々(さきざき)で。
――中略、
到底かういふ巧言令色時代に
ちやほやされる色男にはなれないから、
いつそ惡者になつてやらうと思つた
そしてこんな馬鹿馬鹿しい快樂の敵になるんだ。

一讀しただけでは、恐らく此の序詞から、我々の主題(テエマ)への關係を見出す事は出來ないであらうが、リチヤアドの科白は、單に下の樣な意味以外の何ものでもないらしいのだ。『己はこんな無爲の時に飽々した、己は面白おかしく暮したい。だが、己は醜い片輪者であるばかりに、女に惚

られるなんて樂しみに會ふことが出來ないから、いつそ惡者の假面を被つて、陰謀を企んだり、人殺しをやつたり、その他面白さうな事を片端からやつてやらう」と。もし此の科白の背後に、何等眞劍なものが藏されてゐないとしたら、こんな輕薄無慚な獨りよがりの理窟は、觀客の同情を爪の垢ほども惹き起すことは出來なかつた筈である。だがさうなると、此の劇自身も亦精神的には不可能となつてしまつて、作者が、我々の同情共感の或る神祕なる背景を此の主役に喚起しようとした意圖も無効になつて了つたであらう。從つて、その人物の大膽と機敏とへの驚嘆も、何等內的な異議なしに感じられなければならないし、又、さうした同情共感といふものは、相手を十分に理解して初めて、彼との可能なる共鳴の感情に於て初めて、基礎づけられ得るのだ。

であるから、案ずるにリチャアドの獨白は全部を言ひ盡してゐるのではあるまい。それは單なる暗示であり、その暗示された實體の何であるかは、我々觀衆の解釋に委せてあるのだ。此の暗示の解釋が正當に行はれれば、やがて輕薄無慚の假面は落ち、やがて、當然是認されるのが、リチヤアドが己の不具者である事を嘆いた心持の痛ましさと克明さであり、かくして明確な共鳴が喚起されて、リチャアドが言つた惡者にならうとする心持さへも、我々の同情共感を强ふるもので

ある。言ひ換へれば、『自然は己に對つて一つの重大な不當を敢てした』のである。『己に、人間の愛をかち得る美しい容姿を與へなかつた』のである。『人生は、己に對してそれを賠償する義務があり、己はそれを要求する權利がある。己は、他の人間を束縛する一切の顧慮や懸念から超越する例外者としての存在を要求するのだ。自然が己に對つて不當を働いたのであるから、その不當さへやつていいだけの資格が己には在る』——かうなると、我々に感じられるのは、我々自身もリチヤアドの樣になるかも知れない、といふ心持だ。否、程度こそ小さいが、我々は既にさうなつてゐるのだ。リチヤアドは、かうした我々の中にも見出される或る一面の誇張的擴大である。我々は、自然と運命とに對して、與へられた精神的竝に畸型的傷害について憤るだけの、凡ゆる理由を持つてゐると信ずる。かのナルチスムスや、自己偏愛等の幼年期疾患に對する凡ゆる賠償を、我々は要求して止まない。何故自然は我々へ、バルデルの金髮を贈らなかつたのか。ジイクフリイドの强さを、天才の秀でた額を、貴人の高貴な顏容を、與へてはくれなかつたのか。何故我々は、王城に生れずして市民の家に生れたのか。我々が今羨望し嫉視する人々と同樣な、美しさと高貴さと位は十分我々にだつて持ち得たであらう。

だが然し、作中の人物をして、その口實の祕密の全部を、悉皆(あまさず)、聲高に言はしめないといふ事は、言はば作者の微妙なる經濟的技巧だ。此の技巧によつて、作者は、それを補充する事を我々に强ひる。我々の精神活動を働かせ、それを批判的の考察から轉向させ、我々を否應なくその人物と同化させてしまふ。作家によつて引出された一個の傀儡は、作家が我々に告げんとした一切を意識的表現に於て把握すると共に、また、冷やかな、自由な、動き易い、幻想の深化を不可能ならしめるところの、我々の知識に對して對立するであらう。

と言つて何も、我々は頭から此の、例外を信ずる心を見捨てて終ふつもりはない。前に言つた婦人の如き、人生の餘りにも多い逼迫からの解放と特權とを要求する心持が、やはり同じ理由に基いてゐる事は十分考慮してゐるのだ。我々が精神分析の仕事(アルバイト)によつてどういふ知識を得たか、畸型的傷害を持つてゐる婦人たちは自ら考へて見ると宜しい。だがその際に、彼女自身等の責任をほんの少しでも縮小したり引込めたりしてはいけない。又、多數の娘達が抱いてゐる母への不滿といふものは、その根元を探ねて見れば、母親が彼女達を男として生んでくれなかつた事に對する怒りなのである。

二　坐礁の結果に終るもの

精神分析の仕事（アルバイト）が我々に與へた命題に、次のやうなのがある。『人間は拒絶によつて神經疾患を招來する』と。此處に言はれた拒絶とは、性慾的願望に對する滿足の拒絶で、此の命題を理解するには、一つの長い迂路が必要だ。といふのは、凡そ神經疾患の成立には是非とも、その人間の性慾的願望と、我々が『自我（イッヒ）』と名づけるところの本質の參與と、此の兩者の間に於ける一つの葛藤を必要とするのである。自我（イッヒ）は、自己保存の衝動の表現であつて、彼自身の本質によつて理想を包含する。では、どんな場合にかかる葛藤が現れるかと言ふと、永く『自我（イッヒ）』によつて克服され監視されてゐた性的慾望が、即ち、將來に亙つても絕對に禁抑されてゐた慾望が、その目的と手段へ躍り出ようとする場合である。性的慾望の側から言へば、自我の正しとする理想を滿足するといふ可能の望みが、性的慾望の中に絕たれた場合（とき）、性的慾望は猛然として奮起するのである。かくして、實際的な滿足を拒絕する事と、その缺乏とが、永久に唯一のものではないにしろ神經病患發生の第一の條件となる。

之は醫師としての立場に在つて初めて知り得る事だが、更に一層驚かされ、惑亂的感動を受けるのは、人間はどうかすると、深く植ゑつけられ永く抱いてゐた願望の將に滿たされんとする時に、發狂する場合がある事だ。かかる場合に對しては、恰も彼がその幸福に耐へきれなかつたかのやうな觀を呈するもので、結果と發病との因果關係を疑ふ事が出來ない。偶〻、或る婦人の遭遇した運命を穿鑿する機會を得た私は、之を、かかる悲劇的轉換の典型的なものとして說明して見ようと思ふのである。

立派な素姓と善い敎育とを與へられた彼女が、生活慾を抑制しきれずして兩親の家を出奔したのは、まだ完全に少女期の時代だつた。さうして、冒險的に世の中を渡り步く中、最後に知合ひに成つたのが或る美術家だつた。彼は、少女の女性的魅力を十分に認めたが、また、その墮落頽廢の中に在る微妙な美質をも豫想したのである。で、彼は少女を家に伴ひ、之を忠實な人生の伴侶とする事が出來たが、彼女の中には、かうした完全な幸福に對して、何か、從前の市民的生活への復歸を喜ばぬ風が見えた。やがて、數年の共同生活の後、彼女と自分の家族との親しみを見究めた彼は、法律的に彼女を自分の妻とする用意をしたのである。此の瞬間に、彼女の拒絕が始

まつた。やがて正當な主婦となるべき家の家政を捨てて、此の家に迎へ入れる筈だつた親屬や知己から追跡されてゐるといふ觀念を抱き始め、夫たるべき彼に對しては、無意味な嫉妬から凡ゆる交際を嚴禁したり、その美術家としての仕事を妨害したりした揚句に、やがて不治の精神病者となつてしまつたのである。

もう一つ、他の觀察によつて示された、非常に尊敬された男の實例がある。彼は大學教授で、數年來、彼を今日あらしめた恩師の後繼者たらんとする願望を目標として勉勵してゐた。ところで、やがて此の老師の引退後、同僚が彼に、彼以外に適當な後繼者を見出すことは出來ない、と告げた時、急に、彼は逡巡し臆病に成り始めたのである。自分の學歷を卑下し、そんな立派な位置に据る資格はない、と斷つて、以來一種の憂鬱(メランコリイ)に陷り、翌年にはもう、凡ゆる活動から遠ざからねばならぬに至つた。

以上の二つの場合は、いろいろな點でひどく懸絕を見せてゐるが、而も願望滿足の瞬間に發病し、その享樂を無にしてしまつた、といふ一點ではよく一致してゐる。

以上の二例によつて得た知識と、冒頭に述べた命題『人間は拒絕によつて發狂する』との間に

於ける矛盾は、解き難いものでない。此の矛盾を解かせるものは、拒絶には外的と內的の差別があるといふ事實だ。性的慾望がその滿足を求め得る筈の對象を眞實に失つたとすれば、その場合が卽ち外的の拒絶である。此の外的な拒絶は何等の影響力をもたないもので、それへ更に內的の拒絶が加入されて初めて、疾患の形を取るのだ。此のものは『自我』から發して、自ら占領せんとする別の對象を性的慾望と爭はねばならない。かう成つてから初めて、一つの葛藤と精神的疾患の可能、卽ち、强壓された無意識を越えた迂回路での、一つの代償滿足の可能、が成り立つのである。從つて、凡ゆる場合を通じて眺められるのは內的の拒絶だが、之は、外的の實質的拒絶が都合よい形勢を準備してくれないうちは、効力を發揮しない。人間が、やつと思ひが叶つた最後の瞬間へ行つて發病するものなら、例外の場合に在つては、此の內的拒絶がそれ自體に對してだけ影響を及ぼしたものである。否むしろ、願望充足の外的拒絶が行はれた後に初めて現れて來るのだ。かかる場合には、一見しただけでは何かひどく特殊な場合のやうに見えるが、一歩立入つて商量すれば、とに角それが、何等異常の場合でなかつた事に思ひ當る。卽ち自我は、或る一つの願望に對して、それが存在を空想と觀じ、その實現から遠く距つてゐる間は、大して邪魔に

もならぬものとして之を寛容して置く。ところが、一旦その願望が實現されさうに成つたり、實質的に成りさうな脅威を受けると、忽ち、鋭敏な妨害作業を始めるのだ。神經疾患の周知な情勢に對する區別が存する點は實に、慾望充足への從來の內的增長が、それまでは輕視して寛容されてゐた空想を、恐るべき敵と化してしまふ事だ。我々の場合で言へば、合圖のシグナルが、實質的の外的變化を通じて爭鬪の開始を與へるのと同じである。

精神分析の仕事によつて容易に示されるのは、彼の永らく望んでゐた結果を、幸福な實質變化から取り出す事を禁ずるものは良心の力であると言ふ事だ。だが、かうした裁斷し、罰する力の本體と由來とを探し出すのは容易ならぬ課程である。かかる力は、時に、我々の思ひ設けなかつた所にその姿を見せて、我々を驚愕せしめる事が尠くない。私は此處に、それについて知り、或は想像するところを吟味しようと思ふが、私が何故これを、醫師として觀察した諸實例に頼らずして、却つて、文豪達がその心知の充實によつて創造した人物に頼らうとしたのであるか、その理由は說明するまでもないであらう。

百難不撓のエネルギイを以て苦鬪を續けた揚句に、漸く目的の結果をかち得ながら、しかもそ

の結果に到達すると共に仆れてしまつた人物に、シエークスピヤのマクベス夫人がある。最初の間、彼女の中には、一つの內的爭鬪を示す何等の動搖も表徵もなかつた。彼女の努力はただ一途に、名譽心に富んだ、而も溫和な心の持主である男の懸念に打ち克たうとしてゐる。愈〻殺害の決心がつくと、彼女自身の女性をさへ犧牲にする覺悟で、それが實行された後、萬一、犯罪によつて達せられた彼女の名譽心の目的を主張する必要に迫られた場合、此の女性を失ふといふ事がどんな重大な結果を惹き起すかも、顧みようとしない。

(第一幕　五景)

さあおいで惡靈たち、
人殺しばかり考へてゐるお前たち、あたしを女でなくしておくれ。
………………(略)あたしの胸へ來て、
人殺しのお手傳ひさん！　膽汁になるまで此のお乳を吸ふがいい！

(――七景)

お乳を呑ませて氣がつきました、

お乳を飲ませる赤ちやんは、まあどんなに可愛いいんでせう。
でも、こんな事を考へる間に、あたしを嘲り笑ふ者がある、
さうだ、あたしはこの母親の乳房から
あの歯のない可愛いい口を引離して、その脳髄をうち砕くつもりなのだつけ、
あたし、本當にそれを誓つたかしら、あんたがあれを誓つたやうに！
ただ一度、輕い反抗の動きが、實行の直前で彼女を襲うた。

（第二幕　二景）

あの人はあたしのお父さんに似てやしないかしら
こんなにして眠つてる時、あたしがそれをしたのかしら。

さて、ダンカンに對する殺害によつて彼女は皇后と成つたが、そこへ、何か絶望に似た嫌厭の情がちらつと顔を出す。それが何處から現れるものか、我々には解らない。

（第三幕　二景）

自分の所有なんて何處にもありやしない、何もかも噓だ、

望みは達したのに、何か物足りない氣がする、
　あたし達が滅すものは、確かにまだ何處かにあるに違ひない、
　永遠の不安を滅す事によつて誓ふよりもつと確實に。

だが、それでも兎に角彼女は持ち耐へてゐた、此の科白の直後に來る破局の場面に在つて、取亂さないのは彼女一人である。彼女は、夫の昏迷惑亂を押し隱して、客人達を遠ざける口實を見つける。やがて彼女の姿は消え失せ、復び我々の眼前に現れる彼女は、(第五幕、一景)夢遊病者の姿だ。それは、あの殺人の夜の印象を思はせる。此處で復び、その時と同じ様に、夫に向つて勇氣を出せと言ふのである。

　へへんだ、あんただつたら、兵隊一人がそんなに可怖(こは)いの?——可怖(こは)がる必要が何處に在ります、誰も知つてやしませんよだ。あたし達の力に誰が敵對して來るもんですか。

彼女は、門を叩く音を聞きつける。それは、實行の後で夫を愕然とさせた音である。だがその際に彼女が骨を折つたのは、『もう絶對に未然にする事の出來ない行爲を未然にしよう』とすることだつた。彼女は兩手を洗ふ。血だらけで、血腥い手だ。彼女は、いくら隱さうとしても無駄だ

と覺る。悔が、彼女を屈服させたかに見える。だが、その悔はもう後の祭りだつた。彼女が死んだ時、夫マクベスは、ほんの短い言葉を發したに過ぎなかつた。此の時の彼の殘忍さは、恰度、最初の時の彼女同樣である。

（第五幕　五景）

もつと後で死ぬとよかつた。
こんな文句を一つ言ふだけの時間がまだあつたのさ。

さて、此處において自然に發せられる疑問は、此の、まるで鋼鐵で鍛へられたやうな性格を粉碎したものは何か、といふことである。果してそれは絕望だけであらうか、我々は實行された行爲が示す別の姿を考へねばなるまい。マクベス夫人の中にも、一つの始原的な溫柔の女性的精神生活があつたので、それが或る事件への集中と最大緊張とへ押上げられたのだ。かかる强度の緊張にはいかなる辛抱强い人間でも耐へきれるものでない。それともまた、一つのより深い根據を通じて、かうした破局を、人間的により親しませるやうな表徵を探求したものであらうか。

此處に、是非の裁斷を下すことは不可能であると思ふ。シエークスピヤのマクベスは、昨日までのスコツトランド王ジエームスの卽位を描いた、言はば一つの際物劇である。材料は旣に在つたし、同時にまた他の著作家たちによつても扱はれてゐたのであるから、さういふものを、シエークスピヤが巧みに利用した事は確からしい。彼は、現實した情勢へ注目すべき諷刺を與へてゐる。處女で終つたエリザベス女皇は、まさしく彼女の子寶の無い事から、スコツトランド王を後繼者にしなければならないのだつた。エリザベスが處女であつた事に就ては、こんな噂がある。それは彼女は子供を儲ける事が絕對に不可能だつたので、或る時、ジエームスの誕生の報告を聞くと、『なんて貧弱な苗裔』と非痛な叫びを揚げたといふのだ。

(*) マクベス第三幕、一景

私の頭上に置かれたのは生產力のない黃金だ、
拳に握らされた瘦細つた笏、
やがてそれは他人の手の中へ滑り落るのだ、
私には、後を繼がせる息子がないのだから——

而も此のジェームスこそ誰あらう、エリザベスが、不本意だつたとは言へ、自ら處刑を命じたマリアの息子だつたのである。マリアは、政治上のいろいろな顧慮を通じて凡そ複雑な交渉に曇らされてはゐたものの、とに角エリザベスに取つては血縁の間柄であり、國賓として迎へられる女性だつた。

ジェームス一世の即位は、言はば、不姙症の呪詛の示威運動であると共に、また、持續され行く世代の祝福の示威運動とも見られる。さうして、此の全然同一な對立を基礎として、シェークスピヤのマクベス劇は發展するのだ。豫言の娘たちは、王位を繼承する者が彼自身である事を約束する。だが同時にバンクォに取つては、それは、自分の子供に王冠が傳へられることを意味した。マクベスは、此の豫言をきいて激昂する、彼は自己の野心の成就だけで滿足しない。自分が王朝の創始者たらんと志したのであつて、殺人をやつたのも、他人を利するためではなかつたのである。シェークスピヤ劇を、單に野心の悲劇とのみ眺めようとすると、往々、此の點を見逃し易いのだ。マクベス自身は永遠に生きてる事が出來ないから、彼に唯一つ殘された手段が、彼に反抗した豫言の力を奪つて終ふに在る事は明瞭である。卽ち、彼自身に、後を繼がせるべき子供

があればいいのだ。彼は此の事も、彼の強い妻から期待してゐたらしい。

(第一幕　五景)

お前が、息子さへ產めばいいのだ、
お前の大膽不敵な勇氣が、是非ともやらねばならないのはただ
男の子を拵へ出すといふ事だ。

之と同樣に、萬一此の期待さへ裏ぎられた場合には、もう彼は運命に屈服して終はなければならぬ事明白である。或は又、彼の行爲が目的と目標を失つて、滅亡を宣告された者の盲目なる狂暴に變ずる事も明白である。それは、事の最初から、手當り次第に擊ち滅ぼさうとする狂暴者の行爲でなければならない。我々の見る所では、マクベスは此の發展過程を踏んだのである。さうして悲劇のクライマックスへ來て、あの沈痛傷魂のマクダフの叫びと成るのだ。これはもう幾度か、樣々な意味に解されて來た科白で、恐らくは、彼の轉化を解く鍵を藏するものであらう。

(第四幕　三景)

彼は子供が無かつたのだ。

此の意味は恐らく次のやうであらう『彼自身に子供が無かつたので、私の子供を殺すやうな事に成つたのだ』と。だが、もつと突込んで考へると、此の叫びこそ、何ものにも優つて最も奥底の主旨(モティフ)を暴露し得たものかも知れない。それは、マクベスをその本性以上に驅立てたと同じ程度で、彼の強い妻の性格に對しても亦、その性格中の唯一の弱點を衝いた主旨(モティフ)である。然し、此處で此のマクダフの科白に表されたクライマックスをよく見廻して見ると、全體の結構が父對子――の關係の上に置かれてゐる事が解るであらう。人の善いダンカンの殺害は、父親殺しとあまり違はないし、バンコオの場合では、マクベスは息子の方は遁したが父親の方を殺してゐる。マクダフの場合では、その反對に子供の方を殺して父親には遁げられてゐる。誓約の場面において、豫言の娘によつて示現せしめられた、血みどろな、戴冠の子供を見給へ。前方に武裝して現れた首は恐らくマクベス自身であらう。而も後方に朦朧として立つ姿はマクダフの復讐神と化した姿である。彼だけは生殖の掟の例外者だつた。彼は、母胎から生れたのではなく、却つて、母胎から割出されたのだ。

さて、マクベスに子供が無い事とその夫人が姙孕不能である事とが、生殖の神聖な掟に逆つた罪への刑罰であつたとすれば、即ち、マクベスが父親と成り得なかつたのは、他の子供をその父親から、他の父親をその子供から、奪ひ葬つたためであり、また、マクベス夫人の方は、殺戮の亡靈を呼ぶ爲に自ら進んで女性を捨てたのであるとすれば、シェークスピヤ劇一篇の骨子は徹頭徹尾、因果律の上に組立てられた詩的合理性をもつてゐると言へるであらう。思ふに、何等の異論なく肯定される事は、マクベス夫人の悲痛である。その惡への勇氣の、悔の轉化である。之は姙孕不能に對する反應として出て來たのだが、これによつて夫人は、失神から自然律の嚴格さを確信すると共に、又、夫人の過失が、自身の負債を通じてその生產のより善い部分を殺してしまつた事を覺らされたのである。

史實（Holinshed. 1577）に就て、シェークスピヤが採つたマクベス劇の材料を調べて見ると、マクベス夫人は、自分が皇后と成りたいばかりに夫に謀殺を勸めた野心家として、極く簡單な記述があるに過ぎない。之に反して、マクベスの性格に現れた血みどろな狂暴への轉化に就ては、恰度我々の探してゐたと同樣な主旨（モチイフ）によつて解し得られる如き記載がある。即ち、ホオリンセッ

ドの記述に據ると、ダンカン王の弑虐と、その後に於ける幾多の暴虐行爲との間には十年の距離があり、その間、彼は嚴格な、而も正しい國主として君臨してゐたのだ。かうした永い時を置いて現れた性格上の轉化は、妖女によつて與へられたバンコォへの豫言が、自分自身の運命と同樣に的中する時が來はしまいか、といふ恐しい不安の影響によつて生れたものである。此處において彼はバンコォを謀殺せしめ、シエークスピヤ劇に描かれた如く、第一の罪から第二の罪へと引きずられて行く。勿論、彼をさうした非行の道へ追ひやつた原因が、子供を持たなかつた事に在るとはつきり、ホオリンセツドも書いてはゐないが、それに近い解釋を妥當ならしめるものは、此の十年といふ時の距離である。然し、此の點、シエークスピヤ劇は大いに異つてゐる。息を繼ぐ暇もない程、次から次へ展開される事件が、我々を只管に悲劇の中へと驅立てて止まない。恰も劇中の人物の科白によると、僅々一週日の間の出來事のやうにさへ、感じられる程だ。かかる目まぐるしい周章しさによつて、マクベス及びその夫人の性格に現れた、激變の主旨(モテイフ)に關する我我の推理は、ともすると足場を浚はれがちである。時の無視だ、或る時間的餘裕を置いてこそ度重なつた妊孕への絶望が夫人の强い心をくづ折れさせもし、また、マクベスの心を、捨鉢な狂暴

へ驅立てもし得る筈である。だから、これ程に澤山の微妙な關聯的事件を、作の內部、及び、作とその發想との間で、子供がないといふ主旨(モテイフ)へ集中させようとする事は、一方に、悲劇の時間的經濟法が、最も奧深い他の主旨(モテイフ)ならぬ、主旨(モテイフ)から、一つの性格發展を故意に拒絕するものである事を考へ合はせても、矛盾はどこまでも矛盾であると言はねばならない。

けれども、こんな短い時の間に、引込思案な野心家を無制遏なる狂暴者と變じ、鋼鐵のやうに冷嚴な煽動者を、悔いに胸を嚙み碎かれた病婦人と變じたそれ等の主旨(モテイフ)が、果してどんなものであり得るかといふ豫想は、私の判斷のよくし得るところでない。思ふに、こんな風に二重にも三重にも重ねられた闇を押分けて深入りする事は、諦めねばならないのであらう。而も搗てて加へて其處には原文の毀損とか、わけの解らぬ原作者の意向、傳說の祕密なる意義等の事があるのだ。かと言つて何も私は、誰かが抗議した樣に、『かかる事柄についての穿鑿立てが、觀客に及ぼす悲劇全體の壯大な効果に對して、全然愚にもつかぬ無駄事である』と決めてしまひたいのでは無い。勿論、シエークスピヤは彼の技巧によつて我々の心を征服する事が出來るし、また、我々の思考能力をも痲痺させ得る。だがそれは、さうした素晴しい影響力を、それのもつてゐる精神的

機構によつて解釋せんとするその後の努力を妨げるものでない。また、作者によつて引出された事件の、自然的なる時の經過を都合よく短縮する事も、もしそれが、普遍的な眞實性を犧牲にする事によつて劇的効果の增長が志され得る場合なら、あくまでも作者の自由であるから、かかる點に對しては、註釋を加へるのさへ當を得たものでない樣に思はれる。一體、かやうな眞實性を犧牲にするといふ事が是認されるのは、唯、眞實性に從ふと妨害を受けるといふ場合のみに限れるので、それによつて因果の連絡が斷たれて終ふやうな場合には許されないのである。またもう一つ、絕對に眞實の時の經過通りにやつて行くと、折角の劇的効果が支離滅裂に終るやうな場合にも、特別な表出によつて之を短時日の出來事に短縮して差支へないのだ。

マクベス劇の場合の樣な問題を、解き得ぬ謎として抛つて置くのは、頗る心苦しい話だから私は勇を揮つて、一つの註釋を附加するべく試みた上、一つの新しい解釋への通路を指示することとしよう。L・イエケルス(Ludwig Jekels)は、最近にシエークスピヤ研究を書いて、彼の作劇上の技巧の一部を解し得たと言つてゐるが、此の研究は、マクベス劇に對しても應用し得るものかも知れない。彼は曰く、『シエークスピヤはよく、一個の性格を二人の人物に頒ち與へてゐる。

從つて、その二人物をもう一遍一人の人間に組合せて見ない中は、孰方にも何處か不完全な點が感じられる。』と。マクベスとマクベス夫人との關係も、やはりさうだつたかも知れない。さうだとすると、性格を補足して考へない限り、二人を各々獨立の人物としてその轉化の主旨を探す事は當然、徒勞と言はなければなるまい。私は、之以上その跡を追はないが、然し、次の點だけは論證して見るつもりだ。卽ち、弑虐の夜マクベスに現れんとした恐怖の芽が、その後の發展を彼に示さずして却つて夫人の方に移したといふ、此の注目すべきやり方に於て、前に擧げた解釋を支持するものは果して何か、といふ疑問である。マクベスは、ダンカン王弑虐の直前に當つて、短刀の幻覺を感じた男である。だが、後に精神に異常を呈した夫人の方はどうであつたか。またマクベスは弑虐の大罪を犯した後、屋內に叫聲の擧がるのを聞いた、彼はもう眠れなかつた。眠れる者の眠りを奪つたのだから、自分ももう眠る事が出來ない筈である。ところが、實際はどうかといふと王妃と成り得たマクベス夫人が夜中に眼を覺したり、夜步きをして無言の裡に罪を自白してゐるのに、マクベス自身が眠れなかつたといふ事は少しも現されてゐない。又、マクベスが血だらけの手を見せて、海神の凡ゆる潮を以てしても此の手を洗ひ淨める事は出來ないと、絕

望の嘆聲を洩した時、夫人は慰めて、ほんの少しの水でそんなものは洗ひ落とせる、と言つた。だが、さう言つた夫人が、やがて、十五分ばかり手を洗つても、血痕の落ちないのを見た時、かう嘆じてゐるのである。『アラビヤの香料を悉皆持つて來たつて、此の小さい手を佳い匂ひに變へる事は出來ない』(五幕、一景)と。かうして、マクベス自身の中に在る良心の呵責が、却つて夫人の胸を一ぱいにしたのである。夫人は行爲の後に悔い、マクベスは却つて反抗者と成つた。二人は互ひに、犯罪への反應の凡ゆる可能性を頒ち合つてゐるのである。恰もこれは、單一なる個人の精神から相反した二つの型を取出した如くである。又、恐らくは、單一なる典型を基とした二つの模型である。

マクベス夫人といふ人物に就ての疑問、卽ち、彼女が望みの結果に至つて發病して仆れたのは何故か、といふ疑問に對しては答へ得ないにしろ、恐らくは此處により善い期待を私語いてくれる筈の、別の大劇作家の創作がある。彼は精神分析上の課程を容赦なく追究するのが好きなイプセンである。

或る助産婦の娘として生れたレベッカ・ガムヴイクは、養父ウエスト博士の教育によつて、自由思想の持主と成り、宗教上の信仰に基いた一種の道義觀を、いろいろな人生の願望へあてはめたがるやうな鎖は蔑視する風を養はれてゐた。博士の死後彼女が引取られて行つたロスメルスホルムは、一つの古い種族が住んでゐる祖先傳來の地であり、其處の住民は笑ふといふ事を知らず又、喜びを頑陋な義務遂行の犧牲に捧げきつた人々であつた。此のロスメルスホルムに、ヨハンネス・ロスメルといふ牧師が、病身で子種のない妻ベアーテと暮してゐる。此の貴族生れの男に對する愛情へ『野生的な抑制のない慾情』によつて捉へられたレベッカは、邪魔に成る彼の妻君を追拂つて終はうと決心した。此の際に大きに役立つたのが、彼女の『勇敢な、自由を愛する』如何なる顧慮をもものともしない意思である。レベッカは、彼の妻に一册の醫書を見せる。それには、子供を儲ける事が結婚の目的であると記載されてあるのだ。かくして、憐れな妻は自分の人妻としての資格について迷ひ始める。同時にレベッカは又、ロスメルが今將に、古陋な信仰をふり放して文明人の仲間入りをしようとしてゐるのだといふ事を、巧みに妻に向つて暗示する。妻は、夫の教へと考へ方には萬事盲從して來た女である。やがて、こんな風にして夫に對する道義

上の信頼を動搖させて置いてから、最後にレベッカは次の様な意味の事を言つて聞かせるのだ。『私は近々の中に、ロスメルとの道ならぬ關係の結果を祕密にするために家出をする』と。奸惡なプランは成功した。自分の無能力を悟つて世を儚んだ結果、憐れなベアーテは、自分が在つては愛する夫の幸福の邪魔に成ると思ひつめて、水車の橋から水へ飛込んでしまふ。

かうして、ロスメルスホルムでの、レベッカとロスメルの共同生活が何年か續けられて行くが二人の關係については、彼は、どこまでも純粹に精神的な、理想的の友情關係でありたいと考へてゐる。だが、やがて二人の關係の上へ、悲劇の結末を暗示する影がさすと共にロスメルの心中には、如何なる主旨から先妻ベアーテが自殺したのかといふ、疑惑が荐りに起つて、散々懊惱煩悶の末、彼はレベッカに二度目の妻と成つてくれと切願するのである。痛ましい過去を、新しい活潑な現實によつて忘れ去らうと考へたのだ。(第二幕)レベッカは、此の言葉をきいた一瞬間は歡びに震へる。が、次の瞬間にはもう、そんな事は不可能だと宣言して、萬一彼がこれ以上迫つて來るなら、彼女もまた、ベアーテの選んだ道を辿るだらうと答へる。ロスメルには、此の拒絕の眞意がまだ解らない。だが、之はレベッカの行爲と意圖とに就て彼よりも善く知つてゐる我々

に取つても、更にわけの解らない話である。然しレベツカの拒絶が眞劍な考へ方から出たものである事だけは、疑ひの餘地がないのだ。

大膽で自由を愛するこの冒險好きな女が、今と成つて提供された結果を摘み取ることを避けようとするのは、一體どういふ考へからなのであらうか。自分の願望實現への道を、凡ゆる顧慮を排して切拓いて來た彼女ではないか。その說明は、第四幕に於て彼女自身が與へてゐる。『恐しいのは今です、世界中の凡ゆる幸福が、持ちきれない程私の前に差出されてゐる今こそ、一番恐しい時なんです――それを受取つてしまへば、私といふ女の過去が、私の幸福への道を塞いでしまひます』と。つまり、レベツカの中に從來とは全然別の思想が生れたのだ。良心が覺醒したので、罪の意識が呼起されて、それが彼女に、幸福の結果を享樂する事を拒絶させたのだ。

では、彼女の良心を覺醒させたものは何か。先づ、レベツカ自身の言を聞いて見よう、さうした上で、それを全部信じてさしつかへないか否かを考へて見よう。レベツカは言ふ。『それがロスメル家の人生觀なんです――でなければ、尠くともあなた自身の人生觀です――お蔭で私の意思まで傳染してしまひました……あなたの人生觀は私の意思を病氣にしてしまつたんです。昨日ま

での私に取つて、何の價値も持たなかつた樣な法則でもつて、私の意思を奴隷にしてしまつた。あなたとの共同生活は――あなた、私の精神を貴族にして下さつたんです。』と。かうした影響力が、レベッカとロスメルの二人きりの共同生活實現によつて初めて現れたといふ事は受取れる話である。更に彼女は言ふ。『ぢつとして――一人ぼつちでゐるとき――あなたが御自分の思想を殘らず、少しも包み隱さずに私へ下さつた時――あなたがお感じになつた通りの優しい美しい心持のすべてを話して下さつた時――急に、大きな變化がやつて來たんです。』

右の科白のすぐ前のところで、レベッカは此の急激な變化の他の一面を訴へてゐる。『ロスメルスホルムが私の力を奪ひ取つてしまつた。だから、此處へ來てからといふもの、私の活潑な意思はすつかり萎けてしまつた。そして臺無しにされてしまつた！　もう駄目、一切萬事、どんな事でもやつてのけられる時代は過ぎてしまつたんです。ねえロスメル、私にはもう、動くだけの元氣もない。』

此の說明は、レベッカが、ロスメルとクロル校長（之は死んだベアーテの兄）の前で、問はず語りに、自分の犯罪を自白した後に言はれるのである。イプセンの微妙な手腕は、些細な特徵に

よつてよく、レベッカの言葉が噓でないことを感じさせるが然し、それは決して全部が正しいものでもないのである。偏見とか成心とかといふものを全部ぬきにして考へて見ても、彼女が年齢を一つだけ隱してゐる事は明白だし、それと同じに、二人の前でなされる彼女の自白もまた不完全であり、クロル校長の衝戟によつて、實際的な點の二三を補足されてゐるのだ。また我々に取つても、腑に落ち兼ねる點は、彼女の幸福への棄權の說明を、一方だけ與へて他を隱してゐるといふ事でなければならない。

ロスメルスホルムの空氣や貴族的なロスメルとの交際が、彼女を貴族的にし、彼女へ萎縮的な影響を及ぼした、と訴へる彼女の言を疑ぐる理由は、毛頭ないに相違ない。彼女は、彼女が知り、感じたままを述べてゐるのである。だが、それだからと言つて、彼女の心中に起つた事柄の全部を言ひ盡してゐるとは考へられない。尤も、レベッカには、何も一切に互つて淸算する必要がないかも知れないが、とに角、ロスメルの與へた影響は、ほんの外被でしかあり得なかつたので、その外被の背後に、もう一つの別な影響力が包まれてゐるのだ。その方向を示すものとして、一つの注目すべき特徵がある。

更に、彼女の自白後、最後の大詰の會話において、ロスメルはもう一度、彼女に妻になつてくれと懇願してゐる。彼は、自分への愛の爲に犯された彼女の罪を許したのだ。此處に至つて、彼女は如何にすべきかの返辭を與へない。如何なる許しも、彼女が奸智によつて憐れなベアーテを欺いたといふ慚愧を消す事は出來なかつた。却つて彼女は、別の非難を我と我が心へ向ける。これがまた我々には、此の自由思想の持主には似つかはしくなく感じられ、此處には斷じて無要の非難である事を思はせるのである。『おお、あなた、――二度とそんな事を言つてはいけません！それは不可能の事なんです――一體ロスメル、あんたは、私が過去を負うてゐる女だつて事を忘れたんですか』

此の言葉が、彼女が以前に他の男と性的交渉を持つてゐた事實を暗示するものである事は言ふまでもない。此處で注意したいのは、此の、彼女がまだ自由に氣儘に振舞つてゐた時代の、或る男との性的交渉こそ、彼女に取つては、ベアーテに對して眞實に犯した罪以上に、ロスメルとの結婚を妨げるより強い障碍であると考へられた事である。

ロスメルは、彼女の過去なんぞ聞きたくないと拒んだ。我々は此の過去の祕密を想像する事が

出來る。勿論、それが指示するやうな事柄は、少しも作中に暗示されてゐず、言はば、舞臺外の出來事となつてゐるのだが、十分豫想し得られるのだ。此の作者の手腕を以て組立てられた暗示が、觀衆の豫想を誤らしめるやうな事は無論有り得ない。

レベツカの其後の運命に對して決定的な價値を持つものは、彼女の最初の拒絶と、後の自白との間に現れてゐる。クロル校長がやつて來て、彼女の出生の祕密を敎へる事によつて彼女の心を屈服しようとするのだ。彼は、レベツカが私生子であり、母の死後にウエスト博士によつて養女とされた事實を知つてゐるのである。憎惡が、クロルの俊敏さを一層尖銳にした。が、その爲に何か別の事を言ひ出す考へはない。『本當を言ふと、之はあんたがよく御承知だと思ふんですがね。いや、御存知なかつたにしろ、あんたがあのウエスト博士の養女となりなすつた事は、何と言つても奇妙な話だつたぢやありませんか――博士があんたを引取つたのは、あんたの母親が死んで直ぐでしたな。博士はあんたをずゐぶんひどい目に遭はした。それでもあんたはくつついてゐなすつた。あんたは、博士が一文の遺產もくれないだらうといふ事も知つてゐた。その通りあんたが貰つたのは書物が一箱だけだつた。それでもあんたは辛抱し續けて、博士の氣難し屋を耐へ、

博士の臨終まで見とりなすつた——博士に對するあんたの態度を、私は親子の本能からだと歸納しますよ。それから後のあんたのやり方つてものは、あれは、あんたの生れから來た當然の成行きだと思ひますな。』

だが、此處にクロルの誤信がある。レベッカ自身は、自分がウエスト博士の實の娘であるといふ事實に就ては全然知つてゐなかつたのだ。クロルが、彼女の過去へいろいろな恐しいあてこすりを始めても、彼女は自分の事ぢやないのだと思つてゐる。やがて、クロルの諷刺が何に向けられてゐたかを氣づいた時、それでも暫くはまだ、彼女は落ちついてゐる事が出來た。レベッカは、クロルの嫌がらせの理由が、以前の訪問の時に自分の年齢を僞つたことにあると信じたからである。だが、續いてクロルは、彼女の反問を勝誇つた顏でやつつけた。『かも知れんな、あんたの計算の方が當つてゐるかも知れんよ。なにしろ、博士は赴任する一年前にも、一寸此處へ立寄つた事があるんだから』此の新しい報告が、彼女の凡ゆる支點を奪つたのである。『嘘だ』——レベッカは歩き廻つて、激しく兩手をこすり合はせる。『そんな不可能な事が。あなたは私にたきつけようといふんですね。そんな事が絕對にあり得るもんですか。嘘にきまつてます。絕對永久に——』

昏亂顚倒した彼女は、もう、クロルの言を歸納する事が出來なかつた。

クロル。だがあんた――何だつてまあそんなに、興奮なさるんだね。私を脅さうつてのか。いつたいこれはどうした事だ……。

レベツカ。何でもないんです。あなたは何も心配したり考へたりする事はありません。

クロル。ぢやあ、本當のところを説明して貰ひませう。今の話が、何故さうあんたの心を驚かしたんです?

レベツカ。(復び我に返つて) 簡單ですわ。校長先生。とも角私、私生子だなんて言はれるのは面白かありませんもの。

レベツカの態度に於ける謎は、唯一つの解答を與へるだけである。ウエスト博士が彼女の父親だといふ報告は、およそ彼女を驚かし得る最大の打擊だつた。彼女は、ひとり養女たるに止まらず、實はまた博士の愛人でもあつたのである。最初、クロル校長が話をきり出した時、彼女は、彼が此の關係をあてこすつてゐるのだと解した。それだけの事なら、明らかに彼女の自由思想と

いふ立場で甘受し得たに違ひない。だが、彼女の推察は外れてゐた。校長が、此の養父と養女の間にそんな情的關係があつたとは全然知らなかつた事、恰度、彼女が、博士を實の父親であるとは露知らなかつたのと同じだつた。レベッカをしてロスメルの最後の申出でをも拒ませたその眞の意義は、かうした養父との情的關係に他ならない。彼女は、ロスメルの妻となる資格を失ふやうな過去を負うてゐたのだ。恐らく彼女は、もしロスメルが欲したなら、自分の祕密の一半だけは打明けたらうけれど、その一番重大な點は隱したに相違ない。

此處に至つて、何故彼女が、自分の過去を、ベアーテを自殺させた罪にも優つた、ロスメルとの結婚の障碍であると信じたのかが、異議なく理解されて來る。

レベッカは、自分がかつて愛人としてゐたのが眞實の父であつたと知つて後は、今度は、異常な力で現れて來た罪の自覺にすつかり打負かされて終ふ。彼女は、ロスメルとクロルの前で懺悔をし、それによつて自分の人殺しである事を肯定した上、かつてはその犯罪によつてきり拓いた幸福への道を、決定的に思ひ捨てて、旅に出る支度をする。然しながら、最後の一線で彼女を粉碎せしめた過去の罪の意識については、その本當の主旨（モティフ）は何處までも祕密にされたままだつた。

此處で我々が感ずるのは、ロスメルスホルムの空氣とロスメル自身の德義的影響とは、全然違つたものがまだ何處かにある事だ。

此處まで突進んだ以上、今更、異議を持出すのに遠慮は無用であらう。その異議が釋明せられて初めて、凡ゆる疑念も氷解され得るのである。レベツカがロスメルの申出でに對する最初の拒絕によつて、クロル校長の再度の訪問が招來されたのだから、つまりこれは、彼女の私生子であるといふことがまだ發覺しない中であり、同時にそれはまた、彼女がまだ自分の不倫を知らなかつた時でなければならない——作者を正しく理解すればさう言へるのだ。ところが、それにしては此の第一回の時の拒絕は餘りに激しくかつ眞劍である。して見ると、彼女に殘酷な行爲による幸福の結果への棄權を命じた罪の意識は、不倫といふ本元の罪を認知する以前に、既に働いてゐたわけだ。假りに一步讓つて此の點を是認すると、從つて今度は、大いなる罪の自覺の本源としての不倫といふ意義が非常に減殺されなければならない。

さて、我々は此處まで、レベツカとウエストを實在の人間の如くに扱ひ、それが、批判の知性から誘導されたイプセンの空想の所產であることを、忘れたかの如くだつた。我々が、此の異議

の解決に當つて、先づその立脚點を確立しようと試みる事は許されるだらう。此の異議は確かに惡くない。レベッカの胸中には、過去の不倫行爲を認知せぬうちにも、一片の良心が覺醒されてゐたのだ。彼女の變化の原因を良心の發動に求める事を妨げるものは一つもない。レベッカ自身がその事實を告白し訴へてゐるのだ。だが然し、之を以て直ちに第二段の主旨（モティフ）の認知（不倫の事實の認知）を解く事は出來ない。クロル校長から事實を聞かされた際の彼女の態度と、それに直接引續いて現れた告白による反應とを考へ合はせれば、幸福の棄權への決定的主旨（モティフ）がより強烈な偉力を揮ひ始めたのは、その時が初めてである事は疑ふ餘地がない。此處にはさまざまな主旨（モティフ）の中の一つの場合が現れたので、それによつて、表面的な主旨（モティフ）の背後に匿れたより深い主旨（モティフ）が暴露されたのである。此の事件にかういふ形を與へたのが、言ふところの詩的經濟法の掟で、かかるより深い主旨（モティフ）といふものは、聲高に、說明さるべきでない。どこまでも包匿して、劇場の觀客の隨意な知覺や、或は又讀者のそれから遠ざけて置く必要があるのだ。さもないと、かうした重大な抵抗の際に悲痛の感情のあまり總立ちとなつて、折角の演劇の効果さへ疑問となる恐れがある。

だが、當然要求されてよいのは、第一の主旨（モティフ）が、その背後に藏された第二の主旨（モティフ）と、何等かの

內的な關聯を深めなければいけないといふ事である。むしろそれは、後者から生れた一つの綏和されたもの、演繹されたものとして現される必要がある。我々が、作者の意識した詩的組合せが結果を誤らず、無意識の假定から躍り出て來たことを信賴し得るなら、また我々は、作者によつて如上の要求が滿たされてゐる事をも示す事も出來る筈だ。レベッカの罪の意識は、まだ、クロル校長の分析的俊敏さによつて自覺させられぬ前から、不倫といふ過去の罪を源泉として現れてゐた。今イプセンによつて暗示された彼女の過去を、順を追うて補足的に組立て直して見ると、かう言ふ事が出來る。レベッカは、母親とウエスト博士との隱約な關係を夢にも知らなかつたのである。恐らく、博士によつて母の役目の二代目とされた時、彼女は非常な印象を與へられたに相違ない。彼女を支配したものはエヂプス混和(コムプレックス)であつた。彼女自身は知らなかつたにせよ、彼女の場合は、かうした一般的空想の現實化だつたのである。やがて、ロスメルスホルムへ來た時、彼女は前の初めての體驗の內的な權力(ちから)に驅立てられて、勇敢な實行によつて同じ形勢を誘引しようとした。卽ち、最初は無意識の裡に實現された、ウエスト博士に對して母の位置に取つて代るといふ情勢を、今度は、ロスメルに對してベアーテの位置に取つて代らうとしたのである。いか

に彼女が、自分の意思に反しつつも、歩一歩とベアーテの排撃手段に引きずられて行つたか彼女は實に確信に滿ちた力强さで、次のやうに言つてゐるのだ。

『でも本當になさるでせうか、私はそりや大膽極まる考へを回らして實行したんです。あの頃はとに角、かうしてお二人の前で喋つてゐる私とは、大變違つてをりました。それからやがて、私は、一人の人間の中には二つの種類の意思がある事を考へずにゐられなくなりました。私はベアーテさんを押しのけてやらうと思つた、何とかして。然し、それでゐて私は、實際にさうなるだらうなんて事は信じなかつたんです。私が、追立てられるやうに思ひきつて一歩踏出すと、その都度、心の中で何か、もうおよし！　一足もそれ以上進めてはいけない！　と叫ぶ聲がありました。――それでもなんでも、私は止められなかつた。もう一足、一寸でもと進まずにゐられなかつた。もう一寸、もう一歩――何處までも驅立てられた――さうして、到頭あそこまで行つてしまつたんです。ああした大變な事はかういふ風にして起るものなんです。』

之は決して辯解でない、寧ろ眞實の自己淸算である。ロスメルスホルムで彼女が味はつた事件、卽ち、ロスメルへの愛着と、その妻ベアーテへの敵視とが旣に、エヂプス混和（コムプレツクス）の結果であり、

母及びウエスト博士に對する關係への、强ひられた摸倣だつた。

從つて、ロスメルの求婚をはねつけさせた最初の場合の罪の自覺も、根本に於てはクロル校長の話をきかされた後で告白を强ひたより大きな罪の自覺と、差別はない。ウエスト博士の影響を受けて、自由思想の持主となり宗教的道德觀の輕蔑者となつたやうに、今度は、ロスメルへの新しい戀愛を通じて、良心的な、貴族的な人間へ轉身したのである。レベッカは、自分の心的過程に就て之だけの事を自ら理解してゐた。だからこそ、自分の心持の變つた主旨(モティフ)を、當然ロスメルの影響によるものだと言つたのである。

或る家庭へ、下婢、女徒弟、もしくは家政婦として傭はれた少女が、いかによく、又は殆ど例外なしに、意識すると無意識であるとに論なく、一種の白日夢を描くものであるかを、精神分析の仕事に從事する醫師はよく知つてゐる。その夢の內容こそ、前に言つたエヂプス混和(コンプレックス)から發してゐるもので、何等かの機會によつて家庭の主婦が主婦たる位置を失ひ、自分がその代りになる事があらうといふ空想の願望だ。ロスメルスホルムは、かかるありふれた少女の空想を扱つた種類での、最大の傑作である。一篇の作意を悲劇的にするものは、女主役(ヘルディン)の白日夢と全然一致す

る現實が、彼女の過去に豫め行はれてゐたといふ事實である。

(*)ロスメルスホルムの中に不倫の主題(テエマ)がある事に就ては、一九一二年に發表されたO・ランクの大著、『作意と傳說に現れた不倫主旨(モテイフ)』(O. Rank, Das Inzestmotiv in Dichtung und Sage) の中でも、既に、右と同様な方法によつて立證されてゐる。

さて、以上長々と作品の事にばかり拘づらつて來たが、此の邊で今度は、醫師としての實驗に立歸らう。だがそれもほんの、兩者に於ける完全な合致を確立するための、數言に過ぎない。卽ち、精神分析の仕事によつて我々は次の事實を敎へられるのである。人間の良心の力といふものは今までの例と異つて、彼の願望が拒絕された場合でなく、彼の願望した結果に行き着いた時に之を發病せしめ、エヂプス混和(コンプレツクス)と密接な關聯を持つもの、卽ち、父及び母に對する關係、恐らくは、我々の罪の意識一般と密接の關係を有するものである。と。

三　罪の意識による犯罪者

人間の青年時代に就てのいろいろな報告、別して成熟前期の年輩に關する報告を調べて見ると、後には非常に端正な紳士或は淑女となつてゐる樣な人々が、許すべからざる行爲を、卽ち盜み、詐欺、乃至はまた放火等の犯罪行爲を、それ等の時代に働いてゐた事が往々にして發見される。私は之まで、かうした報告に接しても、かかる成熟前期の時代に在つては、明白に道德的防壓力が薄弱なのであるといふ說明だけで、格別穿鑿もせず看過すと共に、それを、一つの重大な意義ある聯繫へ配列して見ようともしなかつた。ところが到頭、極めて明白な、また一層都合のよい場合、卽ち患者が私の治療を受けてゐた間に、それ等の患者の少年時代に行はれたかかる過失の幾多の實例を知ることによつて、かうした偶然的突發への、より徹底的な硏究を、促進されるに至つたのである。此の硏究によつてもたらされた精神分析の仕事（アルバイト）の收穫には、實に驚くべきものがあつた。かかる行爲を實現させた理由は、先づ第一に、それが禁じられた行爲であるからといふ事、その行爲を實行する事が、犯行者自身の心的負擔を輕減する事と密接な關係があつた事等である。どうしてさういふ强迫感を受けるのかは知らないが、とに角、これを犯すと恐しい罪になるぞ、といふ猛烈な罪惡意識の壓迫に惱まされる場合、その犯罪を實行してしまふと、却つて

強迫感が和げられるといふのだ。尠くとも、かかる罪の意識には何ものかが藏されてゐなければならない。

逆說的に聞えるかも知れないが、罪の意識は犯罪が實行される以前に在つたのである、と主張せざるを得ないのである。卽ち、犯罪が、罪の意識によつて生れるのでなく、むしろ逆に、罪の意識が犯罪を實行させるのだ。かかる人々に對しては、罪惡意識からの犯罪者と呼ぶのが當然であらう。罪惡感の先住が、他の幾多の表出や影響力によつて立證される事は言ふまでもない。

然しながら、科學上の仕事(アルバイト)の目的は、異常な珍奇を確立する事ではない。此處で解かれるべき一個の第二段の質疑は、此の幽暗な罪惡感が、その實行に先だつて存在するのは果して何に由るか、また、人間の犯罪を惹き起す原因には果して眞にかうした種類のものが淺からぬ關與を持つてゐるのか、といふ事である。

第一の質疑の追究に答へるものは、一般に、人間の罪惡感の根源に關する知識だ。精神分析學の理路整然たる收穫によると、かかる幽暗な罪惡感はエヂプス混和(コンプレックス)に端を發し、二つの大きな犯罪的意圖、卽ち父を殺して母と性的交渉を結ばうとする意圖への反應であるとされる。此の兩

者と比較すれば、確かに、罪惡感の凝着に對して行はれた犯罪が、その强迫に惱まされてゐる者の心的負擔を輕減する事は眞實である。此處で想ひ起さずにゐられないのは、父を殺し母と不倫を行ふといふ事が、人間の犯し得る罪の最大なる二つである事だ。原始の社會集團でも、之だけは、大罪として罪を問はれ、嫌忌されてゐた。もう一つ考へなければならぬ事がある。それは、我々が、別の研究の探索によつて次のやうな事實を殆ど承認しようとしてゐる事だ。卽ち、いま繼承された精神力として現れてゐる人間の良心は、元來、エヂプス混和によつて與へられたものである、といふ事實だ。

また第二の質疑は、精神分析學の答辯し得る限界でない。人間は、子供達を見ると一も二もなく『此の子は惡くなるだらう』と考へるが、之は、子供たちの方に刑罰を受けたいといふ親をそそのかす心持があるからである。だからして、刑罰を貰つてしまふと、後は滿足して大人しくなるのだ。後に出て來る精神分析の探求は、子供等をして刑罰を望ましめる罪惡感の痕跡とぶつかる場合が往々にして在る。成熟した人間の犯罪に就ては、恐らく、罪惡感なしで犯罪が行はれる、といふ樣な事は有り得ない。之等の場合は、或は道德上の防壓が發達してゐないか、或は、社會

集團との爭鬪に於て、自分の行爲を善いと信じてゐるのである。然しながら、大多數の犯罪者の場合では、その犯行へのかかる主旨（モティフ）解釋を參考にする事は非常に善い事であらう。刑罰の法律といふものが、本來は此の大多數の犯罪者に對して規定されたのであるから、犯罪者の精神狀態に於ける幾多の不明な點を明らかにすると共に、また、刑罰そのものにも、一つの新しい精神上の基礎を與へる事が出來るに違ひない。

かく考へ終つた時、一友人が私に注意してくれた。『罪惡感による犯罪者』といふ見方は、ニイチエも言つてゐる、と。罪惡感の先住と、その合理化としての犯罪實行とは、彼のツアラツストラにある『蒼白な犯罪者に就て』の辯中に仄見されるものがある。我々が、犯罪者のどれだけ多くを彼の所謂『蒼白な』者の中に數ふべきか、の裁定に就ては今後の探究に待つとしよう。

不氣味なるもの

一

精神分析學者が、審美學上の吟味といふ事柄に就て興味を寄せる場合はごく稀だが、その場合でも、審美學を『美に就ての學』として制限せず、寧ろ『人間の五感の種類に關する學』として考へるなら、全く左様な興味を感じないのである。精神分析學者の仕事(アルバイト)は精神生活の別の層の中に在るので、專ら審美學の素材をなすところの妨害され、制限された感情活動、即ち餘りにも多くの隨伴情勢に拘束された感情活動の類に就ては、關知する事少い筈である。にも拘らず、往々にして審美學の特定範域を犯さねばならぬ場合が一再でないが、そんな場合に精神分析學者の扱ふ審美學範域といふものは、通常、審美學の專門家から等閑視され、輕視された、凡そ審美學とは緣の遠い範域であるのを常とする。

此處に取上げた『不氣味なるもの』は、實にその範域に屬する事柄である。勿論、これが怖しきもの、恐怖と戰慄とを抱かしめるものである事は言ふまでもないが、また、之等の言葉が絕對に特定された意義に於て使用されてゐるものでない事も確かである。言はば、多くは『恐怖を喚

び起すもの』といふ一語に合致するのが一般の場合なのである。だがそれにしても、此處で豫期し得る事は、特殊な概念の使用を是認し正當とする一つの特殊な核心が存在する、といふ事だ。では、一般に『怖しきもの』の中から、特に一つの『不氣味なるもの』の抽出を許すところの普遍的な核心とは何であるか。これが我々の知りたい點でなければならない。

之に就ては、無にも等しい程の夥しい說明が、審美學の敍述中に發見されるのであるが寧ろそれ等の說明に取扱はれた事柄といふものは、美とか壯麗とか魅力とかの、言はば積極的陽性的な感情種類と、並にそれ等の感情を喚び起した條件と對象とであつて、その反對のもの、つまり嫌忌とか苦痛とか言つた消極的陰性的の感情種類は、扱はれてはゐないのである。醫學上並に心理學上の立場から見て、私の知つてゐるものは唯一つ、イエンチュの論文があるのみだが、これとても藏された意味は深長だが、說くところは十分でない。

* E. Jench ; Zur psychologie des Unheimlichen, Psychiatrie—neurolog. Wochenschrift. 1906. Nr. 22 uud 23.

勿論、此處でお斷りして置かねばならぬ事は、此の小論文に對する學說は、誰もが豫想し得る

時代的理由によつて、殊にはそれが外國語で書かれてあるところから、徹底的に檢出されてゐない事である。これが、此の論文を、何等の優先的要求なしに持出させた所以なのである。

『不氣味なるもの』の研究は至難の業である、とイェンチュが嘆じたのも道理（ことわり）、かかる感情種類に對する感覺といふものは、文字どほり各人各說、人によつてさまざまな相違が現れて來る。かうした新しい研究を企てる者は、寧ろ、大きな敏感さを必要とするかかる事柄に於て、却つて自分の特別な鈍感さを訴へずにゐられないのである。彼は、自分の感情に對して不氣味なるものの印象を與へた事象が果して何であるかを、もう永いことまるで體驗してゐなかつたし、或はまた全然覺えもなかつた。だから、先づさうした感情の中へ自分を置き換へ、その可能性を自分の中に喚覺まして見る必要がある。然雖（とはいへ）、かかる種類の困難さといふものは、審美學上の多數の他の範域に在つても亦大きい。從つて我々は絕望する必要はないのだ。疑はしい性質が、一般から何等の矛盾なしに認識されて居るといふ種々な場合が、必ずや現れて來るに相違ないのである。

さて、此處で我々は二つの道を取ることが出來る。その一つは卽ち、『不氣味な』といふ言語に於ける發展がどんな意義を孕んでゐるかを穿鑿することであり、他の一つは、人間に、事物に、

五官印象に、體驗に、狀況に就て、『不氣味なるもの』の感情が我々に喚び起すものの何であるかを蒐集してみる事である。その上で、『不氣味なるもの』の掩蔽された性質を、一つの凡ゆる場合に共通する普遍性から推知するのだ。卽座に打明けて言ふなら、此の二つの道の歸するところは同一の結末であつて、『不氣味なるもの』もつまりは『怖しきもの』と言ふ、かの昔から周知の、誰にも習熟された感情種類にほかならないのである。では如何にしたら、どんな條件があつて、萬民に習熟された事柄が、不氣味な、戰慄すべきものとなり得るのか。之に就ては追々に說明して行くことにするが、更にもう一つ注意して置きたいのは、かうした硏究が、事實に於て個々の場合の蒐集を土臺としての道である事、またその確認が、言語用法を根據として初めて見出された、といふ事である。だが、此處の說明に於ては、私は逆の道を取るであらう。

ドイツ語の『不氣味な』(unheimlich) といふ言葉が、『親しき』(heimlich)『馴染みの』(heimisch)『熟知の』(vertraut) 等の反對なものである事は明白だ。結局それは、見た事のない、熟知しない事柄であるところから、何か『怖しい』といふ感じが來るのだと言へよう。だが、さればと言つて何でも目新しいもの、見なれないものが、悉く怖しいものではないこと勿論である。此

の關聯は裏返しが出來ないものである。だから、新奇なるものは往々にして恐怖され易く、又不氣味に感じられ易い、といふ事だけは言へるので、或る二三の新奇なものが恐怖されたからと言つて、それを萬般にあてはめる事は出來ない。先づ新奇なもの、見なれぬものへ、何か、それ等を『不氣味なもの』たらしめるところの或るものが附加へられる必要があるのだ。

イエンチユの意見では、大體かかる『不氣味なるものの、新奇なるもの、見なれざるもの』への關聯だけで足れりとしてゐる。彼は、不氣味な感じの實現に對する實體的條件を、知識上の不確かさの中に見出した。元來『不氣味な』といふ心持は常に、言はば全然知らなかつたといふ事柄の中に在つたには相違ない。人間が外界を征服すればするほど、外界に於ける事象や現象から『不氣味なるもの』の印象を蒙ることは尠くなる筈である。

かかる説明の十全的でない事は、容易に判斷される。そのために此處で、(不氣味なもの)=(見なれざる事)の類似に就て研究して見よう。先づ第一に考へられるのが他の外國の言語である。だが、我々の參照しようとする辭典は、何等新奇なるものを敎へはしない。恐らく之は、我々自身が外國語を話す者であるといふ理由からに過ぎないのであらう。いやそればかりでない、此の

怖るべきものといふ特殊なヌアンズに對する一つの言葉が、多數の國語中から離れ變化してゐる、といふ印象を與へられるのである。

(*) 以下の抽出引用に就ては、Th. Reik に感謝の義務を負ふものである。

ラテン（K・E・ゲオルグ氏、獨羅小辭典一八九八年版）不氣味なる場所——locus suspectus. 不氣味なる夜の時に——intempesta nocte.

ギリシャ（ロスト及びシエンクル氏辭典）ξένος——即ち、奇異なる、見なれざるの意味である。

イギリス（ルカス、ベロウ、フリユウゲル、ムレットーザンゲルの諸辭典）uncomfortable, uneasy, gloomy, dismal, uncanny, ghastly, 家についてはhaunted, 人間ならば a repulsive fellow.

フランス（ザックスーヴイラッテ）inquietant, sinistre, lugubre, mal a son aise,

スペイン（トルハウゼン一八八九年版）sospechoso, de mal agüero, lugubre siniestro.

イタリイ語とポルトガル語の方は、單に書き直し(ウムシュライブング)と見做しても十分であらう。アラビアとヘブライでは『不氣味な』といふ言葉は『惡魔の』とか『物凄き』とかいふ言葉と合致してゐる。

そこで今度はドイツの國語へ戻らう。

ダニエル・ザンデルスのドイツ語辭典（一八六〇年版）を披くと、『馴染みの』(heimlich)といふ言葉には次のやうな說明が見出される。それ等を此處に悉く省略なしに書き寫して、その中から、此處彼處と抽出して見ようと思ふのである。（原書では此處に四六倍版約三頁に亙つて、細字にぎつしり、辭典からの引用があるのだが、餘りに煩はしいから省かしてもらふ。篤志の方は前記ドイツ辭典の卷一七二九頁を參照されたい。——譯者）

我々に取つて、此の長々とした引用中一番に興味があるのは、此の『馴染みの』(heimlich)といふ小句が、その意義の種々さまざまなヌアンズの下に、その反對語であるところの『不氣味な』(unheimlich)といふ言葉に、全然合致する一つのヌアンズを示してゐるといふ事實である。つまり、『馴染みの』といふ言葉は『不氣味な』といふ言葉の對立語である。例へばグッコウの用語に

『僕たちはそれを不氣味だと言ふのに、君はそれを馴染みのものだと言ふ』とある。一般に我々が思ひ出すことは、此のハイムリッヒ（heimlich）といふ言葉が一義的のものでなく、寧ろ二つの概念圈に從屬してゐる言葉であると言ふことだ。それは對立的ではないが、とも角はつきりと異つた概念圈で、一つは親愛と安住を現す意義、一つは隱匿と祕密を現す意義である。ところで unheimlich（不氣味なる）といふ言葉はどうかといふと、單に前の第一の概念圈の意義に對する對立語を現してゐるだけで、第二の概念圈の意義に對する對立語としては通用されないのである。果して此の二つの意義の間に、何等かの發生語原的關聯があつたか否か。これに關しては、ザンデルス辭典では全然知る事が出來ない。之に反して、シェリングの注意書きを注意して讀むと、unheimlich といふ言葉の概念內容に就て、或る全然新しい說明が與へられてをり、此の說明に基けば、我々の期待はまんざら退けられもしないのである。およそ、一つの祕密が匿されてあつた筈のものが現れて來る、といふ事は、總て不氣味な（unheimlich）事でなければならない。

かやうにして惹起された疑念に解說を與へるのが、ヤコブ及びヰルヘルム・グリンムのドイツ

語辭典である、（ライプチヒ、一八七七年版、二ノ四、八七四頁）

Heimlich 少しく別の意義に於ては、快よい、不安を離脱したの意……

b、また幽靈惡鬼等が出現する事のない場所を意味する……

八七五頁。

β、信賴された。親しき、うちまかせた。

4、故鄕の、我家の……等の意義から一層發展して、他人の眼を免れた、匿された、祕密の、等さまざまな關聯に於て意義づけられる……

八七六頁。

湖畔の左に

弱りきつた木造の一軒家（eine matte heimlich）がある。（シラアのテル第一幕、四景）

八七八頁。

6、認識に對する heimlich は、神祕の、寓意の、といふ意義。

次の場合に於ては異りたる意義あり、認知を免れたるもの、意識されざる、等。更に、隱蔽さ

れたる、の意義もある。探求と關聯しては不可入、不可侵の意。等

卽ち heimlich といふ言葉は『馴染みの』及び『祕密の』といふ二樣の意義から發展して、最後にはその對立語である unheimlich（不氣味なる）といふ言葉と合致したのである。不氣味なるものはとにかく祕密なるものの一種に相違ない。だが之等のまだ完全に說明されない結論を、『不氣味なるもの』といふ言語に對するシエリングの定義と關聯させる事は出來ない。之に對する指示は、『不氣味なるもの』の凡ゆる場合に於ける個々の檢討が了解させてくれるであらう。

二

假にいま、我々に對して『不氣味なるもの』の感じを特に強く、且明瞭に喚起し得るやうな人間、事物、印象、實例、狀況等の審査をやつて見るなら、その都合よき最初の例の選擇が次の切實な要求である事は明白だ。E・イエンチュが特筆すべき場合として擧げてゐるのは『外見上は生きてゐると見える物體に生命を與へ得る事の疑問。並にその逆、卽ち、生命のない對象を幾ら

かでも生かす事が出來ないか、といふ疑問』である。これ等の疑問は、蠟細工の人像や、精巧な人形、自動人形、等を見た際に受ける印象から喚起されるもので、イエンチュは此の疑問に對して癲癇發作の不氣味さと、精神錯亂の表現の不氣味さとを聯繫させてゐる。と言ふのは、さういつた患者の發作狀態が、觀察者に對して何か自動的――器械的な操作を想ひ起さしめるといふ理由からであり、またそれ等の器械的操作は、生命賦與の見なれた繪畫の背後に匿されてゐるかも知れない、といふのである。

さて、此の論者の說明には暫く耳を傾けない事として、今度は我々自身の穿鑿を彼自身に對して結びつけて見よう。と言ふのは、我々をして更に一人の詩人を想起せしめた者は、彼自身だつたのであるし、此の詩人こそ、不氣味なる効果の生產に就ては他に比類を見ない作家だつたからである。

イエンチュはかう敍べてゐる『およそ不氣味なる印象的効果を物語りによつて喚起すべき、最も的確な藝術的手練は歸するところこれである。即ち、讀者をして無意識の中に、或る特定の形像、人物、乃至は或る器械を目前に見る如き感を抱かしめ、而もその曖昧不確實な點は直接讀者

の注意の焦點には現さず、從つて、讀者をして直に不審と穿鑿の心を誘致することなく、かくして、既に述べた如く、その特殊な感覺効果を易々と眩惑せしめるのだ。エ・チ・ア・ホツフマンこそは、彼の幻想的諸作に當つて、かかる心理學的操作を繰返しつつ、完全な成功を示した作家である。』

かうした意見は、別して、小說『砂男(サンドマン)』や『怪談集(ナハトスチユツケン)』(グリイゼバツハ版ホツフマン全集第三卷)等の諸作に對しては確かに當つてゐる。かのオツフエンバツハのオペル『ホツフマン物語り』第一幕に出て來る人形オリムピアの姿などは、實にかうした創作から生れたのである。だが私は言はざるを得ない。――さうして之等の作品の大多數の讀者が私の意見に賛成するであらうと期待する者であるが、かの生きてゐるかに見える人形オリムピアただ一人が、比類なき此の物語りの不氣味な印象効果の任務を果してゐるものでは斷じて無いのである。いやそれどころか、さうした印象的効果が、第一線に此の人形へ歸せしめられてはならないのである。さうする事は、此の作品の効果に取つても有利ではない。オリムピアの挿話といふものは作者自身によつて、物語りの、諷刺への輕い轉向を示したものであり、またそれによつて若い男の側から言へば、戀愛の過

重に對する嘲弄に利用されてゐるのである。物語りの中軸を成すものは寧ろ別箇の素因（モメント）だ。それによつて物語りの題名が冠せられ、また、危機一髪といふ場合には、これがいつでも再現してゐるのである。卽ち子供たちの眼を奪ふ『砂男（ザンドマン）』それ自體が主旨（モチイフ）なのである。

大學生ナタニイルの幼時の追憶を以て此の幻想小說は始まるのだが、彼は、現在の幸福にも拘らず、呪はしい幼年時代の記憶を追拂つてしまふことが出來ないでゐる。それを彼は、自分を可愛がつてくれた父親の、謎めいた恐しい死と勝手に結びつけて考へてゐる。

或る特定の晩が來ると、子供たちの母親は決つて『そら砂男（ザンドマン）が來るよ』と脅してベットへ追ひやつた。而もその場合、子供たちは實際に、そんな晩に限つて、父親に面會に來る或る訪問客の重い足音を耳にするのが常だつた。母親に訊くと、頭から否定して、そんなものは唯の譬へ話に過ぎないと言ふ。だが乳母は、もつとはつきりした說明を與へた。『砂男（ザンドマン）といふのは大變惡い男で、ベットへ行くのを嫌がる子供がゐるとすぐやつて來ます。そしてその子供の眼の中へ一握りの砂を投げ込んで、子供たちは血だらけになつて仆れます。さうすると、砂男（ザンドマン）はその子供を袋の中へ抛り込んで、半月の晩に、自分の子供たちの爲にそれを燒きに行くんです。砂男（ザンドマン）のお家（うち）では大勢

の子供たちが坐つてます、そしてまるで梟(ふくろふ)のやうに曲つた嘴で、お行儀の惡い子供の眼をほぢくり出すんですとさ。』

少年ナタニイルが、成長し理解力も十分に具つてからは、こんな戰慄すべき惡行を砂男(ザンドマン)と結びつけて考へるやうな事は、避け得た筈である。にも拘らず砂男(ザンドマン)そのものに對する恐怖は、依然として彼の心を去らなかつた。で一夜、砂男(ザンドマン)の正體を見屆けてやらうと決心し、刻限をはかつて、父親の部屋に匿れて居つた。砂男(ザンドマン)だと思つた訪問客は代言人のコッペリウスだつた。之は、豫々(かねがね)子供たちから嫌惡されてゐる意地惡の男である。此の男がどうかして晝間にでもやつて來ようものなら、子供たちは怖氣をふるつて寄りつかないのを常とした。つまり、恐るべき砂男(ザンドマン)はコッペリウスと同化されたのである。さて、此の情景の以後の發展に就ては、これを恐怖に憑(つ)かれた少年の精神錯亂と解したらよいのか、それともまた、小説の再現する世界に於ての眞實(レアル)として見做さるべき、一つの報告と解したらいいのか。此の點に關しては、既に作者自身の態度が頗る疑はしいのである。

父親と訪問客「コッペリウス」は、爐の傍で灼熱の火中に何か拵へようとしてゐる。物陰から

容子を窺つてゐた少年の耳には、コッペリウスの『眼を出せ、眼を出せ』と叫ぶ聲が聞えた。少年は悲鳴を擧げる。さうしてコッペリウスのために見あらはされて捉へられる。コッペリウスは、火焰の中から取出した赤熱の球を少年の眼へ投げ入れようとする。父親は、子供の眼だけは勘辨してくれと哀願する。かうして、失心と永い間の病氣とによつて、此の恐しい體驗は終りを告げるのである。

さて、小說『砂男』の合理的な說明を是認する人は、少年のかかる幻想の中に、乳母から聞かされた物語りの影響が働いてゐる事を見逃さないであらう。乳母の話して聞かせたのは砂粒だつたが、此處ではそれが赤熱した火の球となつてゐる。何れにしても、それを眼の中へ入れられると眼球が飛び出してしまふのである。その後一年たつて、やはり砂男卽ちコッペリウスがやつて來た時、父親は爐の爆發によつて變死を遂げ、代言人コッペリウスは影も殘さず何處へか失踪してしまふ。

大學生となつたナタニイルは、かうした少年時代の恐怖人物の姿を、光學者と稱するイタリイの浮浪人ジウゼッペ・コッポラの中に見出す。光學者はナタニイルに晴雨計を買つてくれと勸め

拒絶されると更にかう言ふのである。

『之はしたり、晴雨計に御用がないと！　――では眼玉も御座いまする――美しい眼玉ぢや。』

びつくりしたナタニイルは、取出された眼玉といふのが實は普通の眼鏡だつたのでほつとする。彼は此の男からポケツト用の望遠鏡を買ひ取り、それでもつて向側のスパランツアニ教授の住居の方を覗いて見る。そこには、教授の娘オリムピアがゐた。美しいが、滅多に口もきかず、餘り身動きもしない謎の娘である。

ぢきに彼はオリムピアに惚れ込んで、悧發で眞面目な約婚者の事もすつかり忘れてしまふ。だが、オリムピアは自動人形だつた。ぜんまい仕掛はスパランツアニが作り、眼球はコツポラ、卽ち砂男がはめこんだ細工である。偶々、此の二人の山師が仕事のことで喧嘩をしてゐるところへナタニイルが來合せる。光學者コツポラは、眼球のない木製の人形を引抱へて飛び出した。スパランツアニ教授は、ナタニイルの胸へ、床のうへに落ち轉つてゐたオリムピアの血だらけな眼球を、投げつけて呶鳴る。

『そいつは貴樣のところからコツポラが盜んで來たんだ』

復び、ナタニイルに新たな精神錯亂の發作が現れる。此の發作には、亡父の最後の記憶が生々と蘇つてゐる。

『ヘッ、面白いぞ、やれやれ！　――火の玉だ――火の環だ！　背中を向けろ、火の環だ――愉快――愉快！　木の人形、素敵だ！　別嬪の人形さん背中を向けろ――』から叫びながら、彼はオリムピアの假の父親である教授に飛びかかつて、首をしめ上げようとする。

やがて、長時日に亙つた重病から意識を取戻したナタニイルは、到頭全快したやうである。彼は、再會した婚約の少女と結婚する氣になつた。ある日、二人が町へ散歩に出かけると、高い議事堂の塔が巨大な影を投げてゐるのを見た。少女は、彼に、塔へ登つて見ようと言ふ。二人に隨いて來た少女の兄は、塔の下で待つてゐることになつた。ところが、塔の上へ登ると、何か街上に珍しい物が見えたので、少女クララは一心にそれを眺めた。ナタニイルも、ポケットから望遠鏡を取出してそれを眺めた。前のコッポラから買つた望遠鏡である。

此處でまたしても狂氣の發作が現れ、『木製の人形さん、背中を向けろ』と叫びながら、クララを突き落さうとする。悲鳴を聞いて駈けつけた兄は妹を救つて一緒に塔を降りてしまふ。塔の上

では、發狂したナタニイルが躍り狂つてゐる。

『火の環だ、背中を向けろ』——此の狂人の言葉が何に由來してゐるか、我々には十分解つてゐる筈だ。

塔の下では、大勢の群衆の中から、例の代言人コッペリウスが躍り出た。此處で、此の男は忽然と現れたのである。つまり、此の男が姿を現すと、ナタニイルの發狂が始まると推察されるのだ。人々は、塔上の狂人を制止するために駈け登らうとする。だが、コッペリウスは笑つて言つた。

『まあお待ちなさい、彼はもうぢきに自分で降りて來ますよ』

ナタニイルは忽ち立ち止つた、コッペリウスの姿を見つけたのである。彼は、かき裂くやうな叫びを立てて、

『美しい眼玉——美しい眼玉』と呼びながら、欄干から身を躍らした。さうして、ナタニイルが堅い鋪道の上で頭骨を碎いて死ぬと同時に、砂男（ザンドマン）コッペリウスの姿は、群衆にまぎれて消えてしまつたのである。

さて、此の短い後日譚の構成が、直接砂男（ザンドマン）自身の姿に對する恐怖感に、卽ち、眼を奪はれると

いふ想像恐怖に結びついてゐる事は、恐らく何等の疑ひを容れないであらう。イエンチュの所謂知識的な不精確さも、一篇の小説的効果に對しては何等影響するところがないのである。我々が不問に附した人形娘オリムピアに對する生命附與の疑問なども、以上述べたより強烈な、不氣味なるものの實例に較べてはまるで問題でない。

勿論、最初のうちは作者は、讀者の胸に一種の曖昧さ、不精確さを植ゑつけ、故意に、或る意圖の下に、作者が我々を引き込む世界が眞實（レアル）の世界であるか、乃至はまた作者の好む幻想（ファンタジイ）の世界であるかを、容易には見究めさせないのである。言ふまでもなく、作者が之を取るか彼を選むかは、作者の權利だ。例へば、シエークスピヤのハムレットに於ける如く、マクベスに於ける如く或は他の方面で言へば暴風や夏の夜の夢に於ける如く、作者はその描き出さうとする舞臺を、精靈と惡魔と幽鬼の跳梁する世界としても結構、我々は作者に從つて、彼が假定したこの世界を唯唯として眞實のやうに扱へばいいのである。

だが、ホツフマンの小説ではかうした疑惑がぢきに消失する。我々は、作者が、讀者自身にその惡魔的光學者の眼鏡を、或はその望遠鏡を、貸與して覗かしめようとしてゐることに氣づかざ

るを得ない。そればかりか、恐らくは彼自身が、その超特異的人格に於て、かかる器械を覗き込んだのである。物語りの終局は、光學者コッポラが實は代言人コッペリウスであり、從つてまた砂男(ザンドマン)自身でもあつたことを明瞭にしてゐるのである。

所謂知識上の不精確さは、此處では少しも問題でない。此處に至つて我々の氣づくことは、讀者の前に呈出されたものが、決して一人の發狂者の幻想圖であつてはならない、といふ事である。寧ろその背後に隱された、合理論の優越性に於ける嚴肅な事實を認識する事が出來るのである。かつ又、かかる解釋が『不氣味なるもの』の印象を稀薄にする惧れは斷じて無かつた。從つて、讀者が此の『不氣味なる』感覺的効果を受入れるに當つて、知識上の不確實さなどは何等妨害にならぬのである。

之に對して我々の注意を喚起するものは、精神分析學上の經驗である。之に從へば、小兒の恐怖中で恐るべきものの一つは、我が眼を損ふとか、或は失ふとかいふ考へである。多數の成年者にもかうした恐怖心は殘つてゐるもので、彼等は、自體の他の器官の損傷よりも、眼のそれを最も恐れる。通俗にも『眼玉のやうに可愛がる』と言ふ言葉があるではないか。また、種々な夢、

空想、神異譚、等の研究に從へば、眼を大切にする心、盲目になりはしないかといふ不安恐怖が、往々にして睪丸截除の恐怖の代償と成る例さへあつた。かの神話中の犯罪者エヂプスが自ら進んで盲目になつたのも、タリオンの掟による唯一の相當刑罰なる睪丸截除の減刑として行はれたに過ぎない。

純理論的な考へ方に於ては、眼球の恐怖を睪丸截除の恐怖へ歸納する事は、否定しようとすれば出來るであらう。眼球のやうな貴重な器官が、それに相應する大きな恐怖によつて護衞されてゐる、といふ考へは何人にも首肯し得る。更に立入つて、如何なる祕密も如何なる價値も、睪丸截除の恐怖感に藏されたるそれに比較すれば、遙かに輕少であると主張する事も出來るのだ。だが之だけではまだ、夢、空想、神話等に現れた眼球と男性々器との代償的關係を說明するには妥當でないし、又、性器を失ふといふ脅威に對して、特別に强烈な暗澹たる感情が起る、といふ印象を反駁する事も出來ない。更にまた、かうした暗澹たる感情は、損失は損失されるといふ豫想が他の別の器官の場合だと、さう强烈でないといふ事實を反駁する事も出來ないのである。これ以上の凡ゆる疑問は、神經患者の分析によつて、睪丸截除コムプレックスの細目に通じ、彼等の

精神生活に在つて之が如何に大きな役目を演じてゐるかを知つたなら、自然と解消する問題である。

私はまた、精神分析の解釋に對する反對者の何人にも、決して忠告などはしないつもりである。ホッフマンの小說『砂男』を引證して、眼球に對する恐怖不安が睪丸截除コムプレックスと何等の關係がないなどと主張する議論は打捨てて置かう。では一體、眼球に對する恐怖が此處では父の死と最も緊密な關係に置かれてあるのは何故か。砂男が、いつも決つて愛情の妨害者として登場してゐるのは何故か。砂男は、不幸な大學生をその約婚者から引離し、彼の最もよき友人であつた約婚者の兄からも引離した。砂男はまた、彼の第二の愛情對象なる美しい人形オリムピアを破壞した上、彼が再會した約婚者クララと幸福な結合を遂げようとする、その直前に於て彼を自殺せしめた。ほかにもまだいろいろあるが、總てかうした此の小說の特色といふものは、眼球喪失の恐怖と睪丸截除との關聯を否定する者には、無意義な、作者のほしいままな弄筆としか見えないであらう。だが、假に砂男の代りに、睪丸截除を豫期された恐るべき父親を持つて來たら、およそ意味深長なものとなるではなからうか。

(*)實際に於て此の怪奇小說の材料的要素といふものは、さしてこんぐらかつたものでなく、容易にタネを探り出す事が出來るのである。幼年時代の記憶中に現された父親とコッペリウスとは、愛憎兼備の兩面を示したもので、相反した二つの性格を二人の人物に分割したに過ぎない。

また、作者ホッフマンは實生活に於ても、不幸な結婚の子供だつた。彼が幼年三歲の時、父は些かな家族を捨てて、終生戾つて來なかつた。此の父子の關係といふものは、ホッフマンの生涯を通じてその精神生活の最も苦痛な傷痕だつたのである。

さて、かくして『砂男』に對して感じられる『不氣味なるもの』は、幼年者の睾丸截除に對する不安恐怖へ歸納し得る、と言ひきれるであらう。だが待ち給へ、不氣味なるものの感情が成立する爲には、總てかうした畸型（成人しても尙幼年の特徵が殘存してゐる一種の精神病型）の素因が要求されはしまいかといふ考へが浮ぶと、すぐに今度は、此の事を他の『不氣味なるもの』の實例に演繹して觀察したくなつて來る。砂男に在つては、イエンチュが取上げてゐる通り、生きてゐるやうに見える人形といふ主旨があつた。彼に從へば、これこそ不氣味なる感情の生產に對する屈强な條件なのである。果して生きてゐるのか死んでゐるのか、といふ知識的の不確實さ

が喚起されるなら、また、生命のないものが生命あるものと同樣な振舞ひをするなら、そこに不氣味なる感情が生産されると言ふのだ。

勿論、我々の幼年時代が、人形とあまり大差ない存在だつたことは言ふまでもない。ごく幼稚な子供の遊びを見てゐると、生命あるものと生命の無いものとのはつきりした區別がなく、別して人形をまるで生物のやうに取扱つてゐるものである。そればかりか、或る婦人患者の話を聞くと、彼女は八歳の頃まで、自分の人形を一心になつて見つめればきつと生きて來る、といふ確信を持つてゐたさうである。卽ち、此處に容易に立證し得るのが、例の畸型（インファンティル）の素因（モメント）だ。が注意すべき事に、砂男（ザンドマン）の場合に扱はれてゐる此の素因は過去の小兒期恐怖の覺醒であつた。生きてゐる人形に就ての恐怖や不安はまるで問題外である。子供は、自分の人形が生きたからと言つて恐怖するものでない。寧ろその方が望ましいのである。つまり此處では、不氣味なるものの源泉は小兒期恐怖でなく、却つて小兒期願望であり、乃至はその信仰でなければならなかつた。此の事はどうやら矛盾らしく見える。どう考へてもこれは一つの多樣性でしかあり得ない。此の性質は、後で我々の理解の上に大いに役立つ事があるであらう。

エ・テ・ア・ホッフマンは『「不氣味なる」物語りの作家として、前人未到の巨匠である。彼の長篇(ロマン)『惡魔の法液』(Die Flixiere des Teufels)は、全篇悉く物語りの『不氣味なる』効果を成就するに絶好な主旨(モティフ)の堆積である。その内容の絢爛錯綜せる、蓋し何れの主旨(モティフ)を引用したらよいのか、その選擇抽出に迷はざるを得ない、讀者に豫斷を下す暇も與へず終始する此の物語りに、強ひて一言を附加するなら、物語りの結末は讀者に解決を與へるものでなく、寧ろ完全な混亂に陷れるものと言へよう。作者は、餘りに同種同類の事件を重ね過ぎた。そのために全篇の印象は損はれることがないにしても、晦澁難解の弊を免れる事は出來ないであらう。從つて此處ではかの不氣味なる印象を働きかける樣々な主旨(モティフ)中、最も顯著な、幾つかを取出して、果してこれ等の主旨(モティフ)も亦、その發生始源を畸型(インファンティル)へ歸納し得るかどうか、それを確かめるだけで滿足せねばならない。

　言はば、之は凡ゆるヌアンスと凡ゆる成形とに描き出された二重出現(ドッペルゲンゲル)の眞相なのである。即ち同じやうな形で出現するために同一のものと解されねばならぬ人物の登場である。かかる關係の上昇といふものは、精神的前例が一の人格から二の人格へ飛び移る事によつて現れるので、精神

分析の方ではかかる現象をテレパシイと呼んでゐるが、Aの人格が、知識と感覺と體驗とを、Bの人格と共有してゐるのである。言ひ換へればAとBとの人格の同化である。從つてAなる人間は、本來の自分といふものが解らなくなつたり、或は又、Bといふ自我を持つて來て自分の自我に据ゑ込む。つまり自我の二重化であり、自我の分裂であり、また自我の交換でもある。さうしてとどのつまりは、同じ所へ復歸して、全く同じ顏つきを繰返したり、性格も運命も犯罪的行爲までも同じ樣に繰返すのが常である。そればかりか、何代か繼承されて之が續いた場合には、名前まで同じものになることさへあるのである。

二重出現の主旨は、O・ランクの同名の研究中で精密な評價を與へられてゐる。（註。O. Rank: Der Doppelgä nger. Imago III, 1914.）その中には、映像、陰鬼、守護靈、心靈學、恐死、等に對する二重出現の交渉が吟味されてゐるが、此の主旨の驚嘆すべき發展中には明るい光も亦含まれるのだ。元來、二重出現といふものは自我の崩落にたいする保險であり、ランクの所謂『死の權力に對する旺んな拒絕』であると共に、多分は又、肉體の最初の二重出現の、不滅なる靈であつた。か樣な滅亡に對する防禦としての二重化の創造に對立するものは、夢物語りの描寫中に在る

のだ。睾丸截除を性器象徴の二重化乃至多様化を通じて表現せんことを好む夢がそれだ。此の事は古代エヂプトの文化に在つては藝術のための刺戟となり、死亡者の姿が耐久力ある物質によつて形づくられたのである。

だが、之等の概念はみな無制限なる自己愛の畑に發生したもので、悉く之小兒及び原人の精神生活を支配した原始的の自己溺愛(ナルチスムス)である。さうしてかかる階梯(ファーゼ)が克服されるに及んで、初めて、二重出現(ドッペルゲンゲル)の前提的徴候へ變化し、生命繼續の安全を望むところから、死への不氣味なる前兆となつて現れる。

二重出現(ドッペルゲンゲル)の概念は、かうした原始的な自己溺愛(ナルチスムス)と共に滅び去るものでない。更に後年の、自我(イッヒ)の發展過程から新たな內容を獲得することが出來る。自我(イッヒ)の中で、徐々に一つの特殊な自制克己が形成され、別の自我(イッヒ)に對立し得ると共に、之によつて反省と自己批判とをする事が出來る。言はば心理的檢閱官の仕事をするもので、我々の所謂良心と言ふのが之である。病理學上で言ふ苦勞症の場合では、之が孤立的になつて自我から分裂する。醫者には直ぐ認め得る症狀である。

別の自我(イッヒ)を、恰も客體のやうに扱ひ得るところのかかる自制克己が存在する事實、即ち人間が

自己觀察をなし得るといふ事實こそ、前後の二重出現的概念に新たな內容を齎すものであり、別してはまた、自己批判といふ現象が先に克服された原始時代の自己溺愛(ナルチスムス)に從屬したものである事を示すものではなからうか。

然しながら、二重出現(ドッペルゲンゲル)の中に併合されてゐるものは、ひとりかうした自己批判と牴觸する內容のみでない。寧ろ同樣にして、凡ゆる偶然形體の、活動を休止してゐる可能性やら、これには空想といふものがまだしつかりとくつついてゐるし、それから、外部的な障碍のためにまだ貫徹出來かねてゐる凡ゆる自己努力とか、自由意志なる幻影をもたらしたところの壓伏された意志決定の一切などが、併合されてゐるのである。

(*)H・H・エーウエルスの小說『プラアグの大學生』中の主人公は、戀人に向つて、決鬪の相手を殺さないといふ約束をする。ところが、定められた決鬪の場所へ行く途で、彼は、既に此の競爭者を擊ち殺して來た二重出現と出會つたのである。

さて以上のやうに明かにされた二重出現(ドッペルゲンゲル)なるものの趣旨を觀察して見ると、誰しも自ら嘆じざるを得ない。卽ち、超自然的『不氣味さ』といふものは、どんな事をしても我々には理解し得な

いものであり、又病理學上の心靈先行に關する我々の知識から言つても、かかる內容からでは、之を或る異物として自我から浮び上らせるところの防禦的努力を說明することは、全然不可能である。と。だが、とに角『不氣味なるもの』の性質に觸れ得る途が一つある。それは、二重出現といふ事柄が克服された精神的原始期に從屬するところの成形であり、その原始期に在つては一つの親愛的意義を持つたものであるといふ事だ。此の二重出現が恐怖の形に變じたのは、恰も、神々がその宗門の墮落によつて惡靈と化したに等しい。（ハイネ、神々の追放）

　ホッフマンが使用した自己破壞の別の種類は、敍上の二重出現の主旨に倣へば容易に判斷される。それ等に扱はれてゐるものは、自我の感情の發展史に於ける一つ一つの階梯への背面攻擊であり、自我がまだ、外界及び他からきつぱりと絕緣せぬ時期に於ける賠償である。思ふに之等の主旨が『不氣味なるもの』の印象の全體的効果に對して、その幾分づつかを分擔するものであらうが、勿論、その分擔の割合ひを區別して取出す事は容易でない。

　同一事象の反復の素因を、不氣味なる感情の源泉と見做すことは、或は一般人には氣づかれないかも知れないが、私自身の觀察では、或る種の條件の下に、また特定の狀態と結合して、かや

うな同一事象の反復が現れると、さまざまな夢の中に在る時抱かされる、絶望的な感情を覺えるのである。

或る時、夏の暑い午後だつた。私が全く不案内の、イタリイの小都會の寂しい通りを歩いてゐた時である、或る場所へ行き當つた。此の場所の性質は後でぢきに合點が行つたが、とに角其處ではどつちを向いてもお白粉を塗つた女達が、小さな家の窓に顔を竝べてゐるのである。私は急ぎ足で、手近の曲り角を折れた。此の狹い街を早く退却したかつたのである。ところがどうだ、もとより道案内もなかつたが、暫くぐるぐる歩き廻つてゐるうちふいと氣づくと、さつきと同じ街へまたしても迷ひ込んでゐた。女達はまたぞろ私の方をじろじろ眺め始めてゐる。私はまた急ぎ足で通り拔けたが、結局、別の迂路を廻つて三度まで其處へ出るといふ結果を見たに過ぎない。

此の時である、私は、不氣味な、とより他に言ひ樣のない感情に襲はれた。だが、幸ひにも其の場合は、拔道を探すのを斷念してからぢきに、元來たピアッツァへの道を見つける事が出來た。いろいろな點で根本的な相違はあつても、いま述べた場合と共通した思ひがけぬ反復の狀態に置かれると、同じく絶望的な心持に襲はれるものである。例へば、高い森の中で霧や何かに脅さ

れながら、さんざん道に迷ひ拔いた揚句、最前記標(しるし)をつけて置いた見覺えのある道へ出てしまつたり、何等かの形態で心覺えがされてあつた地點へ復び出てしまつたときなどがそれである。或はまた、何も見えない暗闇(くらやみ)の室內などで、扉か乃至は電燈のスヰッチを探り當てようとしてゐる際、幾度やり直して見ても同じ家具か何かにぶつかる事があるが、之などは、例のマアク・トウエンの誇張したグロテスクな筆致で、不可抗の喜劇的狀況として描き變へられた一つの實況ではあるまいか。

種々な經驗の別の一列を認識する事も造作ない事であつて、之はただ無意識的な反復の素因(モメント)に過ぎず、かつて無害なるものを不氣味なるものとして、宿命と不可避との理念を我々に押しつけた、所謂偶然といふ言葉だけで現されてゐたものである。例へばこれなども無關心な體驗だが或る人が更衣室で着物を脫いだ場合、それに對する預り證の番號が、假に六十二といふ數字だつたとする。或はまた、指定された船室の番號がやはり六十二といふ數字だつたとする。ところで此の二つのそれ自身としては全く無關心な事柄が相近づかうとする場合、此處では六十二といふ數字が一日の中に繰返し限に止まる場合、彼の受ける印象は變化して來るのである。

さうして更に彼が、家の番地、ホテルの部屋、汽車の客室等々、およそ番號のついてゐるものに就て悉くその番號を研究し出すとして、その際にもやはり、それ等の番號の文字が、排列の順序は逆になる事があつても、同じ數字から成立つてゐたとする。さうすれば此の場合、彼は『不氣味な』感じを抱くに相違ないのである。また此の場合の彼が、白刃の脅威にも屈せぬ程の迷信排斥家でない限り、かかる同一數字の執拗な反復の中には何か隱約な意義があるものと考へ、例へば前の六十二といふ數字なら、それが彼自身に許された天壽であると言ふやうな考へを抱くであらう。

或はまた、生理學の大家、H・ヘリングの著述に就て一心に勉强してゐる場合、相前後して、別々の土地に住む二人の同名の人から、二通の手紙を貰つたと假定し、而も此の場合、彼は未だかつてかういふ名前の人とは交際がなかつたものとする。最近、かうした類の偶然の暗合的事象を、或る一定の法則の下に處理し、之によつて『不氣味なるもの』の印象を解消せんと企圖してゐる才能ある博物學者があつた。これが果して成功したか否か、私には決定を與へるだけの勇氣がない。

(*) P. Kammerer : Das Gesetz Der Serie, Wien 1919.

では、如何にして、畸型（インファンテル）の精神生活から、同種の反復によつて生ずる『不氣味なるもの』を演繹し得るか、之に就ていま私のなし得るところはほんの暗示に過ぎないが、其の爲には先づ、別の關聯に於ける周到詳密な表明への指示が必要だ。およそ心的無知の中で第一に認められるものは、衝動活動から生じた一つの反復強迫の主權である。此の強迫は恐らく、衝動それ自體の最も奧深い性質に依據してゐるもので、快樂の原則を無視し得るほどに強大であり、精神生活の一面へデエモン的性格を賦與する。また幼兒のいろいろな努力中に在つてはなほ頗る顯著な存在を見せ、神經疾患の精神分析に於ても、その經過の一半を支配してゐるのである。さて、以上の凡ゆる論考によつて我々の準備は出來たから、之等の內的な反復強迫について思ひ起し得る一切は、『やがて不氣味なる』ものとして追跡探求されるであらう。

だが、今は暫くかうした、尙かつ判定困難の事情からは離れて、『不氣味なるもの』の明白直截な場合の方を吟味すべき時であると考へる。此の方面の分析ならば、前に與へた假定の價値に就

て、最終的な決定を期待する事が許されるのだ。

『ポリクラテスの指環』の中の客人が慄然として向き直つたのは、彼が、友人の凡ゆる願望が倏忽の間に滿たされ、彼自身の運命に關する一切の杞憂が、立所に解消されたのを知つたからである。此の場合、客人である彼には、友人が『不氣味なる』ものになつたのである。だが彼自身が言つてゐる『餘りに幸福な者は神々の妬みを恐れねばならぬ』といふ思想の出所については、まだ我々には明白でないものがあり、その意義は神話的なベエルに包まれてゐるやうに思はれる。

で、もう一つ別の、もつと卒直平明な實例を取り上げて見よう。之は或る强迫性神經患者の病狀記中で述べた事であるが、かつて此の患者は水治療院に收容された事があつて、頗る治驗があつて退院した。ところが彼はなかなか頭の善い男で、これは水の治療力によるものでなく、むしろ彼に當てられた部屋の狀態によるものであると考へた。彼の部屋の隣りは可愛らしい看護婦の室だつたのである。

それから二度目に同じ療院へ收容されると、彼は以前と同じ部屋を要求した。ところが今度は既に先客があつた。以前の部屋は、老紳士によつて占められてゐたのである。彼は之を聞くと、

大きに憤慨して『よし、そんなら其奴を擲り仆してやるぞ』と、亂暴な事を言つた。それから十四日目、實際にその老紳士は卒中發作に苦しんだ、といふのである。

彼に取つて、此の事柄は一つの「不氣味なる」體驗であつた。此處でもし、彼の暴言を吐いた日と老人の卒中發作の日とが、時間的にもつと近接してをつたなら『不氣味なる印象は一段と强かつた事であらう。或はまた、彼の體驗がこれ一つに止まらずに、同樣なものをもつと澤山に』味はつた場合でも、やはりその印象は益〻强くされた事であらう。事實、彼はかかる實證を持たないわけではなかつたが、一人彼ばかりでなく、私の扱つた强迫性神經患者の悉くが、類似の話題を持つてゐたのである。

彼等の或る者は、自分がたつたいま考へてゐた人物にひよつくり出合つても、決して驚かず當然だと思つてゐる――之は、恐らく永い事相見なかつた相手であらう。或はまた、前晚の中に、明日は誰某から手紙が來るぞと言ふと、必ず翌朝はその人から手紙が來るといふ例もある。而も此の場合の相手は、旣に久しく音信を絕つてゐた人間なのである。それからまた、特別な不幸とか死亡などといふ事柄については、ごく稀な例外を除いた大抵の場合、その事の起る直前に彼等の

思想中へ電流のやうに閃くのである。かかる事情について彼等の主張するところを聞けば、斷乎たる顔つきで、自分等には『知らせ』(Ahnung)があるので、大抵の場合は的中すると言ふ。

迷信の形式中で一番に不氣味な、また最も普遍的なものは、『邪視』に於ける恐怖である。邪視に就ては、ハンブルクの眼科醫S・ゼエリヒマンが、根本的の治療法を發見してるが、(註、S. Seligmann : Der böse Blick und Verwandtes. 2 Bande, Berlin. 1910 und 1911)それに對する恐怖が何に由來してゐるかと言ふ源泉に就ては、さすがに誰の意見にも誤りは無かつたやうである。およそ何等かの貴重な、而も失ふ危險の多いものを所持してゐる人は、他人からの妬みに對して不安を感ずるのが常だ。彼は、むしろ反對の場合から感じた妬みといふものを、罪もない他人のせゐに押しつけてしまふ。

ところでかうした心の動きは、言葉ではどう胡魔化し得ても、眼つきまでは隱しきれるものでない。で假にAといふ者が他の人々の前で、餘り歡迎されない種類の著しい特徴によつて人目を惹いたとする。さうすると皆の人から、Aは非常に妬み深い奴だ、警戒しないとどんな眞似をするか解らんぞ。といふ風に頭から思ひ込まれてしまふのである。つまり人間といふものは匿れた

意圖の害されるのを惧れるから、或る種の表徴を見ると直ちに、此の意圖の實行力を信じ込むのである。

『不氣味なるもの』として最後に敍べた諸例は、私が或る患者の興奮狀態を觀察する事によつて名づけ得た『思考の全能』といふ原則と深い關聯を持つものである。之でもう、我々の立場と進路が何處に在るか見誤り得なくなつた『不氣味なる』場合の分析は、我々をして古いアニミスムスの世界觀へ復歸せしめる。此の主義の特筆さるべき點は、世界が人間の靈によつて充滿されてゐるとする考へ方である。自己の心的前事の自己溺愛的な過重視である。思考の全能と、それの上に組立てられた魔術の技巧である。綿密にぼかしをかけた魅惑力を、他人及び他物へ對して配與するやり方である。竝にまた、既述の發展過程にある無制限な自己溺愛が、掩ひ難い眞實の異議抗告を防禦せんとして作り出した種々の拵へものである。

およそ人間といふものは、それぞれの個性發展の中では皆、かかる原人のアニミスムスに適應した階梯を通過してきたのであるらしい。目立つ程の痕跡やその名殘りを止めては居らぬにしても、百人が百人、此の階梯を飛越した者は無いらしい。だから、今日の我々に『不氣味なる』も

のとして現れる一切は、恰度、かかるアニミスムス的精神活動の殘滓を動かし、之を發表にまで刺戟するところの條件にぴつたり當てはまつたものなのである。

(*)『トーテムとタブー』中の『アニミスムスと魔術、及び思考の全能』を參照。

さて此處まで來て初めて言つて置きたい注意が二つある。實は、此の小さな研究の具體的內容は此の注意の中に藏して置きたかつたのだ。第一に、精神分析の主張する所が正當であつて、一つの感情活動の凡ゆる情緒はその種類の如何を問はず、位置轉換によつて恐怖不安の形に變化させられるものなら、恐るべきものの凡ゆる場合中には一つの群が存在すべきであり、此の群によつて、かかる恐るべきものが或る再歸反復的な轉位物である事が解らなければなるまい。恐るべきもののやうな種類こそ、取りも直さず『不氣味なるもの』であり、其の際、この始元的前身が恐怖そのものであらうと、或はまた別の情緒に附帶されたものであらうと、それはどちらでも同じ事なのである。

第二には、以上述べた事が實際に『不氣味なるもの』(Das Unheimliche)の正體であるなら、その反語なる祕密(Das Heimlichie)といふ用語法は『不氣味なるもの』の移動である事が理解

される。元來此の『不氣味なるもの』は、實際には新奇(ノイエス)の事でも見知らない(フレムデス)ものでもなく、寧ろ心理生活に取つてはずつと昔から馴れきつた(フェルトラウテス)ものであり、それが轉位の過程によつて疎遠にされてゐたに過ぎない。此の轉位への關聯を明白にしてくれるものは、シェリングの辭典にある定義だ。曰く、不氣味なるものとは、隱匿されたままである事を望まれた事物が、現れ出た事である。

之で、我々に殘されたところはただ、我々が得た見解を、他の『不氣味なるもの』の二三の場合へあてはめて見る事だけだ。

多數の人々に取つて一番不氣味な感じがされるのは、何と言つても、死、屍體、死者の再來、幽靈、陰界、等に關聯した事柄である。現代人の言ふところを聞くと、『怪異屋敷(ばけもの)なんて實際にあるものか、そんなものは文字だけの話だ』などと言ひ、また『あの家には幽靈が出る』などと言ふ。

本來なら、我々の吟味はかうした不氣味さの最も強烈な例から始める事が出來る筈だが、此の方面は一先づ預つて置く、といふのは、かかる場合には『不氣味なるもの』と凄じいもの(グラウエンハフテン)との混合が餘りに甚しく、時としては全然混同されてゐるからである。ところが、視野をほんの少しず

らせて別の範域を覗いて見ると、人間の思想とか感情とかいふものは、案外、原始時代と變つてゐない。此處では、昔といふものが稀薄な被覆の下でよく保存されてゐること、恰も我々の生命の死に對する關係と同樣である。

では何によつてそんな停滯狀態が續いたかといふと、解り易い動機が二つある。卽ち、人間の原始的な感情復古作用の强さと、科學的な認識の不正確さとがそれだ。今日の生物學は未だに、死が、凡ゆる生きとし生けるものの必然なる運命であるのか、それともまた、生命の內部に於ける一つの規則的な、而も恐らくは避け得らるべき偶然であるのか、さへ決定し兼ねてゐるのである。論理學の敎科書を披くと『人はすべて死すべきものなり』と言ふ金言が、一般の主張の規範のやうに麗々と書いてある。だが、此の金言は何の解決も與へてはくれない。我々自身の『死なねばならぬものなり』といふ假定に對する無知不識は、昔も今も少しも變りないのである。

相も變らず、此の個々の生命の死の事實についてその意義を論議してゐる宗敎家は、死後の存在などといふ事を主張してゐるが、國家の權力者に言はせれば、若し國民がより善い彼岸の生活を望む事によつて地上生活の正しさを捨ててしまふなら、社會の道德秩序といふものをちやんと

維持して行く事が出來なくなつてしまふのである。我々の大都市の廣告柱へこんな報告が公布されて、市民へ警告を發した。『如何にせば死者の靈と交通する事が出來るか』と。さうして、科學者中の最も鋭い思想と優秀な頭腦の持主たちは、特に自己の生命の終りに近づいてゐる人達は、『かかる交通は可能である』と斷定してゐるのである。

此の通り、此の點については大多數の人々の思想が、未だに原人と同様なのであるから、死者に對する原始的の恐怖が、我々の間にまだ勢力を持つて居り、ややもすれば、所謂『お迎ひが來る』といふ言葉を言はせるのも、さして訝しむにも當るまい。確かに此處には、死者が生存者の敵であるとする古い精神と、死者が自分等の新しい世界の仲間として生存者を取り入れようと企んでゐるとする精神が、未だに殘つてゐるに違ひない。寧ろ、かかる『必ず死ぬ』といふ不易性に就て疑問となり得るのは、こんな單純な事柄を何か不氣味なものとして、再來し得るやうに要求された轉位の條件は、一體何處に在るのか、といふ疑問だ。ところが、此の條件も、とに角確立してゐるのである。所謂學者たちは、さすがにもう『靈としての死人の出現』などは信じないが、かかる現象を、現實を離れた條件、稀には具體的條件と結びつけて考へてゐるのだ。さうし

て、元來は非常に曖昧な意義を持つてゐた、愛憎具有的（アムビヴァレンツ）な、かかる死者への感情移入が、精神生活のより高い層に取つて畏怖（ピエテエト）なる明瞭一義のそれに紛飾されてしまつたのである。

(*)『トーテムとタブー』中の、『タブーと愛憎具有（アムビヴァレンツ）』を參照。

さて、以上で、庶物崇拜（アニミスムス）、魔術と魅惑、思考の全能、死への關聯、意圖されざる反復、睪丸截除のコムプレックス等、『恐るべきもの』を『不氣味なるもの』へ化せしめる素因（モメント）の範域については、略論じ盡したから、次に些か補遺として附加へよう。

我々は、生きてゐる人物に就ても『彼は不氣味な奴だ』と言ふが、これはその人間に惡い意圖があると信じた場合である。だがこれだけでは十分でない。かかる彼の我々を害さうとする意圖が、特殊な力の助けを得て具體化された場合をも附加へる必要がある。

この好個の例は、アルブレヒト・シエッフエルが『ヨオゼフ・モントフオルト』中で描いた『ゲツタトオレ』である。詩人の直觀と深い精神分析的知識とを以て、一つの親しむべき姿に描き上げた、ロマン的迷信の不氣味なる形態である。然しかうした祕密の力といふものを考へると、またしても庶物崇拜（アニミスムス）の原始大地へ歸らねばならない。敬虔な少女グレエチヘンに、メフイストを『不

氣味な』と思はせたものこそ、かかる祕密な力の豫感だつた。
彼女の想像では、僕は本當に一個の天才なんだ、
いやそれどころか、ひよつとしたら惡魔なのかも知れない。
癲癇の不氣味さと、狂人の不氣味さとは、同一の始原を持つてゐる。無學な人は之を見て、豫想しなかつた異常な力の發現に驚き、而もその力の發動を、彼自身の人格中の一隅に、朧氣ながら探り當てることが出來るのである。中古の時代では、すべてかうした病狀の現れを目してデエモンの作用に歸したのであるが、これは正當でもあり、また心理學的にも殆ど誤りがないと言へる。勿論私は、かかる祕密な力の暴露を任とする精神分析學が、そのために却つて、多數の人々に無氣味なる感を與へる、といふ非難を聞いても、敢て異としない者である。かつて私が、或る數年來の疾患に惱んでゐた少女の治癒に成功した時——勿論それまでには相當な時日を要したが——私は、同じ病氣からすつかり癒りきつてゐた母親から、同じやうな言葉を聞かされた事があるのだ。
分解された四肢、胴を離れた首、腕から拔け出た手、足等とが、前述のシエツフエルの書物中

には、恰もハウフの童話を讀む如く、それぞれ單獨で踊り出すのである。之は、それだけで既に、何か非常に不氣味な感を抱かせるものだ。別して、それ等の分解した四肢の一つ一つが、今言つた獨立の運動を始めるとしたら尙更の事である。

かかる不氣味さが、睾丸截除への親近によつて由來されるものである事は旣に述べた。凡そ我我に取つて不氣味さの最大なものは、假死のまま葬られたら、といふ假定であるに相違ない。然しながら、精神分析學の敎へるところでは、かうした恐るべき空想も、實は別の空想の變形に過ぎないので、之は原始的には恐るべきものでなく、言はば或るエロテイクな願望、卽ち母胎に在つた時の生活に關する空想に由來したものなのである。

× × × ×

尙もう少し一般的な事柄に就て言ひ添へよう。之は、嚴密に言へば、旣に述べて來たところの庶物崇拜(アニミスムス)や、靈的裝置の種明(たねあか)しに關する我々の主張中に抱含されてゐるのだが、とに角、特別に此處で取り上げて見る價値があるらしい。といふのは、空想と現實の境界が消されると、往々に

してかやうな事柄が不氣味な働きを及ぼし易いのである。何か、今日まで空想的なものと思つてゐたものが眞實眼の前に飛び出して來たり、一つの象徴と見られたものが、象徴化された事象の意義を完全に發揮し實行したりするのを見せられると、此の感は一層大きい。これ等は例の魔法の實踐と結托してゐる不氣味さだが、此處にもそのよき實例があるのである。

この畸型（インファンテル）は、精神病者の心的生活をも支配するものだが、心理的眞實を物質的眞實に比較して強調したものであり、言はば『思考の全能』に含まれるところの一特徴である。

世界戰爭中、經濟封鎖の行はれた當時だつた。私の手もとへ、イギリスのストランド誌の第何號かが屆いた。其の中で、澤山の餘計な記載中から讀んだ一つの話である。一組の若夫婦が或る家具附きの住居（すまゐ）に移つたところ、その家具の中に、木彫の鰐を飾りにした奇妙な形の机があつた。それからといふものは、晩になると決つて、耐らなく不愉快な異臭が部屋中に擴がるのである。或る夜、夫婦のどちらかが、まつ暗な中で何かに躓いた。よくよく透（すか）して見ると、何やら得體（えたい）の知れぬ形のものが、階段の上をすつと通り過ぎたやうである。といふわけで、確かに之は、例の机の鰐のせゐで、此の家に怪異（ばけもの）が出るのだらうと言ふ事になつた。夫とも或は、木彫の怪物が、

暗くなると生きて動き出すのか、乃至はそれと同じ様な何事かが始まるのだらう、といふ話なのである。之など、話はごく單純だが、その不氣味な効果は頗る秀逸と言はねばなるまい。

結論として、之等のまだ不完全な實例蒐集に就ては、精神分析上のアルバイトから言つて置かねばならぬ一つの經驗がある。それは、かかる實例が、もし一つの偶然的遭遇によるものでないとしたら、それこそ、不氣味なるものへの我々の解釋に、絶好の加勢(ベクレフチグング)をもたらしてくれる、といふ事である。男子の神經病者が往々言ふところをきくと、彼等に取つては女性の性器が何か不氣味なものに感じられるさうである。此の不氣味なるものは然し、人の子の昔の故郷への入口である。誰でもが一度は、そして最初は、入つて居つた場所なのである。

『戀愛(リイベ)は思郷病(ハイムウエー)だ』と洒落(しや)れた人があるが、もしいま夢を見つつある者が、夢の中で、或る場所なり地方なりに就て『此處は私にはよく解つてゐる、既に一度私は此處にゐた事があつた。』と考へられる場合、其の夢の場所の意味するものは、性器であり、或は母の胎であると解する事が出來る。『不氣味なるもの』とは卽ち、かかる場合にあつてもまた、かつて自分の馴染んだもの、昔からよく知つてゐるもの、となるのである。此の言葉の前綴り不(ウン)は、轉位(フエルドレングング)を示す記號なのだ。

三

さて、以上の解説を讀んでゐる間にも、既に讀者の胸には或る疑念が生じたことであらう。先づ、此處にそれ等の疑念を蒐集し、强大にする事を許して貰はうと思ふ。

第一にぶつかるのが、不氣味なるものとは祕密な馴染みのものである、といふ解釋だ。それが一つの轉位を經て、其處から復歸したものである、といふ説明だ。更にまた、凡ゆる不氣味なるものが此の條件に該當してゐる、といふ考へ方だ。――ところで、かうした材料だけでは、不氣味なるものの謎が解けさうにも無いらしいのだ。だが、我々の命題は明白に、何等の方向轉換をも許さない。それ故、個性前史と民族前史との轉位された願望活動や、竝にそれらの克服された思考方法やに關して思ひ起し得る一切は、また不氣味なものでは無いのである。

また、我々の命題を裏づけるべき凡ゆる實例に對して、それに矛盾する所の一つの相似（アナロオゲス）が見出される事も、默過してはならない。例へば、ハウフの童話に現れた『きり離された手の話』の如き、確かに不氣味さを抱かせるものであり、我々の睾丸截除（カストラチオン）コムプレックスへ歸納したもので

ある。

ところが、ヘロドトの物語り『ラムプゼニトの寶』に在つては、王女に捕へられようとした大盜賊が、自分の兄弟の切斷された手を彼女に遺棄してゐる。此の場合などは、恐らく私ばかりでなく他の人々も同じ意見であらうが、何等の不氣味なる影響を與へるものでない。『ポリクラテスの指環』に見られる迅速な願望成就の早業に、不氣味な感じを抱かされる者は、ひとりエヂプトの王自身のみではあるまい。だが、我々の童話中に有り餘つてゐる同じ卽決的の願望成就には、全然かかる不氣味さの感じが來ないのである。例へば、三つの願ひを扱かつた童話において、腸詰めの天ぷらの匂ひに耐らなくなつた女が自分もあんな腸詰めが食べたいものだと言ふと、立所に食卓へそれが出て來る話。おせつかいな女を忌々しがつた男が、彼女の鼻を引搔いてやりたいと思ふと、直ぐに女の鼻が引搔かれる話。

何れも頗る面白い話だが、不氣味な感じは藥にしたくも無い。みな一般に、思考竝に願望の全能といふ、庶物崇拜の立場を、公然と取つてゐるのである。と言つて何も、何等かの不氣味さが出て來なければ眞の童話でないなどといふ謬見を持つてゐるわけではない。また、非常に强く不

氣味さを覺えるのは、生命のない物體、繪畫、人形等が活動しだす場合である、と聞いてゐるが、アンデルゼンの童話を見ると、家の器物や、家具、錫の兵隊、等々が活潑に生きてゐて、而も、およそ不氣味なものとこれほど緣の遠いものはあるまいと考へられる。例のピグマリオンにしてもさうだ。此の美しい立像が生きて動き始めたからつて、おそらく不氣味さを感じる人はないであらう。

假死と死者の囘生とが、我々に取つて最大の不氣味なる空想である。とは前に敍べたが、之と同じ事が、童話（メルヘン）の世界では平氣で起つてゐる。例の雪姫（シユネエホツトヒエン）がぱつちり眼を瞠つたからと言つて、誰が之を不氣味だと感じようか。また、新約聖書に描かれた奇蹟の中の、死者の再生が喚起する感情を、果して不氣味なるものに數へてよいであらうか。

同一事象の思はざる反復再來が、我々に不氣味の感じを與へるものであることは疑ひのないところだが、之でさへ、或る場合によつては別の働きをするもので、而もその効果作用は頗る區々たる有樣である。之が滑稽の感情を喚起する手段として用ひられてゐる場合でさへ、既に百も承知してゐる。此の種の例ならいくらでも持ち出す事が出來るのである。意味を强調する手段とし

ての例なら、倘更の事だ。では、沈默と獨坐と暗黑の生ずる不氣味さは、何に由來するのか。此の素因（モメント）の指すところは、不氣味さの成立に於ける危惧の感じではない。勿論、どちらも同じ條件から發生するものではあるが、就中、最もよく恐怖の感情を現すものは幼ない子供たちである。死の不氣味さに對する意義を認めたのであるからと言つて、果して此處で實際に、知識上の不確實さの素因（モメント）を沒却する事が出來るのであらうか。

かうなると、恐らく讀者も旣に、不氣味なる感情の現れる材料的條件は、前に述べて來た以外にも在る事を認めざるを得まい。固より、前述の證據がためだけで、不氣味なるものの問題に對する精神分析的關心は盡されてゐる、と言ひ得たかも知れない。殘餘の部分は、確かに、一つの審美學上の吟味を必要とするのかも知れない。だが、我々は、不氣味なるものの出所に於ける我我の見解が、轉位された『馴染みのもの（ハイミッシェン）』から本來どれだけの價値を要求し得るか、此の疑問に就て門を開け放つて見よう。

此の不確實さを解明する途を示し得る觀察が一つある。我々の從來の期待に矛盾した凡ゆる例は、殆どすべてが、作り話の、小說の領域に發生したものであつた。かくて、一つの合圖（キンク）が與へ

られる。體驗された不氣味なる場合と、單なる空想や小說中で讀んだ不氣味なる場合との間に一つの區別を立てねばならないのである。

體驗上の不氣味なる實例は、遙かにその條件が單純であるけれども、數に於てはずつと僅少である。思ふに、此の場合に用ひられた解說手段は、いつも例外なしに、古く馴染んだものの轉位への歸納だつたが、此處が、材料上から言つて重大な、また心理學的に意義深い相違として考へるべき點なので、又獨得の實例を持つて來れば一番よく認められる相違點なのだ。

先づ、『思考の全能』と、『卽決的の願望成就』と、『匿された害惡の力』と『死者の再生』と、此の四つの場合の『不氣味なるもの』を取上げて見よう。此處での不氣味なる感情を成立させる條件は、誤認すべくもない事だ。

我々は——或は我々の原始の先祖たちは、かつてかかる可能性を目して現實の事實とし、之等前事(フオールゲンゲ)の眞實である事を確信したのである。今日ではもう左樣な事を信ずる者はなく、さうした考へ方は克服されてゐるが、それでも此の新たな確信に對してはまだ何處かに覺束なさが感じられ、古い確信が未だに我々の中に殘存して、ややもすればそれを是認させようと機會を覗つて

ゐるのだ。だから、かうした古い置捨てられた確信に、何か是認を與へられさうに見える何ものかが、我々の生活中に起つて來ると直に、不氣味なるものの感情が現れて、『して見ると矢張り、人間がその單なる願望によつて他人を殺し得るといふ事や、死者にも別の生命があつて、時に彼等の生前の活動の場所へ姿を見せるなどといふ事は、やはり本當だつた!』と言ふ樣な判斷を、その感情へ補充し得るのである。

之に反して、かかる庶物崇拜的(アニミスムス)の確信を根本的に征服してしまつた人には、かかる種類の不氣味さは現れ得ない。願望と願望成就とが同時に起つた、といふやうな不思議。同じ場所や同じ月日に關する相似た體驗の反復された神祕。或はまた瓜二つと言へる位よく似た顔を見受けること、怪しい物音、等々の現象にも、かかる人は惑はされないから、『不氣味なるもの』の前の不安恐怖として呼び得たやうな如何なる不安をも、彼の中に喚起す事が出來ないのである。かかるが故に、いま此處に扱はれるものは、純粹に眞實性(レアリテエト)の檢討の問題であり、物質的眞實性の問題でなければならぬ。

從つて、轉位された畸型的(インフアンテル)コムプレックスから發生した『不氣味なるもの』や、睾丸截除のコム

プレックス、母胎空想等其の他から發生した『不氣味なるもの』の感じとは、自ら別問題なのでかかる種類の不氣味なるものを喚起し得る眞實(レアル)の體驗といふものは、さう無闇に有り得ないのである。

體驗上の不氣味なるものは、大部分從前の群(グルッペ)に屬するが、理論上では、此の兩者の區別は頗る重大な意義がある。畸型(インファンテル)のコムプレックスから生じた不氣味なるものに就ては、物質的の眞實性(レアリテエト)の問題は全然觀察の外に置かれ、心理的眞實性が之に代る。問題となるのは一つの內容の具體的轉位、竝に轉位されたものの復歸再來であつて、かかる內容の眞實性(レアリテエト)に對する信仰の解消如何ではないのである。或はかうも言へるかも知れない。卽ち、或る一つの場合には或る種の想像內容が轉位され、他の場合では、その(物質的)眞實性(レアリテエト)への信仰が轉位されるであらう、と。だが、後の方の說を考へて見ると、確かに之はテルミヌスの慣用手段である『轉位說』を、それの正當な限界以上に引き伸したものである。だから、此處で見出し得る心理學的の差別といふものを斟酌して、文明人の庶物崇拜的(アニミスムス)確信が存在してゐる狀態を、一つの多少とも完全な、克服されてあるものと考へた方が一層正しい。かくして我々の結論は次のやうになる。

經驗上の『不氣味なるもの』が起る場合は、追放された畸型(インファンテル)のコムプレックスが或る印象を

通じて復活された時か、或はまた、かつて克服された原始的確信が復び是認されさうになつた時である。と。結局我々が、此處に示された實際生活に於ける『不氣味なるもの』の二様の種類をどうしても截然と區別し得ないと言ふ信條から離脱する事が出來ないのは、圓滿な解決と見易い說明とに對する偏愛があるからなのである。原始的の確信が畸型（インファンテル）のコムプレックスと密接な關係を持つてゐる事、本來は此のコムプレックス中に根ざしてゐるものである事、等を考へるなら、かうした差別限界の抹殺されてゐる事もさして訝しむに足りないであらう。

架空譚――空想及び小說類に現れた『不氣味なるもの』は、實際には一つの分離された觀察が役立つてゐるのである。第一に、此處に現れた『不氣味なるもの』は、實際生活のそれよりも遙かに內容豐富である。卽ち、實際生活のそれを全的に包含した上、更にまた實際生活の條件の下には現れて來ない別の種類をも包含してゐるのだ。轉位（フエルドレングテ）されたものと克服（ユウベルウンデネ）されたものとの間に於ける對立が、小說の中の『不氣味なるもの』へ移植されるには、よほど突込んだ改修なり限定なりが行はれなければ不可能だ。小說＝空想の領域といふものは、その內容價値を眞實性（レアリテエト）の檢閱から免除させてゐるといふ前提を持つてゐるのである。だから、逆說的に聞えるか知れないが結論

はかうだ。

『小説の中では、それが實際生活でなら不氣味であつた筈のものも、大部分は不氣味でなくなると共に、また、小説の中で不氣味な効果を狙つた多數の可能性も、實際生活に持つて來るとその効果が消失する。』

　文學の作家といふものに許された諸種の自由の中にはまた、彼の表現世界を隨意に、或る時は我々の熟知してゐる眞實性（レアリテエト）と合致させ、或る時はそれを全然無視させても、少しも差支へないといふ特權も含まれてゐるのである。讀者はそのどちらの場合でも作者に跟いて行くのだ。例へば、童話の世界では最初から、眞實の大地を捨てて庶物崇拜（アニミスムス）の確信を採用してゐる事を、公然と告白してゐる。願望の卽時成就も、祕密の力も、思考の全能も、死物の蘇生も、すべて童話の世界ではごく普通の事であり、其處に何等の不氣味な印象をも働きかけることが出來ない。それは、既に述べた通り、不氣味なる感情の成立するためには、『克服された信ずべからざるものが實は眞實（レアル）として可能ではあるまいか』といふ批判が要求され、また、童話の世界の假定によつて一般に除外されてゐたところの一つの疑問が要求されるからなのである。

かくして、不氣味なるものへの我々の說明に矛盾する幾多の實例を示した童話は、最初に述べた場合を現實化する。卽ち、それが實際生活に起つたなら不氣味に感じられるべきものが、架空譚の領域では少しも不氣味でない、といふ場合だ。加ふるに、童話に就てはまだ別の素因があるのだが、之には、更に後で簡單に觸れて見ようと思ふ。

小說は、童話の世界に較べると遙かに空想の程度が低くなるが、それでもやはり、此の世界もまた、とに角實際生活にはないやうなより高い精神的實體や、デエモンや、死者の亡靈等を採用することによつて、眞實の人生と懸け離れてゐる。小說中の人物や形態に附與された一切の不氣味さは、その詩的眞實性の前提が成就されると同時に、すつと消えてなくなつてしまふ。ダンテの地獄篇に現れる諸靈や、シエークスピヤのハムレット、マクベス、ジユリアス・シイザア等に見る亡靈出現や、それ等は十分に陰暗凄絕であり得るが、不氣味なといふ點にいたつては、結局、あの朗かなホオマアの神々の世界と同樣、餘り効果がないのである。かうした文學作家の筆によつて假託された眞實性の條件へ、我々の得た判決を適合させ得るであらうか。また、其處にあつかはれた靈や亡靈や幽鬼を、物的眞實性に見る如き正當な存在として解し得るで

あらうか。これ等もやはり、不氣味さを消失した一つの場合でなければならない。

さて今度は、作家がその作品の舞臺を、外見上一般の眞實性(レアリテエト)の上へ置いた場合である。此の場合には、實際生活に於ても不氣味なる感情の成立に價する一切の條件が採用されるので、實際生活で不氣味な効果を及ぼすものは、小說の中でも同じやうに働いてゐる。だが此處でもまた、彼は、不氣味なるものを、實際生活に可能なる程度以上に誇張させ、多樣化させ得るところから、かかる實際には全然起らぬか、または起つてもごく稀にしか起り得ぬやうな事象を、やたらに持出して來るのである。そこで、卽ち我々が既に克服して來たと思つてゐる迷信である事を、或る程度まで暴露したり、一般の現實である事を約束しながら、しかもそれ以上に誇張した作意を以て讀者を欺くのである。だが讀者といふものは、小說と現實の區別を忘れ易い。作者の作意どほり、實際生活に於けると同樣な反應を示すのである。萬一讀者が、此の欺惘を悟つても、その時は既に遲い。作者の意圖はもう達成されてゐるのであるが、私をして言はしむれば、彼は實際には決して、何等の純粹な効果をも達成してはゐないのだ。

讀者の心に殘されたものは、不滿足の感情であり、うまうまと乘せられた欺惘に對する忿(いか)りの

一種である。特に此の感の深いのが、シュニツツラアの小説『豫言』その他、奇蹟へ色眼を使つてゐる作品の幾つかである。それからまた、作家たちが使用してゐるもう一つの手(ミツテル)がある。それは、之によつて我々の欺かれまいとする抵抗を引き去ると同時に、彼の意圖の達成を一層有効にする事が出來る手(ミツテル)だ。かうである、作者が取上げた世界に對して擇んだ假定は、本來どういふ種類であるか、それをいつまで經つてもあてさせない、解らせないで置く、といふやり方だ。或はまた、巧みな技巧と詭計によつて、讀者にさうした決定的な解明(たねあかし)を最後まで見せない、といふ手もある。だが、かやうな場合は、大體に於て、既に述べた場合の具體化に過ぎず、實際生活では當てはまらぬ、不氣味なる感情の新奇な可能性を創作したに過ぎない。

かかる多様性の一切は、嚴密に言へば、既に克服されたものから發生した『不氣味なるもの』と關聯してゐるに過ぎないのである。之に較べると、追放されたコムプレックスからの不氣味なるものの方は遙かに抵抗が強い。之だと、小説の中ででも、一つの條件さへ除けば、實際生活に於けると同樣の働きをするのである。實際生活に於てかうした性質を示すものは、克服されたものから發生した別の『不氣味なるもの』だが、物質的眞實性(レアリテエト)を舞臺とした小説の中では、之が、

作意的(フイクチブ)の、作家によつて創作された眞實性(レアリテエト)の中へ沒入してしまふ。

さて、詩人の創作的自由と、竝にそれによる、不氣味な感情の喚起、妨壓の小說的特權が、以上述べたところだけで盡されてゐるのでない事は言ふまでもない。我々は、實際生活の經驗に對して、一般に比較的受動的であると共に、物質的材料的の影響感化に對しては全く屈服的である。殊に、詩人に取つては、讀者は實に馭し易い。彼が讀者の心へ置いた氣分によつて、呼び起した期待によつて、彼は、我々の感情過程を一つの結果から他へ移入する事も出來れば、同一の材料によつて非常に多樣多種の効果をかち得ることも出來るのである。これ等は總て、周知の事であると共に、また恐らくは、有名な審美學者たちによつて綿密に價値づけられてゐる事柄である。讀者は、正しい意圖なしに研究のかかる範域へ連れて來られてゐるのだが、此處では、『不氣味なるもの』に就て我々の與へた演繹に反抗する、幾多の實例の矛盾を解明する試みへうち委せてしまつたのである。であるから、かかる實例の一つ一つについて、一應引き返さなければならない。

最初我々が向けた疑問は、『ラムプセニットの寶』の中の截斷された手が、例へばハウフの童話

『きり離された手の話』に於けると同様、少しも不氣味な感じを與へないのは何故か、といふ事だつた。追放（轉位）されたコムプレックスの源泉から出た『不氣味なるもの』が、より大きな抵抗力を持つものであることを知つたいま、此の疑問は一層重大であるらしい。だが、その答へは容易に與へられるのである。卽ち、我々讀者は、此の物語りに在つては王女の感情でなく、寧ろ大盜賊の素晴しい狡智の方へ移入されてゐる。勿論この際、王女の感情には不氣味なものが大いにあるに相違なく、王女が失神して倒れた事にでも、我々はよく信じ得るのだが、何しろ我々の感情が王女の方でなく別の男の方へ置き換へられてゐるものだから、王女の失神する程の恐怖を見ても、何等の不氣味さをも感じないのである。

また、不氣味さの印象が更にもう一つの狀況によつて消失された例を擧げれば、ネストロイの笑劇（ポッセ）『引裂かれた男（デル・ツェルリッツセネ）』がある。自分が人を殺したと信じ込んでる男が逃げ出す。そして方々の引窓や、落し扉を開くと、その度に殺された男の亡靈が（勿論之は彼の誤認であるが）ぬうつと顔を出すので、彼は絶望して叫ぶ。

『俺の殺したのは一人きりだつたのに……』

一體、此處に現された殘忍なる乘算(ムルチペリカチオン)は何であらうか？　我々は、此の舞臺の前提的條件を知つてゐるが、『引き裂かれた男』の誤解とは無關係だ。そこで卽ち、彼に取つては不氣味だつたものが、我々へは不可抗的な笑ひを働きかけるのである。

更にまた、O・ワイルドの小說『カンタヴイレの幽靈』に於けるやうな一つの實際的幽靈に至つては、尠くとも戰慄の感情が要求さるべきであるのに、それが全然消失されてゐるのは、作者が諧謔(シエルツ)を弄し、皮肉に茶化してゐるからである。かくの如く、小說の世界に於ける感情効果といふものは、選まれた材料には無關係なのである。童話の世界に在つては、恐怖の感情、卽ち一般に不氣味な感情が喚起されてはならないのだ。我々が、これ等の世界に於て幾多の、當然起るべき矛盾や撞着を飛び越えて平氣でゐられるのも、實はかうしたからくりを承知してゐるからなのである。

獨坐と靜寂と闇黑とに就て言へば、これ等が、我々大多數の人間に取つて絕對に消し去る事の出來ない、幼兒期不安に結びついた實際の素因(モメント)であるからといふ以外に、說明のしようがない。精神分析家の檢討は、かうした問題に就ての說明を別の個所に求むべきである。

藝術の分析

定價　壹圓八拾錢

昭和八年五月十二日印刷
昭和八年五月十五日發行

譯著者　篠田英雄
　　　　濱野修

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　宮下桃太郎
東京市淀橋區戸塚町一ノ百九

發行所　東京市神田區今川小路二ノ一
アルス
電話九段　一二一七五番
　　　　　一二一七六番
振替東京二四八八八番